
コナン哀ものがたり

サブラピッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナン哀ものがたり

【Nコード】

N5795C

【作者名】

サブピッド

【あらすじ】

工藤新一と宮野志保が幼児化して、江戸川コナン、灰原哀として生活を始めて2年。コナン、哀、そして蘭の心に変化が生じていた。コナンと哀を中心に、少年探偵団や阿笠、蘭や平次など、彼らと、彼らの周囲を取り巻く人物のものがたり。

プロローグ（前書き）

コ哀小説です。新蘭派には、お勧めできません。

プロローグ

毛利蘭は、友人の鈴木園子と共に、大きなガラス窓のあるコーヒーストップで、外に向いたカウンターに座り、道路を行き交う人や車を眺めながら話をしていた。

と、道路の向こう側の歩道を見覚えのある5つの小さな人影が歩いているのに気づいた。帝丹小学校で1年生の時から、「少年探偵団」なるものを結成している5人。今は、3年生になっていた。

前に行くのは、カチューシャを頭につけた少女吉田歩美と、体の大きな少年小嶋元太、そばかすをつくった面長顔の円谷光彦。歩美を挟んで両方に男の子が並び、三人で歩いている。少し遅れて、蘭の家に居候している眼鏡の少年江戸川コナンと、赤みがかった茶髪をした少女灰原哀。二人が話しながら並んで歩いている。

子供らしく、はしゃぎながら歩く前の三人とは違い、後の二人は、自分たちでもあまりしないような真剣な目をして何か話している。

コナンの小学生らしからぬ頭の良さ、行動力は、何度も目の当たりにしてきたし、またそれによって蘭も、周りの人たちも何度も助けられてきた。時折見せる、大人顔負けの知識に驚くことは今でもあるが、自分には、子供らしい人懐っこい笑顔を向けてくる。しかし、今、道路の向こうで、これまた子供とは思えない雰囲気を持った少女に話す姿は、自分などよりは遥かに大人であるように見えた。

（コナン君と哀ちゃんって、あんな雰囲気なんだ）

二人で話している姿をあまり見たことがない蘭にとって、他の三人と明らかに違う空気を持った二人が会話する光景は、普段あまり見ないコナンの表情と共に、驚きを抱かせるには十分だった。

（どんな話をしているんだろう？）

「不思議な子達よね」

園子も子供達の姿を見つけ、独り言のようにつぶやく。

「一昨日ね。佐藤刑事と高木刑事に会って話してたんだけどね。あの眼鏡のガキンちょはさ、前からマセてるというか、ただ者じゃないって感じがしてたんだけどさ、あの哀って子も、目立たないけど、コナン君に負けず劣らず、不思議な子なのよね」

「哀ちゃんも・・・？」

蘭は、あまり哀と話したことがないが、時折つぶやくように話す言葉は、どこか心に残っていて、とても小学生の言葉には聞こえないという印象はある。哀が話すことを見たこと自体、あまりないので、今、コナンと真剣なやり取りをしている姿自体が、蘭にとって、意外な光景ともいえた。

「ほら、佐藤刑事のお父さんが殉職した事件の犯人が捕まったとき、連続放火があつたでしょ？あの時、次に放火犯が現れるのは品川だつて当てたのは、あの哀って子だつて」

「へえー。コナン君みたいだね」

「それと、連続爆破事件で怪我をした白鳥警部、急性硬膜下血種つて言つたかなあ？それを白鳥さんの症状を見ただけでわかつたらしいし、その後、犯人が爆弾を仕掛けた場所・・・まあ、偽モノだったみたいけど・・・それが電車だつたつてことをコナン君と同じようにあの子も当てたらしいわよ」

今、道路の向こうの書店に入ろうとしている5人の子供たちを見ながら、蘭は、驚きながらも、コナンと哀が真剣に話をしている理由がなんとなくわかつたような気がした。

「それに、前にさ。あの子たちだけでモーターボートで犯人を追っかけていった時のこと、後で光彦君に聞いたんだけどさ、最初モ―

ターボートを操縦していたのはコナン君だったんだけど、途中であの子が操縦を替わったらしいよ」

「えっ？哀ちゃん、モーターボートの操縦もできるの？」

「そうなのよ。それもさ、コナン君がさ、さも当たり前のように替わってもらったみたいよ」

「じゃあ、コナン君は、哀ちゃんが操縦できることを知ってるというか、そういうのを当然と思っているということかしら？」

「そうなのよね。暗号なんかの謎解きするときもさ、コナン君と一緒にになっていろいろ説明してくれるらしいし、元太君なんかに言わせると、あの二人は、絶対、年をごまかしてるって。コナン君もだけど、あの子も不思議な子よ」

園子は、両手のひらを上に向け、少し肩をすくめた。

一方で、蘭には、別の疑問も胸に広がってきていた。

（コナン君は、なぜ、哀ちゃんのことを私に話さないのだろう？）

少年探偵団の他の子供たちのこと、学校のことなどは、自分に普通に話してくれるコナンが、こと哀のこととなると、何も話しをしてくれない。このことだけを考えると、コナンは哀が嫌いか、興味が無いのだとも思えるが、今、目の前で話している二人の様子をみれば、仲が悪いわけでもないようだし、哀がコナン同様、大人顔負けの知識や知恵を持っているのだとすれば、コナンにとって、哀はまたとない話し相手、パートナーになり得る。

第一、以前、哀が風邪をひいたとき、泊り込んでまで看病したコナンである。哀のことに興味が無いとは、とても思えない。

哀が転校してきたこと、阿笠博士の家に住んでいることなど、蘭は直接コナンから聴いてはいない。あとになってわかったことだ。そもそも、哀の両親のこと、これまでの生い立ちも知らない。阿笠は、哀を親戚の子だと言っている。コナンも阿笠の遠縁だという。

では、二人は親戚ということなのだろうが、そういうことも、コナンからは、何一つ聴いてはいない。

哀のことに關しては、コナンは一切、蘭に話をしていないのである。

蘭には忘れられない哀の姿がある。

どういうわけか、阿笠が父の小五郎と自分を自宅に招待し、自らが作ったゲームをさせたことがあった。その時、阿笠と別れたというコナンが家に帰っているかも知れないと思い、自分も帰ろうとしたとき、哀は帰るなど言った。その自分を止めた哀の顔、その思い詰めたような表情。

「ダメよ帰っちゃ……。江戸川君なら大丈夫だから、心配ないから……。だから、もう行かないで！お願い！！」

いつもクールで、自分の感情をあまり表情に出さない哀が、あの時は、あんなに激しい口調で、帰ろうとした自分を押しとどめた。あの時の言葉、「もう行かないで！」とは、いったいどういう意味なのだろう。「江戸川君なら心配ない」とは、あの時、コナンがどこで何をしていたのか、哀は知っていたのだろうか。いや、もしかしたら、「心配ない」とは、コナンを心配していた哀が、自分自身に言い聞かせていた言葉なのではないのだろうか。

蘭は、以前、誘拐されそうになり、犯人から銃撃された哀を庇ったことがある。

小さな体を襲う危険に、自分の危険も顧みずに彼女を自分の体の下に入れて庇った。夢中だったし、そのまま気を失ってしまい、あまり鮮明な記憶がないが、あの時、自分の腕に回された小さな哀の手のぬくもりをかすかに覚えている。

今思えば、あの時、哀は、自分を見て驚いてはいたようだが、震

えても、怯えもせず、むしろ、落ち着いて、覚悟を決めたようにあそこに立っていたような気もする。

（哀ちゃんって、いったい何者なんだろう？コナン君と哀ちゃんは、私達が知らない、知るすべもない事、お互いのことをよくわかつているのではないのだろうか？）

蘭の疑問は、大きくなっていくばかりだった。

「出てきたみたいね」

園子の声に表を見ると、5人の子供達が書店から出てくるところだった。

書店の袋を両手で頭の上にかざし、嬉しそうにはしゃいで最初に出てきたのは元太。すぐに同じ袋を抱えた歩美と光彦が楽しそうに笑い合いながら顔を出し、少し遅れてコナンと哀が並んで出てきた。

コナンと哀は、手に何も持っておらず、楽しそうにはしゃぐ三人を見て、コナンは苦笑いを浮かべた顔を哀に向ける。哀は、両手の手のひらを上に向けながら少し肩をすくめたが、同じように笑みを浮かべてコナンと目を合わせている。二人ともまるで、自分の子か、幼い弟妹を見守るような優しい眼差しをしていたが、蘭は、そんな初めてみる二人の表情に奇妙な嫉妬を覚え、そんな自分の感情に少し戸惑っていた。

「へえー。あのマセガキ、あんな顔するんだ。まるで子供を見守る夫婦だね」

「うん・・・」

その幼い姿には不似合いな二人の表情が、蘭の心に深く刻まれた。

プロローグ（後書き）

初執筆です。今後、コ哀の関係を中心に展開させます。事件性は、低いです。

第1章：哀の想い（前書き）

前は、コナンと哀のセリフがありませんでしたが、今回から、二人がストーリーの中心となります。

第1章：哀の想い

工藤新一と宮野志保が幼児化して2年、当時、帝丹小学校1年に転校生としてやってきて2年、二人は3年生になっている。

「博士。いつてきます」

「おお、気をつけての、哀君」

厄介になっている阿笠の家を出て、いつもの道を学校に向かう哀の前に1台の車が停まった。

「ハイ！哀ちゃん」

FBIのジョディが運転席から降りて手を振る。少し驚いたように見ていると、助手席からは、コナンが顔を出した。

「よっ！灰原、悪いが今日は学校サボってもらっぜ」

「えっ？」

「さあ、乗って」

ジョディが笑顔で後部座席のドアを開ける。怪訝な顔をしながらも、哀は言われるまま、車に乗り込んだ。

「で？どこへ連れて行く気なのかしら？」

哀が後部座席で腕を組んで言う。

「俺も知らねえんだ」

「行く場所は問題じゃないわ。問題は、話の内容」

ジョディは、いくぶん含みのある言い方をする。

「クールキッド、哀ちゃん、やっと、“その時”が来たと言った方がいいかもね」

ジョディは、町外れの山の中腹にある、1軒の別荘のような建物に車をつけた。

ジョディの言うまま、コナンと哀が中へ入ると、ジェイムズが居

た。

「よく来てくれたね、二人とも」

FBIの彼らの話では、やっと“組織”の日本の本拠がわかったこと。アメリカなどの本拠と共に、近く、壊滅作戦に乗り出すことがコナンと哀に告げられた。

その詳しい内容、日取りについては、アメリカから連絡があり次第決定。そして、この作戦には、日本などの各国警察やインターポール、一部軍隊も協調して行う大掛かりなものであることが知らされた。

「それでね、あなた方がほしがっている薬のデータをどうやって入手するか、についてなんだけど」

ジョディが言うと、哀がすかさず口を開いた。

「もちろん、彼らのホストコンピュータからデータをコピーするわ。そして、向こうの分は消去し、こちらの分も、解毒剤が出来、彼の体を元に戻したら、完全に消去する。この薬のデータは、この世から葬り去る」

哀がいつになく強い調子で言った。コナンは、横で黙って聞いているが、その表情がかすかに曇ったことには、誰も気づかなかった。

「あの薬は、人類が持つてはならない禁断の木の実なのよ」

「クールキッドも同じ考えかしら？」

ジョディがコナンの方を向き言う。

「そうだね。薬の詳しいことについては、灰原がよく知っているし、灰原がそういうなら、その通りにすべきだと思う」

「問題は、あなた方を連れていくべきかどうか」

「私が行かないとデータを取ることはできないわ。私は、行くわ。それが私の義務」

「俺も行く。おめえを守ると約束したからな」

「あなたは、何も危険を冒す必要はないわ。あなたは、彼女のところへ戻らなきゃならないのよ。」

「言つたる？守つてやるつて。約束だかな」

「工藤君・・・」

二人のやり取りを聞いていたジョディたちは、仕方ないという表情になり、ジエイムズが口を開いた。

「やむを得ないな。君達にも来てもらうことにしよう」

「ところでコナン君、哀ちゃん。あなた達のこと、そろそろ話してくれない。シェリーと呼ばれた哀ちゃんのこと、そして、執拗に組織を追うクールキッド、あなた達は、いたい・・・？」

ジョディが二人に方を向き、真剣な表情で訊いてくる。

「それは、まだ言えないよ。ジョディ先生。このことのケリがついたら、すべてが終わつたら話すよ」

コナンが目の光を強めて言う。隣で、哀は、黙っていつものポーカーフェイスでジョディを見つめていた。

この4人のやり取りを隣の部屋で聞いている男がいる。コナンとは、顔見知りのFBIの捜査官だ。

コナンと哀がジョディと共に出ていった後、この男、赤井秀一が部屋に入ってきた。窓から、コナンと哀がジョディの車に乗り込むのを伺う。

「赤井君、どうして、彼らに直接会わなかったのかね？」

ジエイムズが訊く。

「私はまだ、この件のケリがつくまでは、あの茶髪の少女と会うわけにはいきません」

二人を乗せたジョディの車が走り去っていった。

いつからだろう。哀が、コナンこと工藤新一に好意を持ったのは、最初は、自分と同じように幼児化した人間で、研究の対象という

感じの興味だった。しかし、最初は自分を責めた彼は、いつしか守ってくれるようになった。

鮮やかな推理で事件を解決するかと思えば、阿笠が作ってくれた武器を操り、自分や仲間を何度も危機から救ってくれた。

そして、ピスコの事件やバスジャック事件、ベルモットとの対決では、自分の身を危険にさらしても哀を救ってくれた。

何度も自分から命を絶とうとした哀に、「運命から逃げるな」と言って、生きる希望をくれた。「興味」が「好意」に変わり、いつしか「恋」になっていった。

同時に彼がどれほど幼馴染の毛利蘭を思っているか、そして、蘭がどんな思いで新一を待っているのか、これも肌身を感じてきた。機会あるごとに、彼は、幼馴染との思い出やちよつとした出来事を哀に話した。そして、そんな仲の良い幼馴染の二人を引き裂いたのは、自分が作った薬のせい。

その事実が、哀の胸に重くのしかかると共に、自分には彼を愛する資格はない、彼を好きになることは許されないと自分の想いを押し殺してきた。

蘭は強いと思う。彼女は、今年春、高校を卒業、4年生の大学に進んでいる。すでに、高校を退学してしまった新一からは、相変わらず時々電話で連絡が入るだけ。彼は、どこでどんな事件に巻き込まれているのか、知るすべもない。

でも、蘭は、いつも笑っている。今や名探偵と言われる父の小五郎やコナン、園子や探偵団の子供達の心配や世話を焼きながら、相変わらず、組織のベルモットをして「エンジェル」と言わしめた笑顔を見せている。

時が過ぎるに従い、その眩しい笑顔は、ますます哀の胸を締め付けるものになってきた。

その蘭にとって、新一がいない時間を慰めてくれた存在がコナン

であつたことは、まぎれもない事実だつた。

今の哀にとつては、仲間といえる存在もある。

コナンと共に自分を仲間を迎えてくれた少年探偵団の歩美や光彦、元太、自分を匿ってくれた阿笠博士、そして、あの日、命がけで自分を守ってくれた蘭。

蘭には、そつけない態度で接してきた。彼に会えない状況を作つた申し訳なさと、嫉妬が入り混じつた複雑な感情で、彼女を避けてきた。でも、そんな自分でも、彼女は、何のためらいもなく、助けるためにその身を呈して庇ってくれた。

彼女や仲間たちが「真実」を知ったとき、自分をどう思うのだろうか？ここに、自分の居場所は、果たしてあるのだろうか？

いや、彼らが自分を責めるとすれば、それは甘んじて受ける。憎しみの対象となるのであれば、それも仕方ないこと。

哀は、ジョディたちの話を聞いて、静かに覚悟を決めていた。

第1章：哀の想い（後書き）

いや〜っ、小説は初めて書くんですが、難しいですね。なかなか、思い通りにいきません。拙い作品を読んでいただいた方に感謝！です。作者は、哀ちゃん偏愛なので、そのことを許してください。次回もがんばります。

第2章：嘘（前書き）

これまでになかったコナンと哀の行動に、歩美、蘭、阿笠は、心を揺らします。

第2章：嘘

「蘭お姉さん、園子お姉さん！」

数日後の土曜日、園子に誘われてショッピングモールに新しくオープンした手作りケーキの店にやってきた蘭は、母親に連れられて買い物をしている歩美から声を掛けられた。

「歩美ちゃん」

「今日は」

「今日は。毛利さんと鈴木さんね。いつも、歩美がお世話になっています」

歩美の母が蘭と園子に笑顔で言った。

「ねえ蘭お姉さん。コナン君、大丈夫なの？」

歩美は、気になって仕方ないという様子で、母親の挨拶が終わらないうちに蘭に訊いてきた。

「えっ!？」

「だって、コナン君、昨日、学校休んで、先生は風邪だって言うってたけど、大丈夫なの？」

蘭は驚いた。コナンは、昨日も、普段どおりランドセルを背負い、朝学校に出かけている。帰りは、みんなと遊んでいて少し遅くなっただと言ったが、それでも夜7時前には帰ってきていた。

「え？昨日、コナン君、いつもどおり出て行ったけど・・・学校に行っていないの？」

「うそ〜！コナン君、学校に来てないよお。サボりかなあ。・・・まさか」

歩美の表情がいつぱんに曇ってしまい、悲しそうな目になって下

を向いてしまった。

「どうしたの？」

彼女の母親が心配そうにわが子の顔を覗き込む。蘭も園子も、その急な落ち込みぶりが理解できなかった。

「だって、哀ちゃんも休んでたんだよ。・・・二人でどっか行っただけかな？」

蘭は納得した。以前、歩美にコナンのことが好きだと相談されたことがある。あの時、歩美は、コナンは蘭が好きだと思っていたようだった。

蘭は、知らなかったこととはいえ、歩美に、コナンがいつも通り学校へ行っただと言ったことを後悔した。

「へえー。学校サボってデートとは、あのガキンちょ、やるわねえ」歩美の気持ちに配慮しない園子の言葉に、蘭は少しムツとしたが、しゃがみ込んで歩美の肩に手をかけ、優しく微笑んで言った。

「とにかく、コナン君にわけを聴いてみるわ。まあ、コナン君のことだから、何か理由があるんだと思う。わかったら教えてあげるわね」

「うん」

蘭の優しい口調に、歩美は少し元気を取り戻して答えた。

「それは本当かね？蘭君」

阿笠は、昨日、いつものように学校に行っただと思っていた哀が、休んでいたことを蘭から電話で聴き、驚いて聞き返していた。

「ええ。今日、歩美ちゃんが言ってたんですけど・・・。今、哀ち

やんいますか？」

「いや、コナン君と出かけておるよ。なんでも、哀君が見たがってる美術展が横浜の方であるとか言ってたがの」

「じゃあ、昨日もそういうふうに出かけてたのかしら？いつも博士が車を出してたでしょう？今日は、どうして二人だけなんですか？」

「そう。少しヘンなんじゃが、たまには二人だけで電車で出かけたいと言うもんじゃし、あの二人なら大丈夫だと思って送り出したんじゃないが」

「二人だけで出かけるなんて、今までほとんどなかったですよね？」

「そうじゃな。いつも、わしや子供達が一緒じゃったからのう。二人だけで遠出するのは、初めてなんじゃないかのう。哀君は、あまり出かけたがるほうじゃないし」

二人が学校をサボり、学校が休みの土曜日の今日も二人だけ出かけている。やはり、腑に落ちないことだった。

人気のない大きな屋敷。門の表札には、「工藤」とある。もう、2年近く、誰も住んでいないが、掃除や所蔵されている膨大な書籍類の整理に、人の出入りが時々ある。

その大きな屋敷のリビング、夕方の薄暗くなってきた時間、照明もつけられていない部屋のソファーに小さな二つの影が座っていた。

「ホントに行くの？」

「ああ、そろそろケリつけなきゃな。解毒剤のこともあるし、蘭を待たせるのも、このヘンが限界だろうし」

「そうね。・・・でも、あなたが危険を冒すことはないのよ」

「この話は、さんざんしたろ？それに、約束したじゃねーか。守ってやるって。あの薬のデータ、表沙汰にすることなく手に入れて、あっちの分は消さなきゃなんねえし、手に入れたほうも解毒剤がで

きたら完全に消さなきゃなんねえ。そのためには、おめえが必要だし、それなら、おめえを守る俺も行かなきゃなんねえだろ？」

「まったく、お人好しもここまで来ると、異常だわね」

「うつせい・・・とにかく、他のみんなには気づかれないうちに・・・博士にもな」

「少し、胸が痛むけど、巻き込むわけにはいかないわね・・・本当は、私だけで行くべきだと思うけど・・・」

「もう言うなよ・・・それに、おめえになんかあったら、お姉さんに、明美さんに申し訳ないからな」

「工藤君・・・」

「へえ。博士も知らなかったんだ」

蘭は、阿笠と電話で話した後、園子に電話をした。

「そりゃ蘭、あのマセガキども、付き合ってるということじゃないの？・・・確かにまだ小学3年生だけど、あの雰囲気じゃ、付き合っても不思議はないような感じはあるしね」

「でも、私や博士にウソついてまで出かけたりするような子達じゃないと思うの。だから、なんかもっと深い理由・・・例えば、哀ちゃんの両親のことかなにか、そういうあの子たちの家庭事情が関わっているとか・・・そういうのがあるのかなという感じもするんだけど」

「なら、親戚の阿笠博士に相談するんじゃない？それに、新一君のご両親も親戚なんでしょう？」

「うん。・・・いずれにしても、私達には言えない事情があるんだろうけど、コナン君に直接訊いていいもんかどうか、迷ってるんだ」
「とりあえずさ、明日、どうかへ遊びに行こうって誘ってみてさ、それでもし、コナン君が断ったら、その理由を訊いてみる。そんな

感じで訊いてみたらどう？」

「そうね。とりあえず、そうしてみようかな？」

「ただいま。蘭姉ちゃん、遅くなってごめん」

「おかえり。ご飯、できてるから、手を洗ってきて」

「はあゝい」

コナンは、居候している蘭の家に帰ってくると、手を洗い、いつものように子供らしく振舞って、食卓に座った。

「おじさんは？」

「この前の事件の現場検証に立ち会うつて。遅くなるって言ってたわ」

食事が終わり、食器を片付け始めた蘭が口を開いた。

「ねえ。コナン君。明日、予定ある？」

「え、うん。・・・明日は、灰原さんと約束があるんだ」

「哀ちゃん？どこかへ行く約束でもしてるの？」

「うん。西多摩市の方に灰原さんが行きたい美術館があるんだつてそこへ行くこつて。」

「そう。・・・でも、随分哀ちゃんと仲良くなったのね。博士に訊いたけど、今日も一緒だったんでしょ？今までなら、博士や歩美ちゃんたちとも一緒にキャンプに行つてたりしたじゃない？」

コナンは、真剣な表情になって言った。

「うん・・・あの子を守つてやんなきゃいけないから・・・だから、傍に居たいんだ・・・」

「へ？・・・」

あまりにあっさりコナンが言うので、蘭の方の顔が赤くなってしまった。

少し経った頃、阿笠邸では、博士が天井を見上げて何か考え込んでいた。その様子を哀がソファに座って半眼でみている。

博士は、意を決したように哀に顔を向けた。

「のう、哀君。まあ、君と新一君は、今更じゃから学校、サボるの
はかまわんが、それならそれで、どこへ何しに行ってるのか、ちゃ
んと言ってくれんかのう？何なら、わしが車を出してもいいし．．
まさか、組織が関係しているんじゃない．．．」

「違うわ．．．無断で学校をサボったことは謝るわ。工藤君がどう
しても付き合えって言うもんだから．．．明日も彼と出かけるけど、
月曜日からは、ちゃんと学校に行くから、心配しないで」

「新一君が誘っておるのか？」

「．．．私も戸惑ってるんだけど．．．本当なら、工藤君、もう高
校卒業してるはずでしょう？彼女のこととか、いろいろ悩んで．
．ほら、事情知ってる私に愚痴ってどうか、いろいろ言いたいこと
があるみたいなの．．．私にも責任はあるし、付き合ってあげるく
らいしか今はできないし．．．」

哀は、阿笠に組織の本拠へ行くことを気づかれないため、あらか
じめ考えていたウソをついた。

「しかし、わたしには何にも言ってくれんのう」

博士は、少し寂しそうに目を伏せた。

哀が慌てて口を開く。

「博士に心配かけたくないんじゃないの？それに．．．ほら、やつ
ぱり同年代の私の方がいろいろ話やすいんだと思うし、それに、私
も彼に聞いてほしい話もあるし．．．ごめんなさいね。博士を仲間
はずれにしてるつもりはないのよ。今度、二人で博士にちゃんと話
すから。お願い、今は、工藤君の好きにさせてあげて」

「まあ、哀君がそこまで言うのなら．．．」

（ふう．．．これは大きな罪ね）

一応、コナンから話を訊いて納得した蘭だったが、歩美に教えると言ってしまったことを思い、ベッドに入って考え込んでしまった。
(歩美ちゃんにどう話したらいいのかしら?)

教えると約束した手前、話さないわけにもいかない。しかし、コナンが哀と一緒に学校をサボってるというだけで、あれだけ悲しそうな目をしていた小さな女の子のことを考えると、滅入ってしまう。
(それにしても、コナン君も罪作りね。小学生のくせに)

第2章：嘘（後書き）

灰原哀偏愛の筆者ですが、蘭や歩美も結構好きだったりします。も
っと、彼女たちも描きたいです。

第3章：哀の想い2（前書き）

組織への潜入を決めたコナンと哀は、あるパーティーに出席します。
その会場で、哀は、小さな事件を起こします。

第3章：哀の想い2

「オメーも行くんだろ？あのパーティー」

学校帰り、いつもの場所で他の少年探偵団の3人と別れてから、コナンは哀に尋ねた。

「行かないわ。博士は、鈴木会長から招待状を貰って出席って返事してたようだけど。」

堤無津川沿い、オープンテラスのあるレストランで鈴木家主催のパーティーが行われることになっていた。鈴木グループのレストラン経営会社が、新たに店舗をオープンすることになった披露パーティーで、鈴木家と縁のある人たちが招待されていた。

園子からは、蘭と、コナンたち少年探偵団の5人、阿笠博士、佐藤刑事と高木刑事、蘭や園子の同窓生などが招待され、毛利小五郎と妃英理、日本に仕事で帰国する予定の工藤夫婦、目暮警部、白鳥警部は、園子の父から招待を受けていた。

「そついわずに行こうぜ。みんな行くみたいだし」

「いいわよ。着ていくものもないし」

「じゃ、着ていくものがあれば行くよな」

「えっ？・・・でも、どうして、そんなに私を出席させたいのよ」

「最後かも知んねえだろ？組織のこのケリがつけば・・・灰原哀としてみんなとパーティーなんてさ、最後かもしれねえだろ？」

言われて哀は、少し考えていたが、しばらくして口を開いた。

「・・・そうね・・・そう言われると、そうかもね・・・行くのも悪くないかしら」

「よし！じゃ、オメーの着るもの、用意してもらうかな」

「はあ？・・・用意って、誰が・・・まさか、あなたのお母さん！

？」

「まあ、任せとけて」

コナンは、意味ありげに微笑んでいた。

当日までにコナンは、母親の有希子に頼み、哀のドレスを新調してもらった。明るい紺色のパーティードレス、胸には、これも有希子を選んだブローチが光っている。シルバーに光っているが、あまり大人びた感じにならないように、少しかわいい感じのものにしてある。コナンは、母親の目に感心せざるを得ない。なんとも、哀によく似合っていて、元太や光彦だけでなく、大人たちの注目も集めていた。

最も、当人は、目立つのを嫌がる方だから、少し不機嫌ではあった。

この日、午前中、阿笠邸にいきなり有希子が現れ、当人の意思とは関係なく、あれよあれよという間にこの格好をさせられてしまった。

「さーすが、私！哀ちゃん、よく似合ってるわよ」

うんうんと、自分の見立てたドレスを気に入ったように頷き、哀を映す鏡を覗き込んで笑顔満面の有希子。

この大きなお世話を焼いた女性の息子は、この姿を見るなり、「へえー。似合ってるじゃん。おめえ。結構かわいいんだな」

なんて言うもんだから、らしくなく、顔が赤くなってしまった。

「お世辞を言っても何も出ないわよ」

「バー口。俺がお世辞なんて言うと思うのかよ」

「すごい、哀ちゃん。よく似合ってるよ」

「綺麗です。灰原さん」

会場に着くと、最初、歩美と光彦が素直に驚きの表情で見た。哀は、少し恥ずかしそうに、彼女らしく、プイと顔を背けたが、「ありがとう」と、いくぶん紅潮した頬で言った。

「綺麗よ。哀ちゃん」

「ホントね、私には、負けるけど」

蘭と園子も、ドレス姿の哀に声をかける。その後も、顔見知りの人々が、次々と哀に賛辞の声をかけてきた。

哀は、改めて工藤親子の怖ろしさを感じた。さりげなく、いきなり、こんな格好をさせてニコニコしているのである。留めに世界的な有名作家のコナンⅡ新一の父、工藤優作が現れ、「私が20歳若ければ放っておかないな」なんて笑顔で言うものだから、会場にいる優作のファンからも、よけい注目されるハメになってしまった。

（工藤君、このお返しは必ずさせてもらうからね）

哀の横にいてニコニコと優作のファンの相手をしているコナンを細目で睨んだが、当人は気づいていなかった。

パーティーの参加者は、60名ほど。鈴木財閥のパーティーとしては、人数が少ないが、そう大くない店舗の規模の関係もあって、内輪だけのパーティーという感じだった。

1時間ほどした頃、哀は、少しイタズラっぽい微笑みを浮かべ、ひとつの決心をして琥珀色の液体の入ったグラスを手にした。

「ねえ、哀ちゃん。そのドレス、コナン君のお母さん……じゃなく、あの有希子さんが着せてくれたの？」

歩美が少し悲しそうに哀に訊いてきた。

「ええ。江戸川君と有希子さんにハメられたわ」

「なんか、コナン君、哀ちゃんのこと、すごく気にしてるみたいだね」

「は？」

そういうと、歩美は少し寂しそうに笑った。

哀にとって、この10歳も年下の少女は、今、一番の友達といえるだろう。そして、この歩美がコナンに寄せる想いも、十分気づいている。そして、それが叶うことのない儚いものであることも。

歩美の心中を思うと、痛むものがあつたが、哀も、コナンが新一に戻る前に彼に伝えておきたいことがあつた。

「ねえ蘭。やっぱり、あのガキンちょ、本気であの子が好きみたいね。新一君のご両親を抱きこんであんな格好さしてんでしょ？」

「そだね。ここまでやるとは思わなかった」

蘭と園子も半ば呆れたように見ていたが、ふと気づくと、哀の姿がなかった。

哀がグラスを手にオープンテラスに出ると、佐藤刑事が手摺りに凭れて川面を眺めていた。街明かりの中、少し離れたところにある観覧車の明かりが見える。杯戸町にある大観覧車だった。

「松田刑事のことを思い出しているのかしら？」

「えっ？」

不意に声がしたのに驚いて佐藤が横を見ると、大人びた表情をした小さな少女が、紺のドレスを着て、同じように街明かりを眺めている。

「哀ちゃん・・・ええ、でも、前と違って、胸の痛みがなくなつたわ。それどころか、今日、あの観覧車を見るまで、しばらく彼のことを忘れていたような気がするの。『忘れちゃだめだ』って、高木君にも言われたのにね・・・死んだ人は、人の心の中にしか生きて

いられないのにね・・・」

「それで、十分なんじゃない？」

哀の大人びた返事に驚くようにその横顔を見つめる佐藤。

「死んだ人をずっと想い続けるのは、生きている人間には、辛いことだし、そんなことは、死んだ人も望んでいないと思う・・・私が死んだら、私のことを覚えていてほしいと思う人は何人かいるけど、ずっと想っていて、悲しんでほしくない・・・ただ、たまに思い出して、懐かしんでくれれば、それでいいと思う」

哀の言葉に、目を大きくし、驚いている佐藤は、言葉がでない。

「私、両親を知らないの。そして、大事な人を失った・・・最初は、ずっと悲しかった。でも、今は、時々思い出すけど・・・辛いときもあるけど、前よりは、胸が痛むことは少なくなっただわ・・・いつか、あなたのように痛みもなく想えるようになったら、本当にその人たちは、私の胸ですっと生きていけるようになると思うの・・・だから、松田刑事は、間違いなく、あなたの胸で生きているのよ」

佐藤は、哀の年齢不相応な、大人びた言葉に驚きを超え、不審を持った。いったいこの子は、何者なのか？そして、同じような空気を纏うもう一人の少年も・・・

「哀ちゃん・・・すごいね。まだ小学生なのに、そんな風に思えるなんて・・・でも、大事な人って？」

「お姉ちゃん・・・」

哀は、そのまま俯いてしまった。その様子に、慌てて佐藤が言う。

「ごめんなさいね・・・辛いことを言わせてしまつて・・・」

「気にしないで・・・私は、大丈夫だから・・・」

「佐藤さん！どうかしたんですか？」

高木刑事が佐藤を探しにきたようで、後から声をかけてきた。

「彼、心配してるわよ。行ってあげたら？」

「ホント、コナン君もだけど、哀ちゃんも、年、ごまかしてない？」

その言葉に、哀は、両手のひらを上に向けて肩をすくめた。佐藤は、複雑な表情で笑って高木の方へ歩いていった。

哀は、自分がなぜ、佐藤に両親や姉のことを話したのか、不思議だった。コナンと阿笠以外の人に、両親と姉の話をするのは、初めてだった。

（私、結構、気に入ってるのかもね、あの、鈍感で、真直ぐで、綺麗な瞳の女刑事さん。そういうば、工藤君に似てるかも・・・）

「子供たちに知恵を借りまして・・・」

「子供たちに怒られちゃいました」

高木が事件の捜査中や解決後、佐藤に時折そんなことを言う。子供たちとは、少年探偵団の5人の小学生。1年生のときからの付き合いで、もう2年になるだろうか。

「あなたねえ、いい大人が、しかも警察官が、子供にいいように言われてどうすんのよ！」

この前、高木にそう言ったが、今日、その少年探偵団の一人の哀と話した、いや、元気づけられた佐藤は、人のことは言えないと苦笑した。

少年探偵団と名乗る小学生5人組。時々、事件現場で出くわす彼ら。そのなかで、異彩を放つ二人の少年と少女。

彼らがいると、不思議と事件がスムーズに解決する。それは、自分達でも気づかない証拠を見つけ、状況を観察して的確に指摘し、推理する少年と、その少年の意見に、鋭い観察眼に元づく考察を話

す少女の存在によるものが大きい。

なぜ、あの二人は、大人でも知らないような知識を持っているのか。警察官でも見逃すような些細なことに気づくのか。容疑者の前で、あんなに大胆で、冷静な言動がとれるのか。

その疑問の答えは出ない。

生意気とか、大人びたとか、年齢不相応とか、そういう言葉は、彼らには、すべて当てはまると言えるが、それ以上の、それらを超える何かがあのだ二人には、ある。

レベルの高い知識を持つ小学生は、他にもいるだろう。現に、同じ少年探偵団の円谷光彦は、小学三年生にしては、博識である。しかし、あの二人には、知識だけでなく、何か、大人と同じか、それ以上のことを経験してきた雰囲気がある。経験に裏打ちされた知識、言動。そんなもの、小学生が持ちえるだろうか。

「高木君、私、あなたに謝らないといけないわ」

佐藤は、傍らにいる最愛の人に言った。

「えっ？何のことです？」

訳がわからないという表情の高木の顔を見ながら、佐藤は、二人の不思議な少年と少女への疑問を深めていた。

「こんなところに居たのか」

コナンは、オープンテラスの隅のテーブル席に座っている哀をみつめた。

「悪かったな。おめえ、目立つの嫌いだもんな」

「もう、知っててやってんだから。この貸しは大きいわよ」

「でもさ、俺は気に入ってたんだぜ。おめえのそのドレス」

「何言ってるのよ。彼女もいるのに」
「蘭のことは言っなよ」

コナンは、哀のとなりに座った。

オープンテラスのテーブルの椅子は、2、3人が座れるぐらいの少し横長のもので、テーブルを挟んでその椅子が2つ置かれている。二人が座っているところは、一番端っこなので、屋内のパーティー会場からは、少し目に入りにくいのが、窓越しには、見えないこともない。

哀の前のテーブルには、僅かに琥珀色の液体が残るグラスがひとつ。コナンがそのグラスを不審に思ったとき、哀の様子がいつもと違うことに気づいた。

「やい！工藤。あなたね・・・人の気もしらないで、こんなもの着せて。この責任、取ってくれんでしょっね！」

少しろれつのまわっていない口調と、いつもより大きめの声。会場になっている屋内には聞こえないだろうが、「工藤」と呼ばれたことに、コナンは肝を冷やした。

「おい！こんなところで工藤はやめろよ！」
思わず声を低くして言う。「工藤」と呼ばれ、冷や汗をかかされるのは、服部だけで十分だ。

「なによ！工藤に工藤って言って、何が悪いのよ！」

「おい、やめろって・・・あゝっ！おめえ、酒飲んでんな！」

「わ・る・い」。こんな格好、飲まなきゃやってらんないわよ」

と、言いながら、哀は、両手で着ているドレスの裾をヒラヒラさせる。そして、いきなりコナンの腕に自分の腕を絡ませ、頭をコナンの肩に乗せた。

「おいおい」コナンは、焦った。

「あゝっ！このマセガキども！何やってんのよ！」

二人の様子に気づいた園子が大きな声で叫びながらオープンテラスへ出てきた。

哀は、頭を起こし、眠そうに園子にチラツと視線を走らせたが、すぐに興味なさそうに目を閉じて、またコナンの肩に頭を乗せてしまった。

「えっ、と・・・これは灰原が・・・おい！灰原、起きろよ！」

コナンの左腕は、哀の右手によって完全に自由を奪われているので、自由になる右手で哀の左肩を揺すって起こそうとした。しかし、本当に寝ているのか、寝たふりをしているのか、哀の眼は閉じられ、体はまったく動かない。

そうこうしているうち、園子がテーブルのグラスに気づく。

「あんた、お酒飲ませたね！」

「違うよ、コイツが自分で飲んだんだ！」

騒ぎに人が集まり始めた。

「コナン君、哀ちゃん・・・」

歩美が寂しそうにつぶやく。

「コナン君、灰原さん、何やってんですか！」

光彦が抗議するように言えば、

「やるわね、やっぱりただ者じゃないわ、この子たち」と、佐藤がヘンに感心している。

あたふたしながらも、哀がすっかり拘束しているため、コナンは動けない。その時、フツと風が起きたかと思うと、哀に上着が掛けられた。

(蘭・・・)

コナンが見上げると、上着を脱いだ蘭がいた。

「哀ちゃん、風邪引いちゃうよ。コナン君、中に入れてあげたら？」

「うん・・・博士、悪いけど、このまま帰りたいんだけど、いいかな？」

コナンは、哀を心配そうに見ている阿笠に言った。

「わかった。車を回してくる」

しょんぼりしている歩美のところに、蘭が近寄っていく。

「歩美ちゃん」

「蘭お姉さん・・・やっぱり、コナン君は哀ちゃんが好きなんだね。哀ちゃんも・・・」

「ごめんね」

「なんで、蘭お姉さんが謝るの？それにね、歩美、ちょっと寂しいけど、コナン君と哀ちゃんならお似合いだと思うんだ・・・コナン君のことは大好きだけど、哀ちゃんも大好きな友達だし・・・だから、二人が笑ってくれば、歩美も嬉しい」

蘭は、この優しい小さな少女がとても愛おしく思えた。

「歩美ちゃん、まだチャンスはあるわよ」

「えっ？」

「だって、あなたたち、まだ小学生なのよ。あの二人がどうなるかわからないし、コナン君よりもっと素敵な人が現れるかもしれないし・・・」

「うん！ありがとう、蘭お姉さん」

歩美は、明るく笑って蘭を見上げた。

「でも、コナン君と哀ちゃんに仲良くしてほしいと思ってるのは、ホントだよ」

阿笠の車の後部座席で、相変わらず、哀はコナンの腕を拘束し、肩に頭をもたせ掛けている。規則正しい寝息が車内に聞こえている。「あつたく、パーティーを途中で抜けさせやがって……でも、還ってよかったのかもな」

もともと、哀は、あまりああいふ場を好まない。決して人が嫌いというわけではないのだが、自分が命を狙われているため、周りを巻き込まないためにも、人が集まる場所というのは、意識的にしろ、無意識にしろ、避ける気持ちが強いのだろう。

（でも、コイツ、こうしてると、意外とかわいいよな。普段もこのくらい可愛げがあるといいのに）

阿笠邸に着いても、哀はコナンを離してくれない。しかたなく、そのままリビングのソファに二人で座る。

哀が頭痛と人のぬくもりを感じて目を覚ましたのは、夜中3時。

阿笠邸のリビングのソファで、コナンの腕を抱いたままだったことには、自分でやったこととはいえ、少し驚いた。コナンと自分に毛布が掛けられている。

腕をしっかりと拘束され、コナンは、横で寝息を立てている。昨夜は、自分でコナンを困らせてやろうと騒ぎを起こした。

今の哀がコナンに寄せる想い……あれが、それを表現する行動、今の哀にできる精一杯の行動。

「この人、少しは私の気持ちに気づいたかしら？まあ、この鈍感な名探偵さんには、無理かしらね」

哀は、そつと手を話すと、コナンに毛布を掛けなおし、立ち上がった。

「ありがとう。工藤君・・・あなたを元の体に戻してあげるから・・・彼女の元へ帰してあげるから・・・」

コナンの寝顔を見つめてそうつぶやく哀の表情は、少し寂しそうだった。

第3章：哀の想い2（後書き）

哀と佐藤刑事の会話、書いてみたかったです。うまく感じが伝わったでしょうか？モーターボートを操縦し、暗号を解き、英語に精通しているコナンと哀。目暮警部はじめ、警察の方々、この二人、絶対ヘンです。不審をもってください。

第4章：事件（前書き）

コナンと哀は、組織への潜入を決行。アポトキシンのデータを手に
入れようと思いますが・・・

第4章：事件

工藤新一が蘭の前から姿を消して2年。

その間、3度ほど、新一と会ったことがあるものの、蘭にとって、この2年は、不安の多い2年だった。

高校2年生だった蘭も、今は大学に進み、教育学部に籍を置いている。有希子が帰国し、帝丹高校に新一の退学届けを出したのが、蘭が大学に入学した頃のこと。その時の有希子の話では、新一は、高校へは、もう戻る意志はないと言っていたそうだ。

新一と入れ替わるようにして現れた少年、江戸川コナン。工藤一家の親戚に当たるといふ。その面差しは、新一に似て、行動も性格や好みも、新一に似ている。蘭は、何度かコナンが新一ではないかという疑いを持ったが、コナンと新一が並んでいたこともあったし、コナンと話をしている最中に新一から電話があったりして、蘭の疑いは一応晴れていた。

そして、大学生活を送り、新たな友人ができると、蘭に好意を持つ男性も現れた。同じ教育学部の北大社公平。高校時代、ラグビーをしていたというが、その割には、長身で細身だ。少年のような笑顔をする真面目な感じの男で、暗さはない。

一度、映画を見て食事をした。デートといえるほどのものでもなく、公平も、無理にそれ以上蘭を誘わなかった。

蘭は、新一のことを正直に公平に話した。公平は、2年も待たせる男の心が理解できないと言い、蘭がかわいそうだと本気で怒っているようだった。

公平も頭はいい。新一ほどではないが、話をすると、なんでもよく知っていると感心する。それに、優しい。

でも、やはり、蘭には、公平とこの先へ進む決心はつかない。2年が過ぎ、心に住んでいた工藤新一は、どこかへ遠くへ行ってしまうようにも感じるのだが、やはり、まだ彼がいる。

そして、コナンが哀と急速に仲良くなってしまう、自分から離れていったような寂しさを最近感じている。

コナン自身は、以前と変わらず、蘭に対して人懐っこい笑顔を見せてくれるが、以前に比べて、父や自分と3人で出かけたりすることが少なくなった。

コナンは、よく哀と出かけるようになった。哀が居る阿笠博士の家も以前より、よく遊びにいつている。

新一とコナン。蘭にとって大切な人が、遠くに行ってしまうような寂寥感。蘭は、そんな心で過している。

侵入した組織のコンピュータールームで、哀はAPT X4869のデータをMOにコピーし、組織のデータの削除に取り掛かった。

コナンが傍で周りを警戒している。入り口には、ジョディと赤井秀一が警戒していた。FBIのメンバーは、組織の主要メンバーの搜索をしていた。

「まだか？」

コナンが問う。

「もう少し。あと5、6分、時間を頂戴」

哀には、入り口にいる赤井という男が、以前、どこかで会ったことがるようで、気になったが、今は、それどころではない。

そのとき、赤井たちが警戒する入り口と反対側の壁が大きな音をたてて崩れ、黒い大男が現れた。

「ジン！」

コナンが哀を背中に隠し、麻醉銃を構える。赤井とジョディも駆け寄ってきた。

「ほう。驚いたな。お前がシェリーにたぶらかされた男か。そして、シェリー。その姿、ガキだが間違いない、シェリーだな・・・見つけられなかったわけだ。ガキになってたとはな。フフ・・・驚いたぜ」

ジンを認めて赤井とジョディが駆け寄って銃を構える。ジンが哀を狙って撃った弾は、突然、轟音と共に起こった振動のせいで狙いが反れ、コナンの左腕に当たった。コナンの左腕が血に染まっている。

「工藤君！」

哀が驚いてコナンとジンの拳銃の間に立つ。

「工藤？・・・工藤新一か。なるほど、出来損ないの名探偵の副作用というわけか・・・お前があそこら抜け出られたわけも、そのガキが生きていたのも・・・面白そうな話が聞けそうだが、残念ながらその時間はないようだ。シェリー・・・その男と共に逝かせてやろう」

ジンが銃を構えなおす。その時、爆発音が聞こえ、大きな振動と共に天井からコンクリート片などが落ちはじめた。その瓦礫が赤井とジョディの進路を阻み、ジンとコナン、哀になかなか近づけない。ジンが発砲すると同時に哀がコナンに抱きつくように倒れこんだ。

「灰原！」

哀の体の下になったコナンが叫ぶ。自分の上にうつぶせに被さった哀の体から、鮮血が流れ、コナンの胸まで赤く染まった。

「……く……どう……くん……」

瞳の光が弱くなっていたが、それでもコナンを必死で見つめて哀が言った。

「だい……じょ……うぶ？」

「俺は大丈夫だ。しっかりしろ！灰原！灰原！！死ぬな。……灰原！」

コナンは悲痛な叫びを上げる。

「ジン！」

ようやくコナンたちのそばに立った赤井がジンに発砲する。続いてジョディも発砲。ジンは、静かに崩れ落ち、その場に倒れた。

「……シェリー……赤井……」

赤井は、倒れたジンに近づき、その死亡を確認した。

その時、天井が崩れ、梁が落ちてくるのがコナンの目に入った。

とっさに自分に被さった哀の体と自分の体を回転させ、哀を庇ったところで、記憶が途切れた。

その日、警視庁捜査一課の佐藤美和子刑事と高木渉刑事は、上司である目暮警部に呼び出され、会議室を訪ねた。

「失礼します」

二人が部屋に入ると、白鳥警部も居て、目暮の隣に座って神妙な顔をしていた。

「ご苦労さん。かけてくれ」

「はい」

二人は、白鳥の向かいに座った。

「昨日、茨城の工業団地で爆発火災事故があつたのは知ってるな」

目暮は、いきなり本題に入った。その顔は、いつもに増して、厳しい表情をしている。

「実は、その事故の負傷者のうち2名が近くの慶杏病院に運ばれた。二人とも意識がなく、重態。火傷などもあるが、二人とも拳銃で撃たれている」

「なんですって！」

「あれは、事故じゃないんですか！？」

佐藤、高木の順で驚いて大きな声を出した。

「すまんが、詳しいことは、上からの指示で今は言えん。ただ、この二人、この件のために命を狙われる可能性があるということだ。で、君達に警護してもらいたい。いや、上からの命令で、面識のある君達に警護しろとのことだ」

「面識がある？誰ですか？」

高木が驚いた顔のまま尋ねた。

今まで黙っていた白鳥が口を開く。

「負傷者の2名は、帝丹小学校3年生、年齢9歳の少年と少女。氏名は・・・江戸川コナンと灰原哀」

白鳥は、努めて平静な声で言った。

「ええっ！コナン君と哀ちゃん！！」

佐藤と高木は、同時に立ち上がって叫んでいた。

「それで、具合はどうなんですか？」

佐藤が心配そうに訪ねる。

「二人とも非常に危険な状態で、特に灰原哀君に関しては、背中と腰に2発の銃弾を受け、今、手術中だそうだ。コナン君の方も銃弾を受けているが、これは腕で、彼の方は、崩れてきた柱などによって頭部と背中に負った傷の方が大きいらしい」

目暮も神妙に答える。

「それで、そのこと、毛利さんや阿笠さんには・・・」

「まだ知らせていない。病状は知らせても良いが、入院している場所に関しては、今のところここにいる者以外には、一切口外するなどの命令だ」

白鳥が答えた。

「そんな。毛利探偵や蘭さんにもですか？」

高木の不服そうな声に目暮が言う。

「ここにいる者以外には、一切口外するなど言ってるだろ？」

数分後、佐藤が運転する車で高木と二人、慶杏病院に向かっていった。

「いったい、何があったんでしょう？」

高木がいつもよりゆっくりした口調で、少し乾いたような声を出した。

「場所も遠いし、拳銃で撃たれたとなると、ただ事じゃないわね。上が事件を隠したがつてるというのも気になるけど、コナン君と哀ちゃんのこと、隠したいのかしら？」

「どういう意味です？」

「だって、あの二人、普通の子供にとっても見えなんでしょう？まあ、私達、随分助けられたけど」

「そうですね。コナン君と一緒に東都タワーのエレベーターに閉じ込められたときは、本当に驚きましたよ。爆弾を解体しましたし、爆弾の場所の推理も的中していましたし」

「父の事件が解決できたのも、コナン君のおかげだったし」

「哀ちゃんに関しても、忘れられないことがあるんですよ」

「どんな？」

「あのエレベーターにコナン君と閉じ込められる前、ほら、僕の車に彼女が乗ってて、佐藤さんの車にコナン君が乗ってて、お互い、推理し合ってたでしょ？あのとき、あの子、言っただですよ。『そう、犯人はまるで子供。爆弾というおもちゃを手に入れた質の悪いガキだわ』って・・・その時、なんだかゾクツとしましたよ。怒りのこもった迫力のある感じで」

「ふん。そういえば、あの時、爆弾を高木君とコナン君に解体させようとしたの、哀ちゃんはすぐに気づいたわね・・・とにかく、無事だといいいんだけど・・・あの二人には、死んでほしくない」

「そうですね」

少年探偵団の5人の子供たち。よく事件現場で遭遇する彼ら。そのなかで、異彩を放つ二人の少年と少女。その二人が、今、瀕死の重傷を負っているという。いったい、二人に何があったのか。そもそも、あの二人は、何者なのか。湧き上がる疑問と、二人が助かるよう祈って、佐藤は、ハンドルを握っていた。

第4章：事件（後書き）

事件やアクションを描くのは、苦手です。本当は、もっとジンや組織側の人間を描きたいとも思うのですが、この小説では、組織との対決がメインではないので、このくらいの描写でご容赦してください。次章からが、この小説の本題に入っていきます。

第5章：心配（前書き）

組織への潜入で、ケガをしたコナンと哀。そして、彼らを心配する人々。

第5章：心配

その日、夜遅くになっても、コナンは帰ってこなかった。もう、夜9時になろうとしている。

蘭は、何度もコナンの携帯電話にかけてみたが、繋がらず、メールの返事もなかった。阿笠の家かもしれないと思い、電話をかけてみる。

「ああ、蘭君。今、電話しようとしておったところじゃ」

「え？ひよつとして、哀ちゃん、帰ってないんですか？」

「そうなんじゃ・・・コナン君も帰っておらんのか？」

「そうなんです。携帯も繋がらないし・・・」

「哀君の携帯も繋がらんのじゃ・・・それに、歩美君や光彦君たちのところにもかけてみたんじゃが、哀君とコナン君、今日も学校に行っておらんようじゃし、みんな、二人の行先は知らんようじゃった」

「・・・そうですか」

蘭の不安が大きくなる。向こうの電話口の阿笠も同じだろう。

「とりあえず、心当たりを探してみるつもりなんじゃが・・・」

「私も、探してみます」

と言って、電話を切った蘭だが、心当たりは、他になく、途方にくれてしまった。

阿笠が受話器を置くと、すぐに電話が鳴った。

「哀君か？・・・あ、目暮警部・・・」

哀からの電話かと思ったが、電話の主は、目暮警部だった。目暮は、すぐに迎えの車をやるので、来てほしい。コナンと哀の所在を教えると言って、電話を切った。

「新一君、哀君・・・まさか」

阿笠は、不安といやな予感と、何も話さなかった二人への、小さな怒りなど、複雑な心境で目暮からの迎えの車を待った。

コナンと哀が行方不明になった翌日、蘭は、インターネットで、非合法組織が関わっていたといわれる茨城の工業団地での爆発火災事故の際、ケガをしたらしい男女二人の小学生が車で運ばれたという目撃談を見た。ただ、警察からの公表はなく、しばらくすると、テレビなど、マスコミで、未確認情報として小さく報道されていた。

（あの二人かもしれない）

蘭は、コナンと哀があ的事件に関わっていたのではないかと思っている。二人が行方不明になった時期と重なるし、最近、二人で出かけることが多かったこともあり、よくいつも二人が真剣な表情で会話していたのは、このことだったのではないのか。と想着て仕方がなかった。

あのコナンが自分に連絡をしてこないということは、連絡ができない状況にあるとは思えない。

コナンの携帯電話に何度かけても、繋がらないし、メールも返ってこない。

（コナン君・・・そして、新一。今、どこにいるの？もう帰ってこないの？私を一人にしないでよ。私はどうすればいいの？）

そして、蘭の心に浮かぶひとつの疑惑。

工藤新一も、あの非法組織の事件に巻き込まれたのではないのか。あの組織は、化学薬品の工場をいくつか持っていて、ある人体に大きな影響を与える薬品の実験を行っていたフシがあるという。

新一は、その薬品などによって、行方を隠さなければならない状況になったのではないのか。そして、新一と入れ替わるように現れた江戸川コナン。コナンは、新一ではないのか。何度も蘭が疑惑を抱いたそのことが、また心に浮上してくる。

そして、灰原哀。彼女もまた、この事件に関わりのある人物ではないのか。二人は、そのために、行方不明になってしまったのではないのか。そう考えれば、二人の持つ、子供離れた雰囲気、頭の良さは、納得がいく。そして、仲の良かった理由も・・・。

蘭の心には、疑念と心配が渦巻き、ずっと眠れない夜を過していた。

コナンと哀の行方がわからなくなって3日目、毛利探偵事務所の電話が鳴った。今では、押しも押されもしない名探偵と呼ばれる毛利小五郎が電話に出る。

「はい、毛利探偵事務所・・・あ、目暮警部。・・・えっ、コナンの消息がわかった・・・」

蘭は、父親の電話に会話を聞き耳をたてる。コナンが見つかったというのだ。しかし、電話をしている小五郎の顔は、段々と難しい表情に変わっていった。

「コナン君、どこにいるの？無事なの？」

電話の受話器を置いた父親に畳み掛けるように訊く。だが、父の反応は鈍かった。

「・・・コナンな、あの哀という子と一緒に、事故に巻き込まれて大怪我をしたそうだ」

「・・・うそ・・・で、ケガの具合は？どこの病院に居るの？」

「二人とも危険な状況は脱したらしい・・・ただ、入院先は教えてもらえなかった・・・何か、機密事項に触れるらしい。警察関係の一部しか知らないらしい」

「そんな・・・お見舞いにも、行けないじゃない」

「二人の親戚に当たる阿笠博士と新一の両親には、どこに居るか伝えられているそうだ。博士と有希ちゃんがついてるらしい」

先に目覚めたのはコナンだった。左腕に銃創があり、弾丸が1発残っていた。他に頭と背中を強打していて、頭と背中に大きな怪我をしていた他、左腕を骨折しているのと火傷が少し見られた。

結局、警察の上層部の判断で、他に口外しないことを条件に、二人の親戚である新一の両親と阿笠には、慶杏病院にコナンと哀が入院していることが知らされた。

「気がついた？」

さすがに有希子が心配そうに小さくなったわが子を覗き込んでいる。隣に父の優作と阿笠博士の顔も見える。

「・・・」

なんともいえない、不思議そうな顔をしていたコナンだったが、やがて目の色が変わって起き上がって叫んだ。

「灰原・・・灰原は！？・・・うつ」

背中や腕に痛みが走る。頭と腕、背中に包帯が巻かれている。

「ほら、痛むんでしょ？起きちゃだめ。彼女は、まだ集中治療室よ。拳銃の弾は摘出されたけど、頭も強く打っているようで、まだ危険な状態だつて・・・」

有希子は、正直に話した。コナンにへたな嘘は無意味だということとは、彼女が一番心得ている。

「灰原・・・守ってやるって約束したのに・・・守ってもらったのは、俺のほうじゃねえか・・・」

「ね。新ちゃん、信じましょ。彼女も元気になるって。笑って話せる時が必ず来るって。あなたが命を賭けて守った子でしょ？あなたを放って逝っちゃうわけないわ」

「そうじゃ。哀君が死ぬわけがない。彼女は、これから幸せになる権利があるんじゃない」

阿笠も自分に言い聞かせるように頷いた。

コナンは、集中治療室との仕切りのガラスに顔をつけ、人工呼吸器をつけた哀を見つめていた。頭の包帯が痛々しい。

「小さな体で、ずっと闘ってるのね。コナン君・・・上からの指示で、何があつたのかは聴けないんだけど、哀ちゃんが撃たれたのは、ひょっとして、コナン君を守ったから？」

いつの間にか、佐藤刑事が横に立っていて、哀を心配そうに見ていた。

「うん。アイツ、何の躊躇もなく、拳銃で狙われた僕を庇った・・・守ってやるって約束したのは、俺の方なのに・・・」

「そう・・・助かるわよ。だって、コナン君がこんなに心配しているんだから・・・彼女も、自分が守った人に会いたいはずだから・・・」

「うん・・・ありがとう。佐藤刑事」

（灰原。必ず起きろ。みんな・・・みんな待つてんだ。帰ろうぜ、博士やあいつらの待つところへ。お前の居場所は、あそこなんだからよ。そして、俺の居場所も・・・お前の傍なんだから）

コナンの病室に阿笠が訪ねてきた。

「新一君・・・」

「博士。ごめん。灰原を守るって約束してたのに、あんなケガさせちまった・・・ごめん」

「新一君、そのことは、怒ったりやせん。哀君も、君を守りたい一心だったんじやろう・・・じゃがな、水臭すぎるんじやないかの。二人だけで・・・わしにも、役に立てることがあつたはずじやろう？」

「ごめん・・・でも、博士にこれ以上迷惑をかけたくない、命を危険にさらすわけにはいかないというのは、灰原の意志でもあつただ・・・博士、博士が灰原を娘のように想っているのはよくわかつてる。だから、無事に、灰原を博士の元に帰してやりたかつた・・・俺のことは、どう思ってもいいさ・・・でもさ、灰原も、アイツも、博士のことを父親のように想ってるんだ・・・だから、わかつてやってくれよ」

「新一君・・・今は、哀君が回復することを祈ろう。彼女と、また笑顔で話せる時が来ると、信じておるよ、わしは」

「博士・・・」

コナンは、博士の心労を思うと、頷くしかなかった。

哀の様子を心配して見守るコナンの横に、優作と有希子が立って

いた。

「新ちゃん、寝てないと・・・」

「俺は、大丈夫。とても、寝てられねえよ」

「新一、今回のことは、お前と哀君で十分話し合って決めたことだろうし、済んだことだ、何も言わん。だが、お前、もう少し、周りを頼ったらどうだ？お前も、哀君も、全部一人で背負い込んで・・・迷惑をかけたくない、危険な目に遭わせたくないというのはわかるが、寂しいもんだぞ。特に、親が子に頼ってもらえないというのは」

優作が、いつもと違って、少し寂しそうな表情で言う。

「それに、結果として、周りに迷惑をかけてるでしょ？哀ちゃん、あなたも大怪我して、蘭ちゃんや歩美ちゃん、光彦君たちも、服部君も、随分心配してるわよ・・・私達だって、どれだけ心配したか・・・」

「そだな。悪いと思ってるよ。でも、アイツの、灰原の背負っているものを思うと、アイツのこれからのことを思うと、みんなに知られるのは、やっぱりまずいと思ったんだ」

「新ちゃん」

「なあ、父さん、母さん。今は、アイツが元気になることだけを祈ってやってくんねえか？責めは、アイツが元気になってから、俺が受けるから・・・」

第5章：心配（後書き）

本当は、これ以降の話を書きたくて、この小説を始めたようなもので、実は、ここら辺までは、後に書き足した部分です。なもんで、筋が粗いなど反省しております。

第6章：決心

もう10日になる。コナンは、ずっと、この仕切りガラスから、哀を見つめている。

ふと、哀の瞼が動いた。そして、静かに目が開く。

「灰原！・・・先生！灰原が目を覚ました！」

コナンが叫んだ。

「あなた、誰？」

目覚めた哀がコナンに言った第一声だった。同じように、隣で心配そうに哀を見つめる阿笠にも言った。

「おじさん、誰？」

「お譲ちゃん、お名前は？」

担当医、岡島が哀に訊く。

「みやのしほ」

「えっ！」

コナンと阿笠が声を上げて驚いた。

「今、いくつ？」

岡島が続けて尋ねる。

「5歳」

目覚めた哀の様子がおかしい。

コナンは、両親と阿笠博士、佐藤、高木と共に、病院の事務室で担当医、岡島の話聞いていた。

「記憶喪失？」

「ええ、正確には、精神的なものと頭を強く打った影響による記憶障害だと思います。脳には損傷なども見られませんので、一時的というか、十分、直るものだと思います。彼女は、5歳頃に戻っている状態です。それと、名前の『みやのしほ』というのは、友人が誰か、彼女にとって大切な人の名前だと思います・・・ただ、時間がある程度必要になるでしょう。数日もかもしれませんし、数年かかるかもしれません・・・とにかく、あせらずに、静かに見守ってあげてください。まだ歩ける状態でもないですし、体の傷を治すことも大事ですから」

哀は、阿笠が買ってきた熊のぬいぐるみを抱き、動物の絵本を眺めていた。どうみても、4〜5歳ぐらいの子供のしぐさ、表情。あの大人顔負けの冷静な灰原哀の表情はまったくくない。

「あ！コナン君！」

子供らしく、元気にコナンを見つめて笑いかけてくる。ただ、頭と腕に包帯が見え、腰に受けた銃創のため、まだ歩けない。痛みも時折あるようで、辛そうな表情をするときもあつたが、痛みを訴えたりはしない。

「志保ちゃん・・・」

「ねえ。コナン君知らない？」

「えっ。何」

「お姉ちゃんがどこ行つたか。おねえちゃん、志保が怪我したから、絶対きてくれるはずなの。明美って言うの。知らない？」

コナンは、絶句せざるを得なかった。自分が救えなかった命。灰原哀こと宮野志保の唯一の肉親、実姉の明美。その笑顔と亡くなる

ときの寂しそうな表情が、コナンの臉によみがえり、胸が詰まって涙が出そうになる。

「ねえ。まだ、来ないのかな？お姉ちゃん」

「きつと、もうすぐ来るよ。お姉ちゃん、志保ちゃんのこと、大好きなんだろ？」

「うん！志保もお姉ちゃん、大好き！」

あの灰原があどけない表情で明るく言う。コナンの胸は、ますます押しつぶされそうになった。

子供に戻ってしまったている哀にとって、たった一人の肉親、姉の明美がいけないことは、悲しく、つらいことに違いない。

その日、コナンが哀の部屋に入ろうとすると、ベッドに上体を起こし、すすり泣く哀の姿が目に入った。やっと、上体を起こせるようになっていた。

「お姉ちゃん、どこに行つたの？なぜ、来てくれないの？」

「志保ちゃん」

コナンは、努めて明るく声をかけた。哀は、涙顔のまま、コナンを見る。そして、堰を切つたように声を上げて泣き始めた。

あわててコナンが哀のベッドに座り、哀の肩を抱く。哀は、そのまま、コナンにすがって泣き続けた。

「お姉ちゃんに会いたい・・・お姉ちゃん・・・」

コナンには、かける言葉もなく、ただ、優しく抱いてやることしかできなかった。コナンの胸が熱く、重くなる。今ほど、哀のことを愛しいと思つたことはなかった。

蘭にとって、新一とはどういう存在なのか？

新一が消えて2年たち、最近、蘭は、自分の気持ちに変化があることに気づいた。

そもそも、新一は、幼い頃から、ずっと傍にいた。それが当然だった。彼もそう思っていただろう。だからこそ、離れて時が経つにつれ、彼の気持ちが見えなくなっていくようだった。同時に、自分の気持ちが変わっていくを感じ、愕然とする思いもあった。

始めは、やっかいな事件を抱え込んだか、巻き込まれたため、帰れなくなったと言った。その後、何度か、一時だけ、蘭の元に帰ってきたことがあった。でも、いつも、急に蘭の前から姿を消した。

「必ず戻るから、死んでも戻るから、だから、待っていてほしい」

と、コナンに伝言を残して・・・。

確かに、新一に好きだと言われたことはない。自分も新一に好きだと言ったこともない。でも、お互い、一番近い存在だと思っていた。離れていても、気持ちは一番近くにいます。そう思っていた。

2年が経ち、最近では、新一からの連絡も減っている。最後に新一と電話で話したのはいつだろう？3週間前？1月前？

新一の携帯電話の番号は知っている。でも、かけても繋がることは少ない。いつも留守電になっていて、最近では、メッセージすら残すことはなくなってしまった。

蘭にとって、新一が大事な存在であることは、今でも変わっていないだろう。しかし、以前のように好きかと言われると、首を傾げざるを得ない。新一のことを思い出す時間も少なくなったように思うし、想いも変わったように思う。

その日、蘭の携帯が鳴った。

「新一……」

携帯画面の通知には、新一の携帯番号が表示されている。蘭は、携帯を取った。

「蘭……。久しぶりだな。元気だったか？」

「うん。私は元気だけど、コナン君が……」

「えっ？あの坊主がどうかしたのか？」

「何かの事故に巻き込まれて大怪我したらしいの。」

「そうか……。で、ケガの具合は、わからないのか？」

「警察の機密らしくって詳しいことは、教えてもらえないの。命は助かったらしいけど、どこに入院しているのかもわからない……。ね。新一は、茨城の事件、あの非合法組織の事件には、関わっていないの？」

しばらくの沈黙があり、新一は、おもむろに切り出した。

「実は、そのことで、オメーに言わなくちゃならないことがあるんだ」

「なに？」

「俺、この事件に関わったことで、好きなヤツが出来たんだ」

「え？どういうこと？」

蘭は、新一の言うことの意味がすぐに理解できなかった。この黒い組織事件に関わったことで、なぜ、好きな人が出来るのか？

「いや、詳しいことは、長くなるから……。この事件で守ってやらなきゃならない人がいて、そいつのこと、好きになっちゃった」

蘭は、思ったより冷静だった。そんな気がしていた、予感があった。最近、連絡してくる回数がめっきり減っていれば、当然、そう思うだろう。そして、強いて自分からも連絡しなかった。

「そう……。なんとなく、そんな気がしてたんだ……。でも、勝手

だよ、そんなの・・・」

「蘭・・・」

「だって・・・2年だよ！2年も離れてて・・・今まで、新一といつも一緒だったのに・・・私には、事情が何もわからないまま、新一は離れていって・・・待っていてくれなんて言っというて、ひどいよ」

「すまない・・・蘭には、ホントにすまないと思ってる」

蘭の目からは、涙が溢れ出していた。

「ごめん、新一・・・今は、あなたと、話したくないから・・・」
フツと電話が切れた。

変声機を口元から離し、携帯電話を切ったコナンが目を伏せて、慶杏病院の屋上に立っている。その様子を屋上への入り口から、有希子が険しい顔で見つめていた。

2年・・・長いようで、あっという間に過ぎたようなこの間に、変わってしまったお互いの心。あれほど、聞きたいと思った新一の声、会いたいと願った新一の姿。今は、もう遠い人のように感じる。蘭は、自分の心の変化に驚き、新一の心の変化に怒りと諦めを感じていた。

「ねえ。コナン君。志保のこと好き？」

哀が目覚めて8日目、部屋を訪ねたコナンに、少し恐る恐る哀が訊いた。

「え？・・・」

自分の顔を伺うような哀の瞳には、子供のあどけない色が浮かび、そのあまりの純粹さに、コナンは少し戸惑い、

「ああ、好きだよ」

と、それだけ答えた。

哀は、笑顔をはじけさせる。

「志保もコナン君が大好きだよ！」

少し紅潮した顔で、本当に嬉しそうな表情を浮かべている。

4〜5歳になっている彼女にとって、ここで頼れるのは、心を許せるのは、コナンだけなのだろう。

「ありがとう、志保ちゃん」

コナンもつられて笑顔で答えたが、その顔は、赤くなってしまっていた。

「じゃあさ。大きくなったら、志保をお嫁さんにしてくれる？」

まっすぐに、素直にコナンを見つめてくる瞳は、今までになかった哀の表情。

「えっ！・・・あ・・・ああ、いいよ。お嫁さんにしてあげる」

コナンには、今の哀には、逆らうことはできない。

「やったあ！・・・じゃ、せいやくしよを書いて」

「・・・せいやくしよ？」

「うん。約束を守るように、志保も書くから。『えどがわこなんは、大きくなったらみやのしほをおよめさんにすることをちかいます』って書いて。志保も『みやのしほは、大きくなったら、えどがわこなんのおよめさんになることをちかいます』って書くから」

これも博士が買ってきたスケッチブックに哀がマジックで大きく誓約書を書く。次のページにコナンも誓約書を書かされた。

「これで、約束したよ。約束、破ったらだめだからね」

コナンが苦笑していると、
「よかったわね、志保ちゃん。コナン君、約束は守らないといけな
いわよ」

と声がした。驚いてコナンが振り返ると、病室の入り口に佐藤が立
っていて、いたずらっぽくウインクしている。半目でコナンは苦笑
したが、心の中では、ひとつの決心をしていた。

その日、コナンの病室にやってきた母親に対し、コナンが切り出
した。

「母さん、お願いがあるんだ」

いつになく、神妙な様子の息子に有希子は、息子の言いたいこと
を察した。

「哀ちゃんのことね」

「ああ。アイツの体が治って、記憶障害が治らなかったらさ、アメ
リカの父さんと母さんのところに連れて行ってほしいんだ。俺と一
緒に……」

「そうね。博士のところにおいて、今までのように学校に通うことは
できないしね……あなたは、彼女の傍にいるつもり？」

「俺を守ってこうなったんだ、アイツ……俺が傍にいてやらねえ
と……俺しかいないんだ、アイツには」

「わかったわ。優作も歓迎すると思うし、私も可愛げのない息子だ
けじゃなくて、娘もほしかったから、丁度いいかも」

有希子がコナンの額を指で小突きながら笑って言う。

「悪かったな。可愛げのない息子で」

「へへ……でもね、新ちゃん、心配しなくていいわ。私も優作も、
哀ちゃんの場合は、本当の娘のように想ってるから。あなたの命の

恩人だし、新ちゃんが彼女を大事だと思うのなら、私達にとっても大事な子だからね」

「ありがとう。母さん」

コナンにしては珍しく、母親に、素直に感謝した。

「やっと、私達を頼ってくれたわね」

「え？」

「だって、新ちゃん、哀ちゃんと組織に行くこと、私達には、何も言ってくれなかったでしょ？あなたは、いつも、私達を頼ろうとせず、戦っていたわ・・・優作も、私も、これでもあなたの実の親よ。あなたのことを心配してないわけないわ。もちろん、あなたは、そんなこと百も承知でしょう。でも、親ってね。やっぱり、時々、頼ってほしいと思うものよ・・・だからね、だから、哀ちゃんのことには心配しないで。彼女のことは、私達がちゃんと面倒見るから」

「かあさん・・・頼むよ」

コナンは、今更ながら、親をありがたく思った。そして、そんな親を、大好きな肉親を亡くした少女。いつも強がって、一人で何もかも背負おうとし、自分を庇って大怪我をした少女。コナンは、自分にとって、哀が今、一番大きな存在であることを自覚し始めていた。

第6章：決心（後書き）

コメントいくつか頂きました。ありがとうございます。読んでくださった方に感謝します。

第7章：仲間（前書き）

コナンと哀がない間の仲間達の想い。

第7章：仲間

「なあなあ、見たか？昨日の東京スピリッツの試合」

「見ましたとも。良い試合でしたね。思わず、手に力が入りました」

朝、いつもの登校風景。

元太と光彦が昨日のサッカーの話を楽しそうにしているが、そんな二人に少し遅れ、歩美が俯きながら、歩いている。

「やっぱり、前半ロスタイムのあのシュート、あれを外したのがすべてでしたね」

光彦は、明るく振舞って言いつつ、後ろの歩美に目をやった。同じように元太も後に目をやる。二人の視線の先には、俯いて、悲しそうに歩いている歩美の姿があった。

たまらず、元太が歩美に声をかけた。

「なあ、歩美。そんなに落ち込んでても、あいつら、喜ばねえぜ」「そうですよ。心配する気持ちはわかりますが、そんなに塞ぎこんでたら、歩美ちゃんが病気になっちゃいますよ」

コナンと哀が行方不明になって10日。阿笠に消息を訪ねても、二人は、事故にあつて今、入院中だとしか教えてもらえず、入院先も、二人の病状も教えてもらえない。

三人の小さな心には、二人の親友のことが、いつも影を落としていた。

「コナン君と哀ちゃん、いつも、私達の後を歩いてたよね。ヒソヒソ話したり、私達を優しい目で見たりして・・・」

そう言つて、歩美は、ゆっくり振り返った。そこに、コナンと哀がいることを願うように・・・

（ん？どした、歩美ちゃん）
（何かあったの？吉田さん？）

二人の声が聞こえたような気がした。

「いつもさ、二人で後でヒソヒソ話しててさ、それで怒ったことあったよね、三人で・・・でも、ヒソヒソ話してても良いから、コナン君と哀ちゃんにここにいてほしい・・・」

歩美が泣きそうになったので、元太も光彦も慌てて言う。

「大丈夫だよ、歩美。アイツら、いつも、ちゃんと俺達のところへ帰ってきてたじゃんか。はぐれてもさ、いつも、最後は、一緒になったじゃんか。だから、大丈夫だよ。必ず、俺達のところへ帰ってきてくれるさ」

「そうですよ。あの二人が、僕達に黙って、どっか行っちゃうわけありません。必ず、帰ってきてくれますよ。仲間なんですから」

歩美は、泣きそうになるのをぐっと堪えたようだった。

「そうだよな。必ず、また、帰ってきてくれるよね」

「そうだ、二人が帰ってきたときのために、なんかプレゼント用意しませんか？」

「うん。何がいいかな？」

「うな重がいいな」

「それは、元太君がほしいものでしょう？お二人にあげるもの話をしてるんですよ」

「もう、元太君・・・」

歩美も光彦も元太も、寂しいはずなのに、他の仲間を思いやって明るく振舞おうとしている。三人は、お互いのそんな気持ちが、今は、嬉しかった。

「おはよう、お父さん」

「蘭、お前、ちゃんと寝てるのか？」

その日の朝、毛利探偵事務所の上の自宅で、毛利小五郎は、娘の蘭の顔色の悪さに心配して訊いた。

蘭は、笑顔を作って言っ。

「大丈夫よ。ちゃんと寝てるわよ。それより、お父さん、早くご飯済ませて。今日は、少し早めに出たいから」

「あ、ああ、わかった」

小五郎は、無理になんでもない様子を作ろうとする娘の顔を見て、胸が痛んだ。

「ごめんなさいね。遅くなっ

蘭が出かけた後、探偵事務所に妃英理が訪ねてきた。毛利小五郎の妻であり、蘭の母親であるこの弁護士は、小五郎との折り合いが悪く別居中。それでも、お互い、気持ち近くにいるような、周りから見ると、不思議な夫婦だった。

「いや・・・」

小五郎は、ゆっくりとタバコに火をつけた。

「それで、コナン君の様子は？」

「目暮警部によれば、ケガについては、心配はいらないらしい。ただな、一緒にいた博士んとこの子、哀って子の方が重傷らしくてな。まだ歩けない上に、記憶障害が出ているそうだ」

「そう。じゃ、まだ帰ってくるのは、先になりそうね」

「ああ。それにな、警察は、二人が命を狙われるかもしれない思っているようだ」

「どういうこと？」

「どうも、あの茨城の黒の組織事件に関わったらしい」

英理は、眼鏡を外し、目の間に手をやっている。

「どうした？疲れているようだが・・・」

「まあね。それでも、母親ですからね。蘭のこと、やっぱり気になるって、寝られないときもあってね」

「そうか・・・」

「あなたは？あなたこそ、眠れませんかって顔してるわよ」

「まあな。お前と同じだよ。父親だからな」

「それで、話は蘭のこと？」

「それもあるが・・・なあ、俺達、そろそろ元の鞘に収まらないか？もう、俺も限界なんだ・・・増して、新一が帰ってこない、コナンもいないではな、蘭になんて言ってやっていいか・・・ダメだな、男親は・・・」

「そんなことないわ。私の方が蘭を置いて、出て行っただんですもの・・・母親失格なのは、私の方」

「蘭を見てるとな、俺や周りに心配かけまいとして、明るく振舞ってるんだよ、ずっと・・・それを見てるのが辛くてな。せめて、コナンが居てくれれば・・・それに、やっぱりな、何でも話せる母親が傍にいないとな・・・」

「ねえ、あなた。蘭は、私達が思っているより強い子だわ。だから、新一君のことも、コナン君のことも、そう心配はいらないと思う・・・でも、優しい子だからね。他人の痛みをわかってやれる子だからね。だから、あなたやみんなに心配かけまいとしているんでしょうけど・・・わかったわ。仕事もなるべくセーブするし、しばらくはここへ通うことにするわ・・・先のことは、これから、話し合っていきましょう」

「わかった・・・忙しいだろうが、頼むよ」

小五郎は、吸い終わったタバコを灰皿でもみ消した。

「それにしても、あの子たち・・・コナン君と哀ちゃん・・・黒の組織事件に巻き込まれたようだけど、どうしてなのかしら？」

「あん？なんか気になることでもあるのか？」

「警察がケガをした小学生を匿うなんて、普通じゃないわよ。それにね、この事件では、FBIやCIAが動いていたという話でしょ？アメリカやロシア、イギリスの国家機関も動いてるし、これだけ大掛かりな搜索、摘発が行われたのであれば、それなりの情報が流れていた可能性はある。あの子たち、ひょっとして、もっと以前から、この事件に関わっていたんじゃないのかしら？FBIの捜査官も知り合いだったんでしょ？」

「ジョディ捜査官のことか？まあ、その可能性もあるかもしれないが、しかし、二人共、まだ小学生だぞ。あの事件は、根が深いからな。警察も警戒しているんだろう」

「でも、あの二人、小学生にしては、勘も鋭いし、知識も、行動も小学生離れしているでしょ。警察にとっても、重要な人物かもしれない・・・」

英理は、小五郎の顔を見つめ、意味ありげに目を細めた。

「それで・・・有希ちゃんと阿笠博士には、会ったの？」

「いや、博士は、ほとんど留守だし、有希ちゃんも、こつちに来て、すぐに病院に戻っているようだな」

「そう。とにかく、コナン君には、早く帰ってきてもらいたいわね」

同じ日、朝、哀の病室をコナンが訪ねると、哀は眠っていた。髪の毛の乱れをそつと直してやりながら、コナンは、優しい目で哀の寝顔を見つめている。

（決めたぜ灰原。俺は、ずっと・・・）

と、突然、哀の目が開かれた。

「！」

一瞬、ドキッとしたコナンだったが、

「志保ちゃん？」

と、優しく問いかけた。

哀は、啞然とした表情でコナンを見つめているが、何も言わない。その目は、子供のものではないと、コナンにはすぐにわかった。

「はい・・・ばら？・・・灰原」

「え・・・く・・・工藤君？」

「灰原！わかるのか」

「あ・・・あなた、無事！・・・あなた無事なのね！・・・よかった」

検査の結果、哀の脳には、異常は見られなかった。岡島医師は、記憶障害は、完治したと診断した。

「そう・・・データの収集は失敗したわけね・・・ジンは死んだのね。組織も・・・」

「組織の幹部クラスは、9割方逮捕か死亡だそうだけど、完全に息の根を止めたのかどうか、FBIが確認している」

「ごめんなさい。薬のデータが手に入らなかった・・・あなたを危険な目に遭わせただけで・・・」

「おめえのせいじゃねえよ。俺も迂闊だったし、あの状況じゃ、命があっただけでお互いめっけモンだよ。今は、何も考えるな。体、

治すことだけ考えろよ。リハビリしなきゃなんねえだろ。俺もついてやるから」

「でも、あなたを彼女の元へ戻すため、解毒剤はなんとか完成させるから、それは、私の命に代えても……」

「今は、体を治すことだけ考えろよ……すべては、それからだ」

コナンは、哀にいつもの笑顔をむけて言った。そして、背を向けて低い声で言う。

「心配してたんだぜ。ずっと……このまま目、覚まさねえんじゃねえかって……記憶が戻らねえんじゃねえかって……おめえが生きてて、おめえの記憶が戻って、ほんとに良かったよ」

「工藤君……ごめん……ありがとう」

コナンの横で、阿笠が涙を浮かべて哀を見つめている。

「哀君……よかった」

「博士……ごめんなさい。黙って行って……それに、こんなケガして、心配かけて……ホントにごめんなさい」

「いや、今は、哀君が帰ってきてくれただけでいいんじゃないよ。何も心配せず、ゆっくり休んで、体を治しておくれ」

「博士。ありがとう」

第7章：仲間（後書き）

「せいやくしよ」を書きたくて、哀ちゃんに記憶障害になってもらったようなもんです。誰か、私に「バカやろう」と言ってください（^^；

第8章：ふたりのとき

不思議な感覚だった。

夢を見ていたような気がする。しかし、触れた感覚、触れられた感覚が残っている。暖かい胸に触れた腕や顔、肩に置かれた暖かな手。実感を伴ったその暖かさが、まだ腕に、肩に、顔に残っているような感じがして、哀は、戸惑っていた。

体を感じる確かな感覚と霞んだ記憶。

悲しくて泣いていた自分。その体を包み込み、癒してくれたぬくもり。霞んだ映像でも、顔や肩を通して、心まで届いたその暖かさの感覚は、確かなもの。そして、その暖かさの主は、間違いなく彼今の哀にとって、一番近くに居て、いずれ、遠くに離れてしまうかもしれない人。

その人の暖かさに、いつまでも触れていたいと思う自分と、それを諦めようとしている自分。暖かな感覚と、霞む映像と、揺れる心。

（らしくないわね）

哀は、病室の窓から外を眺め、自嘲するように笑った。

ドアがノックされる。返事を返すと、コナンが入ってきた。一瞬、ドキツとした哀だったが、いつもの冷静さを装ってコナンを迎えた。

「気分は、どうだ？痛みは、あるか？」

「大丈夫よ。あなたこそ、傷の方はどうなの？」

「この通り、もう大丈夫さ」

腕を上げて、ニコッと哀に笑って見せる。そして、不思議そうに哀の顔を見つめた。

「何よ」

哀が半目で睨み返すと、コナンは、悪びれずに言った。

「いや。おめえ、5歳の志保ちゃんとは、とても同じ人間に見えねえなと思って」

「どうせ、可愛くないわよ」

「・・・そうでもないさ」

「え？」

哀が怪訝そうにコナンを見つめる。

「え・・・いや、やっぱりさ、おめえは、そうでないと・・・憎まれ口を叩くぐらいがいいぜ。面食らうことが多かったからな、おめえが子供らしいと」

「誰かさんと違って、子供のフリが下手なものね」

「で、あなた、子供らしい私に何かしたわけ？」

哀がコナンを半目で睨んでいる。

「なんだよ。なんもしてねえよ・・・そういえば、約束はしたな」

「約束？」

「そのスケッチブックに証拠があるぜ」

言われて哀は、テーブルに置いてあったスケッチブックをめくる。なんとなく、見覚えがあるような、ないような絵がいくつか出てきたあと、哀のページをめくる手が止まった。哀の顔が赤くなっていく。コナンは、楽しそうにその様子を見ていた。

『えどがわこなんは、大きくなったら、みやのしほをおよめさんにすることをちかいます』

「おめえが書けって言ったんだぜ。ほら、これ」

コナンは、自分が持っていた、同じスケッチブックから破り取った一枚を哀にかざした。

『みやのしほは、大きくなったら、えどがわこなんのおよめさんになることをちかいます』

哀は、目を見開いて驚いた顔をしている。コナンは、少し意地悪く、その様子を楽しんでいた。

「なっ・・・どうして・・・こういうことになってるわけ？・・・あなたが書かせたんでしょ？」

哀は、コナンに抗議の目を向ける。

「おめえが書くって言い出したんだよ。おめえの、志保ちゃん意志だよ。約束やぶっちゃだめだって、おめえから念をおされたし・・・佐藤刑事が証人だよ」

コナンが病室の入り口を指差すと、いつの間に来たのか、扉のところで佐藤がウインクしていた。

「バカ」

哀は、そうつぶやくと、スケッチブックを放り出し、顔を背け、シーツをかぶって寝てしまった。

結局、組織からAPT-X4869のデータを取ることはできず、組織のメインコンピューター自体、破壊されていた。

コナンと哀の見舞いにジョディとその上司のジェイムズがやってきて、組織のその後について、状況を説明していた。

まもなく、2人は、一旦アメリカへ帰国するという。

「結局、主だった幹部は逮捕するか死亡が確認され、メインの施設もほぼ壊滅させることができたけど、一部のメンバーが地下に潜っている可能性もあるわけね」

哀は、状況を聴くとそう言ってジョディを見た。

「そういうこと。ロシアやアメリカなどの拠点は、ほぼ壊滅させられたと思うんだけど、世界には、いろんな国があるし、完全に消滅させることができたとは、言えない状況ね。でも、私達も引き続き捜査するし、今回の事件が公になったことで、インターポールも、各国の警察や公安、軍も動いているから、以前に比べれば、格段に危険は減っているわよ」

ジョディは、ベッド上の哀と、その足元に座るコナンの表情を見ながら、話した。

「あの爆発は、組織側の人間が証拠の隠滅を図ったためのようで、そのため、組織との繋がりが疑われながら逮捕に至らない人間も何人かいるわ。あなた達のことを知る人間は、その中にはいないと考えているけどね」

「ありがとう、ジョディ先生。それと、ここへ僕達を運んでくれたのもジョディ先生でしょ？」

「ええ。ここが現場から10分もかからない所でよかったわ。あなた達、運が良いわよ」

「彼女は、赤井君と一緒にまた崩れるかもしれないあの部屋から、君達を助けた。4人とも命があつてよかったと思うよ」

ジェームズが微笑む。

「ただ、いくつか気になることがあるの」

ジョディが哀に向き直って言う。

「組織のデータの一部が流失しているらしいの」

「えっ？」

「噂は、アメリカで流れているの。確認を急いでいるわ」

「そう。何かわかったら連絡してくれる？」

「もちろん、あなた達に関わることもかもしれないしね・・・あとは、マスコミ関係ね」

ジョディは、コナンに向き直った。

「あの事件以来、組織のことが明るみに出て、政界や財界、芸能界まで、いろんな有名人が関わっていたこともあって、マスコミの追求が激しくなっているわ・・・それと、インターネットから出た目撃情報で、ケガをした子供がそこから運び出されたことが載って、どこのマスコミも、あなた達だって特定はできていないけど、同時期に行方不明になっているあなた達のが、どこから漏れる可能性もあるわね」

二人を知る人から、悪意なく話しが漏れる可能性も十分考えられる。

「日本の警察も、私たちも、あなた達がここに居ることは、伏せておくわ。マスコミ対策もあるし。ま、護衛は日本警察に任せるけど・・・さて、クールキッド。あなたは、まだまだ、哀を守らないといけないことになるけど？」

「もちろん、灰原を守るさ。今は、灰原の体が早く良くなるように、手助けするつもりだよ」

「工藤君・・・」

コナンは、静かに哀の方を見て言う。

「大丈夫。守ってやつから・・・」

コナンは、ずっと哀のリハビリにつきあっている。ここに二人が入院していることを知っているのは、警察関係者以外では、新一の

両親と阿笠博士だけ。

哀は、黙々と歩く練習をしている。足、とくに右足が自由にならない。他人の足のようで力が入らないし、ヘンに動かそうとすると腰の、撃たれたところがかかなり痛む。

哀が慎重に足を運ぶその姿をコナンがじっと見つめている。

コナンにとって、灰原哀という女性の存在の大きさを、今回は、いやというほど知らされた。哀を守っているつもりだった自分が、実は、哀に支えられ、守られてもいたことに気づいた。そして、哀の記憶障害が治らなかった時は、自分は、躊躇うことなく、哀と共に、アメリカの両親の元で暮すことを決め、母親に頼んだ。そして、哀に対する自分の想いに気づいた時、蘭に「別れ」を切り出す電話をした。正直、まだ蘭は、コナンの心に大きく存在している。彼女の笑顔を見たいとも思う。

しかし、哀が自分を想ってくれていると考える以前に、自分が哀のことを大切な存在、かけがえのない女性であるということを、コナンは、自覚してしまった。

（灰原・・・俺は決めた）

哀は、コナンに見つめられていることに気づいた。

「ね？・・・穴が開きそうなんだけど？」

「あん？・・・あつ、わりい」

赤い顔をしてコナンがうつむく。と、次の瞬間。

「きゃ」

小さく悲鳴を上げ、哀がつまずいて倒れそうになり、傍にいたコナンが、とつさに抱きとめた。

「ありがとう」

哀は、素直に言ったが、次の瞬間のコナンの行動に戸惑った。コナンは、そのまま哀の背中に手を回して抱きしめ、離そうとしない。「えっ……ちょ、ちょっと……離して……」

哀が逃れようとする、ますます背中に回った手に力が入る。哀は、以前、このぬくもりに触れたことを思い出す。そして、その心地よさに心が静まっていくのを感じた。

哀は、自分の手をコナンの背に回し、手のひらを優しく彼の背に当てる。

やがて、コナンが哀の肩に手をおき、ゆっくり体を離れた。

「わりい……邪魔しちゃった」

哀は、コナンの行動と、自分の心の揺れに戸惑いながらも、平静を装った。

「……そんなこと……今日は疲れたから、これくらいにするわ。部屋まで連れて行ってくれる？」

「ああ、もちろん」

コナンは、隅に置いてあった車椅子を哀の傍に持ってきて、哀が座ると、ゆっくり押しはじめた。

慶杏病院は、総合病院としてかなりの規模であるが、二人は、外来や内科などの病棟のある場所から少し離れ、別院のようになった脳外科病棟にいる。これは、院長が警察上層部と親しく、警察の要請で二人をここへ入院させているためで、ここには、二人の他は、入院患者が僅かで、他の患者とあまり顔を合わせることもしない。そのため、二人だけでいる時間が長かった。

誰もいない、少し暗い廊下をコナンを押す車椅子がゆっくり移動していく。座っている哀は、自分の心を揺らしたコナンの気持ちを測りかねていた。

(この人、私を・・・まさか・・・まさかね)

第8章：ふたりのとき（後書き）

原作のコナンと哀も、ふたりの時間があれば、お互いの距離が小さくなるのではないかと思います。これまでのストーリー、コナンと哀にケガをしてもらったのも、匿ってもらい、長い時間ふたりきりにさせたかったという筆者の自己満足に他なりません（^^；

第9章：好意

「あら、ラブラブね！新ちゃん。哀ちゃん」

リハリビ室に明るいい声が響く。

「あつたく、息子をからかって楽しいか？」

「ええ。とっても！」

いつも静かなリハリビ室。二人がいつものようにリハリビをしていたが、今日は、有希子一人のせいで、随分賑やかになった。

「ほら、入ってらっしゃいよ」

入り口で佐藤刑事となにやら話していた男が、コナンと哀の方へやってくる。

「やっとご登場かよ。父さん」

「久しぶりに会うのにご挨拶だな」

優作は、コナンが意識を取り戻した後、一旦日本を離れていた。そのため、事件後、哀が会うのは、初めてである。後から、阿笠もやってきた。

「哀君。お礼を言いたくてね。ありがとう、息子を救ってくれて」

「いえ。今まで、ずっと助けられてきたのは、私の方ですから・・・」

「

優作は、優しく微笑んで哀を見ていた。

「なあ、新一。哀君は、随分と綺麗になったな」

コナンは、ドキッとした。そして、優作に言われて、ここ最近、自分がなぜ哀から視線を外せずにいるのか、その理由を理解した。哀は、少し赤くなって俯いている。

「あら、女房の前で他の女性に言う言葉じゃないわね」

「いや、私は、客観的に、作家としての目で言ってるんだよ・・・博士もそう思いますよね」

少し慌てて優作が言い訳し、阿笠に同意を求める。この新一ことコナンの両親は、外見は小学生の哀を決して子供扱いせず、一人の女性として接している。哀には、それがよくわかっていた。

「哀君は、前から綺麗じゃよ。ま、一段と綺麗になったことは、否定せんがの」

阿笠の答えに、コナンが苦笑する。

「親ばかだな」

「何か言ったか？」

阿笠がコナンを睨む。そんなやり取りを、哀は、目を細めて見ていた。

「でも、哀ちゃんが綺麗になったってことは、私も同感だわ」

有希子は、優作に笑いかけた後、コナンを見て意味ありげな微笑みをもたらした。

「私達は、先生にお話を伺ってくるから・・・新ちゃん、哀ちゃんの足が悪いからって、彼女にヘンなことしちゃだめよ」
「かあさん！」

コナンは、赤い顔で母親に講義の声を上げる。

阿笠と優作、有希子は、そんなコナンを笑いながら見た後、部屋を出て行った。

哀にとつて、この工藤親子の親切は、計り知れないものだつた。息子を小さくしてしまった組織にいた自分。息子を小さくした薬、その開発者の自分に対し、責めたり、非難めいたことは一言も言わず、命がけで自分を守ってくれた当の息子と共に、自分に親切にしてくれる。今回は、親代わりにもなってくれている。

いったい、この人たちのこの並外れた暖かさ、優しさは何なのかと思う。そして、自分は、そこまでしてもらえ価値のある人間なのだろうか。そして、一方でその親切、優しさに甘えている自分が居る。

そして、それが哀の心を暖かくしてくれていると共に、自責の念を強くさせているのも事実だつた。

「新一は、やはり哀君に好意を持っているようだな」

優作は、部屋を出ると、廊下を歩きながら有希子に訊いた。

「そうなのよね。あのパーティーのとき、彼女のドレスを作ってたってくれって言い出したから、そうかなとは思ってたけど・・・」

「蘭君のことは、どうする気にいるのかな？」

「この前、蘭ちゃんに電話してたわ、新ちゃん。他に好きな人が出来たって・・・もう2年以上になるわね。新ちゃんがコナンになつてから・・・あの年頃の2年って、長いと思うの。蘭ちゃんもつらいけど、たぶん、あの子も、哀ちゃんもつらい思いをしていると思う・・・新ちゃんも・・・」

「あの子たちは、わしらが考えている以上に、強いし、優しいとわしは思っておる。だから、大丈夫じゃよ。蘭君も」

阿笠が有希子に明るく言う。

「まあ、まだ若いからな、あの子たちは・・・新一や蘭君、哀君がどの道を選んでも、私達の役目は、サポートしてやることしかないと思う」

「そうね」

優作の言葉に、有希子は頷いた。

阿笠と優作、有希子は、担当の医師、岡島をその診察室に訪ねた。

「工藤優作さんと有希子さん。お二人のファンなんです。お会いできて光栄です。」

岡島は、優作と同年代の医師で、慶杏病院の院長の甥にあたるといふ。眼鏡をかけ、色白で端正な顔をしている。

「今回は、コナンがお世話になっています」

「親戚と伺いましたが・・・」

「事情がありましたね。コナンは、わが子同然ですし、哀君の両親は、彼女が生まれてすぐに亡くなっていますので、今回は、私達三人が二人の親代わりをしたいと思ひまして」

「そうですね。しかし、あの子達には驚かされましたよ。そもそも、子供が銃で撃たれるというのが異常ですが、あの哀ちゃん、自分のどこに弾が入っていたのか、どの神経がやられたのか、そのあたりを私が説明すると、すぐに理解しましてね。人体のつくりを実に的確に掴んでいるんです・・・まるで、大学の医学生のようにだ」

阿笠と優作、有希子は、顔を見合わせ、少し苦笑した。

（哀ちゃんもちよつとは抑えればいいのに・・・）

「それにあの子は強い」

「えっ？」

「いや。あのくらいのケガとリハビリとなると、大人でも痛みが大きくて、つらいときがあるものなんです。あの子は、一言も弱音を吐きません。痛みはあるはずなんですが、口に出さず、黙々とリハビリをやっている・・・それと、コナン君も・・・二人とも頭が良いのには感心させられますが、コナン君は、哀ちゃんの顔色とか、

表情を見て、体調とか、痛みがあるとか、すぐわかるようです。で、その日の彼女の体調を見て、早めに切り上げたり、少し頑張ってみたりと、調整をしています。なかなか、プロの医者でも、ああはいきません」

「へえー。あの子達がねえ」

有希子は、大袈裟に感心してみせたが、内心、ある意味当たり前だと思っている。優作も、

「そうなんです、驚きましたね。あとであの子達に話を聞いてみたいな」

なんてとぼけたことを言っている。

でも、コナンが哀の表情をそこまで読み取れるというのは、阿笠も、工藤夫婦にしても、少し意外であった。

ここに入院してそろそろ2ヶ月に近くなるが、哀にとっても、コナンにとっても、毎日が穏やかに過ぎ、決して居心地は悪くない。組織の脅威が格段に小さくなったことで、哀も精神的に随分楽になったこともあり、この2ヶ月の間、哀は随分、コナンに対して素直に話したり、穏やかな表情を見せたりするようになった。

そして、それがコナンにとって、哀をさらに大きな存在にし、意識させていくことになっている。時折、佐藤刑事たち警察関係者と阿笠博士、工藤優作、有希子夫婦が訪ねてくる以外は、いつも二人でいるから、無理もなかった。博識の哀は、コナンにとって、楽しい話相手でもある。

哀も、コナンとの穏やかな時間にこれまでになかったほど、ゆったりと過している自分に気づいている。しかし、コナンとの距離が

縮まるに従い、ますます自責の念が次第に強くなってきているのも確かだった。

いつごろからだろう、哀が、コナンこと新一に好意を持ち、それが時と共に大きく、深い愛になっていったのは。でも、哀は、幼馴染で仲の良かった新一と蘭を引き裂いた者の一人として、この想いを胸の奥に沈め、一生誰にも告げないと決めていた。

しかし、押さえ込めば押さえ込むほど、想いは強くなっていく。キャンプに行ったり、事件に遭遇したり、共に過した時間の中で、自分のなかの彼への想いを改めて思い知らされた時もある。でも、そのたびに、彼の幼馴染を笑顔が浮かび、絶望に似た感情が心を占めてきた。

もちろん、彼を想っていることは、素振にも出さなかった。誰にも気づかれていなかった自信はあった。でも、組織に潜入することを二人で決め、あのパーティーの一件から、自分の感情をコントロールすることが難しくなってきた。あの夜の行動は、自分の本心であったと認めざるを得ない。

哀は思う。もし、新一があの時、小さくならずに死んでしまっていたら、自分はどうなっていたかと。

アポトキシン4869の実験結果と工藤新一の家の調査、姉から聞いていた話を総合して、新一が幼児化し江戸川コナンになっていることはほぼ間違いないと思っていたが、それでも、100%確信していたとは言えなかった。

コナンに出会うことがなければ、哀はとっくに死んでいたかもしれない。しかし、コナンにすれば、哀と出会ったことで、哀を守るために何度も身を危険にさらすことになった。ピスコの一件、バスジャック事件、ベルモットとの対決、ツインタワー爆破事件・・・そして、組織との最後の対決。

おそらく、彼でなければ、彼だからこそ、彼女を守りきることができたのだろう。それに、これらの事件では、哀は、何度が自ら死のうとした。そして、コナンや彼の大事な人たちが自らの身を危険にさらしても、それを止めてくれた。助けてくれた。自分に出会わなければ、いずれ組織との決着はつけなければならなかったにしろ、彼がこんなに身を危険にさらすことはなかっただろう。

自分は、コナンや周りの人々にとって、疫病神でしかないのかも
しない。

（私は、彼や彼の恋人、友人の身まで危険にさらした。彼を好きに
なる資格はない。）

この穏やかに二人で過す日々が哀にとっては、夢のような心地よいものであると同時に、つらい日々であるのもまた事実だった。
そして、それは、コナンが最近見せ始めた自分への好意がよく見えるようになればなるほど、傷がうずくように、痛みも大きくなってきていた。

（あの人は、何を考えているんだろう）

昨日、抱きしめられた。朝起きると、自分を優しく見つめている彼の顔があつたのも、一度や二度ではなかった。まだ、ちゃんと歩けない自分を屋上や庭に連れていく彼は、寒くないかとか、痛くないかとか、いつも気づかってくれるし、自然に肩を貸してくれる。手をとってくれる。これが好意でなくてなんなのか。そして、彼の大事なあの幼馴染の笑顔を思い浮かべ、胸に痛みを感じながらも、自分も彼に甘えている。

そもそも、姉が唯一の肉親であった哀にとって、人に甘えるなどということは、考えもしないことだった。そんな自分がコナンには、素直に甘えることができるようになっていくことに、哀自身、驚いていると同時に、改めて、自分の彼に対する想いを認識せざるを得なかった。

哀の体の回復には、まだ時間が必要だった。コナンの方は、もう退院してもなんの問題もないまで回復していたが、連日、組織に関するニュースがテレビなどで取り上げられているため、そのマスコミなどからの目や組織の残党から二人を守るため、警察は、安全が確認できるまで、コナンと哀を保護する方針であった。そのため、警察の上層部とも繋がり深いこの慶杏病院で、二人は、保護されている格好だった。

第9章：好意（後書き）

工藤夫婦は、一度、メインにして書いてみたいと思っています。それに、優作と哀、有希子と哀という組み合わせも好きですね。この話では、後に「有希子と哀」が多く出てくることになりそうです。

第10章：コナンの告白

この日は、激しく雨が降っていた。午前中、リハビリをした後、いつもは昼食をとってから、庭や屋上に行くのが二人の日課だったが、今日は、哀の部屋で過していた。

ベッドの上で、哀は本を読んでいる。博士に頼んで買ってきてもらった薬学の本。椅子に座ったコナンは、推理小説を読んでいる。哀がふと見ると、コナンは、本を持ったまま居眠りをしている。哀は、目を細めて優しく微笑むと、上着でもかけてやろうとベッドから下りようとした。

まだ、足が不自由なので、ベッドの手すりを掴み、慎重に床に足を下ろす。そして、ゆっくり立ち上がり、コナンの右上の壁にかけてあった哀の上着を取ろうとした時、まだ自由にならない足からフツと力が抜け、そのままコナンの方へ倒れこんでしまった。

コナンは、自分の首に手を回し、倒れてきた哀の顔を見つめ、あつけに取られている。哀は哀で、しまったという顔で間近になったコナンの顔を見つめていた。

「……ご……ごめんなさい」

哀が左手に上着を掴んでいたので、コナンにも状況が飲み込めた。

「……いや……それより、大丈夫か？」

「ええ……ごめん……」

哀がコナンの肩に手を置いて、立ち上がろうとした時、コナンが

立ち上がって哀を抱きしめ、ゆっくり、哀をベッドに座らせた。そして、自分も哀の隣に座り、右手で哀の肩を抱く。哀は、少し戸惑ったが、おとなしく、コナンのぬくもりを感じていた。

コナンが口を開く。

「俺さ、決めたよ」

「何？」

「俺さ。ずっとおめえと一緒にいるってさ、決めたんだ」

「え？」

「これからも、ずっとおめえと居たい。灰原、おめえが好きなんだ。これからも、守ってやりたい……」

哀は、驚いてコナンの顔を見つめる。

「何言ってるの。あなた、あんなに蘭さんのことを想ってたじゃない。……あんなに……あんなに戻りたがっていたじゃない……蘭さんへの想いを何度も私に話してくれたじゃない……それなのに……あなた、自分の言ってることがわかってるの？」

薄々、コナンが自分に好意を持っていると感じてはいた。しかし、彼が何度か話してくれた蘭への想い。

彼がどれほど蘭を想っていたか、彼以外では、哀が一番よく知っていただろう。蘭より、わかっていたかもしれない。だから、コナンから告白されるとは、思いもしなかった。

「蘭には、他に好きなヤツが出来たって、この前、電話で言った。俺は、もうアイツの所には戻れない」

「えっ?……どうしてそんな……元の体に戻ることができない

かもしれないから？」

「いや、それは関係ねえよ。もし、元に・・・工藤新一に戻ったとしても、お前の傍にいたい」

「あなた・・・どうかしてるわ！・・・私が・・・あなたと彼女を引き裂いた薬を作った私が・・・あなたに・・・あなたに想われるなんて・・・」

「俺は、おめえが好きだ。これは、俺の本心だよ・・・おめえの本心を訊かせてくれないか、俺のこと、どう思ってる？」

叶うはずのない恋だと思っていた。しかし、ここへきて、優しくしてくれる彼の好意に、哀は、期待していなかったといえ、嘘になる。しかし、彼の口から、その想いを聞いた今、正直、戸惑いが大きい。彼の傍にいたい・・・でも、自分が居れば、彼女が悲しむ彼女が「真実」を知った時、どう思うだろうか？増して、彼女から新一を奪ってしまえば、なお更許されないと思う。

「なあ、灰原。俺も、生半可な気持ちで言ってるんじゃないぜ。おめえには、蘭のこと、いろいろ話したからな、俺がこんなこと言うの、信じられねえのかもしれないけど・・・でも、本心だと誓えるぜ、おめえが好きなのは・・・」

「ちょっと待って・・・お願い・・・私は・・・ごめん」

「・・・わーった・・・俺も急ぎすぎた。悪かったな」

コナンは、少し俯いて考えた後、静かに部屋を出て行く。扉の閉まる音が聞こえると、哀は、半ば呆然とした表情で、ベッドに座っていた。

コナンが部屋へ戻ると、有希子が怖い顔をしてベッドに座っている。

「かあさん！……いつ来たんだ？」

「そんなことは、どうでもいいわよ……それより、哀ちゃんに好きだつて言つてたでしょ？」

「えっ！……聞いてたんか……」

「新ちゃん、本気ね」

「ああ」

フツと、有希子の表情が柔らくなる。

「なら、私は何も言わないけど……」

「ああ。まあ、蘭を傷つけずに、つてのは、無理だろうけど……灰原が俺を嫌いだと言つても、俺はアイツから離れる気はねえし、はいそうですか、つて蘭の所へ戻る気も、もちろんねえし」

「あなたが哀ちゃんに好意を持っているのは、わかっていたわ。でも、どうしてなの？」

有希子は、小さくなったわが子の本心が知りたかった。

「なんてのかな？ 蘭とはさ、いつも一緒にいるのが当然で、それは、コナンになつてからも同じなんだけど……顔を見てホツとするのも事実なんだ。一緒にいたいとも思う」

いつも鋭いコナンの瞳の光は、今日は少し弱いように有希子は思った。

「でも、アイツはさ、灰原は違うんだ。アイツ、いつも一人でいろんな想いを抱えて、誰にも言わずに、誰も巻き込まないように一人で抱え込んで……子供の頃から、今まで、ずっと、いろんな傷を

受けてきただろうに、一言もそんなことは、言わない・・・そう思うとき、アイツを抱きしめてやりたいとか・・・思っちゃうんだ・・・抱きしめたいとか、触れたいとか・・・蘭に対してはさ、あんまりこういう気持ちにならなかったんだけど・・・アイツ、見た目は小学生なのに・・・小さな女の子なのに・・・よく、そう思うんだ・・・で、どうしちまつたんだろうって、自分でも思う」

有希子がコナンの顔を間近に覗き込んできた。

「なっ・・・なんだよ!」

「新ちゃん、ひょっとしてロリコン?」

「バ、バーロ!」

「フ、冗談よ」

「・・・灰原だから、アイツだから、アイツの背負っているもの、シェリーと呼ばれていた頃のこととか、姉さんのこととか、今のアイツとか・・・そういうのをすべて包み込んでやりたいというか、それをひつくるめて抱いてやりたいというか、そういうふうに思ってたんだ」

有希子は、自分の息子に感心したように小さく笑って言う。

「まあ、哀ちゃんのこととは、私に任せなさい」

「え?」

「心配なんでしょう?今のあの子にとっては、頼りになるのは、あなただけだものね。彼女が、はつきり返事を言わなかったことで、あなたに気兼ねするようになると、彼女自身が困るものね」

「アイツ、あれで、相手や周りに気を使う方だからな」

哀は、ベッドに座って、俯いていた。ここへ入院して以来、コナ

ンが自分に好意を見せ始めていることには、気づいていた。でも、自分の心の方の整理は、まだついていなかった。ただ、彼の優しさに甘え、抱きしめられたときのぬくもりの心地よさに酔っていただけ……。

こうなってしまうと、二人以外にあまり人がいないこの場所が息苦しくなってくる。しかも、今の哀は、コナンがいないと自由に移動すらできない体である。

「ふう」

哀は、いつ以来だろうか、深いため息をつき、ベッドに座り込んでいた。

「哀ちゃん、入るわよ」

明るい声が聞こえたかと思うと、新一の母、有希子が哀の部屋に現れた。

哀は、正直、誰にも会いたくはなかったが、このコナンの、新一の明るい母にだけは、今、会って話しをしてもいいと感じさせるものがあつた。

「改めて、哀ちゃんにお礼を言っておこうと思って。ありがとう。あなた、自分の命を賭けて新ちゃんを守ってくれた。親として、こんなに感謝すべき人はいないわ。本当にありがとう」

「……私、お礼を言ってもらえるような立場には……ありません……工藤君の人生を狂わせてしまいました。ほんとなら、彼やご両親の好意に甘えているのも許されない……そこまでしてもらえない人間じゃない」

「でも、あの子は、あなたを守ると言ったわ。事実、守った。そして、あなたも新ちゃんを守った。これほどの関係を持つ人間なんて、そんなにいないわよ。あなたは、新ちゃんにとって、とても大切な人。もつと自信を持ったら？」

「でも・・・」

「新ちゃんだつてね。中途半端な気持ちであんなことを言ったんじゃないのよ」

「えっ？」

哀は、さっきの話を有希子が聞いていたことを察し、顔が赤くなつてしまった。

「ごめんなさいね。部屋の前まできたら、あなた達の声がしたから・・・聞いてしまった」

いたずらっ子のように舌を出して笑う。

「新ちゃんはね。あなたが受け入れなくても、蘭ちゃんとは別れるでしょうね。そして、その罪悪感をずっと背負うつもりなのよ・・・ね、哀ちゃん、新ちゃんのこと、好きなんでしょう？」

哀は、この人にはかなわないと思う。

「・・・私には、工藤君を好きになる、工藤君に想ってもらえる資格なんてありません・・・でも、それは頭でわかっていても・・・彼が優しくしてくれると、すごく嬉しいし、抱いてくれると、また抱かれないと思う・・・あの優しい手に触れてほしいと思う・・・でも、そのたびに蘭さんの顔が浮かんで、自分が嫌になるんです。さっきも、ものすごく嬉しかった。私なんかを好きだと言ってくれた・・・でも、やっぱり・・・だめだと・・・」

哀の表情が悲痛に歪んでいる。

「ね、哀ちゃん。あなたは、幸せにならなければいけないのよ。あなたのご両親、お姉さんのためにも、あなたを匿ってくれた阿笠博士のためにも・・・そして、あなたを命がけで守った新ちゃんのためにも・・・それには、ね、新ちゃんと同じ重荷を背負ってくれない？あなたが新ちゃんと一緒に、新ちゃんの重荷を・・・そして、あなたが背負っているものを新ちゃんも同じように背負うこと、これがあなた達が幸せになるために必要なことだと思っただけど・・・もちろん、あなたの気持ちが一番大事。それで、あなたが、新ちゃんのことを誰よりも想ってくれるのなら、あの子の背負う重荷と一緒に背負ってあげて。一緒に歩いてあげて。それができるのは、今の新ちゃんと一緒に歩けるのは、世界中であなただけなのよ」

「私・・・彼の傍にいていいんですか？・・・彼と一緒に歩くことを赦してもらえるのですか？」

「赦すとか、良い悪いっていうことじゃないわ。新ちゃんが望んでること。そして、あなたが心から望んでいることでしょ？・・・ね、逃げないで。新ちゃんの想いからも、あなたの想いからも・・・そして、蘭ちゃんやこれから、あなた達を包むいろいろな想いから、逃げないで・・・そして、あなたの本心を、想いを、新ちゃんに話してあげて・・・ただ、急がなくていいのよ。あなた自身が、あなたの気持ちを整理出来たらでいいから・・・母として、女として、二人の味方として、お願いするわ・・・哀ちゃん」

有希子の顔は、優しかった。そして、哀には、テープの声だけではない母の姿がそこにダブったような気がした。有希子が哀の母に変わって自分に言い聞かせているような気がして、哀の表情

が穏やかなものになっていた。

第10章：コナンの告白（後書き）

いやゝ照れます。こういうシーンを書くの、ホント照れます。でも、書きたいんですよね・・・恥ずかし・・・

第11章：哀の告白

次の日から、哀に対するコナンの態度には、変わりはない。ただ、会話らしい会話がほとんどない。

元々、二人共、口数は多い方ではないのだが、今は、必要最低限の会話しかなかった。

それでも、車椅子から乗り降りには、コナンは、優しく肩を貸してくれる。昼には、庭や屋上にも散歩に連れていってくれるし、「痛くないか」とか、「暑くないか」とか、気づかってくれる。あれ以来、自分への想いについては、何も言わないコナン。それが彼の優しさであり、それだけに、本気で自分を想ってくれていると、哀にはわかった。

3日が過ぎたその日、リハビリを終え、哀の病室に戻った二人は、いつものように、会話もなく、コナンが肩を貸して、哀が車椅子から移動してベッドに座った。

「ありがとう」

哀がポツリと言う。

「うん」

コナンも小さく呟く。

「じゃな」

コナンが部屋を出ようとしたとき、哀が声をかけた。

「待って」

「え？」

コナンは、立ち止って振り向いた。

「この前は、ごめんなさい・・・私・・・気持ちが整理できていなかった」

「俺も、いきなりだったからな・・・わりいと思ってる」

「それで、私の気持ちを・・・あなたが本心を言ってくれたから・・・私も本当の気持ちをずっと考えていて・・・私も・・・ずっと前から、あなたが好きだった・・・蘭さんにはかなわない、蘭さんに悪いと思っけていても、あなたを想うこと、やめられなかった・・・ここへ来て、あなたが優しくしてくれて、甘えさせてくれて・・・抱きしめてくれて、すごく嬉しかった・・・でも、素直に喜べない自分がいるの」

コナンは、扉を閉め、哀のベッドに座った。

「私は、あなたから想われることも、想うことも許されない。そんな資格はないと思っけていた・・・あなたに、憎まれているとも思っけていたわ・・・だから、あなたへの自分の気持ちを、想いに気づかないフリをして、押し込めてたの。それが、わかったわ。ここへ来てから・・・」

コナンは、じつと哀の顔を見つめながら、聞いている。哀は、俯いたまま、話していた。

「私は、あなたと、彼女の人生を狂わせた・・・なのに、あなたは優しくしてくれ、私を好きだとまで言っけてくれる・・・彼女の気持ちを振り切っけてまで・・・そこまでして、想ってもらえる女じゃないと自分では思っける・・・」

哀は、顔を上げて、コナンを見つめた。

「ね・・・あなたは知らないでしょうけど、あなたが私に変装してベルモットと対決したとき、あなたがベルモットに麻酔銃で眠らされた後、私を助けてくれたのは、蘭さんだったのよ」

「え！」

あの時、ベルモットの仲間が哀に発砲したが、その時、銃弾のなか、哀を庇って哀の体の上に自分の体を投げ出したのは蘭だった。

「蘭さん、私に変装したあなたがジョディ先生の車に乗るとき、あの車のトランクに潜り込んだのよ。そして、私がベルモットに撃たれそうになった時、命がけで私を守ってくれた・・・蘭さんね、私のお姉ちゃんに少し似てるの。いつも、彼女を見ると、姉を思い浮かべるわ・・・その姉に似た人、あんな優しい人から、私を命懸けで守ってくれた彼女から、あなたを奪うなんて・・・彼女の想う人を好きになるなんて・・・私、いつも苦しかった。彼女の優しさに触れると、ホッとするけど、その分、苦しくもなった・・・」

コナンは、以前、哀が「蘭は強い」と言った意味を今、知った。そして、今も、苦しそうな表情を浮かべる哀を見て、自分の決心が更に固まるのを感じている。コイツは、こんな想いを抱きながら、いつも自分や蘭と接してきた。そのつらさは、自分の想像を超えているだろう。

「彼女、真実を知ったら、私のことをどう思うでしょうね？私が作った薬であなたがコナンになって、あなたと引き離されることになって、あなたを待つつらい日々を送ることになって、命の危険を顧みずに守った私があなたを・・・私を恨むでしょうね」

哀の瞳が揺れ、涙が一筋、頬を伝う。

コナンは、そんな哀がたまらなく愛おしくなった。そして、抱きしめる。優しく、強く。

「く・・・工藤君」

「おめえ、随分苦しんでたんだな。俺、そこまで考えてやれなかった。ごめんな・・・でも、ありがとう・・・嬉しいよ・・・灰原、一緒に歩いてくれよな。おめえが俺の傍に居ないということ、もう俺には考えられないんだ。今、おめえが言ったこと、その苦しさ、俺も一緒に背負ってやるから・・・だから、おめえの胸のなかを聞かせてくれよ。すぐには楽になったり、解決できるもんでもないけどよ、俺にも、おめえのその気持ちと一緒に悩んだり、考えたりさせてくれよ」

抱きしめていた腕を緩め、哀の両肩に両手をおき、哀の瞳を見つめる。

「なあ、好きなんだ。おめえが・・・だから、これから、一緒に歩いていこうぜ」

「工藤君・・・ありがと・・・私もあなたが好き・・・」

潤んだ瞳にコナンが写る。コナンは、もう一度、哀を抱きしめた。

哀がりハリビをしていて、それをコナンが見守る。その他の時間は、屋上や庭をコナンが哀を乗せた車椅子を押して散歩したり、哀の部屋で本を読んだり、たわいない話をしたり・・・まあ、この

二人の場合、たわいない話が他の人にとっては、難解な話しだった
りするが・・・と、二人の緩やかな時間が過ぎていった。

哀がコナンに想いを伝えた数日後。哀のリハビリを終え、二人が
哀の病室に戻ってきた時、哀がコナンに訊いた。

「ね。訊いていい？」

「あん？なんだ」

「どうしても、わからないのよ」

「なにが？」

「だって、あのエンジェルみたいな蘭さんのことを想ってたはずの
あなたが、どうして、素直じゃなく、可愛げのない、愛想の欠片も
ない女を好きになったのか？」

「へ？・・・そんなこと、考えてたのか？」

コナンは、少し呆れた顔になったが、哀が真剣な顔をしているので、
少し考えている表情を作った。

異性を好きになるのに、そう理屈もないもんだと、コナンは思う
のだが、愛情というものに接することが少なかった哀にとっては、
不思議なことに思えるのかもしれない。

「そうだな・・・自分でも、よくわかんねえけど・・・たださ」

「ただ？」

コナンは、哀を抱き寄せると、愛しそうに頬を両手でそつと挟んで
目を見つめた。

「おめえはさ、ホントはすごく優しくて、暖かくて、周りに気を配
って、自分が傷ついても周りを助けようとして、全部一人で背負い

込んで・・・何より、俺が守りたいヤツだから・・・俺を守ってくれたヤツだから・・・だから、惚れたんだと思う」

「・・・工藤君、後悔するかもよ」

「しねえよ」

コナンは、ゆっくりと哀に顔を近づける。二人は、目を閉じ、唇を重ねた。少し長めのキス。やがて、顔を離すと、コナンが照れたように笑っていった。

「・・・俺、女の子とキスしたの、初めてだ」

哀は、少し赤い顔でわざと呆れた表情を浮かべ、

「・・・あら、小学3年生なら、当然だと思うけど」

「おめえ、可愛くねえな。少しは、感動しろよ」

「それに、あなたが溺れそうになった時、蘭さんにマウス、トウ、マウスで息をさせてもらったこと、あつたんじゃなかったかしら？」

「どうして、おめえ、それ知ってたんだ？」

「さあね」

いつもの調子で言い、クスクス笑う哀に、コナンは、少し怒ったように、少し強引に、哀の唇に口付けた。不意をつかれ、目を見開いた哀だったが、やがて、ゆっくり目を閉じた。そして、二人は、今度は深く、唇を合わせた。

第11章：哀の告白（後書き）

やっぱ。こういうシーンを書くのは、実はいい年こいてる筆者には、恥ずかしいです。照れます。赤面します。・・・でも、書きたいんです・・・バカやヤツと言ってやってください。

前章、第10章のサブタイトル、変更しました。

第12章：二人の告白

その日、目暮と白鳥が険しい表情をして、コナンと哀を訪ねてきた。

佐藤、高木両刑事に従い、哀の車椅子を押したコナンが病院内のある場所に着くと、そこは、目暮が手配して借りた病院の応接室の前だった。入り口に警官を立たせ、コナンと哀をその部屋の中に案内する。目暮と白鳥がソファに座り、向かいに車椅子の哀、その隣の椅子にコナンが腰掛け、扉に近い方で向かい合う4人を横から見ると、佐藤と高木が椅子に腰掛けた。

「話が済むまで、誰もこの部屋に入れないように」
「ハッ！」

白鳥がドアの外にいる警官に声を掛け、ドアを閉め、鍵を掛けた。厳しい表情の目暮が口を開く。

「二人とも、順調に回復しているようだね」

「はい」

「まずは、よかった」

「ありがとう」

コナンが言うと、目暮は、フツと息を吐き、コナンの目を見て言った。

「今日、ここへ来たのは、警察官としてではなく、君達を知る者として、友人として、訊きたいことがあるからなんだ。ここにいる4人、相談の上、ここへ来た」

コナンは、そう言われて哀を見た。いつもと変わらず、静かに目を閉じ、腕を組んでいる彼女の様子に、コナンも落ち着いて目暮に目を移した。

「あの黒の組織の事件、今、世間は、この話で持ちきりだ。そして、強制捜査の現場にいたFBIと共に君達がいたこと、私には、偶然とは思えん」

目暮は、いつものような子供を見る目ではなく、鋭い目で、コナンと哀を見つめてくる。

次に口を開いたのは、白鳥警部だった。

「君達のあまりに大人びた・・・いや、時に、大人以上の知識や言動。そして、あの世間を揺るがす大事件の現場に君達がいたこと・・・私は、君達がただの子供だと思えなかったが、今回、その思いが確信になった」

コナンは、白鳥を静かに見つめている。哀は、腕を組んで目を閉じたままだ。

「コナン君、哀君、トキワの原専務殺害事件を覚えているだろう」
目暮が問う。

原は、組織のメンバーで、組織のデータをハッキングし、自身が専務を勤めたコンピュータ会社、トキワのメインコンピュータにデータを送った可能性があったため、ジンに殺された男だった。

「実はな、殺害された原佳明の部屋を搜索したとき、気になるメモを見つけたんだ」

「え？」

コナンが小さく声を上げる。

「彼は、死の直前、トキワ本社にあったコンピュータを・・・人間の10年後の顔を推定して写真にするというヤツだが・・・かなり時間をかけてチェックしていたらしい」

コナンがピクリと肩を動かす。哀も、目を開いた。

「そして、彼のメモを見つけたんだが、そこに君達の名前があった」
「俺達の名前・・・そうか」

コナンが小さく呟く。

「ERROR 江戸川コナン 灰原哀・・・メモには、そうあった」

コナンと哀が目进行合わせる。

その様子を見ていた白鳥が、目暮の話しを継ぐ。

「君達は、蘭さんや子供たちと、あのコンピュータを試したそうだね。それで、君達二人だけ、10年後の顔が出なかったそうだが、殺された原さんは、その原因を調査していた・・・そして、彼は、コンピュータではなく、君達自身に原因があるのではと考えた。それで、君達のことを調べようとしていたようだ」

今後は、目暮が白鳥に変わって話す。

「君達が彼の死体を発見したが、その時、彼が殺害されず、君達と会っていたら、君達の方が彼にいろいろ訊かれたかもしれないな」

「原佳明は、今回のことで、組織に関わりのある人間とわかった。彼を殺害した犯人は、まだわかっていないが、トキワのツインタワービルの爆破事件と考え合わせると、犯人は、組織の人間の可能性が高い・・・警察は、そう考えている。そして、あの爆破事件が、トキワのコンピュータの破壊と共に、誰かを殺害する目的であったとすれば・・・そして、君達があそこにいた。これは、偶然かな？」

目暮がコナンと哀を交互に見る。

「いや、無理やりに訊こうとは思わない。今日は、警察官としてではなく、あくまで、君達の知人として来たのであって、もちろん、話しは、上に報告することもしないし、公表も、もちろんしない。必要なら、ここに居る者だけの秘密にしよう」と4人とも思っている」

ここまで言われ、コナンは、小さく息を吐くと、哀を見つめた。哀は、コナンの視線を受けて頷く。コナンは、その様子に、哀にフツと微笑んで、目暮に向き直って、意を決したように眼鏡を外した。

「目暮警部、白鳥警部、佐藤刑事、高木刑事・・・今まで、騙していてすみませんでした。僕は、工藤新一です」

「えっ!？」

目暮は、驚いて目を見開く。白鳥も目を大きく開いてコナンを見たが、二人は、声を出さなかった。声を上げたのは、佐藤と高木両刑事だった。

半ば、呆然とする4人の警察官の前に、コナンは、順を追って話し始めた。

トロピカルランドで組織の取引現場を目撃し、ジンに毒薬を飲まされ、意識が戻ったら体が幼児化していたこと。その後、コナンになって、組織を追っていたこと。その途中でジョディらFBIの捜査と協力してきたこと。

しかし、哀に関しては、何も話さなかった。

「そして、あの茨城の工場に、ヤツらの本拠にジョディ、赤井捜査官達と入り、撃たれたことは、ご承知の通りです」

哀は、また、腕を組んで、目を閉じている。4人の大人、それも警察官が9歳の少年の話に呆然と聞き入り、9歳の少女だけが冷静な表情で目を閉じているという、異様な風景の空間がここにあった。

気を取り直したように目暮が口を開く。

「・・・その・・・毒薬の副作用で君が、工藤君が幼児化したのがコナン君だったというわけか・・・信じられんが・・・まあ、君の並外れた推理力、知識の量を思えば・・・で、他にこのことを知っているのは？」

「ここにいる灰原の他は、俺の両親と阿笠博士、それに大阪の服部平次です」

「毛利君と蘭君は、知らないんだね？」

「ええ。毛利探偵事務所に転がり込んだのは、探偵事務所であれば、いずれ、組織の情報が入るかもしれないからと考えたからです。でも、毛利探偵と蘭や英理さんには、組織の手が伸びたときのことを考え、僕の正体は隠していました」

自分のことを話したコナンは、心配げに車椅子の哀を見た。彼女

のことをどこまで話すべきか、できれば、哀のことは、何も言いたくはなかった。

しかし、そのコナンの想いとは裏腹に、白鳥が哀に向かって訊いた。

「灰原さん・・・君も、工藤君と同じなのか？」

哀は、目を開くと心配そうに自分を見ているコナンに微笑んだ。そして、白鳥を見て真剣な表情をつくると、初めて口を開いた。

「ええ。私も彼と同じ・・・私の本名は、宮野志保。元は、黒の組織と呼ばれている組織の一員で、彼が・・・工藤君が飲まれた薬の研究開発責任者でした」

「何だつて！」

4人の警察官が驚愕する。コナンは、心配そうに哀を見つめている。哀は、かまわずに続けた。

「幼児化したのは、工藤君が飲まれたのと同じ薬を飲んだからです。彼と違い、自ら飲んだんですが。死ぬつもりで・・・」

「・・・それで・・・どうして、コナ・・・工藤君と知り合っただね？」

驚きながらも、目暮が疑問を口にする。

自分以上につらい話になることを知っているコナンは、目暮を制止した。

「すみません、警部。彼女のことについて話すのは、少し待ってもられませんか？」

待ったところで、何の解決にもならない。しかし、コナンは、ここで哀に、彼女の背負うつらい過去の話をさせたくはなかった。なにより、コナン自身が耐えられそうにない。

「私は平気よ」

哀がコナンを見て言う。

「おめえの話を・・・おめえに話をさせるのは、俺がつらいんだよ」
「工藤君・・・」

哀は、硬く握られたコナンの右手の拳を両手でそっと包み込むように触れると、自分の胸に当てた。

「ありがとう、工藤君。でも、いつかは話さないといけないことよ」

哀は、胸に当てた手をそっと離そうとしたが、コナンの右手が哀の左手を握りしめ、離そうとはしなかった。

哀がコナンに視線を向けると、歯を食いしばって、哀を辛そうに見つめている。

（大丈夫だから）

そっという想いを込め、哀はコナンに微笑んだ。

哀が話し始めた。

自分の両親が組織で薬の研究をしていたこと。自分が幼い時、その両親が事故死したこと。組織にアメリカ留学させられ、その後、両親の研究を引き継いでいたこと。
そして、同じ組織にいた姉が、姉自身と自分を組織から抜けさせる

ため、10億円強奪事件を起こし、警察は自殺と断定したが、本当は組織に殺されたこと。

姉の死に抗議し、組織で研究を中止したこと。そのため、反逆者として拘束され、死ぬためにアポトキシン4869を飲んだこと。そして、幼児化したため、脱出に成功し、阿笠に保護されたこと。組織から逃げたため、宮野志保は、命を狙われていたこと。そのためにいくつかの事件が起きたこと。

哀は、表情も変えず、淡々と話していた。しかし、警察官4人は気づかなかつたが、姉の話になると、僅かに表情が歪み、声が少し震えていた。それには、コナンだけが気づいていた。哀の表情がわずかに歪み、声が震えると、哀の手を握るコナンの手に力が入る。そのたび、哀もコナンの手を握り返してきた。

哀の長い話を聴き終えた目暮ら4人の警察官は、その内容に啞然としていた。見た目は小学生の哀の口から出た話の重大さに愕然とする思いがし、4人ともしばらくは黙っていた。

長い沈黙を破ったのは、白鳥だった。

「灰原・・・いや、宮野さんと呼ぶべきか・・・その話、真実とすれば、君は、逮捕、起訴される可能性が高くなる。それを覚悟で今の話を我々にしたということかな」

哀の手を握るコナンの手に力が入り、悲痛な表情で哀を見つめている。

「そうね。それは、やむを得ないと思います・・・それだけのことをしたのだから・・・」

「灰原・・・」

コナンが何か言おうとした時、目暮が口を開いた。

「いや、この話しは、あくまで、二人の知人として訊いたことだ。報告も、公表もしない・・・考えても見ろ、人間が幼児化したなんてことが公になれば、大騒ぎになるぞ。この二人がどうなるか・・・世界中の注目の的、実験材料にされかねん」

「そうですね・・・もつとも、それ以前に、世間が簡単に信じるとは思えませんが・・・いずれにしろ、マスコミの話題の格好のネタにはなるでしょう」

白鳥が言つと、目暮がコナンと哀を交互に見て、改めて言つた。

「とにかく、今、君達に聞いた話は、ここにいる4人は一切口外しない。警察の上層部にもあの組織と係わりのあつた人間がいなくても限らん。私は、このまま、何も知らないことにしようと思う」

目暮は、白鳥と佐藤、高木に向かって言つた。

「今、コナン君と哀君から聴いた話は、私は、決して他言しない。家族にも・・・たとえ、死んでもな・・・できれば、君達にもそうしてくれ」

「言つても信じてもらえないでしょう。私も、目暮警部と同じく、知らないことにします」

白鳥も目暮に同心した。

「佐藤君、高木君」

目暮が半ば、啞然としている二人の部下を呼んだ。

「私も、何も聞かなかったことにします。ただ、今後は、二人の身辺については、それとなく、警戒したいと思いますけど・・・」

佐藤がそう言うと、高木も同意した。

「私も、佐藤さんと同意見です」

「わかった。二人の身辺については、私も注意することにしよう・・・
もっとも、今後も事件現場で会えそうな気はするがな」

目暮が始めて笑顔を見せて、コナンの方に顔を向けた。

「ありがとう、目暮警部」

コナンが頭を下げると、哀も同じように頭を下げた。

「君達には、いろいろな事件で恩があるからな・・・じゃ、またな。
これから、いろいろ大変になるかもしれん・・・いずれにしろ、よろしく頼むよ、コナン君、哀君」

目暮と白鳥が部屋を後にし、敬礼をして見送っていた佐藤と高木が、哀の車椅子を押して病室へ戻るコナンの横についていた。

佐藤が口を開く。

「それにしてもねえ。あなた達、ただ者じゃないとは思ってたけど・・・信じられないけど、今までのあなた達の言動を思い返すと、納得はできるわね・・・」

「ごめんね。今まで黙っていて・・・騙すつもりはなかったんだけど・・・」

コナンがバツが悪そうに佐藤を見上げて言う。

「なあ、くど・・・コナン君。あの東都タワーのエレベーターに閉じ込められた時、君に訊いたよね？君は何者なんだい？・・・ってあの答え、やっと教えてもらえたわけだ。」

高木が、まだ驚きを隠せないような表情でコナンに言った。

「そして、哀ちゃんの言動も・・・」

高木は、今度は哀を見た。

「悪いと思っているわ・・・みんなを欺いて。責任は、私にもあるのに・・・」

哀の表情はあまり変わっていないが、声がいつもより沈んでいる。

「哀ちゃん・・・あなた、強いわね。そして、綺麗だわ」

佐藤が微笑んで哀に言う。

「えっ？」

哀が驚いて佐藤を見る。

「だって、あなたが経験してきたこと・・・私だったら、とうに耐えられなくて、潰れているわよ」

そう言った後、意味ありげにニヤッと笑ってコナンと哀を見ると、

「まあ、そういうことなら、あなた達、立派な恋人同士というわけね。応援してるわよ」

と、言ってウィンクした。

第12章：二人の告白（後書き）

原作では、この4人の刑事、一向にコナンと哀を不審に思う気配がありませんが・・・とくに高木刑事は、身にしみてるよつの思うのですけど。今回は、高木刑事の影が薄くなってしまいました。

第13章：帰路

「どう思っかね？白鳥君」

病院から警視庁に戻る車の中、目暮が後部座席から運転する白鳥に訊いた。他の者に話を聞かせるわけにいかず、この車に乗っているのは、二人だけだった。

「そうですね。ひとつ言えることは、人間が10歳も若返るなんていうこと、まして、20歳ぐらいの人間が小学生になってしまったことが実際に起こってしまった、この意味は、計り知れないものがあると思います。その薬がもし、秘かに完成されて、犯罪、テロ行為に使用されれば、たいへんなことになるでしょう」

「工藤君と宮野君が小さくなったのは、単に偶然だったわけだが、もし、彼らが飲んだ薬が改良され、誰でも小さくなれるとなれば、大きな混乱が起こることになるだろうな」

「ええ・・・もちろん、血液型や指紋、DNA鑑定など、調べれば本人を特定することはできますが・・・」

「しかし、姿かたちが変えられることになれば、犯罪に使われれば、厄介だな」

「事は、国家、いえ、世界レベルのトップシークレット扱いになるほどの問題でしょう」

「それと、FBIとの関係もあるし、CIAが動いていたようでもあるし・・・となると、アメリカとの国家間の問題にもなるだろう」

目暮は、事に重大さに眩暈がする思いだった。

「あの二人には、普通の小学生として、これからも、暮してもらわねばならん。二人のためだけではなく、世の中のためにも……」

哀の病室を後にした佐藤と高木は、ロビーの自販機の前にいた。佐藤がカップのコーヒーを買って高木に渡す。

「ありがとうございます」

二人は、カップを持って椅子に座った。

「何か信じられない話ね、コナン君と哀ちゃんのこと。まあ、二人の大人びた様子を見ると、納得できるんだけど……」

「そうですね……ね、佐藤さん。佐藤さんなら、耐えられます？」

「え？」

「だって、いきなり子供になっちゃって、今の生活の基盤が消えちゃうんですよ。今の仕事、家、家族、友人……そういうものを失ってしまうんですよ？耐えられますか？あの子たちみたいに……とくに、哀ちゃんは、組織から逃げ出して、誰も知る者のない街にきたわけですし」

「そうね。自信は、ないわね。パニックに陥っちゃうかも……あの子たちにはさ、阿笠さんがいたし、工藤君のご両親も知っているから、救われたと思うけど……そういう保護者がいなかったら、生きていけるかどうか……」

「それに、欲求不満というか、ストレスも凄いと思います。だって、自分は、そこそこの年齢なのに、子供扱いされる。一人で出入りしてきた店にも入れないでしょうし、ちよつと夜遅くなっても、周りに不審に見られる・・・大変だと思いますよ」

「そうね。それにしても、周りの友人に、自分のことを偽って暮らすことは、たいへんだし、つらいでしょうね」

「そうですね。コナン君、どういう想いで蘭さんの傍にいたんでしよう？そして、哀ちゃんは、どういう想いで、彼らを見ていたんでしょね」

「あの二人、やっぱり、私なんかより、強いわね」

そう言うのと、佐藤は、カップのコーヒーを飲み干した。

あの二人の大人以上に大人びた雰囲気は、たぶん、子供の姿になったからこそ、身についたものかもしれない。体が小さくなったことで、逆に精神的には、大きく成長したのではないか。元の工藤新一だって、当時高校生で、今でも大学生の年齢だ、佐藤たちより年下なのだ。

でも、自分達をも見透かしたようなあの瞳は、自分達よりも遥かに大人で、想像以上の経験をして、いろいろ考えてきた者にしか、持ち得ないものだと思う。

「いずれにしても、もし、あの子達が幼児化したことがわかったら、マスコミや研究機関の餌食にされるでしょう？それだけは、絶対にさせない。あの子達、守らないとね」

佐藤が言うと、高木も強く頷いた。

佐藤と高木が哀の病室を去ると、コナンは、哀を車椅子からベッドに座らせた。そして、その姿勢のまま、哀の頭と肩に手を当て、哀の頭を自分の胸に押し付けるようにして、抱いた。

哀も黙って、コナンの背に手を回し、身を任せ、目を閉じている。コナンの心臓の鼓動が身近に聞こえ、頭と肩に当てられたコナンの手のぬくもりが哀の乱れた心を整えていく。さすがに、姉の話、自分の過去の話をすると、哀自身、平静ではいられなかった。

佐藤や高木は、気づかなかったが、コナンには、哀の心の動揺がはっきりとわかる。姉を失った哀しみがまた鮮明に甦っているであろう哀の胸のうちを思うと、コナンには、黙って抱いていてやることしかできなかった。

「無理しやがって・・・」

（あんなに、明美さんのことを詳しく話さなくてもいいのに）

コナンのつぶやく声がかすかに哀の耳に届いた。

「ありがと・・・」

哀の言葉も、コナンの耳にかすかに届く。

哀を抱くコナンの手に力が入る。二人は、黙ったまま、長い時間、そのまま抱き合っていた。

「哀ちゃん！新ちゃんいる？」

不意に扉が開けられ、有希子が入ってくる。あまりに突然だった

ため、コナンと哀は、そのまま動けず、目を見開いて有希子を見つめた。

「あらあら・・・お邪魔だったようね・・・」

と、言いながらも、有希子は二人を見てニヤニヤしている。

コナンは哀を離すと、抗議の声を上げた。

「あゝったく。ノックぐらいしろよな！」

「うふ。ごめんね・・・でも、ノックしない方が楽しめそうね」

コナンと哀がいけない。もう4ヶ月。相変わらず、二人がどこにいるのか、阿笠と新一の両親以外の周りの人々には、教えてもらえなかった。

そして、5ヶ月目に入ろうとする頃、あの事件以降、周りに不穏な様子も見られないことから、コナンと哀は、米花中央病院へ転院することになった。

事件当時、少し話題になった、ケガをした子供が運び出されたという話も、4ヶ月が経ち、いろいろな有名人が組織に関わっていた事実が出てきているなど、他の大きなニュースもあって、人々の記憶から薄れていったようだった。

転院は、コナンと哀にとっても嬉しいことだった。この慶杏病院での二人の時間も貴重なものだったが、米花町へ戻り、みんなに会えると思うと、やっぱり嬉しい。

高木刑事が運転する車の車内。助手席には佐藤が座り、後部座席にコナンと哀が座っている。佐藤がまだ足の不自由な哀を気づかった。

「哀ちゃん、足の具合はどう？痛くない？」

「大丈夫。ありがとう」

「そう、痛くなったりしたら言ってね」

「うん。そうする」

佐藤が助手席から二人を振り返って言う。

「今度のこと、みんなには、何も話せないし、二人にとっては、つらいこともあるかもしれないわね」

「うん。でも、仕方ないし、覚悟はできているよ」

コナンが哀の方に心配そうな視線を走らせると、

「大丈夫よ。あなたと一緒にだもの」

と、コナンの心を読んだように、微笑んで言った。

コナンがフツと微笑んで、座席におかれた哀の手に自分の手を重ねた。

「もう、仲がいいのは、わかったから・・・あまり見せつけないでよ！」

佐藤が呆れ顔で言った。それにしても、と佐藤は思う。

（哀ちゃん、綺麗になったわね。怪我する前に比べると、すごく。まあ、あれだけコナン君に大事にされ、想われたら、綺麗にもなる

わよね・・・それに引き換え・・・私は、綺麗になってるのかしら？)

ちよっとすねた目で、高木を見る。

「佐藤さん？何か？」

高木が佐藤に視線に気づいて聞く。

「別に・・・」

佐藤は、ちよっと半目でつまらなさそうに言った。

第14章：再会

米花中央病院へ向かって、小学生3人と大学生4人が歩いている。この7人にとつて、今日、ここへ入院してくる二人と会うのは、もう半年ぶりくらいになる。

「なんだか、ドキドキするね」

歩美が光彦や元太に顔をむけて明るく言う。

「コナン君の抜け駆けは毎度のことですが、灰原さんを巻き込むなんて、ちよつと許せませんよ」

光彦は、ちよつと不満げな表情だ。

「でもよ、コナンと灰原がいないとよ、やっぱり面白くねえよな。アイツらない間、事件もなかったし」

普通、小学生は、事件に遭遇するのは、稀なはずだが、この3人には、半年近くも事件に遭遇しなかった方がヘンだったらしい。

「あーったく、あのマセガキども、ほんと心配させるんだから」

園子が半目でつぶやく。

「ね、蘭。あのガキンちょ、連絡してきたの？」

「ううん。目暮警部から聞いただけで、まだコナン君とは、電話でも話したことないの」

園子の眼から見ても、最近、蘭が少しやつれたように見える。工藤新一が消えて2年。園子にすれば、2年も待たせるようなヤツは、とつと振ってしまえばいいと思うのだが、蘭は、まだそこまで踏ん切りがつかないようだ。

その上、蘭がかわいがっていた居候のコナンまで、半年近くもいなくなってしまうたのである。園子自身、何度も蘭を元気づけ、勇気づけてきた。父の小五郎も、母の英理も、蘭のことは、かなり気にかけてきた。蘭もそのことを知っているから、心配かけまいと元気に振舞ってはいるが、やはり、その心のなかには、穏やかであるはずがない。

「なんで、連絡くれへんのやろ？コナン君」

午前中に大阪からやってきた遠山和葉が、一緒に来た幼馴染で西の名探偵と言われる服部平次の横で言う。

「平次はどう思う？」

「さ、さあ？・・・何か、警察の機密事項に触れるんかもしれへんなあ？」

心当たりのありすぎる平次だが、ここで二人の秘密を明かすわけにはいかない。とぼけているしかなかった。

平次が言った言葉を蘭が受ける。

「うちのお父さんもそう言ってたけど・・・」

「でも、なんで警察の機密になるような事故にあの子達が巻き込まれたわけ？」

園子が疑問を投げる。

「な、平次、平次はコナン君と仲良かったやん。何か聞いてへんかったん？」

和葉の言葉に、平次は少し憮然とした表情をして、

「あのボウズ、なんも言いやらへんかった・・・」

蘭は、何か考え込んだ表情をしている。その顔に気づいた園子。

「蘭、どうしたの？・・・蘭！」

「・・・え？・・・あ、ううん・・・ちょっと、ずっと気になって
いることがあって」

「何？」

この時、蘭は、本当は、新一のことを考えていた。新一から別れの電話をされたことをまだ園子にも話していない。園子に訊かれ、蘭は、新一のことを頭から追い出し、コナンのことで、ずっと気になって、口にした。

「・・・うん、ほら、あの事件の前、コナン君と哀ちゃんが行方不明になるちよつと前からさ、あの二人、一緒に出かけたり、学校をサボったりしてたでしょ？それが、何か関係あるのになって、そう思ったりして」

蘭の話に平次が反応する。

「え、そないなことあったんかいな？」

「うん。元々、二人は仲良かったんだと思うんだけど、あの頃、急にすごく仲良くなったって印象があつて。」

園子も頷く。

「そうね。あのガキンちょ、うちのパーティーであの子にドレス着せて、あの子お酒飲んで酔っ払って、くっついて帰っちゃったもん

ね」

「え！そうなん？」

和葉が驚いたように言う。

（工藤・・・お前、何考えとんねん。毛利の姉ちゃんの前で・・・お前、ひよっとして・・・それに、今回のこと、俺にも言えへんて、水臭いやんけ。）

平次は、今度の事件で、自分に何も言わなかったライバルの探偵に、少し腹を立てていた。

7人が病院の玄関に来たとき、一台の車が横付けされてきた。運転していたのは、高木刑事。助手席に佐藤刑事がいて、後部座席にお目当ての二人の小さな影が見えた。

知り合いの刑事と子供二人の顔を見つけた7人が思わず駆け寄る。

「コナン君！」

「哀ちゃん！」

「コナン！」

「灰原さん！」

コナンが恥ずかしそうに、車から降りてくる。

「久しぶり。みんな来てくれて、ありがとう・・・蘭姉ちゃん、ごめんね。心配かけて・・・連絡もできなかったんだ」

そういうと、涙目で見つめる蘭にバツが悪そうに微笑んだ。

（蘭・・・少し痩せたな・・・ごめんな、蘭）

そう思いながらも、コナンは、後から降りてくる哀のため、かが

みこむ。そして、その首に哀の手が回される。まだ、足が完治していないので、車から降りるのが哀にはつらい。

コナンは、哀の腰に手を回してそっと抱き上げ、肩を貸し、ゆっくりと二人で立った。その所作があまりに自然で、当たり前のような感じだったため、見ていた7人も呆然とその様子を見ていた。

「コナン君！哀ちゃん！」

歩美が、コナンと哀の前に駆け寄り、コナンと哀と一緒に抱きしめてきた。

「二人とも・・・心配してたんだよ・・・会いたかったよ、コナン君、哀ちゃん」

歩美は、目にいっぱい涙を溜め、そのいくつかがあふれた。

「歩美ちゃん、ごめんな」

「心配かけちゃったわね。ごめんなさい」

哀が、歩美の頭を撫でながら、目を細めている。

「・・・哀ちゃん・・・まだ具合、悪いの？」

歩美の後ろに光彦と元太も駆け寄ってきた。

「まだね、足がちゃんと動かないの」

「コナン君、灰原さん・・・よかったです。帰ってきてくれて・・・嬉しいです」

「お前ら、心配させすぎだぜ・・・」

光彦と元太も、泣きながら言った。

高木が病院内から車椅子を借りてきて、哀の傍に停める。コナンの支えを受けながら、哀が車椅子に座った。

蘭は、そんな様子を目に涙を溜めて、それでいて、少し複雑な表情で眺めていた。

久しぶりに見るコナンは、蘭のよく知っているコナンとは、どこか変わってしまったような気がする。

さっきの自分を見たときの微笑み。コナンは、あんな微笑みをしたことがあっただろうか？

遠慮がちに自分の顔を覗くような目。あんな目をコナンは、していただろうか？

コナンを見て、ホッとしている自分と、コナンの何かが変わったことを感じる自分。蘭の心は、複雑に揺れていた。

「ね、あの子、あんなに綺麗だった？」

園子が哀の顔を見つめて言う。

そういえば、哀も変わった。

いつも、どこか冷めた表情をしていた。子供のクセに、すべてを見通しているような目をして、冷静で、騒ぐこともなくて。

確かに、大人びた表情は、変わっていない。あの、何か自分の知らないものを見通している碧い瞳も同じ。しかし、どこか違う。

そう。今の哀の瞳には、何か、強いものが宿っているように見える。冷めた表情が消え、かわりに瞳に宿るもの。希望とか、信頼とか、そういうものかもしれない。

それは、コナンに対するものだろうか。

「まあ、もともとかわいい顔してたけど、なんだか綺麗になっちゃたね」

蘭は、園子にそう言って、同意した。

呆然と見ているのが平次。

（工藤、ひよつとして？）

その様子を見ていた佐藤。

（やっぱり驚くわよね。しばらく会わないうちに、こんなに綺麗になるんだもの。まだ、小学生なのに・・・）

見た目、体格は、確かに小学3年生。

哀の場合、その表情は、もともと大人びていたが、以前のようなどこか冷めたような、キツイ感じの表情が消え、穏やかな表情をしている。

その表情が、哀を美しくしたようだった。

「蘭姉ちゃん、園子姉ちゃん、平次兄ちゃん、和葉姉ちゃん・・・
ありがとう、来てくれて。ごめんね」

コナンが4人の方を見て言う。

「ありがとう・・・ごめんなさい」

歩美の頭をポンと叩いた哀も、4人の方を見て言った。

「とにかく、灰原を部屋に連れて行って休ませたいから。話は、後で・・・」

コナンは、そう言って、嬉しさと、少しの驚きの表情を示す仲間達の前、車椅子を押して、哀を病院の中に連れて入っていった。

入院の手続きが済み、ベッドに座る哀に、コナンがガウンを肩にかけてやりながら言った。

「無理すんなよ。ゆっくり休め」

「うん。ありがとね。工藤君」

「いいさ・・・佐藤刑事、高木刑事、ありがとう」

コナンが、付き添ってくれた二人の刑事に向き直って礼を言う。

「ホントにありがとう」

哀も心から礼を言った。

「これも仕事よ。でも、二人の様子、楽しく見せてもらったわ。高木君もちよつとコナン君を見習えばいいのよ」

「は？どういうことですか？」

高木は、真面目な顔で訊く。

「これよ」

佐藤は、呆れ顔でコナンと哀に同情を求める。二人は、引きつった笑いを返した。

「工藤さんと阿笠さんももうすぐ来るだろうから、それまで、外にいるわね」

佐藤と高木が出て行く。

しばらくすると、コナンと哀の着替えなど、必要なものを持って、有希子と阿笠がやってきた。

二人の病室の片付けなどを終え、コナンの病室で、有希子がコナンに言った。

「新ちゃん、下で蘭ちゃん達に会ったわ・・・後で来るって・・・なるべく、蘭ちゃんにも、哀ちゃんにも、つらい想いをさせないよ
うに・・・ね」

「ああ、わかってるよ・・・とくに、哀は、こういうの一人で抱え込もうとするからな」

有希子とコナンが哀の病室へ行くと、哀の声が聞こえた。

「博士、ちょっと太ったんじゃない？」

「あ、いや・・・少しな」

「私が居ない間、カロリーの高いもの食べてたんでしょ？知らないわよ、倒れても・・・」

「いや・・・ちょっとだけじゃよ・・・いや、ホント」

哀に睨まれ、阿笠は、冷や汗を拭いていた。

「ホント、博士まで入院したりしないですよ」

有希子がそう言いながら、入ってくる。続いて、コナンが入ってきた。

「大丈夫じゃよ」

阿笠は、まだ哀に睨まれている。

「じゃ、新ちゃん、哀ちゃん、私達、今日は帰るわ。また明日くるからね」

有希子が阿笠を助けるように、微笑みながら言う。

「ここは、慶杏と違って、人が多いから、あまりイチャイチャしちゃダメよ。二人とも」

「あのなあ、よけいなこと言わずに早く帰れよ」

コナンは、口を尖がらせ、哀は、少し赤くなってクスッと笑った。

有希子が出て行くと、歩美と光彦、元太の3人が入ってきた。狭

い病室なので、一度に大勢で押しかけては、迷惑だと思ったのだろう。蘭たちは、後で訪ねるつもりらしい。

コナンと哀は、しばらく会わないうちに、3人の体が一回り大きくなったことに気づいた。

3人は、小さな手作りのブレスレットを2つ持っていた。以前、蘭にプレゼントした貝で作った「金メダル」に似ている。

「コナン君、哀ちゃん・・・」

そう言うと、歩美は、また泣き出してしまった。光彦と元太が横でおろおろしている。

「歩美・・・」

「・・・えへ。ごめんね、二人のこと、心配してたし・・・顔を見たら安心しちゃって・・・そしたら、涙が出てきちゃって・・・コナン君、哀ちゃん、お帰り」

「お帰りなさい。ホントに心配していたんですよ・・・よかったです。お二人の顔が見れて・・・」

光彦も泣き笑いの顔になって二人を見つめてくる。

「そうだぜ、心配してたんだからな！おめえらがいねえと、楽しくねえんだよ・・・」

元太まで泣きそうな顔をしている。

「わりー。連絡もできなかったんだ」

「ごめんなさいね。心配させて・・・ありがとう」

コナンと哀も、この幼い親友達が、自分たちを心底心配してくれたであろうことを考えると、こみ上げてくるものがあった。

「これ、二人がいなくなつてすぐの頃、みんなで潮干狩りに行ったんだ。その時に拾った貝で作ったんだよ。二人が帰ってきたら、渡そうと思って」

歩美が二人にお揃いの手作りのブレスレットを渡す。

ベッドにいる哀と、哀の足元に座っているコナンは、嬉しそうに顔を見合わせ、それから3人に向き直って言った。

「ありがとうな。嬉しいぜ。大事にするかな」

「私も大切にするわ。ありがとう」

歩美たち3人は、顔を見合わせて微笑む。

「今日はさ、蘭お姉さんたちも待つてるから、もう帰るね。今度来るときは、二人がいなかった間のノートとか、プリントとか、持ってくるから」

「おう。じゃな」

元太が手を上げる。

「ホントにありがとうね」

哀が言くと、3人は、ニコツと笑って、病室を出て行った。

入れ替わりに来たのは、蘭と園子、平次、和葉だった。

(蘭・・・)

今のコナンと哀には、蘭の顔を見るのが辛かった。

「コナン君、哀ちゃん、お帰り。安心したわ、二人の顔を見て」

「蘭ねえちゃん・・・ごめんね。心配させて・・・ホント、ごめん・・・」

コナンは、俯いて蘭にわびる。

「ごめんなさい・・・江戸川君を危険な目に遭わせて・・・」
哀も詫びて、蘭に頭を下げた。

「あんたら、心配させすぎ！蘭がどれだけ心配していたか、わかる？」

園子がコナンを睨んで言う。

「園子！いいよ、もう・・・」

「でも、蘭・・・」

「いいの。帰ってきてくれたんだから・・・」

蘭は、瞳を揺らし、コナンに優しく微笑んだ。その様子に、園子は、それ以上、何も言えなくなった。

「そうや！よかったやん！二人共、無事やったんやし」

和葉が明るい声で言った。

「そやそや。ボウズもお譲ちゃんもケガしたみたいやけど、こうやって無事に会えたんやから、よかったで！」

平次も明るく言った。

「で、何があつたの？」

「ごめん・・・それは、今は、まだ、誰にも言えないんだ」

蘭の問いに対し、コナンは、つらそうに答えた。

「じゃ、これだけ教えてくれる？二人一緒に事故に巻き込まれたって訊いたけど、ホント？」

「うん。灰原は、僕を庇って大怪我したんだ・・・僕のせいであんな長いこと昏睡状態が続いて・・・すごい心配だったけど、前にいた病院でだいぶ良くなったから・・・」

「そう・・・哀ちゃん、コナン君を庇って、ケガしたの・・・」

「そんなに危ない状況やったん？」

和葉が訊いてくる。

「それで、ケガしたとき、二人だけやったんか？」

「え？」

他の3人には、平次の訊いている意味がわからない。コナンと哀は、返事に困った。

「・・・他に大人の人がいたけど・・・で、ケガした僕らを病院へ運んでくれて・・・」

コナンは、それだけ答えた。

「大人の人って？」

平次がさらに訊く。

「知らない人・・・」

コナンは、平次の目を見て、僅かに首を振った。

「さやか・・・でも、なんで、二人で行ったんや？」

「私達は、一蓮托生。この人がいなくなると、私も存在できなくなるから・・・」

今度は、哀が答えた。

「え？」

コナンを含めた5人が哀の言葉に驚く。しかし、当人は、もう目を閉じて、静かに腕を組んでいるだけだった。

第14章：再会（後書き）

作品評価、コメント、ありがとうございます。

参考になります。相変わらず、自己満足的なストーリーではありませんが、よろしければ、お付き合いください。

やっと、平次と和葉が出てきた（^^）；

第15章：決意

「あのよ。訊いておきたいことがあんだけど・・・」

二人だけになると、コナンが真剣な表情で哀に問いかけた。

「何？」

「おめえ、元に・・・宮野志保に戻る気、ねえんじゃねえか？」

哀は、少し驚いた表情をしたが、すぐに笑顔になって言った。

「やっぱり・・・お見通しってわけね。探偵さん」

「おめえ、ジョディ先生に俺を元に戻したら、薬のデータは消すって言ったよな。自分は、戻るとは言わなかった・・・」

「それに、組織から情報が洩れていた可能性がある今、組織や他の研究機関や情報機関に、おめえがあんたの薬を開発したことや、その薬の実験中に退化したマウスがいたことが洩れていたとすれば、おめえの回りに危険が及ぶ・・・俺や博士や俺の両親を巻き込まないためには、宮野志保は、二度とこの世に現れない方がいい。そう考えてんだろ？」

コナンと哀は、約束通り、ジョディにも、目暮達に説明したように、事情を明かした。ジョディとジェームズも、目暮同様、二人や周辺に混乱が起きる可能性が高いと判断し、自分たちだけの胸のうちに留めると約束してくれた。

そのジョディからの情報では、組織に関するデータの一部が、組織の残党と思われる人物によって、持ち出されている気配があると

いうことだった。そして、アメリカでは、CIAを含め、情報機関や企業のなかに、そのデータに興味を示すところがあるという。そのなかには、哀が行っていた研究も含まれているかもしれないということだった。

「私は、この体になった時は、元に戻りたいと思ったわ。いえ、今もそうかもしれない」

哀は、コナンから視線を外し、窓の外を眺めて言った。

「でも、組織の科学者、宮野志保のデータが洩れたとすれば、私を探す人間は、組織の人間だけじゃなくなっているわ。CIAなんかの情報機関も興味を持つでしょうね・・・組織の残党に狙われているのであれば、今なら、警察やFBIを頼ることができる・・・でも、相手が大国の国家機関となれば、警察もFBIも、頼ることはできなくなる・・・」

「・・・」

コナンは、黙って哀の顔を見つめながら、彼女の話の話を聞いている。

「それにね。男のあなたと違って、女の体は、複雑に出来ているの。この体になって2年経ったことで、おそらく、私の体は・・・正確には、女性としての機能の細胞だけど・・・元に戻ることは、耐えられず、死亡にまで至らなくても、大きな障害が出る可能性が高いと考えているの」

哀は、窓の外から視線を外し、コナンの方に顔を向けた。

「解毒剤・・・今、手元にあるデータで、なんとか完成させるから・・・だから、あなたを工藤新一に戻したら、そのデータを破棄し、私は、ただの小学生灰原哀として生きていくわ・・・解毒剤を研究していたことについては、まだ目暮警部たちにも話してないし・・・」

」

「それでいいのかよ。俺を元に戻して、おめえは、そのままで・・・
それでいいのかよ」

「かまわないわ・・・たえ、それで、あなたが蘭さんのところへ
戻ることになっても・・・」

哀は、そう言って俯いた。

「俺は、いやだね」

「えっ？」

哀は、顔を上げてコナンを見つめる。

「おめえと一緒に歩いて行くって言ったろ？おめえが元に戻らなければ、俺も戻らねえ・・・今の俺には、元に戻ることで、おめえが大事なんだ。おめえが灰原哀でいるのなら・・・おめえの横にいられるのは・・・灰原哀と一緒に生きていけるのは、江戸川コナンしかいねえだろ？」

コナンが少し頬を赤くして、それでも、力強く言う。

「工藤君・・・でも、あなたには、工藤新一として生きていくことの義務があるんじゃないの？優作さんと有希子さんの息子として、探偵として、あなたを必要とする人がたくさんいるのよ」

「それを言うなら、宮野志保も同じだろ？・・・亡くなったとはいえ、おめえの両親やお姉さんにとっては、宮野志保は、かけがえのない人じゃねえか」

コナンは、哀のベッドに座り、哀の顔に自分の顔を近づける。

「でも、宮野志保が戻れば、警察やFBIが、おめえを捕まえるかもしれないし、そうなれば、薬のことも公になるだろう・・・世界中の国や情報機関、犯罪組織やテロ組織も興味を持つに違いねえ・・・おめえは、その騒ぎからみんなを守るために、宮野志保として生きていくことを捨て、灰原哀として生きていくつもりなんだろ？」

コナンと哀は、お互いの視線を外すことなく、お互いの目を見つめた。

「だったら、俺も、工藤新一を背負って、江戸川コナンとして、おめえを守って生きてえんだ・・・おめえと一緒に、おめえと周りのみんなを守るために、江戸川コナンとして生きて行きてえんだ」

哀の瞳が揺れる。

「工藤君・・・いいの？それで、あなたはいいの？」

「ああ・・・人より10年余計に生きられるんだぜ。お得だろ？」

「バカ・・・あなたは、バカよ・・・私なんか・・・私なんかを・・・」

「ああ、バカだよ。おめえと同じくらいな・・・なあ、俺達の背負うものは、一人じゃ背負えないんだ。二人一緒じゃなきゃな」

そう言うつと、コナンは、哀を抱き寄せた。

「俺たちは、一蓮托生だって言ったのは、おめえだろ？二人でひとつの運命を背負って生きていくしかねえんだよ、俺とおめえは」

「工藤君・・・ごめんね・・・私の運命にあなたを巻き込んでしまった・・・今更、謝って済むことじゃないけど・・・ごめんなさい・・・」

「謝ることはねえよ。俺が選んだんだよ。おめえと同じ運命を背負うことを・・・それに、おめえが好きだから・・・愛しているから・・・巻き込まれたなんて思っちゃいねえよ」

コナンは、哀の頬を両手で挟んで自分の額を哀の額につけた。

「私も愛しているわ。だから、同じ運命を背負って、あなたの傍にいたい・・・」

「ああ。ずっと一緒だ」

二人は目を閉じると、唇を重ねた。

「どう思う？」

蘭は、園子、平次、和葉と毛利探偵事務所の応接コーナーに座って、訊いた。

「うーん・・・まあ、あのガキんちよなら、何か事件に首突っ込んで巻き込まれたような気がするわね」

蘭の問いに、まず園子が答えた。

「でも、あの子・・・彼がいなければ自分は存在しないって、そんなこと、あの歳で言える？・・・今度の事故どうこうというより、あの子の方が気になるわ。なんか、しばらく見ない間に、随分と綺麗になってたし・・・」

園子は、あの時の哀の淡々とした表情が忘れられない。

「そうやねえ。けど、コナン君を庇ったんやったら、あのくらいのこと言いそうやね」

和葉も同意する。

「どうも、子供らしくないというか、私達より大人のような気がするのよね。あの子・・・蘭もそう思うでしょう？・・・蘭？どうしたの？」

隣で考え事をしている様子の蘭を見て園子が声を掛けた。

「・・・あ・・・うん・・・哀ちゃんの言葉の意味、ずっと考えていたんだけど、あの子達、私達の知らない秘密とか、そんなものを抱えてるんじゃないのかって」

蘭の言葉に、園子が少し不審げな顔をしている。

「それは、すごく大きな、重いもので、一人では抱えきれないもの・・・二人なら抱えていける、一人がいなくなると、残された一人がその重みに押しつぶされてしまうような、そんなものを二人で抱えているというか、背負っているのじゃないのかなって、そう思うの・・・私」

蘭は、寂しそうな表情を浮かべて言った。それに、二人が自分を見る時の寂しそうな、辛そうな、なんとも言えない表情も気になっていた。

「でもさ、いくらマせているってさ、あの子たち、まだ小学3年生だよ。そんな重荷なんてある？」

園子が少し呆れたように蘭を見て言った。

「あの子たちが普通の小学生ならね。でも、コナン君も、哀ちゃんも、普通の小学生に見えないでしょ？ 実際、あの雰囲気、頭の良さは、普通じゃない・・・だから、何か大きな秘密を抱えているんじゃないかって、そんな気がするの」

蘭は、少し語調を強めて話す。

「確かにねえ。哀ちゃんとは、あまり話したことないけど、コナン君には、いつも驚かされるし、そのコナン君が認めた哀ちゃんも、コナン君と同じくらいに頭が良かつても不思議やないよね。そう言うたら、コナン君と哀ちゃん、工藤君の親戚なんやろ？」

今まで、二人の話を聞いていた和葉が蘭に尋ねる。

「うん。でも、新一からは、二人のこと聞いたことないし、それと、コナン君、私に哀ちゃんのこと、何も話してくれないんだ」

「え？ どういうこと？」

「哀ちゃんが転校してきたことも、博士の家に住んでいることも、私、随分後になって知ったの。それも、コナン君から直接聞いたんじゃないし・・・」

蘭の目は、寂しそうだった。園子は、いつから蘭がこんな目をするようになったのか、新一がいなくなった時からだと、思った。

「他の友達のこととはさ、コナン君から話を聞いたことあるんだけどさ、哀ちゃんのこととは、コナン君、何も私に話してくれないの。今でも・・・だから、秘密っていうか、二人には、何かあるのになつて気もするの」

蘭が静かに言う。その言葉に園子が言った。

「そうなんだ・・・でも、あのガキンちょ、あの子が風邪ひいたとき、泊り込みで看病してたでしょ？ いくら小学生でもさ・・・それ

って、結構、親しくないとできないよ」

「そうよね。だからさ、よけいに二人には、私達が知らない何かがあるのかなって思うんだけど」

蘭がそう言くと、ずっと黙っている幼馴染に和葉が声をかけた。

「平次は、どない思う？・・・平次？」

平次は、ずっと考え事をしていて、和葉に声をかけられても、気づかない様子だった。

「平次！」

隣に座っている和葉が大きな声で平次を呼ぶ。

「あ？・・・あん？・・・なんや？」

「もう！どないしたん？」

「いや・・・ハハ・・・ちょっと気になることがあってなあ」
「何？」

蘭も平次の様子が気にかかっていた。

「うん。まあ・・・その・・・明日、あのボウズらともういつぺん話してくるわ。今日は、大勢やったから、言われへんことあったかもしれないし・・・」

「うちも行こか？」

「いや、悪いけど、俺一人で行かしてくれへんか？ボウズと男同士の話しがしたいんや」

平次は、ちよつと蘭の顔を見たが、後は、黙って和葉の方へ向いて微笑んだ。

翌日、出かける平次を見送ると、蘭は、和葉と居間で向かい合って座っていた。

「ね。和葉ちゃん。気になることがあるんじゃない？」

蘭の問いかけに、和葉がやっぱりというような表情で蘭を見た。

「蘭ちゃん、氣についてたんや、やっぱり」

「うん。なんとなくね。服部君の顔、よく見てたもん、和葉ちゃん」
和葉は、フツと寂しそうな表情を作った。

「平次、なんか、私に隠してるんちゃうかなと思うねん」

「なぜ？」

「蘭ちゃん、昨日、平次がコナン君に訊いてたこと、意味わかった？」

蘭にも、平次がコナンに訊いてたことの意味は、よくわからなかった。

「そうね。なんで二人で行ったのか、って、どういう意味かしら？」

「そうやねん。へんな質問やろ？・・・それに、コナン君が行方不明になった時、蘭ちゃんから連絡、もうたやん。あの時、平次、心配そうな顔しとったけど、あんまり驚いた感じがせえへんかって、なんや怒ってるみたいやった・・・」

「そういえば、昨日も、コナン君、何も言ってくれなかったって、服部君、言ってたね。帰ってきてからも、なんか、考え事してたみたいだし・・・」

「そうなんよ・・・それに、いつもやったら、コナン君が行方不明と聞いたときに、東京へ行こうって、言うと思うんやけど、今回は行ってもじゃあないって、そう言うて、阿笠博士に電話して、様子聞いてただけやったんよ」

和葉は、窓の外に目をやると、少し寂しそうに言った。

「それに、コナン君に訊いてたこと・・・平次、今回のこと、なんか知ってんねやと思う・・・うちの知らんことを・・・」

「そう。でも、そうだとして、服部君のことだから、和葉ちゃんのことを思って、心配かけないように、黙ってるんじゃないかな」

「うん。そうやとは、思うねんけど・・・」

「お父さんが言ってたんだけど、コナン君と哀ちゃんを警察が匿ってたのは、たぶん、あの黒の組織事件に関係があるんだろうって。服部君、今までに遭った事件で、あの組織のこと、なんか知ってたのかも・・・それで、危険だから、和葉ちゃんを巻き込みたくないって、そう思ったんじゃないのかな？」

蘭も、少し寂しげな表情になった。

「実はね、実は、新一も、あの事件に関わってたみたいなの」

「え？工藤君も？・・・工藤君と話したん？」

「うん。コナン君が行方不明になって、2週間ぐらい経ったところかな・・・電話で。あの事件に関わったって」

そして、その後、他に好きな人が出来たと新一から告げられたが、そのことは、今は言えなかった。

「平次、工藤君とも連絡してたんやろか？コナン君と哀ちゃんが巻き込まれた理由、知ってんのやろか？」

「それにしても、服部君はさ、和葉ちゃんのこと、ちゃんと考えているよ。新一と違って・・・だから、余計な心配しなくてもいいんじゃない？」

「え？」

和葉は、蘭の言葉に不審を持ったが、蘭は、そのまま視線を窓の外に投げてしまった。その寂しげな顔に、和葉は、何も訊けなかった。

平次は、ひとりでコナンの病室を訪ねたが、いない。

「江戸川君なら、たぶん灰原さんの病室だと思いますよ。いつもそ
うですから」

通りがかった若い女性の看護師が言った。

（は、いつもね）

平次は、「灰原哀」と札が掛かった病室のドアをノックした。

「俺や。入るでえ」

「服部か・・・いいぜ」

コナンが答える。

「なんであなたが答えるのよ。ここは、私の部屋よ」

平次がドアを開けると、そんな哀の抗議する声が聞こえた。

「いいじゃねえか、どっちでも」

「よくないわよ。私の部屋なんですからね。私の意向が優先される
はずでしょ？」

「へーへー。次から気をつけます」

「ホントに反省しているのかしら？」

無視された平次は、目を点にして、そこに立っていた。

「お前ら、俺のこと忘れてへんか？」

「あ。わりい」

「ごめんなさい」

哀は、ベッドの上で、コナンは、ベッドに近づけた椅子に座って、それぞれ本を読んでいた。

その本をテーブルに置いてコナンが訊く。

「服部、今日帰るんじゃないのか？」

「ああ、夕方の新幹線で帰るわ・・・それより・・・」

「ま、事情を知ってるお前には、話さなきゃならないことがあるかな。来てくれてよかった」

哀も本を置いて言う。

「それに、他にも聞きたいことがあるようね」

「そやな・・・工藤、姉ちゃん、水臭いやんけ。なんで、組織に行くんやったら、俺にも声をかけてくれへんかったんや？みんなの話やと、ちよつと前からいろいろ探つとつたんやろ？」

「あなたは、関係させたくなかったのよ。もし、何かあったら、和葉さんやあなたの家族に申し訳ないし・・・組織の性格上、あなたのお父さんに迷惑をかけることも考えられたし・・・」

哀は、服部をまつすぐに見つめて言った。

「確かに、黙ってたのは、悪いと思ってる。今まで、いろいろ協力してもらっていたのに、な。でも、FBIにも、俺と哀以外の民間人が関わることは拒否されてもいたんだ」

それから、コナンは、ジョディから聞いた組織の現状を簡単に平次に説明した。それと、目暮らに真相を明かしたことも。さらに、自分も、哀も、元の体に戻るつもりのないことも。

それらを聞いた平次は、

「元に戻らへんて・・・工藤新一は、どうすんねん？このまま、いつまでも行方不明にしとかれへんやろ？」

「ああ、親父たちと相談して、いずれ、工藤新一と宮野志保をこの世から消さなきゃなんねえかもな」

平次は、少し驚いて、コナンと哀を交互に見た。

「それって・・・二人を死んだことにするってことか？」

「それも、考えてる・・・なあ、服部。俺、最近、気がついたんだ。江戸川コナンは、偽りの姿、工藤新一の仮の姿じゃねえって」

「あ？どうゆうこっちゃ？」

「小さくなつてさ、江戸川コナンと名乗ってさ、生活を始めた時にコナンが生まれたということさ。工藤新一は、その時、死んだのかもしれねえ・・・」

そこまで言うと、コナンは、哀を見た。

「そして、哀も・・・宮野志保が小さくなり、博士の家で名前をつけたときに、灰原哀が生まれたのさ。江戸川コナンも、灰原哀も、奇しくも博士の家で生まれ、コナンと哀の人生を生きてきたんだ。工藤新一と宮野志保じゃなく・・・」

平次は、フツと息をつくど、哀を見る。哀の目も、コナンと同感だと言っている。

「残念やな・・・工藤新一と、宮野志保に会いたかったけどな・・・それと」

「俺が哀を選んだことか」

コナンが伏し目がちに平次に訊く。

「ああ、姉ちゃんの前やけど・・・」

「私のことは気にしないで頂戴」

哀は、眼を閉じて腕を組んだ。

「毛利の姉ちゃんとお前、切れたんか？」

「蘭には、電話で言った・・・別に好きなヤツが出来たって・・・」

「ほんなら、お前、この姉ちゃんの方を選んだってことか？」

「なんてのかな？うまく口では言えねえけど。服部にどう思われてもしかたねえけど、俺、哀が好きなんだ・・・蘭よりも・・・たぶん、蘭に対しては、幼馴染として、友達より少し上の感情だったのかな、と思う」

コナンは、平次を見ていたが、俯いて視線を外し、哀の方をチラッと見た。

「哀にはさ、もっと・・・その男としての感情が強いつていうか、ずっと守りたいと思うし、傍にいたい、触れたい、抱きたいって思うんだ・・・コナンのまま生きていこうと決めたのも、哀を守るためでもあるし・・・」

「・・・工藤、お前、本人を前にしてよう言っなあ・・・」

平次が呆れたように言った。

「俺は、コイツには、正直に気持ちを言うつて決めてるかな」

「わかったわ・・・でも、毛利の姉ちゃんのことにも気になんねんけどな」

「蘭に対してやったこと、自分でも酷いことだと思う。この傷は、哀の背負っているモノと一緒に二人で背負う覚悟はできてる」

平次は、コナンのまっすぐな眼差しを見て、その決意の程を理解すると、哀を見た。彼女も静かに平次を見つめ返してくる。

「わかったわ。お前らの覚悟と決心のほどは・・・もう、俺の口出すことやないようやな・・・」

平次は、蘭のことを思っ少し胸が痛んだが、小さくなった探偵の友人と、その恋人が少しうらやましかった。

第15章：決意（後書き）

原作の方では、FBIのジヨディは、コナンと哀のこと、細かいところまでは、知らないようですが、二人のこと、不審に思っていないでしょうか？

コナンと哀が元の体に戻らず、そのまま成長していくというのは、私の妄想、願望であります。

第16章：友達

コナンが退院した。

明日から、学校へ来るといふ。

休み時間。教室から窓の外をぼんやり眺める歩美に、光彦が声をかけた。

「どうしたんですか？歩美ちゃん」

「え？・・・あ、うん。コナン君、明日から学校に来るのは、嬉しいんだけど・・・」

「灰原さんとコナン君のことですか？」

歩美がコナンのことを好きだとは、光彦にもわかっていて、この前、病院で会ったコナンがと哀が、随分と仲良くなっていることに、心を痛めていることも。

「コナン君と哀ちゃんが仲良くなったの、嬉しいんだ。でも、哀ちゃんのこと、ひどいとも思っちゃうの・・・いつも、コナン君と一緒に、今度も、一緒にいて、私達に何も言ってくれなくて・・・哀ちゃんばかり、コナン君の傍にいて、ずるいと思っちゃう・・・私、いやな子だね」

悲しそうな目でそういう歩美の横顔を、光彦は、優しく眺めていた。

「歩美ちゃんだけじゃないですよ」

しばらく歩美の横顔を見ていた光彦が、少し間をおいて言った。

「え？」

少し驚いて、光彦の方を向いた歩美に、微笑んで言う。

「僕もそう思いますから・・・コナン君だけ、灰原さんのこと、わ

かっているような感じで・・・彼女のお母さんのこととか、アメリカにいたこととか、僕達が初めて聞いたときも、コナン君だけは、前から知っていたようだったし・・・」

光彦は、歩美の目を見ると、言葉を続けた。

「でも、それでも、お二人は、僕にとつて、大事な仲間です。灰原さんも、コナン君も、ご両親と離れて暮してるでしょ？きっと、僕達には、わからない理由があるんだと思うんです・・・それに、この前、病院で会ったとき、ちよつと悔しかった」

「悔しい？」

「ええ。だって、コナン君と灰原さん、二人でいるのがすごく自然だったでしょ？お互い、信じあってるんですよ。二人で大きなケガをするような目に遭つて、それで、すごく信じあえるようになったんじゃないかって、そう思うんです」

歩美は、光彦が随分、大人になったような気がして、彼の横顔を大きな目で見つめている。

「悔しいけど、僕なんか、間には入れない・・・でも、友達なんです。仲間なんです。二人共・・・」

「そうだよね・・・私、コナン君のこと、好きだけど、哀ちゃんの方がお似合いだと思うよ・・・そうね、悔しいよ・・・でも、友達だよね」

「そうですよ。友達です」

ニコつと笑う歩美に、光彦も笑顔を返した。

「じゃ、コナン君が学校に来たら、哀ちゃんのこと、ちゃんと訊かなくちゃ」

歩美がうんと、頷いて言う。

「え？」

光彦が少し呆気にとられている。

「だって、友達なら、二人の関係をちゃんと訊いとかないと、ね」
「はあ」

光彦は、いつもの元気を取り戻した歩美に、生返事をした。

半年ぶりに登校したコナンを小さなクラスメート達が歓迎してくれた。

まず、職員室に行つて、担任の小林先生に挨拶し、一緒に教室に入ると、小さな友人達は、拍手で迎えてくれた。

照れくさそうに、それでも、嬉しそうに頭をかいているコナンを、歩美たちも、嬉しそうに笑顔で迎える。

みんな、少しずつ背が伸びていて、半年の時間の長さを思った。

そして、コナンは、自分の席につくと、空いたままの隣の席、哀の席に目をやった。

昼休み、コナンは、歩美と光彦、元太に、校庭の隅にあるメタセコイアの木の下に呼び出された。

「その・・・コナン君。灰原さんと、入院中、何があつたか、ちゃんと話してください!」

光彦が核心を突いてきた。

「あ・・・」

コナンが後ずさりをして、言いよんどんでいると、歩美がつめよる。
「コナン君! 哀ちゃんのこと、好きなんでしょ? 哀ちゃんも、そうなんでしょ? コナン君を守ってあんな大ケガして・・・だから、哀ちゃんを泣かせたら、歩美、コナン君を許さないんだから!」

「そうですよ。僕も許しませんよ！」

「そうだな、探偵団から追放だな！」

光彦と元太も歩美に同意する。

「・・・わーったよ。その・・・アイツとは、その・・・ずっと、一緒にいるって、そう決めたから・・・約束したから・・・」

コナンは、赤い顔で三人に言った。

「よかったね、コナン君！・・・で、哀ちゃんとは、キスしたの？」

「ぶ！ゴホン！ゴホン！」

歩美のマセた質問に、コナンは、むせ返ってしまう。

（マセてやがんな、俺が小学生の時って、こんなだったか？）

「その様子では、キスしたようですね」

光彦がジト目でコナンを睨む。

「で、どうだったの？」

歩美は、追及の手を緩めない。

「あ、もう昼休み終わるぜ！」

コナンは、逃げるように教室へ走り出した。

「あゝ逃げるなんてずるいよ！」

歩美が抗議の声を上げてコナンを追いかけて走ると、光彦と元太も続いて走り出した。

その日、哀の病室を歩美が一人で尋ねてきた。

「哀ちゃん・・・今日はね。二人で話したくて、元太君と光彦君には、黙ってきたの」

哀は、この小さな親友のコナンに対する気持ちを知っていた。

歩美は、小さくなり、灰原哀となつて初めて出来た友人。愛想のない自分の態度にもめげず、真っ先に声をかけ、友人にしてくれた純真な少女。

そして、まっすぐにコナンを見つめる彼女の目。哀がコナンを想うとき、蘭と歩美という、自分にはない、まっすぐに純真な少女たちの瞳を避けることはできない。

蘭も、歩美も、自分のことを気にかけてくれる。自分が、自分だけがコナンの想いを受けることは、この二人の想いが届かないものになるということに他ならないのに。

「ごめんなさいね。江戸川君のこと、私、あなたに彼をそういう対象で見えてないっていっておきながら……」

「ううん。あれは、1年生のときのこと。もう3年生になったんだし、気持ちも変わっていくんだって……それも、わかるから……それに、私、今もコナン君のこと好きだけど、哀ちゃんも大好きだもん！二人が仲良くしてくれたら、嬉しいよ」

「吉田さん……」

「それにね、今日、コナン君に言っておいたから……」

「え？」

「哀ちゃんを泣かせたら許さないって」

イタズラっぽく笑う歩美に、哀の顔にも微笑みが浮かぶ。

「ありがとう……」

「で？どうだったの？コナン君とのキスの味は？」

「は？」

歩美は、ウインクしながら、好奇心とイタズラっぽい目で哀を見つめている。

「コナン君、今日、言ったよ。哀ちゃんとキスしたって」

「彼が自分から、そういうことを話すとは思えないけど？」

「えへへ・・・だって、コナン君、キスしたの？って訊いたら、話を逸らして逃げたから・・・キスしたってことでしょ？」

あの名探偵が子供たちに質問攻めにあっている光景を想像すると、哀は、おかしくなってきた笑いだしてしまった。

歩美は、そんな哀の様子を、目を細めて見ている。

「哀ちゃん、よく笑うようになったね・・・歩美も嬉しいよ。哀ちゃんが笑ってくれてると・・・」

哀は、一瞬、この幼い友人の言葉に笑いを止めたが、フツと微笑んで言った。

「ありがとう。歩美ちゃん」

「歩美って呼んでくれるの！嬉しい！哀ちゃん」

本当に歩美は嬉しそうだ。

「で？キスの話だけど」

歩美は、どうしても哀の口から聞きたいらしい。

「は？」

哀は、また一瞬、気をそがれたように笑顔を消したが、目を細め

て言う。

「そりゃね、キスしたわよ。何度か・・・だって、好き同士なら当然でしょ？前の病院では、ずっと二人で居たし・・・」

「・・・さすが哀ちゃんだね・・・あっさり言っちゃって・・・コナン君よりも大人っていうか・・・」

（なんか、コナン君、苦勞しそう・・・）

歩美は、平然としている哀を見て、少し引きつらせた笑いをして思った。

コナンは、退院し、毛利探偵事務所に戻ってから、奇妙な違和感に襲われていた。

コナンになり、ここへ転がり込んで2年。住み慣れたはずのこの毛利の家が、自分の居場所ではないような感じがする。

コナンの部屋は、蘭が掃除してくれていたのだろう。整理され、教科書やランドセルも、きちんと置かれていた。

久しぶりに共に暮らす幼馴染は、コナンが帰ってきてからは、随分と明るくなったようだ。

「蘭のあんな笑顔、久しぶりに見るな。コナン、お前の存在は、蘭にとって、俺が考えている以上に大きいみたいだ。新一がいなくなつて2年以上になるし、コナンよ、蘭の力になってやってくれよな」

人一倍、娘思いの小五郎がコナンに対して言う。しかし、今のコナンにとって、蘭と小五郎の様子は、さらに重圧となって胸にのし

かかってくる。

「おじさん……」

「コナン君、今度、どこかへ行こうか？」

「え？」

蘭がキッチンで夕食の準備をしながら言った。

「そうだ！園子や歩美ちゃん達も誘って、久しぶりにキャンプはどう？」

「そだね。いいかも……」

コナンも、ちよつと戸惑いながら同意する。

「あれ？いやなの？」

コナンの戸惑った様子に気づいた蘭が不審げに言う。

「いや、そんなことないけど……」

「ああ、そっか。哀ちゃんのことね」

蘭がニヤリとして、コナンを、目を細めて睨む。

「え」

そんな蘭の表情に、少したじろいだコナン。

「だって、コナン君、哀ちゃんと随分仲良くなってたし、好きなんでしょ？哀ちゃんのこと」

「うん」

俯いて、小さな声で頷く。

「そうね。コナン君と哀ちゃん、話しも合うみたいだし、哀ちゃん、随分綺麗になったもんねえ」

意味ありげな微笑みで、見つめてくる蘭に、コナンは、意を決したように言った。

「うん。大事なんだ、彼女。僕にとって、一番」

「へ？」

まっすぐに自分を見てそう言うコナンに、蘭は、少し戸惑った。

「一緒に居るって、一緒に生きていくって、約束したんだ」

力強い目で見つめ返してくるコナンに、蘭は、驚いてその目を見つめていた。

第17章：動揺

この日も、コナンは、哀の見舞いに病院へ行った。

「だいぶ、右足も動くようになってきたわ。この調子なら、来週ぐらいには退院できそうだって」

見舞いに来たコナンに哀が言う。

「そうか。よかったな」

「それで・・・その・・・蘭さんの様子は？」

コナンは、深いため息をつくとき、哀のベッドに腰掛けて言った。

「うん・・・」

「何？あなたにしては、煮え切らないわね」

「蘭さ、俺がいない間、随分沈んでたみたいなんだ・・・おっちゃん顔見てたら、それがよくわかった・・・」

「で、あなたが戻ると、彼女に笑顔が戻った」

哀が察して言う。

「そうなんだよな・・・で、なんか、あの事務所、2年もいたのに、戻ってみるとさ、何か居心地がわりいんだ」

「どうして？」

「俺にも、よくわかんねえんだけどさ。おっちゃんも、蘭も、変わってねえんだけどさ、何か、自分のいる場所じゃねえ気がするんだ」

哀は、目を大きくし、少し首を傾げて聞いている。その年相応に見える表情を、コナンは、素直に可愛いと思った。

「たぶん・・・おめえと二人ですつと過してて、子供を演じる必要

もなかったし、素のままの自分で、ずっと居られたんだからだと思う。蘭のところじゃ、そうはいかねえからな」

「そう」

哀は、目を閉じ、少し考えているようだった。

「これからも、彼女を騙していかなければならない・・・そうさせてしまったわね」

「哀。そういうこと、もう言うな」

「ごめん・・・」

辛そうに眼鏡の奥の瞳を曇らせるコナンの後ろから、哀がコナンの肩に手をかけ、その背中に頭を預ける。

「優しいのね。相変わらず・・・」

その時、部屋のドアがノックされた。慌てて哀がコナンの背から体を離す。

「哀ちゃん」

「ハイ」

「私、蘭。入っていい？」

コナンと哀は、少し驚いて顔を見合わせたが、コナンが頷くと、哀が返事をした。

「どうぞ」

花束を持って入ってきた蘭は、ベッドに座っているコナンを見ると、少し慌てたような顔をしたが、すぐに笑顔になって、

「あら・・・お邪魔だったかしら？」

コナンを少し半目で見て微笑むと、哀に向き直って花束を見せる。
「これ、お見舞い・・・花瓶も持ってきたから、活けてくるわね」
ウインクしながらそう言いつと、一旦部屋を出て行った。

コナンと哀は、顔を見合わせていたが、
「どうするの？」

と、哀が訊いた。

「まあ、この場合は、おとなしくしてるよ」

しばらくすると、花を活けた花瓶を持って蘭が戻ってきた。

「ここにおくね」

花瓶を窓際に置く。

「ええ。ありがとう。よかったら、そこに掛けて」

哀は、ベッドの横にある椅子を指差して言った。

「うん」

蘭は、椅子に腰掛けると、

「哀ちゃん、具合の方はどう？」

と、哀に尋ねた。

「もうだいぶいいって。歩くのも不自由しなくなってきたし、来週には、退院できるって・・・」

「そう、よかった」

蘭は、そう静かに言いつと、哀の傍、ベッドに座ったままのコナンに向き直って言った。

「コナン君。毎日来てるんでしょ？いつも、そうやって哀ちゃんの傍に座ってるの？」

「え？・・・あ・・・うん・・・」

コナンは、蘭の質問に少し戸惑い、曖昧に答える。

「フフフ。そんなに慌てなくても・・・いいわね・・・二人、仲が良くて・・・」

コナンと哀は、ちよつと目を合わせると、蘭の次の言葉を待つように彼女の方を見た。

蘭は、いつものような笑顔をしているが、その瞳に寂しさが混じっているのを哀は感じた。

「あなたたち、ホントに小学生なの？なんか、すごい大人のような・・・時々、私よりも随分大人なんじゃないかと思っちゃうわ」

コナンは、少し慌てた表情になったが、哀の方は、表情を変えずに蘭を静かに見つめている。

そんな哀の顔を見ながら蘭が言った。

「でもね、コナン君と哀ちゃんが帰ってきて、本当に安心した。随分心配してたのよ。命は助かったって聞いてたけど、入院先も教えてくれないし、警察に匿われているということは、それだけ、危ない事件に巻き込まれているということだし・・・」

蘭は、コナンの方に視線を移すと、

「ね。コナン君・・・もう、危ないことはしないでね。それと、これからも、私の家に居てね」

「え・・・うん」

「そうだ、この前、コナン君にも言ったけど、哀ちゃんが治ったら、光彦君たちも誘ってキャンプにでも行かない？長いこと、行ってないでしょ？」

「・・・そだね。行きたいね・・・」

コナンは、蘭の言葉とその優しい笑顔にちよつと戸惑いながら答えた。

蘭が帰った後、哀は、傍に座るコナンに少しキツイ視線を投げた。

「彼女にとって、江戸川コナンは、私が思っている以上に、大きな存在のようね・・・」

「・・・」

「・・・私は・・・このまま、あなたに甘えていると、彼女を傷つける・・・でも、私のあなたを想う気持ち、今更どうにもできない・・・」

哀は、俯いてしまった。

「お互い、覚悟を決めたる？一緒に歩いて行くて。いろいろなものを背負うことになるけど、辛さ、苦しさを伴うかもしれないけど、一緒に居るって」

「そうね。でも、目の前であんなに寂しそうな蘭さんの表情を見ると・・・ね」

「哀、おめえのせいじゃねえよ。蘭につらい想いをさせてんのは、俺だよ」

「・・・私、自信がないのかもしれない・・・」

「え？」

コナンは、思いがけない哀の言葉に、少し怪訝な表情になって、哀を見つめた。

「あなたは、私を好きだと言ってくれる・・・でもね、蘭さんを見

てると、私、やっぱり、かなわないと思うの」

「どういうことだ？」

「だって、私、彼女より良いところなんて、何一つないわ・・・優しさ、いたわり、そして、強さ・・・どれも、彼女には、かなわない・・・」

「何を言うかと思えば・・・」

コナンは、呆れたという表情を作って、哀を軽く睨んだ。

「彼女と会ったび、そう思う・・・だから、あなたが、彼女のところへ行っても、しょうがない・・・」

「いい加減にしろよ！」

哀の言葉を遮るように、コナンが声を荒げた。

哀の肩が一瞬、揺れた。

「おめえな、俺が信じられねえのか？おめえが好きだっていう、俺の気持ちが・・・」

「そんなことない！・・・そうじゃない・・・そういう意味じゃないって・・・」

コナンは、哀を抱き寄せ、続きの言葉を塞ぐように、その唇にキスしてから抱きしめた。

哀は、少し驚いたように一瞬、眼を開いたが、そのまま、おとなしくコナンの腕の中にいた。

「おめえだって、俺を守ってくれたじゃねえか。それって、すげー強くて、優しくって、思いやりがないと、できねえことだと思うぜ。おめえだから・・・おめえにしか、できねえことだと思う」

「工藤君・・・」

「もっと自信持って、自惚れてるよ・・・今の俺のこと、一番わかってくれんの、おめえなんだから・・・俺の一番大事な存在なんだか

らよ」

哀は、コナンの心地よいぬくもりに包まれながら、その暖かい背中に手を回して目を閉じた。その瞼の裏に、寂しげな蘭と姉、明美の姿が重なって映っていた。

蘭が自宅へ戻り、夕食の準備を始めると、しばらくしてコナンも帰ってきた。

「あら？コナン君、早かったのね・・・まさか、哀ちゃんとケンカでもした？」

「え？そんなこと、ないよ・・・」

ランドセルを自分の部屋に置き、戻ってきてテーブルの前にコナンが座る。

蘭は、ジュースのコップをその前に置きながら、コナンの向かいに座った。

「ね。コナン君・・・私ね、男の人から、付き合ってほしいって言われてるの」

「え？」

「北大社公平君って言って、同じ大学の人・・・」

薄々、気づいていたコナンだったが、心が動揺している。そして、その動揺する自分の心に、コナン自身が戸惑っていた。

「それで、どうするの？」

コナンが蘭に訊いた。

「わからないの・・・公平君、いい人だとは思っけど・・・」

静かに考えるふうに首を傾げる蘭を見て、病院で見た哀の表情を思い出す。そして、その蘭の表情は、綺麗だと思った。

「新一兄ちゃんのこと？」

「そうね・・・それも、あるのかな・・・やだ、なんで、コナン君にこんなこと言ってるんだろ？」

蘭は、恥ずかしそうに笑う。

「でも、コナン君だから、言えるのかもね・・・」

「え」

「だって、哀ちゃんのこと気にしてるコナン君、真剣なんだもん。本気で人を好きになるって、大事だと思うから・・・そうじゃないと、本気の相手に失礼だもんね・・・だから、まだ、わかんないっていうのが、本当のとこだから・・・」

その先を言いかけた蘭だったが、口をつぐんで、キッチンへ戻って行った。

（蘭・・・）

コナンは、自分の心の動揺に、自分自身で腹が立っていた。

その日、いつもより遅い時間、夕食を済ませてから来たらしいコナンは、哀の病室の椅子に座って、ずっと本を読んでいた。

「あなた、そろそろ帰ったら？面会時間はとくに終わってるし、蘭さんも心配するでしょ？・・・それに、もう消灯の時間になるわよ」

そう言う哀の声を聞きながら、コナンは、哀の病室の隅に立てかけてあったマットを床に敷き、借りてきていた毛布を取り出した。

「あなた、ここに泊まるつもり？」

哀が少し呆れたような声を出した。

「ああ。先生と看護師さんの許可は貰ったぜ・・・蘭にも言ってるし」

「でも・・・」

「俺、少しでも、おめえの傍にいてえんだ。おめえがイヤなら帰るけど・・・」

照れた表情をしながらも、あっさりそういうコナンに、哀の方が恥ずかしくなってしまうた。

コナンは、自分の心が少し不安だった。哀のことを想う気持ちには、偽りは無い。しかし、蘭に対する自分の気持ちがまだ揺れている。

久しぶりに一緒に生活すると、電話で別れを言ったときとは、違う感情が湧いてきてしまう。コナンは、それが怖くて、哀の所へ来た。

（勝手だよな・・・自分がいやんなるぜ・・・）

「イヤなわけ、ないでしょ・・・」

「え？・・・あ・・・」

哀の返事に、コナンは、我に返った。

その様子を哀が少し不思議そうに見ている。

「どうかした？」

「・・・や、いや、別に・・・」

少し慌てたコナンだったが、

「さ、寝てろよ。傍に居てやるから・・・」

哀に優しく言う。

言われた哀がベッドに横になると、コナンが毛布をかけた。そして、哀は、黙って右手をコナンの顔の前に差し出した。

哀には、コナンの小さな心の揺れが、わかるのかもしれない。
そう思ったコナンは、フツと微笑み、その手を両手で握ると、哀は、
安心したように目を閉じた。

第17章：動揺（後書き）

筆者は、男なので、女性の本当の気持ちっていうのは、わかっていないと思います。

でも、毛利蘭という女性は、ライバルとしてみると、かなりの強敵だと思うんですね。

明るく、誰にでも分け隔てなく接し、正義感も強く、優しいし、周りに気づかいてもできる。おまけに、空手で開かないドアや車のガラスも破壊できる・・・（^^）；

哀としては、こんな気持ちになっちゃうかもしれないと思って、今回の部分を書きました。

第18章：母

次の日、哀の病室を有希子が訪ねてきた。

「おはよう、哀ちゃん」

有希子は、哀に微笑んだ後、床にマットを敷き、寝ながら様子を伺っている我が息子に冷たい目を向け、足でその背中を蹴った。

「いつまで寝てんのよ！そんな邪魔なところで」

「いつてーなあ。息子を蹴るなよ！」

コナンは、起き上がって母親に抗議した。

「まったく・・・蘭ちゃんに訊いたら、病院に泊まってるっていうし、そんなこと私は聞いてないし・・・あなたね！見かけは子供だけど、精神的には、20歳でしょ！・・・女の子が入院している部屋へ泊まるなんて・・・それも、見かけは子供だということを利用して・・・哀ちゃんにヘンなことしなかったでしようね！」

「心配だったから、一緒に居てやって、ここに寝ただけだよ！ナンもしてねーよ。哀に訊いてみるよ」

コナンは、母親の怒る顔にタジタジになりながらも、反論する。

「ほんと？哀ちゃん。」

有希子が哀に訊ねる。

「ええ。私が起きている間は・・・寝ている時は、わかりませんけど。・・・昨夜は、疲れてたから、ぐっすり寝ちゃいましたし」

哀もイタズラっぽく笑って言う。

「おいおい」

コナンが苦笑しながら哀を見る。

有希子がジト目でコナンを睨んだ。

「何にもしてないでしょうね？新ちゃん？」

「・・・」

「なんで黙るのよ？・・・ひょっとして、あなた・・・」

有希子の睨む目の鋭さが増すと、コナンが赤い顔をして頭を掻きながら言う。

「・・・って、おでこにキスを・・・手、握ってやったら、すぐに寝付いちまったから・・・んで、しばらく、寝顔見てただけだよ」
「恥ずかしそうにそう言うコナンに、哀は思わず吹き出してしまった。

「そんな・・・正直に言わなくても・・・」

哀の笑いが止まらない。

コナンに何か言いかけた有希子だが、哀の様子を見て、フツと微笑むと、

「哀ちゃん、よく笑ってくれるようになったわね」

そう言っ、哀の頭に優しく手をかけ、自分の胸に引き寄せた。

「ホント、かわいい！・・・もう、私の娘にしちゃおうかな？」

「おいおい・・・」

コナンが呆れ顔で有希子を見て、哀に視線を移すと、少し戸惑いながらも、嬉しそうな顔をしているので、自然と笑顔になっていた。

「哀ちゃん、これで荷物は全部？」

有希子が哀に訊いた。

「ハイ。本とか、服とか、ある程度は、博士が持って帰ってくれましたから」

哀の退院の日、有希子が朝から手伝いに来てくれていた。

「そう。それと、しばらくは、私もこっちに居て、あなたをウチで預かるから、よろしくね」

「え？」

「だって、あなたの世話をするの、博士じゃ無理でしょ？着替えとか、お風呂とか・・・新ちゃんが怒るわよ」

「すみません。いろいろ・・・」

「今更なに言ってるのよ。あなたは、私の愛息の大事な大事な人よと、言うことは、私にとっても大事な人、娘と同じなの。娘の面倒を親が見るのは当然でしょ？」

哀は、有希子の言葉に胸がつまり、涙が出そうになった。

「さ、新ちゃんもぼちぼち来るでしょうから、着替えてね」

そう言われ、素直に従う哀を優しい眼差しで有希子は見ていた。

コナンがやってきたのは、それから20分も経った頃だった。

「哀、仕度、できたか？」

「ええ」

「博士が玄関に車を置いて待っているぜ。荷物、これだけか？」

「ええ」

「新ちゃん。私を無視しないでくれる？」

コナンが哀にしか声をかけないので、有希子がこめかみに血管を浮き上がらせて言った。

「なんだ、母さん、居たのか」

ゴン！

有希子がコナンの頭を拳でたたく。

「いつてーなあ。何すんだよ！」

「親を無視するからよ・・・さ、哀ちゃん、行きましょ」

有希子は、コナンを放ったまま、哀を乗せた車椅子を押し始めた。

「おい！待てよ」

コナンが慌てて二人を追いかける。

有希子は、車椅子を押しながら、哀の顔を覗き込んでいたずらつ子のように笑い、ウインクする。哀は、追いかけてきたコナンの顔と、有希子の顔を交互に見て、苦笑していた。

哀は、当分、有希子が工藤邸で預かることになった。コナンと哀、有希子は、阿笠の車で、工藤邸に着いた。

「さ、哀ちゃん、この部屋を使って。遠慮はしなくていいのよ。あなたは、私の娘なんですからね」

新一が使っていた、2階の南に面した日当たりのいい部屋に哀を案内して有希子が言う。ベッドとソファ、テーブルがあり、備え付けのクローゼットもある。

「一応、一通り用意しておいたわ。必要なものがあつたら博士の家から運んでくるから、なんでも言って。トイレとお風呂は、2階にもあるから階段を上り下りしなくてもいいし、この部屋、鍵が掛か

るから、どつかの馬鹿な探偵が来ても会いたくなかったら、鍵を掛
けなさいね」

「ありがとう、有希子さん。本当に・・・」

哀は、潤んでいる目を有希子やコナンに見られないように少し俯
いて言った。

「馬鹿な探偵って誰のことだよ！」

コナンがジト目で有希子を睨む。

「わかってんじゃないの？・・・さて、私は、ちょっと片付けをし
てくるから、新ちゃん、哀ちゃんをお願いね」

有希子は、含みのある笑いを二人に向けて言葉を継いだ。

「夕方まで、私は2階に上がってこないから・・・ごゆつくり、ね」
そう言くと、フフと手を口にあて、目を細めてドアを閉め、出て
行った。

「あつたく・・・息子をなんだと思ってたんだ？」

「でも、いいお母さんね。私、こんなに親切にしてもらって、好意
に甘えていていいのかしら？」

「いいんだよ。一番喜んでんのは、母さんなんだから・・・さて、
せつかく母さんが気を利かせてくれたんだから・・・」

コナンは、哀を抱き寄せる。

哀は、肩に置かれたコナンの手のぬくもりの心地よさに目を閉じ
た。やがて、コナンの手が哀の髪に触れ、優しく指を絡ませる。

「おめえの髪、綺麗だよな。いい色だし」

「そう?」

「俺、おめえの髪、大好きだ」

「ありがと」

哀は、素直にコナンの言葉が嬉しかった。母譲りの髪の色。哀にとって、大事な母の形見、母の子であることを証明するものでもある。

「好きだ・・・うん、大好きだ、哀」

コナンが自分の気持ちを確認するように言う。

「私も。私も、あなたが大好き・・・」

哀も、強く言った。

二人は、お互いを見つめ合うと、ゆっくりとお互いの唇を近づけ、そっと合わせた。

「さ、哀ちゃん、食べて・・・お口に合うかどうかは、保障できないけどね」

次の日、工藤邸では、有希子と哀が二人で朝食をとっていた。有希子の手作り。

ご飯に味噌汁、焼き魚・・・

哀は、少し驚いて、テーブルの上を眺めていた。

「どうしたの?」

「あ・・・いえ」

まさか、有希子が和風の朝食を作れると思わなかった、とは、言えない。

「遠慮することは、ないのよ・・・哀ちゃんには、ちゃんと食べて

もらって、早く、体治して、新ちゃんのお守りしてもらわないと、いけないからね」

ウインクして、イタズラっぽく笑う。

「じゃ、いただきます」

「はい、どうぞ」

有希子は、満面の笑みで、箸を動かす哀を見ている。

「どう？」

「はい・・・美味しいです」

お世辞では、ない。長い間、入院していたこともあるのだろうが、本当に、美味しいと思う。

ふと、哀は、箸を置いて、俯いた。

「あら？どうしたの？」

「本当に、ありがとうございます・・・今まで、ちゃんと、お礼が言えてなかったの・・・入院中から、今まで・・・いえ、それより前から、私のような者に、ここまで、してくれて・・・本当に感謝してます」

哀は、俯いたまま、言った。

「何よ、改まって。気にしないでって言ったでしょ？あなたは、新ちゃんにとって、私にとって、大事な人、私の娘なの・・・女の子って、ほしかったのよね」

哀を見て、子供のような笑顔をする。

「有希子さん・・・」

「それに、いつか、あなたが新ちゃんのお嫁さんになってくれる日が来たら、その時、お返ししてもらおうし・・・ね。それまで、何も気にしないで」

彼のお嫁さん・・・

哀には、まだ想像すらできない。

今、彼は自分のことを好きだと言ってくれる。哀にとって、彼が一番大事な存在であることも確か。しかし、彼の人生の伴侶として、自分が相応しいのかというと、やっぱり疑問が残る。彼は、怒るか、一笑に付してしまうだろうが、自分がそこまで彼の傍に居ていいのかどうか、まだ哀には、わからない。

「あなたは、幸せになっていいのよ。いえ、幸せにならないといけないのよ。あなたのお姉さん、ご両親、阿笠博士、歩美ちゃんたち・・・そして、私たち・・・新ちゃん。みんな、あなたの幸せを願っているわ」

考え込んだ哀を見て、有希子が不意に言った。

(また、同じことを言わせてしまった)

哀は、すまなさそうに有希子を見た。

「ごめんなさい・・・私・・・」

「いいのよ。焦ることはないわ。ゆっくり、悩んで、歩いていけばいい・・・でも、幸せになることを捨ててはいけないわよ・・・ま、そのうち、新ちゃんよりいい男が現れるかもしれないけど、ね」

子供のような笑顔をして言う有希子に、哀も笑顔を返した。

昼間、哀は、隣の阿笠邸に戻った。

「哀君・・・」

阿笠は、目に涙を溜めて、哀の顔を見ている。哀には、それだけで、十分だった。

この少々変わり者の発明家が、いかに自分のことを想ってくれているか、今回、十分に知らされた。その不器用な優しさは、哀の心

に染みた。

哀には、不思議だった。自分のような無愛想な、お世辞ひとつ言えない皮肉屋が、なぜ、こんなに優しい人々に囲まれているのだろうか。見返りを求めるどころか、自らの危険さえ顧みることなく、自分に優しさをくれる人たち。

陰謀や打算、欲望が満ちていた組織にいた自分が、こんなに暖かい場所で過せるようになった奇跡に、哀は、震える想いだった。

哀は、自分の部屋へ入る。阿笠と有希子が掃除をしてくれていたそうだが、哀の物には、一切手が触れられた形跡がない。これも、あの人たちの優しさ。

目を潤ませて、思わず微笑んだ哀は、パソコンを立ち上げた。そして、作業を始めたその瞳には、鋭い光が宿っていた。

第19章：お揃い

誰が言い出したのか、蘭かもしれないし、歩美たちかもしれない。阿笠でも言い出しそうだ。阿笠邸で、コナンと哀の全快祝いのパーティーをやろうと。

「その日」の前日、コナンは、調べたいことがあるからと、阿笠邸にやってきて、哀とパソコンの前に座っていた。

「どう？これで、納得した？」

コナンの知的好奇心は、留まるところを知らない。時刻は、午前2時をまわっている。

「ああ。ま、今日のところは、これくらいにしとくか・・・」

「今日つて、もうとつくに日付が変わってるわよ」

「げ！もうこんな時間か・・・あつ！蘭に怒鳴れる・・・」

「さつき・・・って、7時くらいだったと思うけど、博士が蘭さんに電話してたわよ。今晚、あなたをここへ泊めるって」

「へえ。博士にしては、気が利いてんじゃない」

コナンは、あたりを見回して訊く。

「あれ？その気の利く博士は？」

哀は、ふーっとため息をつくど、

「もう、とつくに自分の部屋へ行って寝たわよ」

哀は、コナンが調べものをしている間、周りがほとんど見えていなかったことに少し呆れたが、まあ、これも彼らしい。

「しかし、改めて、哀もすげえな。さすがに医学や薬学は、俺、逆立ちしても哀には、かなわねえや」

「それは、どうも、痛み入ります」

哀は、パソコンデスクに置かれたコーヒークップをキッチンへ下げ、本や資料を片付け始めた。コナンは、パソコンをシャットダウンし、哀に言った。

「で？哀さん？私は、どこで寝ればよいのでしょうか？」

「ここは、どう？」

「ここって、ソファで寝ろってか？」

「あら？毛布も持ってきてあげるし、十分じゃなくって？」

「俺は、おめえの部屋がいいな」

「じゃ、私は、2階の端の部屋で寝るわ」

「・・・最初にその部屋で寝ろって、言えよ」

口を尖らせるコナンに、哀がフツと微笑んで、

「じゃ、布団、用意するわね」

と、言って2階に上がっていった。

「じゃ、おやすみ」

コナンが布団に入ったのを見て、哀は、部屋の灯りを消し、ドアを閉めて出た。自分の部屋に入ると、机の上に持ってきた資料を少し整理し、パソコンデスクに座って、パソコンを立ち上げた。

「おめえ、まだ寝ないのか？」

しばらく、パソコンでデータの整理をしていると、後ろから声が掛かった。コナンがドアを開けて立っている。

「工藤君・・・ちょっとだけ・・・気づいたときに、やっておこうと思って」

「明日・・・いや、もう今日か・・・パーティーやるんだぜ。もう寝ないと、きついぜ？」

「ええ。もう寝るから・・・」

パソコンをシャットダウンし、椅子から立ちかけると、暖かい腕が後ろから、哀の肩を抱きしめてきた。

「ちよつと・・・もう寝ないと・・・」

「うん・・・じゃあ、このまま、ベッドに入りやあいじゃん」
「え？」

コナンは、哀を立ち上がらせると、抱きついてベッドに押し倒してしまった。

「ちよつと！いきなり何すんのよ！」

哀が慌てて抗議の声をあげるのもかまわず、コナンは、哀を拘束したまま、ベッドに倒れこんで、哀ごと毛布をかぶった。

「こうして寝りゃ、暖かいじゃん」

「・・・もう、びっくりさせないでよ・・・ヘンなことしないでね」
間近になったコナンの顔を睨みながら哀が言う。

「しねえよ。ただ、こうしていただいだけだから・・・」

「もう・・・しょうがないわね」

呆れたように言いながらも、コナンの腕枕が温かく、コナンの胸が温かくて、哀は、自分を包むその温かさの中で、おとなしく目を閉じた。

その様子に満足したように、コナンは、哀を抱く腕に少し力を入れ、彼女の髪にキスをした。

「おやすみ・・・哀」

「おはようございます。博士」

翌朝、早くに阿笠邸にやってきたのは、パーティーの準備を手伝いに来た、蘭だった。

「あれ？コナン君と哀ちゃんは？」

博士がコーヒーを飲んでいるリビングを見渡して、二人の姿を探す。

「あの子たちは、昨夜、遅くまで起きていたみたいじゃからな。2階でまだ寝ているんじゃない？」

「もう。子供のクセに夜更かしするんだから・・・」

半目で仕方ないというように手を腰に当てた蘭は、パソコンデスクの上にある資料に、なんとなく目を留めた。

「犯罪心理学」「犯罪における薬物の使用」など、およそ、子供が見ると思えない資料や本が積んであって、蘭は、驚いて博士に言った。

「これって、二人が見ていたんですか？」

「・・・え・・・あつ・・・ああ・・・そうなんじゃが・・・」

阿笠も返答に困ってしまい、なんとなく、曖昧に答えると、蘭の表情が難しくなってしまった。

そして、そのおなじデスクの上に、2台の携帯電話があるのに気づいた。

黒いのは、見覚えのあるコナンのもの。そして、仲良く並んでいるもう1台は、コナンの携帯電話と同じ機種だが、色違いのピンク色をしたもの。おそらく、哀のだろう。

そして、お揃いのストラップ。イチヨウの葉を模った「フサエブランド」のストラップで、手にとってみると、黄色に輝くイチヨウの葉の裏に、文字が入っている。

コナンのものには、「AI」、哀のものには、「CONAN」

蘭は、ほほえましいような、マセた小学生だと呆れるような、複雑な思いで、2台の携帯電話を見ていた。

「そのストラップはな、フサエさんが二人の全快祝いに特別に作ってくれたんじゃないよ。二人共とっても喜んでな、さっそく、その場で付けておったよ」

蘭が二人の携帯電話に目を留めていたのを見て、阿笠が言う。

「ホント、生意気ね。でも、いいなあ・・・」

蘭がそう呟くと、阿笠は、少し表情を曇らせた。そして、笑顔を作って蘭に言う。

「すまんが、二人を起こしてきてくれんかのう。そろそろ、準備を始めんどの」

「はい」

返事をした蘭が階段を上がって行った。

勝手知ったる、阿笠邸。蘭は、コナンは、2階の東端の部屋に寝ているだろうと、ドアを叩いた。

「コナン君、起きなさい。もう、9時を回っているわよ」
返事がない。

「もう、コナン君！」

ドアを開けると、布団は敷いてあるが、もぬけの殻。不審に思っている、哀の部屋のドアが半開きになっているのに気づき、開けてみた。

「哀ちゃん。起きて」

「！」

中に入って哀のベッドを見ると、コナンと哀が寄り添って寝ている。

（まったく、この二人は・・・）

蘭が呆れた顔をしていると、コナンが「うん」と言って目を覚ました。

「・・・あれ、蘭姉ちゃん？」

「蘭姉ちゃん、じゃないわよ！コナン君、どうして、哀ちゃんのベッドで寝てるわけ？・・・まさか、忍び込んだ・・・」

蘭が怖い顔で睨むと、

「ち、違うよ・・・哀と一緒に寝た・・・いや、あの・・・」

コナンは、どう説明しても、蘭の誤解と怒りを呼ぶと気づき、黙ってしまった。

「えっ！？もう9時回ってる！・・・起きなきゃ！」

わざとらしく叫んで、話を逸らそうとする。

「ごまかすんじゃないの！・・・まさか、コナン君、哀ちゃんに・・・」

「な、何もしてないって！」

「でも、コナン君の手、哀ちゃんの肩にあっただけど？」

蘭も意地悪く、コナンをからかっている。

「だから・・・一緒に寝たのは、事実だけど・・・」

「見りゃわかるわよ」

「ただ・・・その・・・一緒に寝ただけで・・・」

コナンの声が小さくなっていく。その時、哀の肩が震えているのに気づいた。

「哀！起きてたんか？」

「・・・だって・・・この状況で・・・寝ていられるわけが・・・ないでしょう・・・」

哀が笑いながら言う。

「哀ちゃん、コナン君に何もされなかった？」

蘭の問いにコナンが脹れる。

「この人に、そんな勇気ないもの・・・まだ、子供だしね。でも、温めてもらったけどね」

「哀ちゃん・・・」

蘭は、哀の言葉にも呆れた。この二人には、何を言ってもムダだ
と思い、

「早く起きて。パーティーの準備するわよ」

そう言つて、部屋を出て行った。

「なあ、哀。今日のパーティーってさあ、俺達の全快祝いじゃなかったけ？」

「一応、そうだったと思うけど？」

「じゃさ、なんでさ、俺と、おめえと、蘭と、博士の4人で準備してるわけ？」

「私はともかく、あなたは、ここに泊まったりしなかったら、準備を手伝わされることはなかったんじゃない？自業自得ね」

「俺が泊まって、喜んでたくせに・・・」

「喜んで私のベッドで寝たのは、あなたでしょう？」

「おめえだって、嬉しそうにしてたじゃんか」

「いやらしいことされたって、あなたのお母さんに訴えようかしら？蘭さんが証人だって」

「おめえな、無実の罪で、恋人を売る気か？」

「でも、いきなりベッドに押し倒されたのは、事実だし」

「・・・って、そういうことじゃなくって、なんで、全快祝いで、祝われる本人が準備してるのかって話なんだけど？」

「確かにヘンだとは思うけど、成り行きね」

「そもそもさ、誰がやるうって言い出したんだ？」

「さあね」

「服部もわざわざ電話してきて、楽しみにしてるからなつて、意味ありげに言いやがった。和葉ちゃんも来るって言つてたけど、誰がアイツらと呼んだんだ？」

「歩美ちゃんは、東尾さんとか、他のクラスメートも呼んだって言うてたわね、意味ありげに・・・」

「げ！　いつたい何人来るんだ？」

「そういえば、佐藤刑事も来るって言つてたような・・・」

「ハハ・・・なあ、哀。どつかへ逃げないか？」

「運命から逃げるな、って言ったの、あなたじゃない」

「それ、ここで言うか？　普通」

「逃げたら、後が大変だと思っけど？」

「でも、みんな、俺達をからかいに来るようなもんだろ？」

「あら？　私は、からかわれるようなことをした覚え、ないけど？」

「おめえになくても、あつちにはあるぜ」

「ま、今朝のこと、蘭さんの口から洩れたら、当然、餌食にされるわね」

「・・・そうだった・・・やっぱ、逃げないか？」

「そうね。私も、その方がいいような気がしてきたわ」

二人の不安をよそに、園子がやってきて、蘭とパーティーの準備を手伝い始める。

コナンは、その様子に、いやな予感がした。

「ね、このテーブル、そっちへやった方がいいんじゃない？」

園子が蘭に声を掛けた。

「そうね。移動させようか？博士、いい？」

「ああ。かまわんよ」

園子と蘭がテーブルを窓際に移動させる。その時、園子が、キッチンで飲み物の準備をしているらしいコナンと哀を遠目に見て、蘭に小声で言った。

「で？ガキンちよ達へのプレゼント、用意した？」

「うん。一応、用意はしたんだけど・・・」

「何？なんか気に入らないの」

「うん。あの子達ね、フサエブランドのお揃いの携帯ストラップ持ってるのよ。しかも、フサエさんが直接渡したらしい特注品でさ、名前まで彫ってあるの」

「ええっ？それって、すごいじゃない！後で見せてもらおう・・・で、蘭。何が気に入らないわけ？」

「だって、フサエブランドのお揃いの鞆とカード入れたもん、二人の全快祝い・・・」

「別にいいんじゃない？喜ぶよ、あの二人ならさ、みんなからって言えば」

「そうだと思うけど、何か他のものにした方がよかったかなって・・・」

「蘭！要は気持ちよ、気持ち。そんなこと、気にしないの！」

園子は、そう言ってもう一度コナンと哀を見た。相変わらず、仲がいいというか、息が合っている。二人の作業分担は、それぞれ心

得ているようで、流れるように二人の手や体が動いている。その様子には、さすがの園子も感心してしまった。

「ホント、不思議な子だね、あの二人。小学生で、しかも二人で、あんなに器用にキッチンの仕事できるなんて、やっぱり普通じゃないよ」

哀が食器棚に手を掛けると、コナンは、何を取り出されてくるのか、事前にわかっているかのようにお盆を差し出す。哀がいちいち言わなくても、コナンが次ぎに哀の必要とするものをシンクの下や踏み台に乗って上の戸棚から取り出しているようだ。

普段、目にする事のない二人のそんな様子を、改めて驚いて蘭と園子は見ていた。

「ね。二人ほど、視線を感じるんですけど？」

「蘭と園子、興味津々だな」

「パーティーが始まるのが怖いわね」

「麻醉銃、使おうか？」

「・・・このメンバーなら、事件が起こっても不思議じゃないから、その時のために取っておいた方がいいわよ」

「誰が事件を起こすって言うんだよ」

「容疑者が多すぎるような気もするけど？被害者は、私達かもね」

「やれやれ・・・パーティーってさ、もっと楽しいもんじゃなかったっけ？」

「あら？私には、パーティーって、事件が起きる場にしか思えないんだけど？」

「そんなわけ、ねえだろ」

「あなたとパーティーに出て、事件に遭わなかったことって、あつたかしら？」

「・・・ないかも・・・」

「パーティー会場に死体があつて、爆弾が爆発して、車で空飛んで、ボートで犯人追いかけて・・・知らない人が聞いたら、映画の話だとは思わないでしょうね」

作業をしながら、お互いに少し呆れたような、大人びた表情で交わされている二人の会話は、蘭と園子には聞こえていない。しかし、パーティーの準備作業に関係ない雑談が交わされているであろうことは、様子を見ているとわかる。まったく、不思議な子だと、園子は、肩をすくめ、蘭と顔を見合わせた。

「じゃ、ちょっと、ストラップ見せてもらい方々、冷やかしてやるう」

園子が二人の方へ歩き出す、自分たちの方へ向かってくる園子の様子に、コナンと哀は、思わず身構えた。

「ハーイ、小学生カップル！あんたら、生意気にもお揃いの携帯に、お揃いのストラップしているそうね。しかも、フサエブランドの特注品だつて？ちょっと、見せなさい」

（げ！なんで、知ってんだ？）

（携帯をおきっぱなしにしてたの、まずかったわね）

「はは、いやだよ」

コナンは、笑って断った。

「何！園子様のお願いが聞けないってか？」

「哀、逃げるぞ」

コナンは、哀の手をとって逃げ出す。その後を追いかける園子。

「もう！準備はどうしたのよ」

その様子を見ながら膨れる蘭。阿笠は、やれやれといった表情をしながらも、この平和な時を楽しめるのが、嬉しかった。

第20章：仲間達のなかで

少年探偵団の3人がクラスメートを3人連れてやってきて、随分賑やかになった頃、大阪から平次と和葉もやってきた。

「よ！工藤」

ソファに座っているコナンの肩を平次がたたく。

「おめえ・・・」

と、言ってから、コナンは、周りを見回して声をひそめた。

「工藤って言うなって、いってんだろ」

「はは、すまん、すまん。元気してたか？あの姉ちゃんとは、仲よろうしとるか？」

「よけなお世話だ」

和葉は、蘭と園子と会話が弾んでいるようだ。

コーヒーを入れたカップを持って、哀がやってきた。

「よ！元気やった？」

平次が満面の笑みを哀に向ける。

哀は、無表情で平次にカップを渡すと、

「まあまあね」

と、無愛想に言った。

「なんや、つれないなあ」

平次が膨れると、哀は、仕方ないというように微笑んで、
「服部君、よく来てくれたわね」

と、言ったので、平次は、また、満面の笑みを浮かべた。

「んで？工藤。どこまで行ってんねん？おまえら」

「あのなあ、一応、小学3年生なんだぜ。どこへも行つてねえよ・
それに、工藤って言つなつていつてるだろ」

コナンは、哀の方を向き、

「コイツに正体バラしたことほど、後悔することはねえぜ」
と、ため息をついて言った。

「お調子者の毛利探偵や園子さんと違って、一応、この人、西の名探偵と言われてんですからね。そういう人を麻醉銃で眠らせて推理に使った、あなたのミスじゃないかしら？」

「一応、つていうところに、妙に力入ってへん？姉ちゃん」

平次がジト目で哀を睨む。

「あら？よくわかったわね」

「そだな、一応、名探偵と言われてたんだな、服部。忘れてた」

「お前らなあ」

「でも、私も一度、あなたに麻醉銃で撃たれたことあつたけど、あんな即効性の麻醉つて、体に悪いわよ。毛利探偵、何度も撃たれて、よく平気ね」

「特異体質なんだろ、きつと・・・そういえば、俺も撃ち込まれたこと、あるぜ」

「知ってるわよ・・・私の目の前だったもの」

「なんや。ほんなら、3人とも仲間やな・・・拳銃で撃たれたんも3人共経験あるし・・・強い絆やな」

「どんな絆だよ」

「あまり、嬉しくない絆ね。断ち切る方法はないのかしら？」

そこまで話したところで、歩美達が3人のところへやってきた。

「何話してんの？3人で」

歩美が言っと、

「服部さん、お久しぶりですね。また黒くなったんじゃないですか？」

光彦が平次に言う。

「あのな・・・」

「とうちゃんが、顔が黒いのは、肝臓が悪いんだって、言ってたぞ。元太が歩美の後から言う。」

「あほ。まだ20歳で肝臓悪うするわけないやろ」

平次が呆れて言い返す。

コナンも哀も、笑って平次と元太たちのやり取りを見ていた。

「コナン君、哀ちゃん、どう？変わったことはない？」

平次たちの次にやってきたのは、佐藤刑事と高木刑事だった。

阿笠や蘭たちと挨拶した後、二人は、コナンと哀の傍に来て囁いた。

「ありがとう。特に、変わったことはないよ。妖しい人間なんかも見かけないし、この家やおっちゃんの事務所が見張られているというでもないし・・・」

高木は、コナンの言葉に真面目な顔をして言った。

「僕達も、それとなく、周辺を回ってるけど、異常はないようだね」とすると、佐藤が少しニヤけて言う。

「あら？私は、二人の仲に変わったことがないかどうか、訊いたんだけどね」

目を細め、コナンの脇を突いた。

「佐藤刑事、小学生をからかって面白い？」

哀がジト目で呆れたように言う。

「誰が小学生だって？」

佐藤が哀に言い返す。

「あら？誰がどう見ても、小学生でしょう？」

哀は、当然という顔をしている。

その様子をコナンが苦笑して見ている。

（その顔は、小学生じゃねえな。どうみても・・・）

コナンがそう思っていると、

「何か言った？」

哀が怖い顔をしてコナンを睨んだ。

「えっ！？・・・別に・・・」

（鋭いな、コイツ）

そんな二人を、佐藤と高木は、乾いた笑顔で見ていた。

「哀ちゃん、ちょっと、話ししない？」

メンバーがほぼ揃い、パーティーが始まってしばらくした頃、哀は、蘭から声をかけられた。

哀は、カウンターに座っている蘭の隣に腰をかけた。

「哀ちゃん、訊いていい？」

「何・・・ですか」

「いつから、コナン君のこと、好きだったの？」

「え！？」

蘭の唐突な質問に、哀は驚いたが、少し柔らかい表情をつくって言った。

「そうね・・・初めて会ったとき・・・かも」

「それって、2年ぐらい前よね」

「ええ。それが、どうかしたの？」

「うん・・・正直に言うわね。あなたとコナン君を見てみると、なんだか、普通の付き合いっていう感じがしないの。その、うまく言えないんだけど、何か大きなものを一緒に抱えているというか、秘密を共有してるって言うか・・・私の思い過ごしかもしれないけど・・・」

哀は、返事に困り、表情を硬くして黙った。そんな哀の様子を見て、蘭が慌てて言葉を継いだ。

「やだ、哀ちゃんを困らせるつもりで言ったんじゃないのよ・・・だから、もっと前から、お互い知ってたのかなって・・・親戚だっというし・・・」

蘭は、少し寂しげな表情になって続けた。

「ただね。ただ、羨ましいなって・・・二人だけの世界。他人が入れない世界を共有できる人がいるというのは、幸せなことだと思うの。それで、つらい想いをすることがあったとしても・・・今の私には、ないもの・・・」

「蘭さん・・・」

「だからね。歩美ちゃんじゃないけど、二人には、仲良くしてほしになって思うの。ほら、コナン君って、後先考えずに走って行っちゃうことあるでしょ・・・哀ちゃんなら、一緒に走って、コナン君の力になれると思うの。一緒にいて、一緒に哀しみとか、喜びとか、そういうものを共有できると思う・・・」

「蘭さん・・・ごめんなさい。江戸川君は、蘭さんにとっても、大事な人なのに・・・」

「謝ることなんてないわ。コナン君がどれだけ哀ちゃんを大事にしているか、わかってるから・・・コナン君にとって、哀ちゃんは、かけがえのない存在だって、わかるから・・・」

哀は、胸が熱く、苦しくなった。新一から別れを告げられて、どこか哀しみを宿してしまった彼女の瞳。コナンまで、哀に取られた気がして、おそらく、胸の中は、せつないに違いない。

「哀ちゃん、コナン君をよろしくね。あの子、哀ちゃんとは親戚だから、他人の私がこういうのはヘンだけど・・・」

「そんなこと・・・江戸川君も、蘭さんを大切に思ってるわ。そして、感謝しているわ」

哀がフト気づくと、離れたところで歩美たちというコナンが、こちらを見て複雑な表情をしている。そして、かすかに笑みを浮かべたかと思うと、俯いてしまった。

「ありがとう、蘭さん」

「あれ、蘭、この子と何話してたの？」

園子が佐藤とやってきた。

「秘密。二人だけの秘密よ、ね、哀ちゃん」

蘭は、そう言って笑う。佐藤は、少し固い表情をしていたが、哀の方に笑みを浮かべ、ウインクしてみせた。

「じゃ、蘭さん、ありがとう」

哀は、そう言うと、カウンターから離れ、コナンのいる方へ歩いていった。

自分と蘭が話しているのを見て、複雑な笑みを漏らしたコナンの傍にきた哀は、黙ってコナンの頭に手を触れ、小さく撫でた。

顔を上げたコナンに微笑む。コナンも、哀に微笑みを返してくる。そして、二人で、園子や佐藤と話している蘭を優しく見つめていた。

「ね。あの大阪弁の黒い人、だれ？」

東尾マリアが歩美に尋ねる。

「ああ、服部さんっていつて、大阪の探偵さん。コナン君と仲がいのよ」

「へえー」

「マリアちゃん、どうしたの？」

「さっき、コナン君と灰原さん、あの人と親しそうに話してたから・
・なんかあるんかなって。そやかて、20歳くらいやんあの人。

コナン君と灰原さん、私達と同じ年やのに、よう大人の人と同じように話できるなあ、思て」

「まあ、あの二人は特別ね」

「そうやね」

マリアは、少し考え込んだ。その様子を歩美が不審に思う。

「どうしたの？」

「え・・・うん、前に灰原さんに言われたこと、思い出しててん」
「何？」

「ほら、1年生で、うちが転校してきたばかりやったころ、みんな小林先生の暗号解いたことあったやん。あの時、灰原さんがうちの関西弁聞いて、恥ずかしがらんでええ、忘れたらあかん、言葉

には、自分がそこで育ったというメッセージが込められてるって言うてくれたやん。あれから、しゃべるの恥ずかしなくなつて、みんなと友達になれて・・・」

「そういうこともあつたね」

「だから、灰原さんに感謝してんねん。だから、灰原さんが大怪我したつて聞いて、ずっと休んでて、心配やつたわ・・・元気になつて、よかつたなつて、心から思うねん」

マリアは、笑顔を歩美に向けて言った。

「そうだね。歩美も哀ちゃんから、いっぱい勇氣とか、嬉しいこととか、もらったよ。だから、哀ちゃんが大好き。その哀ちゃんを大事にしてるコナン君も・・・」

マリアと歩美は、楽しそうに笑い合つた。

「えーそれじゃ、ここで、コナン君と哀君の全快祝いとして、みんなからのプレゼントを二人に渡したいと思います。蘭君」

阿笠が宴たけなわのリビングの真ん中に立つて言うと、蘭がプレゼントの入った袋を持って阿笠の横に立つ。そして、コナンと哀を呼んだ。

「コナン君、哀ちゃん」

二人が阿笠のところへ歩いてくる。

「じゃ、みんなを代表して、私からプレゼントを贈呈します。コナン君、哀ちゃん、ケガの全快、おめでとう」

「ありがとう、蘭ねえちゃん、みんな」

「ありがとう」

みんなが拍手する中、二人がリビングの真ん中でプレゼントを手に頭を下げる。

「ね、開けてみて」

蘭が二人に言う。お揃いで色違いのフサエブランドの鞆とカードケース。二人は、顔を見合わせ、微笑んだ。

「ホントにありがとう。みんなにいっぱい心配かけて、迷惑かけたのに・・・プレゼントまで、もらっちゃって・・・」

コナンがそう言って頭を下げた。哀も一緒に頭を下げる。

「もう、心配かけないでね。コナン君、哀ちゃん」

蘭にそう言われると、二人には、返す言葉がなかった。

第21章：疑惑

コナンは、最近の蘭の様子を気にしていた。自分や小五郎の前では、明るく振舞っているが、気づくと、新一と蘭が並んで映っていた写真が蘭の机から消えていた。

中途半端に切れてしまった新一と蘭の絆。

蘭は、新一への想いを断ち切ることができたのだろうか。自分は、蘭にしてやれることは、もう何もない。ただ、コナンとして、蘭が可愛がっている居候の小学生として、傍にいてやることしかできない。

そして、そのことを一番気にしているのは、他ならぬ哀で、彼女のためにも、蘭には、幸せになってほしいと思う。

「どうしたの？コナン君」

「え？」

「だって、さつきから、私の顔、見てるじゃない？」

夕食の後、蘭とテレビを観ていたコナンは、いつの間にか、蘭の顔をずっと見ていたようだ。

「何か話してもあるの？」

「えっ……べ、別に……」

蘭は、最近、コナンが悲しそうな、辛そうな顔で自分を見ていることに気づいていた。

新一とのこと、哀とコナンが仲良くなつて、哀に軽い嫉妬を抱いていること、勘の鋭いコナンは、気づいているのかもしれない。

（それとも……）

バカらしいと思いながらも、忘れかけていた、心の底にくすぶり続けている疑問が、また浮かんでくる。

新一とコナンは、同一人物ではないのか。それで、ずっと、中途半端に別れたままの自分のことを気にしているのでは、ないのか。

あの大人びた少女、哀との恋は、子供のものではなく、真剣な大人の愛ではないのか。

（バカみたい・・・）

蘭は、心の中で自嘲しながらも、疑問にこだわっている自分に気づいていた。

しかし、ありえないと冷静に判断している自分と、真実を知るところを恐れている自分がいて、その疑問を確かめようという勇氣がない。

以前、蘭は、その疑問を何度か確かめようとして、その都度、否定されてきたこともある。

しかし、確実に成長しているコナンの顔は、ますます新一に似ていると思う。いや、同一人物と言っても、誰も疑問符をつけないだろう。ただ、年齢が違っただけだ。

（あの組織に関わって、あの組織に何かの理由で薬品を投与され、体が小さくなり、コナン君になって、哀ちゃんを好きになってしまった・・・哀ちゃんも、同じように薬品を投与された大人の女性だとしたら？・・・それで、あの事件に巻き込まれた・・・いや、あの現場へ行った、としたら？・・・辻褄は、合う）

「いつまで居てもいいのよ。何なら、ここ、新ちゃんと哀ちゃんの家にしちゃってもいいわよ」

「は？」

哀が阿笠のところへ戻ると聞いて、有希子が少し残念そうな表情をしている。もっとも、有希子も、そろそろアメリカへ戻らなければならぬ。

「哀ちゃん、元気でね。新ちゃんのこと、よろしくね」

そう言う有希子と別れ、阿笠邸へ戻った哀は、しばらく、学校は休むことにして、気になっていたデータの整理と、インターネットで情報の収集を始めた。

それと、ジヨディからのメールのチェック。

入院中も、阿笠宛にジヨディからメールを送ってもらい、それをコナンと哀へ伝えてもらっていたが、哀は、詳しいデータは、自分宛に送ってくれるようにジヨディに頼んでいた。

組織から流失しているデータを、ジヨディは、丹念に拾い集めてくれている。無論、すべてではないだろうが、マスコミが中途半端に掴んでいるものに比べれば、遥かに量も、質もいいだろう。

哀は、そのデータが意外に多いことに、表情を曇らせた。

ひとつずつ。データの内容を確認するのに、結構時間がかかりそうだった。その中には、哀が知らないものも多くあって、今更ながら、組織の大きさを感じる。

アポトキシンに関わるデータと、工藤新一、宮野志保に関わるデータが流れていないかどうか、慎重にチェックしていった。

そのなかで、ひとつ。気になるデータがあった。

原佳明。

ジンに殺されたトキワの専務。

10年後の顔を予測し、その顔写真を作るというコンピュータをみんなで試した際、コナンと哀だけがERRORとなったことに不審を抱き、その原因を調査していたらしい。

その原の名前が、あるデータにあった。警察が、原が組織の人間と特定できたのは、このデータのせいなのだろう。

そのデータは、トキワ関係のデータのように、原の職務や住所から、身辺調査報告、会社内での人間関係などが記されていた。

（この人、私たちのこと、どこまで調べていたのかしら？）

大して、時間がなかったので、詳しいところまでは、調べられていないだろうと思う。二人のことを調べたデータは、なかった。

哀は、とりあえず、原とトキワ関係のデータを重点的にチェックすることにした。

哀の体が順調に回復したこともあって、阿笠は、久しぶりにキャンプへ行くことを提案した。

「蘭君と園子君も行きたいっていうんじゃないが、いいかのう？」

阿笠がコナンと哀に、顔色を覗うようにして訊いた。

「いいわよ。大勢の方が楽しいでしょ？」

「いやだつて言うわけに、いかねえだろ？」

「しかしのう・・・君達、あのパーティーのとき、蘭君を見て複雑な顔しとったから・・・」

コナンと哀が、蘭に複雑な想いを抱くことは、仕方がないことだろう。蘭の気持ちを考えれば、これくらいのは、二人にとって、何でもないことだと思う。

「博士の気にすることじゃねえよ。これは、俺と哀が背負っていいやってこと。アイツらだって、蘭や園子が来れば、よろこぶだろう?」

コナンの言葉に、哀も頷いている。

結局、キャンプは、総勢8人になった。

この人数では、阿笠の車では、全員乗れないので、レンタカーを借りて、出かけた。

もう、季節は秋、夜は、少し冷え込むかもしれない。それでも、少年探偵団の3人は、久しぶりのキャンプに、テンションは高かった。

コナンと哀も、楽しんだ。蘭と園子も、笑顔で歩美や元太たちの相手をしている。

男子は、テントを張り、女子は、コテージを借りていた。

暗くなっても、ランプの明かりを頼りにカードゲームなどに興じていたが、9時前には、それぞれ就寝した。

普段、夜遅くまでパソコンに向かってることが多いせいか、寝つきが悪く、哀は、コテージを出た。時計は、11時半を回っている。

トイレに行き、隣にある炊事場と、コテージの間の小道から少し逸れたところにある、小さな屋根を頂いたベンチに座った。

少し肌寒さを感じるが、夜の山の空気が気持ちいい。星がたくさ

ん出ている夜空を見上げた。

（星を見上げるなんて、いつ以来かしら？）

哀は、飽きずに星や、うつすらと町明かりに浮かぶ山影を眺めたりしていた。

「やっぱり、眠れねえんだな」

後から、聞きなれた声がした。哀が振り向くと、コナンが少し、呆れたような顔をして立っている。

「寒くねえか？」

「うつん、意外と気持ちいいわ」

コナンが哀をいたわるように隣に座る。ごく自然に、コナンの手が哀の肩にまわされた。

「星が綺麗だな」

「そうね」

「虫の声もたくさんするな」

「そうね」

「久しぶりのキャンプ、楽しかったな」

「そうね」

フワッと風が二人を撫でる。小さな屋根にある蛍光灯に灯りに映し出され、哀の茶色い髪が、揺れている。その様子を見たコナンが言う。

「綺麗だ」

「そうね」

「おめえのことだよ」

「な・・・何、言ってるのよ」

哀が驚いたような、呆れたような顔でコナンを見た。

「だって、おめえ、そうね、しか言わねえから」

コナンが、ニヤニヤしている。

哀もクスと笑った。

「そうね」

哀がそう言うのと、二人で小さく声を上げて笑った。

蘭が、コテージの中でふと目を覚ました。時計に目をやる。

（12時すぎ・・・）

横を見ると、哀のシェラフが空なのに気づいた。

トイレに行こうと、コテージを出て小道を歩く。炊事場の明かりが近くなった頃、話している声がした。

小道から外れたベンチに小さな影が二つ。

（コナン君、哀ちゃん・・・何してんだろ、こんな夜遅く・・・）

いけないと思いながらも、蘭は、二人の方に足音を忍ばせて近づく。二人の後姿が見えた。傍の木に隠れ、耳を済ませる。

そんな蘭に、二人は、気づかない。

「でも、アイツら、テンション高いし、ちょっと疲れたかな・・・」

「そうかしら？あなたが一番、はしゃいでいたように見えたけど？」

「そんなこと、ねえよ・・・」

コナンの声が、少し不満げだ。

しばらくの沈黙の後、コナンが口を開いた。

「なあ、哀。」

「何？」

「あんまり、無理すんなよ・・・」

「大丈夫よ・・・」

コナンは、哀が夜遅くまで、ジョディから送られたデータをチェックしていることを知っている。

「おめえに何かあつたら・・・あんな想いをすんのは、もういやだぜ」

コナンは、哀が自分を庇ってジンに撃たれ、重傷を負ったとき、彼女を心配して眠れなかった頃を思い出して言った。

「ええ。私も、もう、あなたに心配かけたくはないわ」

「ERROR・・・もう、忘れかけてたよな」

「どのくらい知ってたのかしら・・・原さん」

（原さん？・・・）

蘭は、聞き覚えのあるその名前をどこで聞いたのか、記憶を辿っていた。

「データは、他になかったんだろ？」

「ええ」

「じゃ、大丈夫じゃねえか？」

「そう思うんだけど・・・」

「ま、気をつけるに越したことはねえけど・・・」

「そうね」

「また、そうね、って言ったな」

「あ・・・」

二人で小さく笑う。

蘭には、二人の会話の意味が、ほとんどわからない。しかし、その大人びた雰囲気胸がさわぐ。

（この二人、やっぱり普通じゃない・・・普通の子供じゃない）

「少し寒くなってきたわ・・・」

哀が少し甘えたような声を出した。同性の蘭でも、ドキっとするような大人の女性を感じさせる声に、蘭の心に、驚きと不審が湧き上がる。

しかし、コナンは、意に介した様子もなく、哀を抱き寄せた。

「哀・・・」

コナンの声で、少し体を離れた二人が見つめあい、やがて、軽く唇を合わせる。そして、抱き合うと、今度は、深く唇を合わせた。

その様子に、蘭は、驚いた。とても、小学生のやること、出来ることではない。

心にくっつかの疑問と、ひとつの答えが浮かんだ蘭だったが、見えてはいけないうものをみた、聞いてはいけないうことを聞いてしまった気がして、驚きに竦みそうになる足をそっと動かし、二人から離れ、コテージに戻った。

その後、しばらくして哀が戻ってきて、自分のシェラフに潜り込んだ。その様子を眠ったふりをして覗いて蘭は、その後、なかなか眠れなかった。

翌朝、ほとんど眠れなかった蘭は、まだ暗いときに外へ出た。

「まだ、5時・・・」

なんとなく、昨夜、コナンと哀が座っていたベンチのあるところへ来た。

一晩中考えていたこと。それは、この前に考えていたのと同じこと。

コナンと哀が普通の小学生ではないということ。そして、コナンと新一は、同一人物であるということ。

蘭は、ほぼ確信していた。

（でも、確かめること・・・できない・・・）

新一のことは、まだ忘れていない。そんなに簡単に忘れられるはずがない。

しかし、彼から別れの言葉を口にされたことは事実で、彼は、もう自分のことを見ていないのだということもわかっている。

（コナン君が新一だったとして、哀ちゃんは、いったい誰なんだろう？）

そんなことは、訊くことはできない。できたとしても、答えてくれるわけがないだろう。

命の危険があったという二人のこと、自分などには、考えもつかない理由があるのだろう。

「蘭、どうしたの？」

不意の声をかけられ、振り向くと、園子がいた。

「園子・・・」

「目が覚めたらさ、まだ5時なのに、蘭がいないから・・・ちょっと心配したんだよ」

「ごめん・・・」

園子は、蘭の隣に座ると、その顔色から、彼女がほとんど寝てないこと気がついた。

「眠れなかったの？」

「うん・・・いろいろ考えてたら・・・ね」

「何？何か気になることでもあるの？・・・ね、蘭。私じゃ、頼みないかもしれないけど、話してくれない？よかったら・・・話してみれば、少しは、楽になるかもしれないわよ」

「笑わないで聞いて」

蘭は、少し間をおいてそう言うと、園子の方を向いて話し始めた。
「昨夜ね、コナン君と哀ちゃんがね、このベンチで話してたの、聞いてちゃった・・・でも、話しの意味、半分もわからなかったの」

「それって、立ち聞きしたってこと？」

「うん・・・トイレに行つたの。その時、ここ通つただけど・・・」

「

蘭は、そこで、少し言い淀んだ。

「・・・コナン君と哀ちゃん・・・その後、キスしたの・・・抱き合つて・・・それも、ディープキス・・・それで、小学生じゃないと思つたの、あの子たち・・・」

園子も少し驚いて聞いている。元々、あの二人は、マセていると思つていた。不思議な子だとは、何度も思つた。

「じゃ、何者だと思つたの？蘭」

「たぶん・・・コナン君は新一・・・」

「ハハ、まさか！」

園子は、冗談だと思つて笑つた。しかし、蘭の表情は真剣だ。園子は、その様子に笑いを止める。

「でも、そう考えると、納得できることが多いの」

「あのね蘭、人間の体が子供に戻るなんてこと、あると思うの？バカバカしい」

そう言われると、蘭も、そんなことがあるわけがないと思う。

「私、前から、何度かコナン君が新一だと疑つたことがあるの。でも、いつも、そうじゃないっていう事が起きたの」

「そうよ。だって、学園祭のときだって、新一君とコナン君、一緒に居たじゃない」

「でもね、新一から、好きな人ができたって電話があった頃、コナン君と哀ちゃん、事故に巻き込まれて入院してたっていう頃なの。その頃から、あの二人、仲良くなってたし・・・」

「ね、蘭。あの子たちが子供離れしてるのは、私も認めるけど、やっぱり、考えられないよ・・・人間の体が子供に戻るなんてこと、信じられないよ」

蘭は、園子には、理解してもらえないとは思っていた。いや、他の誰も、理解してくれないだろう。ずっと、コナン、新一の傍にいて、コナンと新一をよく知る自分以外には、やっぱり考えられないことだと思う。

「蘭！あんまり思いつめちゃだめだよ。ね！他にいい男、いっぱい居るんだから・・・ほら、行こ！そろそろ、みんな起きてくるでしょ」

「うん」

蘭は、園子に促され、笑顔を作って、コテージに戻って行った。

第22章：覚悟

学校帰り、いつもの場所で探偵団の3人と別れ、コナンと哀は、阿笠邸へ向かって歩いていった。

哀も学校に戻った。

探偵団の3人は、哀の登校を喜んだ。とくに歩美は、本当に嬉しそうだった。

お互い、口数が少ないので、この日も、会話は少ない。それでも二人で歩いていること、歩けることが、コナンも、哀も嬉しかった。

コナンが哀の手を握る。哀は、少し躊躇って手を引っ込めようとしたが、コナンが離そうとしない。哀も、それ以上、強く手を引こうとせず、二人、手を繋いで歩いていく。

「江戸川コナン君と灰原哀さん、だね？」

後から、いきなり呼び止める男がいた。

その声に、振り返った二人の前に、20歳ぐらいの痩せ型で、めがねをかけた男が立っていた。

コナンは、右手を後ろにまわして、哀の体を自分の後に隠すように庇った。

「誰？」

コナンの問いに、男が答える。

「驚かせてごめん。僕の名前は、宮津真司。東都大学の2回生でね・
・原佳明を覚えるかい？僕は、彼の姉の子、つまり甥だよ」

「え？原さんの甥・・・」

コナンと哀は、驚いて、顔を見合わせた。

「ここでは話もできないからね。その喫茶店にでも入らないか？」
そう言われ、コナンは、もう一度、哀を見た。哀が頷く。

「わかりました・・・」

「実は、僕は、叔父、佳明の死の真相を知りたくてね。いろいろ調べてたんだ」

喫茶店に入ると、コナンと哀に向かい合って座った真司は、話し始めた。

「如月峰水が逮捕されたとき、如月が叔父も殺したと思った。しかし、如月は、常盤美緒、大木岩松の殺害容疑で逮捕されたのであって、原佳明に関しては、証拠も不十分、本人も否定していて、不起訴になった」

ウエイトレスが真司のコーヒーを、コナンと哀には、オレンジジュースを運んできたので、真司は、一旦、話を変えた。

「君達は、今、何年生だい？」

「3年生」

コナンが子供のフリをして答える。哀は、真司の顔をじっと見ていた。

ウエイトレスが礼をして去ると、真司は、話を戻した。

「それで、少し、調べてみた。叔父は、拳銃で撃たれていたけど、その凶器の拳銃を如月は持っていなかった。そもそも、如月は、拳銃を扱えた様子がない。僕も、如月は犯人じゃないと思った」

真司は、言葉を切ってコーヒーに口をつけた。そして、コナンと哀の表情を覗くように見て言った。

「君達は、小学3年生だよな」
「うん」

「それなのに、僕の話、理解できるようだね」

少し、意味ありげな笑みを漏らす真司に、コナンと哀は、ドキッとした。そして、コナンは、哀の手をそっと握る。

「まあ、君達のこと、ちょっと調べさせてもらったし、如月から話を聞いたからな」

「如月さんに面会したの？」

コナンが訊く。

「ああ・・・最初は、嫌がっていたけどね・・・原の身内ということ、会ってくれた」

「じゃ、知ってるんだ・・・ツインタワービル的事件」

「ああ。常盤美緒、大木岩松殺害の犯人が如月だと特定し、あのパーティールームに残っていると気づいたのは、君だってね、コナン君」

真司の目がコナンを見つめてくる。その表情は、子供に対するものではなかった。

「そして、灰原哀さん・・・君も一緒にいた」

真司は、表情を変えずに哀を見た。

「如月が言ってた・・・あの小さな探偵たちは、とても子供と思えない。不思議な子供たちだと・・・」

真司は、二人から視線を外すと、少し悲しげな表情を作って、遠い目をした。

「僕はね、叔父を尊敬していたんだ。少し変わり者だったけど、僕には、優しくかった。大学を出たら、トキワに来いと言ってくれた。コンピューターも、仕事も、俺が教えてやるって・・・」

「だから、なぜ叔父が殺されなければならなかったのか・・・知りたかった・・・如月は、叔父も殺すつもりだった。その動機は、君

達も知っているだろう？だが、如月は犯人じゃなかった・・・」

真司は、一枚の紙を取り出し、コナンの前に置いた。

「これは、叔父のメモだ・・・僕が叔父の部屋で見つけた」

『ERROR 江戸川コナン 灰原哀 機械に問題なし 人間の方に原因？』

目暮警部が以前、原が同様の内容のメモを見つけたと言っていたが、これは、別のものようだった。

「この意味、僕には、何のことか、わからなかったが、常盤の秘書だった沢口ちなみさんに話を訊いて、この意味がわかった・・・コナン君、哀さん・・・君達の10年後の顔、どんな風なんだろうね」
真司が二人を見比べるように見ている。

コナンが口を開いた。

「宮津さんのことは、わかったよ。僕達を知っている理由も・・・で、僕達に何が訊きたいの？」

「君達は、叔父が殺されたとき、現場の第一発見者だし、如月を犯人だと特定したことを思えば・・・知っているんだろ？叔父を殺した犯人・・・そして、叔父がある組織に関わっていたこと・・・そのヘンの話を聞かせてほしい」

コナンは、考えた。宮津に話してもいいのかどうか、判断に迷った。そして、哀を見る。哀も、戸惑いの表情でコナンを見ていた。

「わかった。知ってること、話すよ」

真司の問いにコナンが答えた。

コナンは、哀を見た。哀の表情は、変わらず、じつと宮津を見ている。今は、この哀のポーカーフエイスがありがたかった。

コナンは、哀の手をずっと握っている。哀は、すべてをコナンに託すように、優しく、コナンの手を握り返していた。

「原さんが組織に関わっていたって言ったね、宮津さん」

「ああ、半年前のあの茨城の工場爆破事件で公になった組織、一般には、黒の組織と呼ばれているけど・・・」

「その組織の人間で、ジンという男がいた・・・彼が犯人だよ」

真司は、少し目を見開き、感心した顔でコナンを見た。

「なるほど・・・やはり、ツインタワービル爆破は、叔父の死と関係あるんだね？」

コナンが真司の目を見つめ返して言う。

「原さんは、組織のデータを盗んだ。少なくとも、組織からそう疑われた。だから、彼らは原さんを殺し、そのパソコンのデータを消し、データを転送した恐れのあるトキワのメインコンピューターを破壊したんだと思う」

「そうか・・・いったい、組織のどんなデータを盗んだのか、盗もうとしていたんだろう？」

「それは、わからない・・・ジンは、半年前の爆破事件で死んだよ。FBIの捜査官に撃たれてね・・・」

「君が叔父を殺した犯人が、そのジンという男だとする確証は？」

「たぶん、死んでいた原さんが握っていたナイフ・・・あれは、拳銃に対抗するには、無意味・・・組織の関わっていた原さんのこと、それは、わかっていたと思う。だから、あれは、ダイニングメッセージ・・・銀のナイフ、銀は、ローマ字でGIN。酒の名前だと、ジンになる・・・」

「なるほど・・・」

真司は、目を閉じた。そして、腕組みをしている。コナンと哀は、彼の様子をじっと見つめた。

真司が目を開けた。少し、瞳が揺れている。

「ごめん・・・叔父は、撃たれるとき、どんな想いだったのかと思うとね・・・コナン君、哀さん、お礼に教えておきたいことがあるんだ」

真司は、少し厳しい表情になった。

「トキワのツインタワービルは、今もあのまま放置されている。あれだけのビルだからね、取り壊すといっても、なかなかたいへんらしい・・・それで、あのコンピューター、10年後の顔を写真にするやつだけど、あの技術、トキワは、他の会社や観光、レジャー施設に売っている。だから、気をつけて、な・・・」

「宮津さん、どこまで、僕達のこと、知ってるの？」

「君達二人は、帝丹小学校3年生で、頭が良く、そして、すごく仲が良い・・・と、そこまでかな？」

真司は、少しいたずらっ子のような微笑を浮かべたが、すぐに真剣な顔になった。

「正直、君達がなぜ、そんなに大人びた、いや、大人と同じぐらいの頭を持っているのか、それは、僕にはわからない。ただ、君達が長く入院していたことと、警察が匿っていたこと、そして、それは、あの黒い組織事件以降のことだってことは知ってる・・・だから、あの事件の証人、もしくは被害者か、組織が開発した薬品の被験者・・・まあ、僕の考えはそんなところ」

真司は、言葉を切って、コナンと哀を交互に見た。

「宮津さん、僕達は、ただの小学生だよ」

これだけは、譲れない。自分たちのことは、心許した、自分達を理解してくれている一部の人を除き、誰にも教えるわけにはいかない。

コナンは、静かなその瞳に、信念と覚悟を込め、目を逸らさずに、真司を見つめた。

真司は、コナンを見つめていたが、フツと微笑むと、今度は、哀を見つめ、またコナンを見ていった。

「君達は、帝丹小の3年生だと、それだけだと、そう思うことにするよ」

「ありがとう」

コナンは、そう言うのと、真司に笑顔を作ってみせた。

真司と別れ、家路を辿るコナンと哀。

しばらく黙っていた二人だが、哀が口を開いた。

「ね、あの人、信じられると思う？」

「ああ、俺達のことについては、嘘は言ってねえと思う」

「でも、あの人が不審を持ったということは、他にも、私たちのこと、不審に思う人が他にもいるでしょうね・・・身近な人にも・・・」

「

哀は、俯きがちに前を見ている。コナンは、哀の手をそっと握った。

「大丈夫だよ。薬の詳しいデータさえ出なければ・・・いや、出てきても・・・幼児化するのは、イレギュラーだろ？だったら、バレることは、まずないだろ」

「そうだといいいけど・・・」

コナンは、立ち止って哀の方に向き直って言った。

「大丈夫。守ってやつから・・・な」

ニコツと哀に笑顔を見せる。

哀は、少し呆れたという表情で、それでも笑顔を作った。

「信じるわ、探偵さん」

コナンには、ああ言ったものの、今日、原の甥に会ったことは、哀に少なからぬ動揺を与えた。

自分が不審に思われ、危険な目に遭うのは、身から出たさびだと思ふ。しかし、コナンや周りの人たちに迷惑をかけたくない。とくに、自分の作った薬の被害者であるコナンを巻き込むのは、哀には耐えられない。

工藤新一は、世間で名を知られた高校生探偵だった。その彼が、今も話題になることが多い黒の組織事件に関わり、薬によって小学生になってしまった。

このことが、公になってしまえば、たとえ信じる人が少なくても、その話題性から、彼がマスコミなど、世間の好奇の目の餌食になることは確実だろう。それは、絶対に阻止しなければ、ならない。

（今は、私が工藤君を守る時・・・）

哀は、コナンが元の体に戻らないと言ったので、退院以来、解毒剤の研究を再開していなかった。

（やっぱり、工藤君は、元の体に戻った方がいい。たとえば、私と工藤君が離れることになっても・・・）

阿笠邸に戻った哀は、その日から、データの整理を始め、もう一度、解毒剤研究の見直しを始めた。

第23章：ひとつの別れ

「な。俺さ、毛利探偵事務所を出ようと思ってんだ」

「そう。やっぱり・・・」

学校帰り、阿笠邸に寄ったコナンが、哀の部屋で、彼女に言った。

「ハハ、やっぱり、おめえ、気づいてたか」

「なんとなく、ね・・・蘭さんのことでしょ？」

コナンと哀にとっての気がかり、それは、やっぱり蘭のことだった。こんなことを言えた義理でもないのだが、蘭には、幸せになってほしいと思う。

「アイツ、たぶん、俺が新一だと気づいている。前にも何度かあったけど、今回は、確信してると思う」

「そう。もう、前みたいな下手なごまかしは、通じないってことね」

哀も、蘭がコナンを見る目が以前と違うことに気づいていた。そして、哀を見る目も違うことも。

その目には、真実を知る恐怖も宿っている。しかし、蘭の新一への想いが以前と変わっていることも感じていた。

「彼女、大丈夫？」

「蘭は、強いさ。俺なんかより・・・それに、おっちゃんも、英理さんも、園子もいるし・・・俺が蘭にできることは、もうないと思う」

「そう」

「それにさ、おっちゃん、英理さんとより戻して、新しい家で暮らしたいみたいなんだ・・・いくらなんでも、そこへは、ついていけねえしな」

哀は、コナンの顔を見つめ、少し首をかしげて話しを聞いている。
コナンは、こんな時の哀の表情が好きだった。

「でさ、おめえがいやじゃなきゃさ、ここに世話になろうと思って
んだけど？」

「隣に自分の家があるのに、居候しないといけないなんて、因果ね。
でも、私より、博士に言うべきことだわね、それ」

「博士に言う前にさ、おめえに言つときたいんだよ。おめえがいや
なら、他に考えるし・・・っていうか、博士に世話になることはと
もかく、おめえと暮したいんだ。おめえと、少しでも長く一緒にい
たい・・・一緒に暮せるなら、どこでもかまわない」

コナンは、哀の表情を伺うように見つめた。

「プロポーズみたいね」

哀は、目を細めて言う。

「ありがと。私も、あなたと少しでも長く、一緒にいたいと思つて
るわ。あなたが来てくれるなら、嬉しい」

そう言つて、哀は微笑えむ。そして、コナンに体を預けてきた。
そんな彼女をコナンは、そつと抱きしめる。

「明日、博士に頼むよ。それから、おっちゃんと蘭に言つて、早い
うちに、おめえのここに行きたい」

「じゃ、蘭姉ちゃん、行くね。おじさん、今まで、ホントにありが
と」

コナンは、3年近く世話になった毛利探偵事務所を出て、阿笠邸に居候させてもらうことになった。

「いや、礼を言うのは、こっちの方かもな。コナン、今まで、蘭のこと、ありがとな」

「おじさん・・・僕は、何もしてないよ」

「それからな、これ、お前のお母さんから預かった通帳だ」

それは、かつて、江戸川文代なるコナンの母に変装した有希子が、小五郎にコナンの養育費として渡した1千万の銀行預金の通帳だった。

「え！？おじさん、1円も使っていないじゃないか！」

コナンは、通帳を見て驚く。一度も引き出されておらず、3年間の利子の分だけ、金額が増えている。

「当たり前だ。天下の名探偵、毛利小五郎がガキ一人を世話できずにどうすんだ」

そう言って、胸を張って笑う。

「おじさん・・・ありがとう」

コナンは、心から、小五郎に頭を下げた。

「コナン君。いつでも、遊びに来てね」

「うん。蘭姉ちゃんも、遊びに来て。それに、また、どこかへ連れてほしいな」

「そうね。また、誘うわね」

別に遠く離れるわけでもないのだが、3年間、コナンの保護者であった蘭にとっては、やはり寂しいことには違いない。新一が離れ、

帰らなくなってしまった後、コナンの存在にどれほど救われたのか、今更ながら、蘭は、思い知らされている。

そして、コナンは、毛利家を出る理由として、小五郎が別居中の英理との復縁を真剣に考えていることを言ったが、蘭は、コナンが哀と一緒に居たいという想いが強いことも、十分感じていた。

（まったく、哀ちゃんにヤキモチでもないわよね・・・）

蘭は、自嘲して笑う。

3年前、初めて会ったときに比べて、大きくなったコナンの背中を見つめていたが、その姿が霞んできた。

（なんで泣いてるのよ。たとえば、コナン君が新一だとしても、もう私のところには、帰ってこないって、わかってるじゃない）

コナンも背中に蘭の視線を感じている。哀と歩いて行くことを決めた。その時に、蘭とは、気持ちの上で別れたはずだった。でも、この寂しさ、辛さはなんだろう？哀がいるのに、自分のことを一番信頼し、愛してくれている女性がいるのに、最愛の人がいるのに、なぜ、蘭との別れがこんなに辛いのだろうか？

コナンは、その想いを振り切るように、振り返って蘭と小五郎に手を振った。蘭が手を振り返す。

その姿に笑顔で答えたコナンは、阿笠邸へ、愛しい人の待っている場所へ歩き出した。

第24章：ゆめ

阿笠は、二階の哀の部屋の隣に、コナンの部屋を用意してくれた。8畳ほどの広さで、隣の哀の部屋と互い違いになるようにクローゼットがある他は、哀の部屋と同じつくりだった。

南に窓があり、有希子が用意した机やパソコン、ベッドを持ち込んだ。

コナンが引越してきて3日目の夜、夜中に目覚めたコナンは、なぜか妙な胸騒ぎに襲われた。

時計を見る。

「2時すぎ・・・」

喉の渴きを覚え、廊下へ出てみると、隣の哀の部屋から、物音が聞こえている。少し躊躇ったコナンだったが、ドアをノックし、声をかけた。

「哀、まだ起きてんのか？」

「え？工藤君・・・」

ドアが開き、哀が顔を出す。

「ごめんなさい。起しちゃった？」

「いや・・・でも、こんな遅くまで、なにやってんだ？」

「ちよつと・・・データの整理してたら、意外と時間がかかってしまった・・・」

哀が一瞬、戸惑った表情をしたのをコナンは見逃さなかった。

「そつか・・・あんまり、無理すんな・・・」

「わかったわ・・・もう、寝るから」

「眠れないんなら、添い寝してやろうか？」

コナンがニコツと少し意地の悪い笑顔をする。

「バカ」

コナンを睨んで、そう言つと、哀は部屋に入り、ドアを閉めてしまった。すると、コナンの顔から笑顔が消え、その表情が曇った。

コナンは、キッチンのある1階へ降り、冷蔵庫にあるミネラルウォーターのペットボトルを取り出すと、コップに移し、それを喉を鳴らして飲み干し、さらに水をコップに注ぐと、リビングのソファに座った。

（アイツ・・・）

今さっきみた、一瞬の哀の戸惑った表情を思い出す。

（やっぱ、言いたいことは、言わねえとな・・・）

コップの水を今度は、ゆっくり飲むと、空になったコップをキッチンのシンクに置く。そして、ゆっくりと2階へ上がり、哀の部屋のドアを横目で見てから、自分の部屋に戻り、ベッドに潜り込む。しばらく、哀の部屋の方の壁を見つめていたが、やがて寝返りを打って反対の方を向くと、目を閉じた。

ドアを閉めた哀は、しばらくその場に立ち、無表情でドアを見つめていた。そして、コナンが階段を降りて行く足音を聞き、それが1階へ消えると、ゆっくり振り返った。

哀は、パソコンを見つめると、その前に座りなおした。

次の日の朝、コナンが起きてリビングに降りると、哀が眠そうな顔をして朝食の用意をしていた。少し、疲れた顔をしている。それ

でも、コナンを見ると、微笑んだ。

「おはよう」

その美しい笑顔に、コナンの胸が高鳴る。同時に、疲れている様子も見え、胸に苦しさも覚えた。

「おはよう・・・大丈夫か？・・・あんまり、寝てねえんだろ？」

「大丈夫よ」

哀がそう応える。コナンは、その声を聞きながら、あたりを見回した。

「博士は？」

「今日は、九州で学会だから、朝一に飛行機に乗るって、もう出て行ったわよ・・・聞いてなかったの？」

哀が呆れたようにコナンを見ている。

「あれ？今日だっけ？」

九州の学会に出席するとは聞いていたが、今日が出発日だとは、忘れていた。

「帰り、来週だっけ？」

「ええ。火曜日・・・」

「じゃ。4日間、二人つきりか」

コナンがニヤツとして、哀の方を見る。

「何？襲う気？」

「バーロ・・・二人でゆっくりりできるなって、そう言いたいだけだよ」

「ほんとかしら？」

哀は、クスッと笑うと、キッチンへ消えた。

コナンは、しばらく、リビングで新聞を読んでたりしていた。と、キッチンで何か物音がした。

不審に思っ、哀に声をかけながら、コナンがキッチンを覗いた。

「哀・・・どうした・・・！」

コナンの視界に、床に倒れている哀の姿が入った。

「哀・・・やっぱり、俺、帰るわ・・・」

「工藤君・・・？」

哀は、とっさにコナンの言葉が理解できなかった。

「帰るって？」

哀が首をかしげて訊く。

「アイツのところだよ・・・だから、解毒剤をくれよ・・・俺、蘭のところへ帰らなきゃなんねえから・・・」

コナンが哀に手を出して言う。

「・・・やっぱり、あなた、彼女のところへ帰りたいのね・・・工藤新一に戻りたいのね・・・」

哀は、少し俯いて、横を向いた。

「そうだよ・・・だから、早く解毒剤をくれよ・・・」

「あなた、一緒に歩いて行ってくて・・・私と一緒に生きていくって、言ってくれたじゃない・・・」

哀は、コナンを見つめなおして言った。

「あん時は、そう思った・・・でも、やっぱ、蘭の元へ帰らねえと・・・アイツ、いつまでも、待ってるから・・・だから、解毒剤をくれよ」

コナンが哀に詰め寄るように言う。

「解毒剤をくれよ」

「ごめん・・・できないの」

哀は、また俯いてしまった。

「嘘だろ？・・・解毒剤をくれよ・・・哀」

「できない！できないの！・・・お願い・・・私と一緒にいて・・・」

私には、あなたしかいないの・・・私を一人にしないで・・・お願い・・・く・・・どう・・・くん・・・」

「！」

「・・・ゆめ」

哀が眼を覚ますと、見慣れた自分の部屋の天井があつた。

「眼、覚めたか？」

コナンが哀の寝ているベッドの傍に椅子を置いて座っている。

「私、どうしたの？」

「倒れたんだよ。キッチンで・・・で、新出先生に来てもらったんだ・・・過労だってよ・・・寝不足と食事が原因だろうって・・・おめえ、小学生が過労って、どう言い訳したらいいと思う？・・・たく、頼むぜ」

そっぴいながらも、コナンは、笑っている。

「よかつた・・・たいしたことなくて・・・ほんと、おめえ、俺を心配させるよな、いつも」

「ごめん・・・」

「わりいな・・・」

コナンがそう言つて、哀の頭に優しく手を当てる。

「え？」

哀には、コナンがそう言う意味がわからなかつた。

「いや・・・俺がちゃんと、おめえと話をしなかつたのがいけなかつたんだよな」

上体を起そうとする哀を、コナンが手助けし、哀の肩に、上着をかけてやる。そして、そのまま、後から、哀を抱いた。

背中にコナンのぬくもりを感じながら、哀は、さっきの夢を思い出していた。なぜ、あんな夢を見たんだろう。自分のなかに、コナンの自分に対する気持ちを疑う部分があるのだろうか。それとも、

身近な愛する人を失ってきた自分には、無意識にコナンを遠ざける気持ちがあるのだろうか。

「おめえ、解毒剤の研究、やってんだろ？」

「え？」

不意に言われ、哀は、後から自分を抱いている腕に手をかけ、彼の顔を見ようとした。しかし、コナンの顔は、哀の肩にあつて、見ることはできない。ただ、自分の頬がコナンの頬に触れていた。

「やっぱ。ちゃんと話さなきゃいけねえな。おめえの話も聞かねえと・・・」

コナンは、哀を抱いている腕を外し、ベッドから降りて、哀と見つめ合った。

第24章：ゆめ（後書き）

これからは、更新のペースが若干、遅くなるかもしれませんが。1週間に1回は、更新したいと思っていますが・・・

コ哀小説用のHP「サブルームAI」を開設、「コナン哀ものがたり」の中学編の連載を始めました。
よかったら、お立ち寄りください。

<http://www.hct.zaq.ne.jp/cpeau106/index.htm>

第25章：口に出して、聞かせて

「俺、おめえに甘えてた」

哀を抱く腕を離し、哀のベッドから降りたコナンが彼女を見つめて言った。

「おめえは、俺のこと、なんでもわかってくれるって、そう思って甘えてた・・・実際、俺のこと、一番わかってくれてんの、おめえだし・・・俺が口に出さないでも、おめえは、俺の気持ちをわかってくれる・・・でも、やつぱ、言わなきゃなんねえこと、ちゃんと口に出して言っつて、伝えなきゃなんねえこと、あるよな」

コナンは、哀から視線を外して立ち上がり、持ってきたペットボトルからコップにお茶を注ぎ、哀に差し出した。

哀がそれを受け取ると、コナンは、自分の分もコップに注ぎ、哀のベッドに座る。

「原さんの甥、宮津さんに会った後、おめえとちゃんと話してなかったよな」

コナンは、そう言っつと、お茶を一口飲んだ。そして、哀を見つめる。

「・・・そうね」

哀は、手に持ったコップに視線を落として言った。

「な、哀・・・おめえが何考えて解毒剤の研究をしてんのか、だいたい想像はつく・・・おめえ、俺が工藤新一に戻った方が、俺が安全になると思っつてんだろ？」

哀は、コップに視線を落としたまま、話した。

「そう・・・あの事件現場から、負傷した小学生2人が運び出されたという話、まだ、世間で流れているわ・・・その頃から、私たち

二人が長期入院していたこと、警察に匿われていたこと、この事実を付き合わせれば、誰でも導き出される結論はひとつ・・・」

「だから、俺が工藤新一に戻れば、少なくとも、俺だけは、この件とは無関係になれる・・・」

コナンは、哀を見つめているが、哀は、コナンを見ていない。

「そのとおりよ・・・」

哀は、フツと表情を緩め、ここでコナンを見つめた。

「ま、あなたは、気づくと思っていただけ・・・ね、研究はさせてもう、無理はしないから・・・」

「それは、おめえの自由だし、おめえにとっては、研究は、趣味みたいなもんだろうしな・・・ただ、俺は、おめえが宮野志保に戻ることができない以上、工藤新一に戻る気はねえぜ」

コナンは、手を伸ばし、哀の頬に触れる。哀は、その手を頬と肩に挟むように首を傾け、自分の手をコナンの手に当てた。

「それにさ、話してくれよ・・・研究の経過や結果・・・」

「あなたに理解できるかしら？」

わざと意地悪く笑う哀を、コナンは、睨む。しかし、しばらくして、表情を緩めると、

「そだな・・・わかる範囲で。頼むよ」

と、言って目を細めた。

そして、コナンは、哀の頬に触れている手を肩に回し、哀を自分の方へ引き寄せる。

「さっきの話だけださ・・・おめえは、俺のこと、よく理解してくれている。俺も、おめえのこと、他のヤツよりは、わかっているつもりだ・・・でもさ、それだからこそさ、ちゃんと、話さないといけないんだよな。お互いをもっとわかるようにさ・・・」

「ひとりで抱え込みすぎるのよ・・・あなたも、私も・・・」

コナンは、ちょっと意外そうに哀の顔を見つめた。

「なんだ、わかってんじゃねえか」

コナンは、そう言って笑うと、ゆっくりと、哀を抱きしめた。

「哀・・・おめえと、もつという話したい。おめえの好きなものとか、おめえにとって、何が嬉しいか、とか、もつと聞きたい・・・」

「私も・・・あなたのこと、いろいろ聞きたいわ・・・たとえば、わかっていても、あなたの口から聞きたい・・・」

コナンは、両手を哀の両肩に置き、哀を見つめた。

「じゃ、おめえも知ってると思うけど、俺、おめえのことが一番大事だ・・・愛してるから・・・」

「知ってるわ・・・あなたも知ってると思うけど、私もあなたのことが一番大切よ・・・愛してるわ」

「ああ。知ってるよ・・・でも、おめえの口から聞くと、嬉しいな」
お互い、照れたように笑い合う。

「だから、無理して倒れるようなこと、すんなよな・・・」

コナンは、そう言って、また哀を抱きしめた。

第25章：口に出して、聞かせて（後書き）

コナンと哀、大人の精神を持つ子供、大人と比較しても、頭がいいとは言っても、こと恋愛や自分の想いを伝えるということは、苦手なんでしょう。

いくら、お互いを理解していても、自分の想いを言葉にして伝えないといけないことも、たくさんあると思います。

第26章：刑事たち

警視庁捜査1課の佐藤美和子警部補と高木渉巡査部長は、時間が許すと、米花町にあるユニークな2件の屋敷と、帝丹小学校付近をパトロールするのが日課になっていた。

米花町のユニークな屋敷。

1件は、世界的な推理小説家、工藤優作と、若くして引退した伝説のアイドル女優、藤峰有希子こと工藤有希子の夫婦の屋敷である。夫婦は、今、アメリカに住んでいて、そのひとり息子、高校生探偵の工藤新一がこの洋館に住んでいたが、彼が姿を消して以降、誰も住んでいない。

その隣、大きな窓と、2階までの吹き抜けが特徴的な凝った設計の屋敷は、発明家、阿笠博士の自宅兼研究所で、今は、不思議な少年と少女が同居している。

高校生の年齢から、小学生にまで、体が幼児化してしまった少年と少女。

佐藤が彼らの秘密を聞いたとき、にわかに信じられない思いだったが、妙に納得できるところもあった。

人間が薬によって幼児化するということ。これは、今でも、佐藤には、信じられない思いが強い。しかし、その幼児化したという少年と少女を見ていると、その言動は、小学生のものとは、思えないところが多く、信じざるを得ないと思っている。

少年、江戸川コナン。

彼の本当の姿は、高校生探偵として有名な工藤新一だという。

少女、灰原哀。

彼女の本当の姿は、犯罪組織にいた、宮野志保という科学者だという。

大人びたというより、大人以上の推理力を発揮する少年。

大人以上の医学知識を持つ少女。

その行動は、騒ぐことも、はしゃぐこともなく、いつも落ち着き、冷静だった。

警察官の自分でも、悲惨さに目を背けなくなる事件を前にして、なぜ、この子たちは、冷静でいられるのか。

その答えは、佐藤には、わかつている。

そして、二人が抱える大きな秘密。

世間を揺るがせかねないその秘密を守るとは、彼らが、普通の人生を生きるためには、絶対に譲れない。

最愛の人、高木と二人、いや、上司である目暮警部や白鳥警部と共に、彼らの秘密を、彼ら自身を守ると決意した。

佐藤は、そのときから、自分の中にある刑事という仕事に対する誇りが、さらに大きくなったような気がしている。

その日も、佐藤と高木は、コナンと哀の住む阿笠邸に立ち寄った。日によって、阿笠邸の周囲を見回るだけのときもあれば、阿笠邸を訪ね、コナンと哀の顔を見ていくこともある。

この日、佐藤と高木は、阿笠邸の呼び鈴を押した。学校は、春休みに入っている。

哀が応対に出てきて、門扉が開けられ、二人を中に入れる。さら

に、玄関のドアに3人が消え、ドアが閉まる。

その様子を、少し離れた場所からじっと覗いている人影があったが、3人とも気づかなかった。

「阿笠博士は？」

哀に招かれ、リビングに入った佐藤がソファに腰掛けながら言った。

「学会の仲間と会合だって・・・夜には、帰ってくると言ってたけど」

コーヒーカップを運んできた哀が、そのカップを佐藤と高木の前に置きながら言った。

「ありがとう・・・コナン君は、出かけたんだ」

高木がコーヒーカップを持って言う。

「ええ。毛利探偵と蘭さん、園子さんと青森だって」

「青森？」

「以前、毛利さんが事件を解決したことのお礼に、そのときの依頼者に自分の経営するペンションに招待されたんだって、彼が言ってたわ」

哀も、佐藤と高木に向かい合って、ソファに座った。

「どうして、哀ちゃんは、行かなかったの？」

佐藤が訊くと、哀は、首をすくめた。

「いろいろあって・・・」

阿笠の幼馴染で、有名デザイナーの木之下フサエが久しぶりに訪ねてくること。阿笠の体調が少し良くないこと。歩美たちと遊びに行く約束をしていること。

そんな理由を挙げて、哀は、今回は、行かなかったのだと言った。

「へえ。二人は、いつも一緒だと思ってたけど、そうでもないのね」

佐藤が少し意地悪げに微笑んで言った。

「あなたたちも、いつも一緒じゃないでしょう？」

哀が反撃する。

「そりゃあね。別の事件を担当することもあるし・・・非番の日がずれたりもするし・・・」

佐藤が生真面目に答える。その様子がなんだか可笑しくて、哀がクスツと笑うと、佐藤が軽く睨んだ。

「それに、たまには、彼女に彼を預けるのもいいかなって・・・」

哀は、佐藤の視線をはぐらかすように横を向くと、彼女が最近、よく見せるようになった穏やかな、優しい表情を見せて言う。佐藤も高木も、その顔は、可愛いというより、綺麗だと思った。

「蘭さんのこと？」

佐藤は、コナンと哀が蘭に対し、複雑な感情を持っていることを知っている。そして、それでも、二人にとって、蘭が大切な存在であること、蘭にとっても、コナンの存在が大きいことも、わかっていた。

「哀ちゃん・・・蘭ちゃんは、もう大丈夫だと思うけど」

佐藤が哀の顔を覗くように言うと、哀は、フツと微笑んで、佐藤を見た。

「そうね・・・彼女は、強いわ。私なんかよりも・・・でも、彼女、周りに気を配って、その強さの陰の寂しさとか、悲しさとか、無意識のうちに隠しているように思えるの・・・もっとも、それは、私のせいでもあるんだけど・・・」

「誰のせいでもないよ。君も、蘭さんも、コナン君も、いつも本気に生きて、誰かのために頑張ってるじゃないか・・・誰かのこと、みんなのこと、大事に思ってるじゃないか・・・それなら、誰のせ

いでもないよ。寂しさとか、悲しさとか、生きてれば、たくさんあるからね。それを誰のせいとか、自分のせいとか言ってさ、責める時間なんか、ないよ」

いつもと違い、高木が哀に一所懸命に話してくる。

隣に座る佐藤も、哀も、少し驚いて、高木を見ていた。そんな二人の視線に気づき、高木が顔を赤くして、俯く。

「なんか、似合わないこと、言っちゃったみたいだね・・・」

高木が呟くように言うと、

「そんなことないわ・・・」

佐藤が優しく微笑んで言った。

「あなたの言うとおりよ」

二人の様子を見ていた哀が、目を細めた。

「ありがと・・・」

微笑んでそう言った哀が、言葉を続ける。

「で、あなた達、いつ結婚するの？」

「え？」

二人同時に顔を上げ、哀を見つめてきた。その動作が見事に揃っていたので、思わず、哀も吹き出してしまう。

「まあ、この人次第なんだけどね・・・」

佐藤が少し高木を睨むようにして言った。

「あら。高木刑事、まだプロポーズしてないの？」

「え？・・・や・・・あの・・・それは・・・」

言いよどむ高木に変わって、佐藤が哀の方を見て言う。

「ま、彼のことだから、まともなプロポーズは期待してなかったけど・・・」

「は？」

意味がわからないというように哀が不審な顔をする。

「だって、普通、張り込み中に言う？『結婚してください』って」
佐藤は、肘について、半目で高木を見た。

「はは・・・だって、他のところじゃ、絶対邪魔が入るし・・・あの時言わなかったら、また、チャンスが遠のきそうだったし・・・」
「でも、もう少し、状況を考えてほしかったわね」

佐藤の表情は変わらない。

「でも、佐藤刑事は受けたんでしょ？」

哀が少し呆れて言う。

「え？・・・ええ・・・」

佐藤が赤くなって俯いた。

「そう。じゃ、日取りが決まったら、早めに教えてね。こっちにも都合があるから・・・」

そう言いながらも、哀が二人を見る笑顔は暖かい。

「じゃ、哀ちゃん。戸締りしっかりしてね・・・何かあったら、すぐ連絡してね」

「ええ。ありがとう」

1時間ほど話していただろうか。佐藤と高木は、哀に見送られて、阿笠邸を後にする。

門を出て、振り返って哀に手を振ると、停めてあった車に乗り込んだ。

門のところで見送っていた哀は、ふと、視線を感じてあたりを見回したが、誰もいない。気のせいかと思って、玄関に入り、ドアを閉めて鍵を掛けた。

さっきの人影が、そんな哀の様子を覗いていた。

第26章：刑事たち（後書き）

佐藤刑事、高木刑事と哀の絡みは、折にふれ、書いていきたいと思っています。ただ、佐藤刑事に対する筆者の思い入れのせいか、高木刑事を書くのが少し苦手で、いろいろ考え中です。

今回は、とりあえず、二人が結婚を約束したということにして、書いてみました。

第27章：人影

かつて、小五郎に失踪事件の調査依頼があった。例によって、コナンが解決したが、そのお礼にと、依頼者が小五郎たちを自分が経営している青森県十和田湖近くのペンションに招待した。

コナンと蘭、園子、小五郎の4人で、その招待を受け、十和田湖畔まで出かけてきた。

3日目の夕方、一回り観光をしたコナンたちは、ペンションに帰った。そのロビーで、コナンは、携帯電話でメールを打っている。

相手は、もちろん、哀。

『変わりはないか？こっちは、事件にも遭わず、のんびりしている』
コナンがそうメールを送ると、しばらくして、返事がきた。

『とくになし』

その、そっけない文面に思わず苦笑する。

（一言かよ・・・たく、もう少し、可愛げのあるメールを送れねえのか・・・）

そんなコナンの様子を蘭は、少し離れたところのソファに座り、寂しそうな、それでも、微笑みを浮かべてみている。飲み物を持ってきた園子は、そんな蘭の顔を見て、少し表情を曇らせたが、いつもの調子で蘭に飲み物を差し出して声をかけた。

「ハイ、蘭」

「園子・・・ありがとう」

「ああゝあ。せっかく青森まで来たっていうのに、いい男、いないわねえ・・・蘭、明日は、もっと観光客の多そうな所に行こうよ。その方が男、見つかりやすいし・・・」

蘭は、園子のいつもの調子に呆れた顔をしながら、明日の予定を

思い出していた。

「明日は、午前中のんびりして、それで帰るんでしょう？」

「ふう。また、男、捕まえられなかったか・・・」

残念そうに言う園子に、蘭は苦笑すると、また、コナンの方を見た。

『明日、夜8時頃には、帰る。哀、早く会いたい。愛してるよ』

コナンは、ちよつと顔を赤くしながら、メールの送信ボタンを押した。そして、ふつと顔を上げると、蘭と園子がこつちを見て、二やついていることに気づき、少し、顔を赤くしながら、二人の方へ歩いていく。その途中で、メールの着信音になった。

『了解』

（それだけかよ・・・）

足を止め、メールを見ていたコナンの膝から力が抜け、その場に転びそうになる。その様子を蘭と園子は、呆れて見ていた。それに気づいたコナンは、赤い顔のまま、口に拳をあてて、咳をひとつすると、何もなかったように歩き出す。

そのとき、また着信があった。

『気をつけて帰ってきて。愛してる×××哀』

立ち止って、携帯電話の画面を見て、ニヤついているコナンを、蘭と園子は、ジト目で見ていた。

一度、携帯電話でメールを返信したものの、あまりにもそつけないと思い、もう一度、返信をした。今頃、画面を見てニヤけているであろうコナンの顔を想像し、哀は、クスツと笑った。

「どうしたんじゃ？楽しそうじゃのう」

阿笠が不意に声をかけてきて、哀は少し驚いた。

「な・・・博士、いたの？」

「いたのとは、ご挨拶じゃのう・・・さっきから、ここにおったよ」

阿笠は、半目で哀を少し睨んだが、すぐに表情をやわらかくする。

「明日は、新一君、帰ってくるの。待ち遠しいじゃろ？哀君」

「べ、別に・・・」

哀は、少し顔を赤くして、プイッと横を向く。その様子に微笑んだ阿笠は、研究が途中じゃから、と、地下室への階段の方へ歩いていく。

「私、ちょっと、買い物してくるから」

その背中へ声をかけると、阿笠は、笑顔のまま振り向いた。

「ああ。気をつけてな」

哀は、阿笠が地下室への階段へ消えると、上着をはおり、財布を持って玄関を出た。

門を外から閉め、スーパーの方へ歩いていく。

その哀を、距離を置いて、後をつけていく人影があった。

阿笠邸を出たときは、まだ、あたりは明るかったが、買い物をして出てくると、日がだいぶん傾き、暗くなり始めていた。レジ済ませた哀は、買い物袋を抱えてスーパーを出た。

思っていた以上に買ったものが多く、博士も連れてくればよかったと、哀は後悔していた。

ふと、背中に視線を感じ、立ち止って、ゆっくり振り返る。

（ふん、昨日、玄関で感じたのは、気のせいじゃなかったみたいね）

後、50mくらいあるだろうか。
自動販売機の陰から、こちらを覗いている人影が見えた。

哀は、再び歩きだした。そして、しばらく行くと、いきなり、クルツと向きを変え、反対方向に歩き出した。それを見て、つけていた人影は、慌てて横道に入った。

それを見た哀は、クスツと笑うと、また向きを変え、駆け出した。

横道に入り、哀の様子をそつと覗いていた人影は、哀が走り出したのを見て、慌てて後を追う。

走り出したまではよかったが、買い物袋が思っていた以上に大きく、哀は、さして長い距離は走れなかった。人影もまだついてくる気配がするが、哀は、しかたなく、走るのをやめ、意識してゆっくり歩きだした。

そのときだった。

哀の向かいから歩いてきた男。

野球帽を深めにかぶり、4月の少し暖かい日だというのに、グレーのトレンチコートを着ている。

後の人影に気を取られていた哀は、その男を視界に捕らえるのが一瞬、遅れた。そして、背筋に何か冷たいものが走ったような、いやな感じがし、気づくと、前から来たコートの男が、哀の手を掴んで引っ張り上げ、口をハンカチのようなもので塞いでくる。

買い物袋が落ち、中身が路上に散乱する。

男は、そのまま、哀を抱き上げ、走りだした。哀は必死にもがいたが、男の腕の力が強く、男の走る速度を少し遅くする程度の効果しかなかった。

男は、哀を停めていた車に押し込もうとした。そのとき、ひとつの影が走ってきたかと思うと、男がその場に倒れた。と、同時に、哀も巻き添えでその場に倒されてしまったが、男は気絶していて、哀は、その腕を押しのとけると、自由になれた。

哀が立ち上がると、ひとつの人影が棒のようなものを手にして立っている。あたりは、薄暗くなっていて、街灯が届きにくい場所に立っている人影の顔は見えない。

しかし、哀には、その影の主がわかっていた。

「ありがとう、服部君」

哀が人影に声をかけた。

「なんや、わかってたんかいな・・・」

街灯の下に人影が現れる。平次だった。

「いつから氣イついてたんや？」

「家を出たところから・・・」

「は・・・さすがやな、姉ちゃん。工藤が惚れただけのこと、あるわ・・・」

平次は、感心したように哀を見つめている。その顔を見て、また綺麗になったと、心の中で驚いていた。

「どうせ、工藤君が連絡したんでしょ？」

哀は、半目になって平次を見ている。

「あ？・・・ああ。工藤のヤツ、自分が姉ちゃんから離れるから、心配やて、何回もメールよこしよってな・・・まあ、来いとは言うてへんかったけど、どうみても、自分がおらん間、見張っていてくれて言うてるようなもんやった・・・ほんで、昨日きて、阿笠のじいさん家、見張ったちゅうわけや」

「ホントに、あなたも、工藤君も・・・お人好しというか・・・呆れるわ」

哀は、両手のひらを上に向け、肩をすくめている。

「なっ、そんな言い方ないやろ！現に、危ないところ、助けてやったやないか」

平次が不満そうに語気を強めた。

哀は、フツと笑顔になる。その女っぽい顔に、平次は、ドキツとして、見惚れた。

「ほんと、あなたって人は・・・ありがとう」

そこまで言うと、哀は、意地悪げな顔になった。

「でも、この男が気絶したの、あなたのせいじゃないわよ」

「あん？どういうこっちゃ」

そう言うのと、平次は、哀が右手に何か握っていることに気づいた。

「あんまり見せたくは、ないんだけど・・・」

哀がその右手に持ったものを持ち上げ、平次の方に向ける。

「はあ？なんやそれ」

見ると、水鉄砲のような、おもちゃみたいな小さな拳銃だった。

ピンク色をしていて、グリップや銃身に赤いハートがついている。

「博士が作ったの。これでも、麻酔銃なのよ。工藤君の持つてるのと同じ麻酔針が撃てるの・・・彼のと違って、5本、針が入ってるわ」

「麻酔銃！？それが？・・・ただの女の子の水鉄砲みたいやんけ・・・」

平次は、少し呆れたような、感心したような顔をしている。

「工藤君が博士に頼んだのよ。私の護身用に作ってくれて・・・工藤君のは、時計型だけど、私は、こっちの方が撃ちやすいから・・・」

・でも、この色とハートは、やめてくれて言っただけだね」
哀は、いいじゃないか、可愛いじゃろ、と言って、満足げにこの銃を自分に見せた阿笠の笑顔を思い出して、苦笑していた。

「ほな、俺の胸が入る前に、姉ちゃんがその麻醉銃を撃ち込んだって言うんか？」

「そうよ・・・それより、服部君、案外、尾行がヘタなのね。探偵なら、尾行術、勉強し直した方が良いわよ」

「あのなあ・・・仮にも恩人に・・・」

「でも、私に気づかれたなんて聞いたら、工藤君も、同じこと言うでしょうね」

そう言われると、平次も言い返せなくなってしまった。

その後、警察を呼んだ。

コートの男は、小学生の女の子を誘拐した前科があった。ここ数日、この付近で女の子を連れ去るチャンスを狙っていたらしい。

「服部君も、陰から見張ってないで、訪ねてくれればよかったのなの」

事件を知り、警察署まで、駆けつけてきた阿笠が平次に言った。

「ま、工藤のヤツがおらへんとき、姉ちゃんの家へ上がり込んだらアイツ、怒りよるかもしれへんからな」

「しかし、自分がいない間、哀君を守ってやってってくれて頼んだのは、新一君じゃろ？」

「いや、直接頼まれたわけやない・・・それに・・・」

その後の言葉を平次は飲み込んだ。

「それに、なんじゃね？」

阿笠は、不審に思っただけで平次に訊く。

「いや。なんでもないわ」

（あの姉ちゃん、体はちっこいけど、顔見てたら、なんやごっつ気になって、しゃあないんよ・・・なんか緊張してまう・・・）

平次は、少し離れたところで、佐藤刑事の事情聴取に応じている哀の横顔を見ていた。

第27章：人影（後書き）

服部平次は、筆者の好きなキャラの一人ですが、一点だけ気になるのは、あの性格では、尾行とか、張り込みとか、目立たない行動が苦手なんではないかということです。

普段から、キザでカッコつけの工藤新一と違い、関西人らしい普段のボケぶりと、いざというときの行動力、と推理力、描くには、面白いキャラだと思います。

第28章：哀

次の日、事件のこともあって、コナン達は、少し予定を早めて帰ってきた。

「哀、大丈夫なのか？」

コナンは、阿笠邸に戻り、哀の顔を見るなり言った。

「見てのとおり、ケガもしてないわ」

「よかった・・・」

そう言って、コナンが哀を抱きしめようとした瞬間、後から声がかかった。

「よっ！おかえり、工藤」

「・・・」

「なんや、おかえり、ちゅうたら、ただいま、言っのんが挨拶ちゅうもんやろ？」

黙って、自分を睨んでいるコナンに、平次が抗議するように言った。

「服部・・・おめえにはさ、確かに感謝してるけど・・・少しは、気を利かせるよな・・・」

盛大にため息をつきながら言うコナンに、哀が笑いをもらった。

「でも、服部君、心配してわざわざ大阪から来てくれたんだから、あんまり無碍にしないほうがいいわよ」

「そうやで、工藤」

平次が哀の言葉に満足したように頷いて言う。

「後で・・・」

いきなり、哀がコナンの耳に口を寄せて囁き、キッチンへ小走り

に去った。

赤い顔をして立っているコナンを平次が不思議そうに見ていた。

「な、工藤」

哀がキツチンへ消えると、平次がコナンに声をかけた。

「あの姉ちゃん、本気で、ちゃんと守ったらなあかで・・・ま、毛利のねえちゃんやおっさんと、どっか行くのも悪うないけど、な」「どしたんだよ？服部、いきなり・・・」

コナンが怪訝な顔で平次を見る。

「俺なあ、あの姉ちゃんの顔見てるとな、なんや緊張すんねん・・・それ、ごっつ、気になっててんやけど、その理由、あの犯人が言うたことで、わかったわ」

そう言う平次の顔をコナンは、軽く睨んだ。

「おめえ、まさか、哀に・・・」

「ちゃうちゃう」

平次は、慌てた顔になって、手を振った。

「あの犯人、姉ちゃん見て、こんな子、初めてみたから、連れて行きとうなった言いよつたらしいわ・・・気になる言うんは、な、そこや。最近、優しなったやろ、あの姉ちゃんの顔・・・居てへんねん」

「はあ？」

コナンは、意味がわからないという顔で平次を見つめた。

「工藤、お前、こういうのん、疎いからなあ」

「おめえに言われたくねえけどな」

「なんやと！？」

平次は、心外だといわんばかりだ。

「だってよ、和葉ちゃんと、相変わらずだろ？」

「話、逸らしなや。今は、あの姉ちゃんのことや・・・」

そう言ってから、平次は、少し遠い目をした。

「うまいこと、言われへんねんけど、あんな子、他におれへんねや・・・」

平次は、少し困ったような顔をしている。

「あの姉ちゃん、前は、難しい顔しとったり、キツイ顔してたこと多かったやろ？そやけど、最近、優しい顔しとったり、笑うとったり・・・ええ顔してるわ・・・アイツ・・・あの姉ちゃんを連れて行こうとしたヤツも、あの姉ちゃんの顔みて、他の子にない、なんかを感じて、連れて行きとうなったんちゃうか？」

コナンには、平次の言いたいことがわかってきた。

「つまり、哀が優しくなった、よく笑うようになったことで、他の子にない魅力が出てきたって言いたいのか？」

「そうや・・・あの犯人、女の子に興味あるから、いろんな子、見てたやろう思う。そやけど、あの姉ちゃんみたいな子見たん、初めてやったんちゃうか？・・・ちっこい体で、あんなええ顔する子、おれへんやろ？・・・つまり、体がちっこなったあの姉ちゃんにしか、ないんや・・・あの雰囲気っていうか、持つてるもんは・・・」

「そだな。俺とアイツだけが体が小さくなるという経験した。男では俺、女では哀だけが経験したことだかな・・・今の哀の持つてるもん、アイツ以外、世界中探したって、同じもんを持つてる女、いねえよな」

「あの犯人も、それ感じとったんちゃうか？そうやとしたら、あの姉ちゃんに興味持つヤツ、これから増えてくんで・・・」

言われて、コナンは、少し考え込んだ。思いもしなかった。確かに、哀は、綺麗になったし、顔も、性格も、穏やかになったと思う。ふとした時、哀の表情にドキツとすることもある。愛おしくて、たまらなくなるときもある。

それは、彼女の持つ不思議な雰囲気、18歳の女性が幼児化したことによつて、身につけたものによるのだろう。そして、その秘密を知る自分だけが、彼女の本当の姿がわかると思っていた。だからこそ、一見、小学生にしか過ぎない哀を、実年齢20歳の自分が好きになったのだ。

そう思っていた。

今の哀が持つ、独特の魅力がわかるのは、自分だけだったと思っていた。

「あの姉ちゃん、これから、もっと綺麗になりよるで。工藤、お前の悩み、尽きひんようやな」

平次は、ニヤツと、少しいやらしい笑顔をコナンに見せた。

平次は、阿笠が泊まることを勧めても、ホテルを取ってあるからと、夜遅く、出て行った。どうやら、気を利かせてのことらしい。阿笠もそうそうに自室に入ると、リビングには、コナンと哀、二人っきりになった。

「やっぱ、おめえと一緒にいると、落ち着く・・・」

コナンがそう言つて、ソファに座ると、キッチンから出てきた哀を手招きする。それに応じて、哀は、コナンの隣に座った。

「服部君には、悪いことしたわ・・・」

「アイツのことだ、気にしちゃいねえよ」

コナンは、哀の顔をまじまじと見つめている。彼女の顔を見ると、平次の言ったことが、実感された。

（ホント、随分変わったな、コイツ・・・）

コナンは、哀に惚れ直している自分に気づいた。

「何？人の顔じつと見て・・・」

哀が怪訝そうに言う。

コナンは、首をかしげている哀の表情にドキツとして、照れ隠しに言った。

「もう寝るか」

そう言って、立ち上がる。そして、同じように立ち上がった哀の方にゆっくり振り向いて、小さな声で言った。

「一緒に寝ないか？」

「え？」

「あ・・・いや、ヘンな意味じゃなくって、ほら、いつかみたいに、さ。一緒に寝ようぜ」

「うん・・・」

哀が小さく頷く。

しばらく後、コナンと哀は、コナンのベッドで一緒に寝ていた。

コナンは、哀の肩を抱き、哀は、頭をコナンの肩に寄り添わせている。

黙って、二人で寄り添っていれば、今は、それでよかった。

「ん・・・」

うとうとしている哀が小さく体を動かし、さらにコナンにくっついてくる。

コナンは、微笑むと、哀をそっと抱きしめた。

「哀・・・一緒だ。ずっと・・・」

「……ん……」

哀は、もう浅い眠りに入っていて、返事も言葉にならない。

「哀、おめえを誰にも渡さねえぜ」

そう呟くと、コナンは、腕と肩に哀の頭の重みを感じながら、静かに目を閉じた。

第28章：哀（後書き）

更新のペースが遅くなっております。実は、この先の話、試行錯誤しているのが原因です。

この作品は、愛着があるので、大事に書きたいのですが、文章力、表現力がついていかないところがツライ……です。

第29章：同級生

小学4年生になった。

クラス分けで、少年探偵団は、バラバラになってしまった。

コナンと歩美はA組、元太はC組、哀と光彦は、F組。

「ちえつ、別のクラスかよ」

コナンが本当の子供のようにがっかりしている。

「なに？20歳にもなって、一緒のクラスじゃないのを気にしてるわけ？」

哀が半目でコナンの顔を見ている。

「おめえは、いやじゃねえのかよ」

「しかたないでしょ？それに、一緒に住んでるんだから、クラスぐらい別でもいいじゃない」

哀の言い方は、いつものように、感情があまりこもっていないが、彼女にしては、慰めのつもりだった。

「あれ？コナン君、私と同じクラスじゃ不服なわけ？・・・やっぱ、哀ちゃんと同じクラスじゃなくて、しょげてんだ」

歩美が呆れたように言って、コナンと哀に近づいてきた。

「歩美と同じクラスが不服なわけじゃねえよ」

「いいじゃんか、歩美と一緒に。俺なんか、ひとりだぞ」

元太が頭の後に腕を組み、寂しそうな顔をしている。

「あら、東尾さんと同じクラスだって、喜んでたの誰だったかしら？」

哀が元太を睨んで言う。

「マリアちゃん、C組ですか」

光彦が哀に訊く。

「ええ・・・あら、円谷君も、私なんかより、東尾さんと一緒に良かったのかしら？」

「そ、そんなこと・・・ありませんよ。灰原さんと一緒に光栄です」
哀の言葉を光彦が慌てて否定する。

「ほお。歩美と一緒にじゃねえって、がっかりしてたの誰だっけ？」

コナンが光彦に意地の悪い笑いを浮かべて言うと、光彦が言い返した。

「コナン君ほどじゃありませんよ」

「え？じゃ、私と一緒にじゃなくても、そんなにがっかりしなかったんだ」

光彦の答えに歩美が膨れて言うと、光彦がまた慌てた。

「歩美ちゃんも、灰原さんも、僕をいじめないでくださいよ」

困る光彦の様子に4人が笑った。

「ねえ、ねえ、コナン君、哀ちゃん達のクラス、本郷啓祐がいるんだって」

それぞれの教室へ入ると、歩美が目を輝かせて言った。

「あん？誰だそれ？・・・本郷瑛祐なら知ってっけど」

「え？誰よ、それ」

歩美が不審げに訊く。

「あ・・・いや、で、誰？その本郷って」

「もう、コナン君知らないの？本郷健一と中原美由の息子で、去年の大河ドラマで人気が出た子役・・・いいなあ、光彦君と哀ちゃん」
歩美は羨ましそうに言うが、コナンには、わからない。

「・・・その・・・本郷健一？中原み・・・」

コナンが首を傾げている。

「中原美由！」

「で、その二人・・・何？」

「えーっ！コナン君、本郷健一と中原美由も知らないの？・・・本郷健一は、歌手だったけど、最近、俳優でよくテレビドラマの主演をやっているよ。中原美由は、今でもうちのお父さんがファンの元アイドル。最近は、あんまり、テレビとか出てないけどね」

要するに、有名タレント夫婦の息子で子役のタレントが、哀と同じクラスにいるらしい。

「ほんと、コナン君で、ミステリードラマ以外のテレビ、観ないの？」

「ハハ・・・」

「そっか、哀ちゃんと一緒に住んでるから、テレビ観てる間なんじゃないんだ」

歩美が思いついたように言った。

「どういう意味だよ」

「だって、哀ちゃんとイチヤイチヤすんで、忙しいんでしょ？」

「あのな・・・」

コナンは、力が抜け、言い返す気力もなくなった。

「でも、そんなヤツ、去年までいなかったよな」

コナンが疑問を口にする、

「ほら。米花駅の前こうに高層マンションが出来たでしょ？あそこに越してきたんだって」

と、歩美が答えた。

「でもさ・・・コナン君、心配じゃない？」

歩美が意味ありな微笑みを浮かべている。

「え？・・・何が」

「だって、哀ちゃん、目立つもん。本郷啓祐が興味持つかもしいよ。本郷君も大人っぽいし……」
「まさか」

コナンは、一蹴した。

「すごいですねえ……」

F組では、その本郷啓祐の周りに人垣が出来ていた。少し離れた席で、光彦が哀の隣で、感心したように言ったが、哀は、まったく関心なさそうに持参の薬学の本に目を落としていた。

「で、誰なの？」

本から目も上げずに哀が訊いた。

「え？知らないんですか？本郷啓祐、今、人気の子役タレントですよ」

光彦が驚いたように言う。

「私、そついうのに興味ないし……」

「ま、灰原さんは、もう少し、大人の方が関心があるんでしょうけど……灰原さんが興味のある男子って、コナン君だけですよね」

「そうでもないわ」

「え？」

光彦が意外そうな声を上げて、哀は、本から目を外さない。

「私からみれば、あなたや小嶋君の方が、あんな子供のタレントより魅力的で興味があるわよ」

「え……」

光彦の顔が少し赤くなる。そこで、初めて、哀は光彦の方に視線を上げた。

「だって、あなたと小嶋君は、私の命の恩人だもの・・・勇気も、優しさも、正義感も、二人共立派だと思うわ」

哀が微笑む。

その顔は、光彦の胸を高鳴らすには、十分だった。

「え・・・あ、や、そんな・・・」

うるたえる光彦の様子に笑みをこぼすと、哀は、また本に目を落とした。

「君、名前、なんていうの？」

いつの間にか、本郷啓祐が哀の隣に立っていた。啓祐にしてみれば、クラスのほぼ全員が自分に関心を持ち、傍にきて人垣を作っているのに、哀と光彦だけが、興味なさそうにしているのが不満だった。

とくに、女子で啓祐の傍にきていないのは、哀だけで、プライドに傷がついたか、哀に関心を持ったのかもしれない。

「人の名前を訊くのなら、自分が先に名乗るのが礼儀でしょう？あなた、芸能界にいて、そんなこともわからないの」

いつもの調子の、哀のキツイ言葉が投げかけられる。

他のクラスメイトがざわついたが、哀を知る彼らにしてみれば、啓祐が哀に声をかけたことで、この展開は予想できた。

「でも、君は僕のこと、知ってるだろう？」

啓祐は、意外な相手の反応に驚いたが、負けずに言った。

「そういう問題じゃないでしょう？礼儀としてって、言ってるの・・・それに、私、あなたのこと、知らないんだけど」

哀のこういう態度に慣れている光彦や、彼女を知る生徒達は、苦笑まじりに二人を見ている。それを啓祐は、笑われていると誤解し

たのか、少し顔色が変わってきた。

「・・・僕は、本郷啓祐。タレントやってるんだよ」

「そうなの・・・私、灰原哀。よろしくね」

そう言つと、哀は、興味を失つたように啓祐から視線を外し、また本に目を落とした。

すげなくされた啓祐は、怒気を含んだ様子で、苦笑している他のクラスメイトを見回し、自分の席に帰っていった。

「有名人を怒らせたのかよ・・・」

「ほんと、ドキドキしましたよ・・・」

「私なら、声をかけられたら、嬉しいけどな」

「ったく、おめえらしいぜ」

4人の反応を聞きながら、哀は、いつもの無表情でいる。
少年探偵団5人でのいつもの下校風景。

「私、嫌いな。ああいう態度。自分が有名だからって、周りを見下すような・・・」

哀は、無表情のまま言う。

「確かに、実際に会って、本郷啓祐に対するイメージは悪くはなりましたが・・・」

光彦の言葉に、歩美が肩を落とした。

「有名人って、そんなものかな？」

「おめえ、相手は子供なんだからよ。そんな言い方しなくてもいいだろ」

コナンが哀の耳元で、他の3人に聞こえないように声を低めて言う。

「あら、私たちだって、今は子供じゃない」

哀が呆れたという感じで、肩をすくめた。

ヒソヒソと話すコナンと哀に気づいた歩美が言った。

「また、二人、仲がいいのはわかるけど、二人だけの会話なら、帰ってからにしてよ」

「コナン君は心配なんですよ。本郷啓祐は、灰原さんに興味がありそうだから・・・」

歩美の抗議に、光彦が言った。

「そっか。コナン君、どうする？ライバル出現だよ」

「私は、あんなガキに興味はないって言ったでしょ」

コナンに向かって言う歩美の言葉を遮るように、哀が言った。

「哀ちゃん、だめだよ。せっかくコナン君の危機感煽って、もっと哀ちゃんのこと、大事にさせようと思ったのに・・・」

歩美が苦笑しながら言った。

「歩美・・・」

コナンは、うんざりしたように、ため息を吐きながら目を細めた。

「な、父さん、父さんの初恋って、いくつの時だった？」

米花駅ちかくの高層マンションの最上階の自宅で、本郷啓祐は、父親の本郷健一に訊いた。

「あ？いきなり、なんだ？」

健一は、実力派の歌手として20歳を超えてからデビューした。当時は、あまり売れなかったが、30歳を前にヒット曲が出て、

世間で名前が通るようになり、アイドルだった中原美由と結婚、啓祐が生まれた。

その頃から、俳優としての仕事もくるようになり、今では、テレビドラマや映画で主役か準主役をすることが多い。

忙しいが、休みのときは、なるべく家にいるようにして、妻子と過すようにしている。家族想いの芸能人としても、世間では有名になっていた。

「いや・・・ちよつと、気になったから・・・」

いつもとは、少し違う息子の態度に、健一は、少し戸惑ったが、すぐに察しがついた。

「そうだな。小学3年生のとき、同じクラスだった子を初めて好きだと思ったな・・・」

少し、遠い目をして言う父親に、啓祐が言う。

「で、その子に好きだって言った？」

「いや・・・言えなかった・・・」

「ふん」

「なんだ、お前、好きな子でも出来たか？」

「え？・・・あ、そうじゃないけど・・・」

少しうろたえる息子を見て、健一は、ホッとしていた。

どうやら、好きな子が出来たな。

芸能界に入ってから、それ以前も、いろいろ苦労してきた健一は、息子には、そんな思いをさせまいとしてきた。それが裏目にでたのか、啓祐は、小学生にしては随分マセているし、周りの人間を見下すようなところがある。

それがテレビなどで一緒に仕事をする他の芸能人や関係者を怒ら

せていることも、健一には、わかっていた。

その息子に、どうやら気になる女の子が現れたらしい。

人を好きになることで、少しでも啓祐の性格が良くなればと、健一は思った。

しかし、その相手が、普通の子供でないなどは、健一には、想像もできないことだった。

第30章：啓祐

「灰原さん、今度、テレビの収録、観に来ない？何人か、歌手とか俳優さんに会わせてあげるよ。誰がいい？」

「結構よ。日売テレビなら、行ったことあるし、沖野ヨーコさんも知り合いだし・・・」

「じゃ、ドラマのロケは？今度、学園ドラマやるんだ・・・そうだ！灰原さんも出てみない？生徒役、もう少し人がほしいって監督、言ってたし・・・」

「結構だつて言ってるでしょう？・・・私、有名人とか、テレビに出るとか、そういうの興味ないの」

啓祐は、哀の気を惹こうと、いろいろ誘ってくる。その啓祐に、哀が強い調子で言つて、逃げるように席を立ち、教室を出ていった。

新学期2日目。1時間目が終わった休憩時間だった。

哀は、校舎の端、非常階段の扉を開け、外に出た。心底、うんざりした顔をしている。いつの間にか、隣にきて立っている、光彦が笑いかみ殺しているのを、哀は軽く睨んだ。

光彦は、咳をして表情を真顔に戻す。

「それにしても、彼の言動、わかりやすいですね。明らかに、灰原さんに好意を持っていますよ」

「まったく・・・いい迷惑だわ」

哀には、理解できなかった。

冷たくあしらったのに、なぜ、本郷啓祐は、自分の気を惹こうとしているのか。

「他の女子は、羨ましいって言ってますよ」

「誰？それ。是非、替わってもらいたいもんだわ」

光彦は、普段、あまり見ない哀の困ったような、慌てたような様子を意地悪く楽しんでいる自分に気づいた。

「もう、2時間目が始まりますよ。行きましょう」
光彦に言われ、哀は、深いため息をつくど、二人で教室に戻っていった。

それから、毎日、啓祐は、哀の気を惹こうと、有名アイドルのサインやグッズをプレゼントしたり、映画やコンサートのチケットを持ってきたりした。

「これ、親父のコンサートのチケット、今度、武道館でやるんだ。一緒に行かない？」

冗談じゃない。有名人と一緒にそんなところに行けば、マスコミの注目を浴びるのは、間違いない。そんなことは、哀にとっては、苦痛でしかない。

「あなたね、いつも、断ってるでしょう？・・・はつきり言って、迷惑なの！」

哀にしては、珍しく声を荒げた。

「とにかく、誘うなら、他の人にして頂戴」

哀は、そう言い残し、鞆を持って席を立った。

「灰原さん、どこ行くんです？」

怖い顔をして立ち上がった哀に、光彦が恐る恐る訊く。

「帰るの！」

「え？・・・まだ、2時間目が終わったところですよ」

「気分が悪くなったから、早退するの！」

そう言い残すと、教室を出て行ってしまった。

鞆を持って、玄関に向かう哀をコナンが見つけ、声をかけた。

「哀！どうしたんだ？」

「見てわからない？帰るの」

「はあ？どうしたんだよ、気分でも悪いのか？」

「ええ。最悪」

どうやら、啓祐の攻撃から逃げ出したようだ。

コナンは、毎日、哀から啓祐から誘いを受けていることを聞かされている。下校するときは、いつも、うんざりした顔をしていた。

コナンは苦笑すると、哀の傍に寄って、耳元で囁いた。

「だったら、校門出たところで待ってるよ。俺も、鞆、取ってくつから・・・」

哀がコナンの顔を驚いて見る。

「あなたも早退する気？」

「ああ。いいじゃねえか、たまには・・・揃ってサボんのも・・・」
哀の表情が和らぐ。

「じゃ、待ってるわ」

教室に戻り、自分の鞆を掴むと、コナンは、取って返して玄関へ向かった。そして、校門の外で待っている哀を見つけると、コナンは、ニヤッと笑った。

「じゃ、これから、どうする？」

「どうするって言っても、小学生がこの時間、外をウロウロするわけには、いかないでしょう？」

「ま、なんとかなるさ・・・おめえ、金持ってたっか？」

「ええ」

「じゃ、電車ででも乗るか」

「電車でどこ行くの？」

「まあ、任せとけて」

コナンは、哀の手を取ると、米花駅へ向かって歩いて行く。通りがかる人たちが不審な目で二人を見たが、気にせず、駅から電車に乗った。

1時間ほどで、海の見える駅に着いた。

駅前から、丘へ続く道を15分ほど登ると、見晴らしのいい展望台に出た。

海と、海岸に広がる街が一望できる。遠くに、富士山も見えていた。

「いい所だろ？」

「そうね、見晴らしもいいし、静かね」

展望台には、人影はない。緩やかに風が抜け、展望台の周りの森の木々を小さく揺らしている。

「ここさ、随分前に蘭達と来たことがあるんだ。園子の親父さんの別荘が近くにあつて、泊めてもらったんだ」

コナンは、海を眺め、目を細めている哀の横顔を見ていた。

「どうしたんだよ？」

「え？」

哀がコナンの方を見た。

「本郷啓祐に付きまとわれて、逃げたんだろ？」

哀は、フツと笑みをこぼすと、海の方へ視線を戻した。そんな哀に、コナンが続けて言う。

「おめえのことだから、適当にあしらって、歯牙にもかけないと思つてた」

コナンには、意外だった。哀が、小学生に言い寄られ、妙にイライラしながらも、今ひとつ強く相手をはねつけられないでいるのが、不思議だった。

正直に言えば、コナンも気にしている。いくら、相手が小学生だといえ、テレビで人気のタレントである。哀の気持ちが動くとは思えないが、周りの目もある。

もし、哀が啓祐と仲が良いなどと、マスコミなんかに流れると、厄介だ。哀も、タレントに負けない端正な顔立ち、容姿の持ち主なのである。芸能プロからスカウトされかねない。

自分達の抱える過去を考えれば、それは、好ましいことではないし、第一、哀が最も嫌うことだ。

「確かに、子供だし、うまく、あしらえばいいのかもしれない。でも、あんな素直な目で言われるとね・・・口では、冷たく言えても、なんか可愛そうっていうか、私みたいな人間が、純粋な子供たちの中にいちゃいけないって、そう思われるの」

しばらくして、哀が少し寂しそうに言った。

「・・・哀」

コナンには、哀の気持ちは、よくわかる。自分だって、同じだ。

「だから、ホントは、彼のことがつつとおしいっていうより、自分がいたたまれないのかもしれない・・・」

コナンは、後から、哀の肩に手をかけた。

「だったらさ、尚更、本気で嫌がってやれよ・・・あしらってやればいいじゃんか・・・ホントの小学生の女の子だって、好きでもないヤツから、ちょっかいだされたら、嫌がるだろ？」

哀が振り向き、コナンの顔を見つめる。

「そうね、あなたは、いつも、本気だったわね。子供たちに対して、事件の謎を解くときも・・・私にも・・・」

「子供だからってさ、ヘンな遠慮はいらねえと思うぜ。アイツら、結構、一所懸命生きてる」

「うん・・・」

「初恋に失恋・・・今は、恨まれるかしんねえけど、何年かすれば、結構、いい思い出なんじゃねえの、アイツにとってさ・・・そういうの作ってやるのも、悪くねえと思う」

「・・・」

哀が言葉なく、少し目を大きくしてコナンを見つめている。

「あんだよ？」

コナンが半目で哀に言う。

「あなた、いつから、そういうこと、考えられるようになったの？」

「はあ？」

「だって、どっちかっていうと、あなた、そういうこと、鈍感だったじゃない？」

「俺だって成長するぜ・・・まあ、おめえや蘭と、いろいろあったかな」

哀がクスツと笑うと、ゆっくり、コナンの胸に寄りかかっていった。

「おいおい・・・小学生が授業サボって、こんなことしていいんかよ？」

そう言いながら、コナンは、哀を抱きとめ、そつとその髪を撫でる。

「いいじゃない。今は、小学生だということ、忘れましょ」

二人を見守っている木々が風に葉をざわつかせていた。

「だ・か・ら」。行かないっていつてるでしょ？私は、あなたに興味はないの！」

哀がまた、啓祐に誘われて、一所懸命に断っている。

「ならさ、どうしたら灰原さん、僕を好きになってくれるの？」

「どうしてもダメ。私には、好きな人がいるの！付き合ってる人がいるの！」

哀がこんなにはつきりと、交際宣言をするのは、初めてかもしれない。光彦は、意外な哀の一面を見たようで、内心、驚くような、感心するような気持ちで、哀の隣の席に座っていた。

「どうしてもダメ？」

啓祐が悲しそうな目で哀を見て言う。

「どうしてもダメ！」

哀のきっぱりとした態度に、肩を落とし、うな垂れた啓祐は、クラスメイトが見守るなか、とりあえず自分の席に戻っていった。

その様子を見ながら、哀は、やれやれという感じで、ため息をついた。

それから、啓祐は、おとなしくなった。哀にとくに声をかけることもなくなった。

それに、仕事が忙しくなったようで、授業が終わると、マネージャーと一緒に迎える車で急いで帰る日が続いていた。遅刻、早退する日も時々あった。

哀は、内心、ホッとしていたが、啓祐は、どこか元気がなくなつたような気がして、少し、胸が痛んだ。

啓祐がおとなしくなつて2週間ほどたつた頃。

放課後のホームルームが終わるなり、啓祐が哀に声をかけた。

「灰原さん、今日、用事ある？」

いきなりだった。

「え？・・・あ、ないけど・・・」

哀は、思わず正直に答えてしまい、しまったと思った。

「じゃ、一緒に来て。見せたいものがあるんだ」

啓祐は、哀の手を掴むと、強引に引つ張っていく。

「ちょ、ちょっと！」

「今日だけ。ね、今日だけだから・・・」

いくら、本当は、20歳すぎだとはいえ、今の哀の体は、小学4年生で、自分より少し大きい体の男子の啓祐には、力でかなうはずもない。

「ちょっと！わかったから、そんなに引つ張らないでよ」

「でも、こうしないと、灰原さん、付き合ってくんないから・・・」

啓祐は、かまわず哀の手を引いていく。

「逃げないから・・・靴くらい、履き替えさせてよ」

哀がそう言つと、ようやく、下駄箱のところで、啓祐は、手を離した。

校門の向こうには、啓祐を迎えに来ている車と、マネージャーの姿がある。

哀が靴を履き替えるのが終わるやいなや、啓祐は、また哀の手を引き、車の方へ歩いていく。

「乗って」

仕方なく、哀が後部座席に入ると、啓祐が隣に座り、車は動き出した。

その様子は、クラスの多くの生徒が、呆気にとられて見ていた。

「え？哀が連れて行かれた？」

哀と一緒に帰ろうと、F組まで迎えに来たコナンが光彦から、啓祐が哀を半ば強引に連れて行ったことを聞いた。

「どうします？追いかけますか？」

光彦がコナンに訊くと、コナンと一緒に来た歩美も言った。

「そうだよ、追いかけないと・・・哀ちゃん、探偵バツジ持つてるでしょ？追跡メガネで追いかけられるじゃない」

心配そうな二人を前に、コナンは、冷静だった。

「大丈夫だろ。誘拐するつもりでもないだろうし」

「コナン君、心配じゃないの？」

歩美が不服そうに訊く。

「ガキ相手に心配も何もねえよ」

コナンがさて、帰るかと鞆を担ぎながら言った。

「ガキって、コナン君も同じ年じゃないですか！そのコナン君だって、その・・・灰原さんにキスしたり、抱きしめたりしてるじゃないですか！本郷君だって、そんなこと、するかもしれないよ！」
光彦の方が焦っている。怒気を含んで、コナンを捲くし立てる。
その気迫に、後ずさったコナンだったが、次第に不安になってきた。

そして、少し、慌てて、携帯電話を取り出す。

「博士か？わりいけど、車で学校まで来てくんねえか？・・・うん、

哀が、例の本郷ってやつに連れてかれたんだ。それを追いかけてえんだ・・・」

第31章：軽い嫉妬

本郷啓祐は、忙しい日々を過していたが、人気者はそれが当然だと思っていた。

父も忙しい日々を送っているし、今は、芸能活動を控えている母も、人気が全盛のころは、1年間で休みは数日というスケジュールをこなしていたという。

小学生とはいえ、芸能人で人気者。しかも、両親も、それなりに人気のある芸能人となれば、周りからは、チャホヤされた。

大抵のことは、言うことを利いてくれるし、ほしいものも、買ってくれたり、貰えることが多かった。

学校へ行けば、クラスメイトだけでなく、他の学年の生徒や先生も、自分に注目してくれた。とくに、女子生徒は、自分の周りに自然に集まってきた。

子供でありながら、人の心を捉えることができ、それが、周りが自分中心に動いているという感覚を抱かせた。

しかし、クラスの女子で1人だけ、自分には、関心を示さない者がいた。彼女にとつては、自分は、中心どころか、端っこにさえ、いないような感じだった。

最初は、腹が立った。

人気者の自分に興味を示さないなんて、信じられなかった。こういう女子は、初めてだった。

しかし、よく見ると、彼女は、他の女子生徒とは、随分違っていいことに気づいた。

大人びた瞳、決してはしゃぐこともない、冷静な態度。

何より、芸能人と比較しても、彼女は、綺麗だった。彼女が纏う不思議な雰囲気は、いつの間にか、啓祐の最も気になるものになっていた。

そういえば、以前、ドラマで、初恋をした男子生徒を演じたことがある。

おそらく、あの役の人物は、こういう気持ちでいたのではないかな。啓祐は、そう思った。

「あの子、僕には、冷たいんだ。信じられないよ、この僕に対してさ、あの態度……」

啓祐は、父、健一に訴えた。

そんな息子に、健一は、ゆつくりと、諭すように言った。

「啓祐、お前、芸能界の仕事は、どういう仕事だと思ってる？」

「え？……」

「まだ、お前には、早かったかな？……お父さんやお母さん、お前、芸能人はな、みんなを楽しませるために居るんだ。自分達を見て、自分達の芸を見た人が楽しい、面白いと思ってもらえることが、喜んでもらうことが、お父さんやお前の仕事だよ」

啓祐は、首をかしげている。

「だからな、お前、その子に楽しいと思ってもらえないのなら、その子を喜ばすことができないのなら、お前は、芸能人失格だよ」

「失格？」

「ああ、そうだ……だから、もし、その子が好きなのなら、その子を喜ばしてみる。その子に笑ってもらえるようなことをしろ。もしたら、その子も、お前のこと、好きになってくれるかもしれん……」

「喜ばす？」

「そう、喜ばすんだ」

考え込んだ啓祐を見て、健一は、慈しむような顔になっていた。

校門の前で待つコナン、歩美、光彦、元太の前に、阿笠の車が到着すると、コナンが助手席に乗り込み、3人は、後部座席に乗り込む。コナンが追跡メガネに出ている哀の位置を捉え、阿笠に指示を出した。

西へ20km。

（以外と遠くへ行ってる・・・）

コナンは、追跡が遅くなったことを後悔していた。

確かに、本郷啓祐は、小学4年生の子供だが、人気のある芸能人だ。もし、マスコミに哀と一緒にいるところを報道されれば、後々面倒なことになる。それに、車があった。

プロダクションなり、テレビ局なりが、その移動手段として、車の世話をしているだろう。つまり、普通の子供よりも、行動範囲が広い。

コナンは、そんなことを忘れていた。

「どこへ行くんでしょう？」

光彦が少し、心配そうに言う。

「マネージャーが運転してたんだろ？アイツ、スケジュールもあるだろうし、マスコミやテレビの目もあるから、ヘンなどこには、行かねえだろ」

コナンが、後部の方を振り返って言った。

そのとき、コナンは、哀の探偵バツジの反応が、動きを止めたこ

とに気づいた。

「止まった・・・西へ18km・・・そこで、止まった」

「よし、急ごう」

阿笠がハンドルを握りながら言った。

「ここは？」

車が停まり、降りると、そこは、山の中にあるが、ちょっとした牧場のようなところだった。

小さな家と、物置小屋のようなものが、その中にある。その周りには、カメラや照明機材などが並び、スタッフらしき人たちが動いている。

「今度のドラマのロケ地だよ」

哀の足元に、子犬が走り寄ってきた。思わず、抱き上げた哀を見て、啓祐が言った。

「灰原さん、動物が好きなんだろう・・・クラスの子がそう言うってた」

その問いには答えず、哀は、抱き上げた子犬を撫でながら、啓祐の顔を見た。

「ここね、今撮影中のドラマのロケやってて・・・獣医さんが主人公で、その息子が僕の役・・・今日は、撮影の準備とか、セットの移動なんかで、役者の出番、ないんだけど・・・この犬、可愛いだろ？・・・それで、灰原さんに会わせたいなって、そう思ってた・・・」

哀は、少し、驚いた顔で啓祐を見ている。

ふと気づくと、哀と啓祐の足元には、数匹の犬たちが群がってい

た。

「あら？啓祐君。どうしたの？今日は、撮影、ないでしょう？」

一人の女性が声をかけてきた。彼女を見るなり、哀と啓祐の足元にいた犬達が彼女の方へ寄っていく。

「あ、二階堂さん。今日は、ちょっと、この子にロケの現場見せたくって・・・」

啓祐が笑顔で答えると、二階堂と呼ばれた女性は、哀を見て微笑んだ。

「あら？啓祐君のガールフレンド？」

「そうじゃないけど・・・同じクラスの子で、灰原さん」

ペコっと、頭を下げた哀に、二階堂が微笑むと、啓祐が言う。

「二階堂さんはね、撮影なんかに使っ動物の世話をしてる人なんだ」

啓祐の説明は、少しニュアンスが違う。

「この子たち、動物タレントなんですか？」

哀が二階堂に訊いた。

「そうなの。私は、このタレントたちのマネージャー兼トレーナー。この子たち、これでもタレント事務所に所属してるのよ。私は、その事務所の社員というわけ」

そう言いながら、二階堂は、寄ってくる犬達を撫でたり、抱き寄せたりしている。

撮影セットの周辺には、馬や牛の姿も見え、それぞれ、トレーナーと思われる人たちが、スタッフと打ち合わせながら、動物の動きを確認しているようだった。

「じゃ、啓祐君、灰原さん、こっちへ来て。他の子たちにも、あわせてあげるから・・・」

それから、哀は、啓祐と共に、二階堂に案内されて、いろんな動

物たちを見せてもらった。

犬や馬、牛の他には、小鳥や猫、猪などもいた。馬に乗せてもらったり、猫や犬を抱かせてもらったり、動物好きの哀にとっては、楽しいことだった。

ただ、爬虫類もいた。哀は、苦手なので、そっちは遠慮した。

「灰原さんのあんな顔、初めて見た」

蛇やワニを見たとき、哀は、思わず、キャと小さく叫んで、数歩、後ずさって逃げてしまった。その時、自分は、いつになく、慌てた顔をしていたのだろう。

まずいところを見られたと、哀は、思ったが、さして、いやな感じはしていなかった。

「ありがとね」

一通り、動物達を見て回った後、哀は、啓祐に言った。

「喜んでくれた？」

「え？・・・ええ。楽しかったわ」

「そう・・・よかった」

哀は、今までの啓祐に対するイメージが大きく変わっていた。

強引に連れ出されたのは、感心しないが、自分を喜ばそうとした啓祐の気持ちの表れなのだろう。

哀は、自分が啓祐に笑顔を向けていることに気づき、ちょっと、おかしくなった。

「なんでえ・・・結構、楽しそうじゃねえか・・・心配して損したぜ」

いきなり、哀の後から、聞き慣れたすねたような声が聞こえた。

「江戸川君・・・」

振り返ると、コナンの顔があった。哀は、バツが悪そうに、その顔を見て苦笑する。

「わあ、動物がいっぱいいる！」

コナンの横にいた、歩美と光彦、元太も目を輝かせた。そのずっと後、車のところでは、阿笠が微笑んで立っている。

「あら？啓祐君、他のお友達も呼んだの？」

「・・・うん」

啓祐は、少し躊躇ったが、声をかけてきた二階堂にそう言った。

「じゃ、案内してあげるわ。来て」

「はい」

3人が二階堂の後について、動物たちのところに行く。

残されたコナンと哀、啓祐が並んで、その様子を見ている。

「江戸川君だね。灰原さんの彼氏の・・・」

啓祐は、コナンを見て言った。

コナンが返事に困っていると、啓祐が続けた。

「灰原さんが、好きな人がいるって、付き合っている人がいるって、言っただの、君のことだろ？」

「・・・そうだよ」

コナンがおもむろに返事をした。

すると、啓祐は、にっこり笑った。そして、コナンに頭を下げる。

「ごめん、灰原さんを勝手に連れてきて・・・でも、ここ、見せたかったんだ。僕も、一度くらい、灰原さんの嬉しそうな顔、見たかったからね」

すると、コナンは、フツと笑って、啓祐を見た。

「怒っちゃいねえよ・・・ただ、黙って連れてくくなよな」

「ごめん」

啓祐は、また、頭を下げた。その様子を見て、コナンと哀は、顔を見合わせ、苦笑した。

「でも、江戸川君、どうしてここにいて、わかつたんだい？」
啓祐が不思議そうにコナンに訊いた。

「どうしてって・・・そりゃ、哀のいるところは、俺には、すぐわかるのさ・・・」

「・・・ホントかな？」

啓祐が首をひねっている。

「あら、ホントよ。タネと仕掛けは、あるけどね」

哀がそう言っ、笑うと、啓祐は、ますます首をひねった。

帰りの車の中。かなり遅い時間になっていた。

後部座席では、歩美、光彦、元太の3人が、熟睡モードに入っている。

助手席には、ひとつのシートベルトをしたコナンと哀が座っている。

「アイツ、ちょっと、変わったな」

「そうね」

哀がコナンを見ると、窓の外を見て、少し不機嫌そうな顔をしている。

啓祐は、楽しそうにしている哀を見て、嬉しそうだった。好きな女の子を他の男が喜ばせていて、面白いはずはない。

それは、哀にもわかる。

「・・・ごめん」

哀は、小さな声で謝った。

「いいさ」

コナンは、横を向いたまま、言った。

そんなコナンの肩に、哀は、頭を乗せ、コナンの胸に手を当てる。

すると、コナンは、哀の顔を見て、フツと微笑むと、彼女の細い肩に手を回した。

「次は、あなたが連れてって・・・」

「俺は、気がきかねえから、おめえが喜ぶところへ連れてってやるかどうか、わかんねえけど・・・」

「あなたが一緒なら、それでいいわ」

「オホン」

運転席の阿笠が咳払いをして、呆れた顔をしたと思うと、苦笑してコナンと哀の様子をチラッと見た。

コナンと哀は、首をすくめて顔を見合わせて笑うと、哀は、また、コナンの肩に頭を乗せた。

第31章：軽い嫉妬（後書き）

更新が遅くなりました。うーん、最初に考えていたのと、内容が変わってしまいました・・・

次回、新展開です。更新日は、未定ですが、1週間ぐらいをメドに頑張ります。

第32章：子供

「ね、灰原さん、今度は、海で撮影があるんだ・・・来ない？江戸川君にも言っとくし・・・」

「結構よ」

本郷啓祐から、また誘いを受けた哀は、うんざりしたように短い返事を返した。

啓祐は、コナンと哀が付き合っているということを知ったのだが、どうも、コナンに断っておけば、哀を連れ出すのは、かまわないと思っているらしい。

啓祐が哀に好意を持っているのはわかるのだが、前に哀を連れ出したとき、コナンにあれほど謝った彼が、今も哀を誘うことが、哀や他のクラスメイトには、よく理解できなかった。

それにしても、啓祐は、めげるということを知らない。一度、半ば強引に哀を連れ出した以外、哀は、啓祐の誘いを受けたことはないのだが、それでも、執拗に誘い続けている。

「灰原さん・・・同情しますよ」

帰り道、光彦が苦笑しながら、哀に言う。

「同情はいいから、彼をなんとかしてくれないかしら？」

哀は、半目で光彦を見て言った。

「そんなにしつこいのか？アイツ」

元太が頭の後に手を組んで言う。

「よつぽど、哀ちゃんが好きなんだね。啓祐君」

歩美の言葉に反応したのは、コナンだった。

「おめえ、有名人に言い寄られて、結構、嬉しがつてんじゃねえのか？」

哀の表情がきつくなり、コナンを睨んだ。その様子に、光彦と歩美、元太の背筋に悪寒が走り、顔がこわばる。

「あんな子供に、興味はないって言ったでしょう？」

コナンに対し、最近、あまり声を荒げることのなかった哀が、コナンを睨んで強く言った。

「コナン君？・・・コナン君でしょ？」

その時、背後から声がして、5人が振り返った。

そこには、大きく、澄んだ目をした女子中学生がいた。長めの薄い茶髪を風に揺らしている。

その姿に見とれ、少し顔を紅くしている元太と光彦。

歩美は、その可愛さに、哀は、コナンの名を呼んだ彼女に不審を持ち、それぞれ顔を見つめていた。

「・・・誰・・・でしたっけ？」

コナンがポカンとした顔で訊く。

「忘れたの？・・・まあ、3年ぶりくらいだもんね・・・探偵さん・

・・・」

「え？・・・あ！」

「思いだした？」

2人のやり取りを半目で見ていた哀がコナンに訊いた。

「誰？」

「谷晶子さん・・・社長令嬢、執事と狂言誘拐をたくらんで、ホントに誘拐された・・・」

コナンが言った。

「思い出してくれたようね。探偵さん」

晶子がニコリと笑顔を見せる。3年前と比べ、随分大人になった晶子の笑顔に、コナンの頬が少し赤くなった。

それを哀が見逃すはずがない。

「あの時、コナン君が助けてくれたことには、ずっと感謝してたのよ。いつか、また会いたいと思ってたんだけど・・・そうだ！あの時の人、蘭さんだっけ？元気？」

晶子の問いかけに、哀の方をチラリと見て、コナンは答えた。

「うん・・・蘭姉ちゃんとは、最近は、あまり会ってないけど・・・」

晶子にそう答えた後、コナンは、怪訝な顔をしている哀に顔を寄せ、小声で言った。

「コナンになつて、初めての事件で会ったんだ・・・父親の気を惹くために狂言誘拐をして、そしたら、ホントに誘拐されて・・・」

「それを助けたってわけね・・・」

哀も小声で答えたあと、声を大きくして言った。

「へえー、綺麗な人ね。さぞ、気分がよかったでしょうね、助けたときは・・・探偵さん？」

プイッと横を向いた哀に、コナンが顔をしかめた。

「おめえ、何怒ってんだよ」

そんな2人の様子を見ていた晶子が、光彦たちに訊いた。

「何？あの子、コナン君のガールフレンド？」

「え？ええ・・・」

光彦は、そういいながら、睨みあっている2人を見ている。

「灰原哀ちゃん・・・とっても、仲がいいんだよ」

歩美もそう言つて、コナンと哀の方を見ていた。

「そうは、見えないけど・・・」

晶子が苦笑している。

「普段は、ホント、仲、いいんですよ」

光彦も、笑顔を歪ませて言った。

「だいたい、あなたは、鈍感なのよ。事件のことには、頭が良く回るくせに・・・」

哀がコナンを横目で睨んで言う。

「へいへい、どうせ、俺は、推理バカですよ」

コナンは、哀を横目で睨んでから、前に視線を移して、肩をすくめた。

「おめえだって、本郷に誘われて、嬉しそうな顔してたじゃんか。こっちは、心配してたつてのに・・・」

「あの子が強引に私を連れってたの、あなた、知ってるでしょう?」

「でも、動物見てたとき、楽しそうだったぜ」

「それは、あの子が連れていってくれたこととは、別のことよ」

「あの、コナン君、灰原さん、お取り込み中悪いんですけど・・・」

光彦がコナンと哀の間に、遠慮がちに入ってきた。

「なんだよ!」

「なに?」

2人が揃って振り返り、光彦を睨んだ。その気迫に、光彦が後ずさりした。

「・・・あ、いや・・・その、谷さんのこと、忘れていませんか?」

光彦の言葉に、コナンと哀は、顔を見合わせた。

「あ・・・ごめんなさい」

その2人を見て、晶子が笑顔で、近づいていく。

「そっかぁ・・・コナン君、こんな可愛い彼女がいたんだ・・・ちよつと、残念だな」

晶子が冗談っぽく微笑みながら言う。

「へ」

コナンの顔が、また少し、赤くなった。

それを見た哀が、プイッと横を向くと、スタスタと歩き出す。

「おい！哀！」

追いかけようとしたコナンに晶子が声をかけた。

「コナン君！」

足を止めたコナンが振り返る。その顔を見て、晶子が出た。

「実はね、コナン君に相談があるんだ・・・明日でもいいんだけど・・・帰りの時間ぐらいに、帝丹小の校門で待ってる。いいかな？」
「え？・・・ええ、いいけど・・・」

「じゃ、明日ね。ほら、早く行ってあげないと、彼女、行っちゃうわよ」

ポンとコナンの背中をたたくと、晶子は、手を上げて振り向いて歩いていく。

少し、呆気にとられ、それを見ていたコナンだが、すぐに振り返って哀を追いかけて、走り出す。

少し離れてその様子を見ていた歩美と光彦、元太も、コナンの後を走り始めた。

歩美たち3人と別れたコナンと哀は、黙って並んで歩いていた。

「ごめん・・・私、ホントの子供になっちゃったみたい・・・つまらないことに、腹を立てて・・・体が子供だと、精神も子供になるのかしらね」

「おめえさ、ちっさい時から、組織にいたんだよな」

前を向いたまま、お互いの顔を見ないで話している2人。今、この2人をじっと見ていると、子供には見えないう。そんな表情を2人はしている。

「え?・・・ええ」

コナンの意外な言葉に、哀がコナンの顔を見て、少し戸惑って答えた。

「だからさ、いいんじゃないの?演じるんじゃない、ホントの子供になるのも・・・悪くねえんじゃないか?」

ニコツとコナンが哀を見て笑った。

「子供になるって、結構面白くねえか?」

コナンの言葉に、哀の表情も柔らかくなる。

「そうね」

「俺も悪かった・・・ヘンなこと言って・・・」

コナンは、そう言って哀の手をとった。そして、2人は、振り返って、後の方を見た。

「と、いうわけだから、心配しなくていいぜ」

「隠れてないで、出てきなさい。つけてきてるの、わかってるんだから」

コナンと哀の言葉に、物陰から、まず元太が頭をかきながら出てきた。その後に、光彦がバツの悪そうに下を向いて、歩美も、舌を出して出てきた。

「やっぱ、気づいてたか」

「だから、お2人には、すぐにバレちゃうって、言っただけですよ」
「喧嘩してたみたいだったから、心配だったんだもん」

3人は、コナンと哀と別れた後、喧嘩をしていた2人が心配で、つけてきたのだった。しかし、この3人の尾行をコナンと哀が気づかないはずはなかった。

「アイツらに心配かけてんだから、やっぱ、俺達、ガキだな」

「俺達って、私もあなたと同じガキなの？」

「おい・・・おめえ、さっき、自分で言ってたじゃねえか」

「そうだったかしら？」

「おめえな・・・」

呆れるコナンの顔を見ながら、哀がクスッと笑う。その2人の様子を歩美たち3人は、顔を見合わせながら、苦笑して見ていた。

第32章：子供（後書き）

忙しい！年末なんて、嫌いだ！！

更新が少し遅れました。1週間といいながら、2日ほどオーバー・・・
・次回は、なんとか、1週間以内に・・・できるといいなあ（^^）；

第33章：レンタル

翌日、晶子は、放課後の帝丹小の校門で待っていた。

教室の窓から、校門に晶子の姿を捉えると、コナンは、哀を教室に迎えに行った。

「おめえ、どうする？」

「あなたに相談があるって言ったんでしょ？ 私たちは、行かない方がいいんじゃない？」

コナンの方を見ず、鞆の中に教科書を入れながら哀は言った。

「おめえ、機嫌悪くねえか？」

「別に・・・」

そう言いながら、哀は、プイッと、顔をコナンと反対の方へ向けた。

隣で、光彦がその様子を少しハラハラして見ている。

「ちょっと、こっち来いよ」

コナンは、哀の腕を引いた。

「あ・・・ちょっと！」

哀が慌てるのもかわわず、手を引いて教室を出る。そして、廊下を出て、校舎の外へ出た。

「おめえ、昨日、俺に謝ってたじゃねえか。つまらねえことに腹立ってたって・・・」

「だから、今も怒ってないわよ」

そう言いながら、哀は、コナンを見ない。

「なら、こっち向けよ」

コナンは、哀の顔に手を添え、自分の方に向かせると、お互いの鼻が触れそうなくらい、間近に顔を寄せた。

校舎の壁に背中をつけた哀の顔を両手でそっと挟んで、コナンは、彼女の碧く深い瞳を見つめた。

「ちょっと、学校内よ・・・」

哀の抗議の声は、弱い。あまりに近くにコナンの瞳があるので、哀も視線を外せなくなった。

コナンが顔を寄せ、哀の唇にキスをしようとすると、哀が少し顔を引いた。

「哀・・・」

「・・・学校内って・・・言っただでしょ？」

呟くように言う哀の言葉を無視し、コナンがもう一度顔を寄せ、哀の唇に自分のそれを近づける。

今度は、哀も逃げなかった。

2人の唇が重なる。

「一緒に来いよ」

コナンは、唇を離すと、そう言って、哀の手を引いて歩き出した。手を引かれた哀は、少し呆れた表情を見せた後、笑顔を作ってコナンの手を少しだけ、強く握った。

「ごめんなさい、遅くなって」

哀の手を引いたまま、晶子の前に立ったコナンは、少し頭を下げ、上目遣いに言った。

手を繋いで2人で現れたことに少し驚いた晶子だったが、すぐ笑顔になった。

「いいのよ、私がお願いしたんだし・・・」

晶子は、視線を哀に移した。

「灰原さん、だったわね。私、谷晶子・・・コナン君から聞いている？」

「ええ」

晶子は、改めて見た哀の容姿に見取れた。

肩で揃えられた赤茶けた髪、切れ長の目と深く碧い瞳、日本人というより、東洋系という感じの顔立ち、そして、何より、身に纏う雰囲気、コナンと同じように大人びていて、それが不自然に思えないところ。

（ふん、さすが、コナン君の彼女ね）

自分や、自分の同級生たちと比較しても、それ以上に大人びた2人の小学生に、晶子は、改めて驚きを感じていた。

初めてコナンに会ったとき、彼は小学1年生で、自分は4年生。今、目の前にいる2人は、あの時の自分と同じ年だが、とても、そう見えなかった。

「谷・・・さん？」

自分達を見て、何か考えているふうの晶子を見て、コナンが怪訝な顔をして呼びかけてきた。

「え？・・・あ、ごめん・・・」

我に返った晶子は、コナンに笑顔を見せた。

「じゃ、行こうか」

「どこへ？」

「近くにさ、お父さんの知り合いの喫茶店があるの・・・そこなら、私たちだけで入れるから・・・そこで、話聞いてくれる？」

「え？コーヒー？」

晶子は、コナンと哀がコーヒーを頼むので、少し驚いた。
(小学生がコーヒーって・・・)

そんな晶子の思いを知ってか知らずか、コナンと哀は、マスターが持ってきたコーヒーを美味しそうに飲んでいる。

「ね、コナン君と灰原さん、一緒に住んでるってホント？」

晶子の表情は、幼さが残るものの、随分、大人になったとコナンは思う。

「うん・・・親戚のオジサンの家に一緒に住んでるんだ」

コナンが答えると、晶子がニヤリとして、目を細めた。

「ふん・・・コナン君、灰原さんのこと、好きなんだ・・・」

言われたコナンは、少し赤くなっただが、哀は、顔色も変えず、コーヒーカップに口をつけている。

「・・・この子は、僕にとって、一番大事な子なんだ・・・命がけで僕を守ってくれたし、僕も、ずっと守りたい・・・」

コナンが真剣な表情で言うので、晶子も少し呆気に取られたが、隣に座る哀は、コナンを見て、表情を緩め、笑顔になった。

哀の笑顔を見た晶子は、心底、感心していた。

「あなた達には、負けそうだわ・・・ホントに小学生？2人とも・・・」

「へへ」

コナンが曖昧な笑いを返すと、哀は、肩をすくめた。

「それで、僕に相談って？」

コナンが話しを変える。

「うん。実はね、お父さんが会社のお客さんのパーティーに招待されたんだけど、そのパーティー、ちょっと変わってて、男女ペアで出席するの・・・それで、私も招待されたんだけど、相手の男の子がいないから、コナン君に頼みたいなって、そう思って・・・」

ニコニコしている晶子に対し、コナンと哀は、少し呆れた顔になった。

「なんで、僕が・・・」

「実はさ、パーティーに招待されたの、一昨日だったんだ・・・それで、相手になる男の子、いないし、どうしようかと昨日悩んだとき、コナン君と偶然会ったから、これは、神様の引き合わせだと思ったの」

しれっと言う晶子に、コナンは苦笑し、隣の哀の顔を見た。

哀は、すました顔でコーヒーを飲んでいる。

「どう？コナン君、一緒に行ってくれない？・・・うちの会社にとって、大事なお客さんのパーティーだから、出ないわけにも行かなくてさ・・・」

「うん・・・でも・・・」

コナンは、哀の顔を覗くようにその横顔を見た。その様子に晶子が哀の方を向いて言う。

「ね、灰原さん、1日だけ、コナン君を貸して。お願い」

手を合わせて、ウインクする晶子に哀も思わず苦笑した。

「別に、江戸川君がいいのなら、私はかまわないけど」

「ありがとう！灰原さん！ね、コナン君・・・服とか、こっちで用意するから、心配しないで」

哀の言葉が終わるか、終わらないうちに、晶子が嬉しそうに言っ

た。

「・・・俺、まだ、行くって、言っただけだな・・・」

「たまには、いいでしょ？行っただけだよ」

不服そうに呟くコナンに、哀が少し意味ありげな笑顔で言った。

「でも、この人を誘うなんて、後で後悔するかもよ」

「え？」

哀の言葉に晶子が怪訝そうな顔になった。

「だって、この人、事件を呼ぶから・・・」

「おい」

哀の冗談とも、本気ともとれる言葉に、コナンは、顔をひきつけた。

そのパーティーは、米花プラザホテルの宴会場で行われていた。

毎年、晶子の得意先である、大手企業の創立記念日に行われているもので、関係企業や取引先、同業者でつくる組合の関係者なども招待されている盛大なものだった。

そして、出席者は、必ず男女ペアになっているというのが変わっている。

夫婦や恋人、友人、兄妹と、そのペアであれば、どういう関係でもかまわないのだが、どういう理由があるのか、コナンには、その意味を量りかねた。

「あら？メガネのガキんちよじゃない！？」

（げ！この声は・・・）

ビクツとして振り返ると、鈴木園子がいた。

「あれ？同伴は、あの子じゃないの？」

コナンと並んでいる晶子を見て、園子は、意外そうに言った後、ニヤリと意味ありげな笑みを浮かべ、コナンを半目で睨んだ。

「さては、浮気・・・それとも、振られたか・・・いずれにしても、相変わらず、生意気ね」

「誰？」

晶子が不審な顔をして、小さい声でコナンに訊いてきた。

「鈴木園子さん、蘭姉ちゃんの友達で、鈴木財閥の会長の娘さん・・・」

「何、ヒソヒソやってんのよ・・・その娘、誰？」

「初めまして、谷晶子です」

「谷さんて、あの谷物産の？」

「ええ、娘です」

「へえ、やるわね・・・あの子から、社長令嬢に乗り換えたってわけだ・・・」

さらに険しい目で、園子がコナンを睨む。

「ち、違っよ！」

「灰原さんから、ちょっと、お借りしてるんです」

焦るコナンの横で、晶子が冷静に言う。

「え？・・・あ、そう・・・」

園子は、毒気が抜かれたような顔になった。

「そう言う園子姉ちゃんは、誰と来たの？」

晶子の言葉に少し呆気にとられたコナンだったが、気を取り直す

と、反撃とばかりに、園子に言った。

「へへっ。この園子さんは、モテるからねえ」

と、一旦は胸をはったが、すぐにため息を吐いて俯いた。

「・・・って、言いたいとこだけど・・・パパと来たの。ママが体調崩しててね、その代わり・・・」

（ちょっと待て、園子がここにいるってことは、もしかして・・・）
コナンがそう思ったときだった。

「あれ？コナン君じゃない？」

（蘭・・・ハハ・・・やつぱりな）

「久しぶりだね、蘭姉ちゃん・・・でも、どうして、ここにいるの？」

ドレスを着た蘭は、一段と女っぽく、綺麗になったと、コナンは思った。

「私は、園子に誘われて・・・」

「うちは、2組招待されたの・・・で、私が来ることになったから、1組分、蘭にあげたってわけ」

園子が代わってそう説明する。

（と、いうことは、蘭は、誰と・・・）

「なんだ、メガネのボウズじゃねえか・・・久しぶりだな」

（・・・おっちゃん）

蘭の後から、父親の毛利小五郎が現れた。

「まったく、こんな綺麗な女性が2人、父親と参加だなんて・・・世の男は、ホント、見る眼がないわ」

園子が嘆くのを、コナンは、半目で、蘭は、苦笑して見ている。

「コナン君こそ、どうしてここにいるの？それに哀ちゃんと一緒に」

やないのね・・・」

蘭がコナンの隣にいる晶子を見て言った。

「あの子から、レンタルに出されたみたいよ」

園子が少し意地悪げな笑いを浮かべた。

「レンタル？」

蘭が首を傾げて晶子を見た。

隣でコナンが苦笑している。

「お久しぶりです。蘭さん・・・谷晶子です」

「え？・・・」

「あつ！あの時の」

小五郎と蘭が声を揃えていった。2人とも、晶子のことを思い出したようだ。

「知ってるの？蘭」

「うん。コナン君がうちに来た頃かな。誘拐されて、コナン君が助けに行った子」

園子の問いに蘭が言うと、

「あの時は、蘭さんにも助けてもらいました」

と、晶子が園子に笑顔を見せた。

「大きくなったわね。今、中学生？」

「はい。中1です」

晶子は、蘭と笑顔で話した。しかし、その後、蘭が、少しの間、コナンを寂しそうな、哀しそうな、複雑な表情で見ているのに気づいた。

（蘭に、おっちゃんに、園子・・・ハハ、哀じゃねえが、事件が起るとき役者は揃ったな）

コナンは、自嘲気味に笑った。

第33章：レンタル（後書き）

なんとか、1週間で更新できました。
コメントくださった方々、いつも、ありがとうございます。

第34章：事件と彼女達

「でも、なんで男女ペアなんだ？」

コナンが首をひねっていると、晶子が言った。

「この八木グループはね、今、結婚式とか、冠婚葬祭のビジネスに力を入れてるの。このパーティーでも、ベストカップルとか、親子兄妹なんかの男女ペアのベストペアとか、賞を出して、会社のイメージアップにつなげたいみたい・・・」

「へえ」

「ベストカップルになると、賞金や商品の他にポスターなんかで写真を使ったりするみたいよ。もちろん、本人の承諾をとるけど、それなりの報酬も出るみたい」

要するに、人気有名人を使って莫大な広告費を使うより、安く、効果的な宣伝を考えてのこと、ということなのだろう。

晶子に説明されても、コナンには、さして興味は持てなかった。

（哀のヤツ、どうしてるかな？）

ふと、コナンの頭に、哀の顔がよぎった。

「あら？」

哀は、開いていたコナンの部屋のドアから、その机の上に、赤い小さなモノを見つけた。

（変声器・・・忘れていったのね・・・まあ、必要ないでしょうけど・・・）

その蝶ネクタイ型変声器を机の上に置きなおすと、机の上に放置された本を揃えた哀は、コナンの部屋を出て、ドアを閉めた。

少し間を置いて、再び、コナンの部屋のドアが開けられる。

主のいない部屋を見ながら、何かを考えていた哀だったが、再び、部屋へ入り、机の上を見た。

赤い蝶ネクタイをしばらく見ていたが、やがて、それを持ち上げ、哀は、自分のスカートのポケットに入れると、部屋を出て、ドアを閉めた。

その頃、米花プラザホテルの宴会場は、大騒ぎになっていた。

パーティー主催者の株式会社八木の社長、八木幸作が、舞台上で挨拶しているとき、突然、倒れたのだ。

（やっぱり事件が起きちゃった・・・）

騒ぎの中、コナンがため息をつく。

いつものように、小五郎が倒れた幸作のもとに駆け寄り、蘭が警察に連絡、目暮警部たちの登場となった。

「死因は、青酸系毒物によるもの・・・おそらく、ワインかそのグラスに仕込まれていたかと思われます」

監察医の報告を聞いていたコナンは、眉をひそめた。

（やっぱり、他殺か・・・）

いつものように、コナンが周辺を調べると、犯人は特定できた。証拠も揃った。

（間違いない。犯人は、あの人だ）

そして、いつものように、舞台上では、小五郎が見当違いな推理で、目暮達の目を白黒させている。

時計型麻醉銃を構えようとして、コナンが左腕を上げかけたとき、不意に傍で声がした。

「何してるの？」

晶子がコナンの腕を見つめている。

「あ？・・・いや、これは・・・そのお・・・」

慌てたコナンだったが、ハッとして晶子に言った。

「あれ？関係者以外は、舞台から下ろされたのに、どうしてここに
いるの？」

「だって、コナン君だって、ここにいるじゃない？・・・今日は、
コナン君のパートナーだもの、コナン君の横にいるわ」

「いや、そういう問題じゃなくて・・・」

冷や汗をかき、苦笑するコナンがそう言ったとき、後ろから声が
した。

「あら？楽しそうね」

ビクつとしたコナンと晶子が振り返ると、腕を組んだ哀が立って
いた。

「哀！？」

「灰原さん！」

「おめえ・・・どうして!？」

驚いたコナンがそう言うと、慌てて哀の背中に手をあて、舞台の
袖、人のいないところへ哀を連れて行った。

その様子を不思議そうに見ていた晶子は、その場に取り残されて
しまった。

舞台の反対側では、蘭が気づいていた。

（哀ちゃん・・・どうして？）

舞台の袖で、他の人から離れたところにいるのを確認したコナンは、哀に声をひそめて言った。

「何かあったのか？」

「何かあったのは、そっちでしょう？これ、持ってきてあげたのよ」
哀は、親指と人差し指でつまんだ蝶ネクタイ型変声器を、コナンの目の前に差し出した。

「眠りの小五郎の登場でしょ？そろそろ・・・」

「あっ！」

コナンは、小さく声を上げた。変声器を忘れたことに、今、初めて気づいた。

（危なかった・・・あのまま麻醉銃を撃つてても、眠りの小五郎が
できずに困っちまってたな・・・）

（何してるのかしら・・・）

晶子は、遠目にコナンと哀を見ていた。2人は、向うを向いているので、変声器は、晶子からは、見えなかった。

晶子は、ふと、背中に視線を感じ、振り返ると、蘭もコナンと哀の様子を見ている。

（蘭さん・・・なんて、寂しそうな目・・・いったい、あの2人と
蘭さんの間に何があるのだろう）

「早くしないと、あの迷探偵、他の人を犯人にしちゃうよ」

哀に促されたコナンは、舞台の中央へ戻ると、小五郎の後に周りこんだ。しかし、晶子と蘭が見ていて、麻醉銃を撃つことができない。

（くそっ！なんとか、蘭と晶子ちゃんの目を逸らす方法はないか・・）

コナンは、困ってしまった。

「んがあ・・・きた・・・」

その時、奇声がして、小五郎がその場に崩れ落ち、舞台の後にあった椅子に座り込んでしまった。

「おお！眠りの小五郎だ！」

一同が声を上げる。

「？」

自分が麻醉銃を撃つ前に、小五郎が眠ってしまい、呆気にとられたコナンだが、すぐに思い当たって哀を見た。

哀は、右手に阿笠手製の麻醉銃を持ち、コナンと目が合うと、笑みを浮かべ、ウインクした。

（哀・・・）

コナンを見ていた蘭と晶子も、座り込んだ小五郎に目を奪われていた。その僅かな隙に、コナンは、舞台の後のカーテンの裏に隠れる。哀も、袖からカーテンの裏に入り、コナンの傍に行った。

（あれ？コナン君はどこ？・・・灰原さんもない）

晶子があたりを見回す。ふと見ると、蘭も2人を探しているようだった。

そして、眠りの小五郎こと、コナンの推理ショーが始まる。

その途中、カーテンの裏に隠れ、口に蝶ネクタイを当てながら、コナンは、哀の方を見てウインクすると、そっと、彼女の手を握った。

「おめえ、ホントに変声器を持ってくるためだけで、ここへ来たのか？」

小五郎の推理ショーが終わり、犯人が警察に連行され、一件落着となった後、その様子を舞台袖の陰から見ていたコナンは、隣に立つ哀に言った。

「・・・そうよ・・・たぶん、事件に巻き込まれていると思って・・・」

そう答え、向うを向いてしまった哀を半目で見たコナンは、表情を崩して、彼女に言った。

「気になってたんだろ？俺と晶子ちゃん・・・」

「別に・・・」

相変わらず、哀は、向こうを見たままだった。

「ま、助かった。おめえがこれ、持ってきてくれて・・・」

変声器を振りながら、コナンが言う。

「コナン君」

声をかけられ、コナンが振り向く。哀も、声の方に振り向いた。

「・・・蘭・・・姉ちゃん」

「ね、コナン君、話があるの、ちょっと、いい？哀ちゃんも・・・」
コナンと哀は、顔を見合わせ、小さく頷きあうと、蘭の方を見た。
「うん・・・」

頷いたコナンと哀を見て微笑んだ蘭は、2人を促すように小さく手招きすると、振り向いて歩きだした。その後に、コナンと哀が続く。

その様子を見ていた晶子は、少し考えていたが、少し離れて3人の後について歩きだした。

第34章：事件と彼女達（後書き）

あけまして、おめでとうございます。
だいぶ、更新が遅れてしまいました。

今年も、「コナン哀ものがたり」、よろしくお願いします。

コメントをいただいた方々、返事もせず、申し訳ありません。でも、
ありがたく、読ませていただいております。本当に感謝です。

第35章：真実1

蘭が歩く後をコナンと哀が並んでついていく。3人とも、一言も話そうとせず、硬い表情で歩いている。その3つの背中を見ながら、晶子は、その重苦しい雰囲気、ただならぬものを感じていた。

（あの3人には、何かある・・・）

そう考えた晶子だったが、それには、他の者が触れてはいけないうような気がして、足が重くなるのを感じていた。

クロックで預けた荷物を受け取った蘭は、そのまま玄関に出て、タクシーのところへ行った。

「蘭姉ちゃん、おじさんに黙って帰っていいの？」

コナンの問いに、蘭は、コナンに笑顔を向けて言った。

「いいのよ。まだ、現場を離れないし、後で、携帯に電話しとくから」

そう言つと、横付けされたタクシーにコナンと哀も乗るように促し、最後に自分も乗った。

走り去るタクシーを見送っていた晶子だったが、その行先は、見当がついた。

（どうしよう・・・）

迷った晶子だったが、後に停まっていたタクシーが目の前に停まると、それに乗った。

蘭とコナン、哀を乗せたタクシーは、毛利探偵事務所の前で停まった。

毛利探偵事務所の応接コーナーの空気は、冷たく沈んでいた。蘭が事務所の照明のスイッチを入れると、コナンには、見慣れた事務所の風景が広がった。でも、いつもと空気が違う。冷たい。コナンは、そう思った。

「2人は、コーヒーかな？」

蘭がそう言うと、コナンと哀は、顔を見合わせ、こっちを見ている蘭に向かって頷いた。

「コナン君が、コーヒーが好きだったなんて、この前まで知らなかった」

蘭は、少し寂しそうに言うと、キッチンに消えていった。

「蘭さんの話って・・・まさか」

ソファに腰掛けながら、哀が小さな声でコナンの耳元に囁いた。

「・・・蘭は、たぶん、気づいてる、俺の正体・・・そのことじゃねえか？」

コナンも小さな声で言う。

「来るべき時が来たのね・・・」

「ああ」

哀の言葉に頷いたコナンは、少し俯いて哀の隣に座っていた。

コーヒークップを載せたトレイを手に、蘭が現れた。

カップをそれぞれ、2人の前に置いた蘭は、トレイを抱いて、ソファに座った。

「コナン君、哀ちゃん・・・また、大きくなったね・・・2人と初めて会って3年になるのか・・・早いね」

静かに話し出す蘭の目は、寂しそうでいて、優しい光りを湛えて

いた。

「私ね、ずっと考えてたの。このこと、コナン君と哀ちゃんに話をしようか・・・ううん、訊こうか、どうしようか・・・って」

蘭は、少し微笑みを浮かべ、コナンと哀を見ている。

「訊かない方がいいとも思ったんだけど、やっぱり、きちんと訊いておかなくっちゃと思って・・・それで、今日、会場でコナン君を見かけて・・・哀ちゃんもいたし・・・ここで、話さないと、訊いておかないと、もう訊けなくなりそうだったから・・・それで、来てもらったの」

綺麗になった。蘭のことを哀はそう思った。

そして、ふと、コナンを見ると、彼も同じように感じているのだろう、静かに微笑んでいる蘭の顔を見つめている。

（やっぱり、私は、この人には、かなわない・・・）

哀は、姉に似たその面差しと、その顔を見つめているコナンの顔を見比べ、そう思った。

「ね、コナン君・・・あなた・・・新一、でしょ？」

いきなりの蘭の言葉に、コナンと哀は、何も言えず、蘭の顔を見つめた。

「そして、コナンく・・・新一が今想っている人は、哀ちゃん・・・」

「

蘭の顔は、微笑んでいるようでもあった。泣いているようでもある。その顔は、すべてを包んでくれる母親のような表情で、綺麗だ。哀は、そう思った。

答えに困ったコナンは、チラッと哀の顔を見たが、すぐに向き直って表情を硬くして、蘭の顔を見つめた。

「え・・・な、何言ってるんの、蘭姉ちゃん。僕が新一兄ちゃんのおかげないでしょ？」

今までなら、コナンがこういうふうに答えると、蘭は、意地になっただけだ。しかし、今日は、違う。

蘭は、優しく微笑んでいるだけだった。

「もう、わかってるの、新一・・・少なくとも、コナン君は、小学生じゃない。哀ちゃんも・・・もう、それは、私は、確信している・・・新一がどう言い訳しても、ね」

コナンは、表情を曇らせ、俯いた。

「もう、隠し通すことはできないわ。これ以上、隠すことは、蘭さんにとっても、私たちにとっても、良くないわ・・・工藤君」

不意に哀が言ったので、コナンも、蘭も、少し驚いて哀の方を見た。

コナンは、静かに視線を蘭に移し、眼鏡を外した。

「蘭・・・ごめん・・・」

「・・・やっぱり、ね。何度もそう思った・・・でも・・・」

蘭の目から涙が一筋、頬を伝う。

「でも、どうして？・・・どうしてなの？・・・どうして、ずっと傍にいたのに、何も言ってくれなかったの？」

コナンは、表情を曇らせ、俯いた。

蘭は、そんなコナンから目をそらし、フツと天井を見上げた。

「新一の・・・新一のことだから、何かわけがあるんでしょうけど・・・寂しいよ・・・離れているより、ずっと・・・」

蘭は、再び、コナンに視線を向けた。

「寂しいよ……」

「……工藤君のせいじゃない……私の……全部、私のせいよ……」

哀が俯いたまま、口を開いた。

「哀ちゃん……」

驚いたように少し目を見開いた蘭が哀の顔を見つめた。

「私が、私のしたことが、工藤君と蘭さんの運命を狂わせてしまった……工藤君は、ずっと、あなたを想っていたわ。傍にいて、ホントのことが言えない辛さを抱えて……でも、私は、自分の気持ちを抑えられなかった」

哀が蘭の顔を見上げた。

「すべては、私のせいなの……」

「哀ちゃん……？あなたは、いったい？」

蘭は、哀のことも、普通の小学生だとは思っていない。どういう理由かわからないが、コナンが新一だとすれば、哀も新一と同じように大人なのだろうと思う。

でなければ、子供になったとはいえ、新一が本気で愛するはずがない。

「違う……哀のせいじゃねえ……俺が悪いんだ」

俯いたまま、コナンが言った。

「もっと早く、蘭にホントのことを話しておけば……俺がちゃんと、話さなかったから……」

「でも……」

哀が言いかけた言葉を遮ったのは、蘭だった。

「勘違いしないで・・・私、新一が哀ちゃんのことを想ってるのを責めてるんじゃない・・・」

「蘭・・・」

コナンが顔を上げて蘭を見上げる。哀も、蘭の顔を見た。

「・・・人の気持ちって、変わるものだし、今の私も、前みたいに新一のこと、好きかどうか、わからない・・・でも、大事な人だよ、今でも」

蘭は、フツと笑って、顔を上げた。

「でも、結局、私は、新一の力になれない・・・新一は、そう思ってたんだね・・・哀ちゃんは、新一の力になれるんだ・・・」

「こないだのキャンプのとき、夜、見ちゃったの・・・2人がキスしてるとこ・・・あの時、2人は、普通の小学生じゃないと確信したわ・・・ね、ちゃんと話して、新一。私、覚悟できてる・・・」
瞳に強い光を宿し、蘭がまっすぐコナンを見つめる。その表情を見て、コナンは、意を決して、息を吐き、蘭を見つめ返した。

「わかったよ・・・全部、ホントのことを話すよ」

コナンの隣で、哀も決心した。蘭には、いずれ話さなければいけないことだ。正義感が強く、姉に似ている優しい彼女が、哀のことを知ったとき、どう思っのか。

哀を憎むだろうか、恨むだろうか。

（やっぱり、私は、工藤君の傍にいたべきでは、なかったのかもしれない・・・）

人の心など、弱いものだ。

灰原哀として、コナンと生きていくと、そう決心したはずの心が揺れている。蘭という、哀にとっても大事な存在を前にすると、自

分の心など、弱いものだ。

（彼も、そうなのかしら・・・）

哀は、自分の揺れる心を感じながら、見つめ合っているコナンと蘭を見ていた。

第36章：真実2

「おめえと、トロピカルランドで別れた後、俺は、ある取引の現場を目撃した。それが、あの黒の組織と呼ばれていた連中だった・・・」

「ゆっくり、確かめるように話すコナンの言葉に、蘭は、驚きを隠さなかった。

コナンになつて、組織を追っていたこと、その組織は、かなり危険なため、蘭を始め、周りを巻き込まないように、正体を隠していたこと。

コナンは、ゆっくりした口調で、話した。

「ごめん・・・それで、おっちゃんを利用してた・・・」

「そう・・・新一のご両親も、知ってたのね」

「ああ・・・それと、服部も・・・」

蘭がふつと微笑んだ。

「それで、時々、服部君は、工藤って言ってたのね・・・」

「蘭・・・おめえを守るためとはいえ、ずっと騙してたことは、悪かった・・・何度謝っても、すまねえけど・・・」

「私をその組織と関わらせないためでしょ？・・・お父さんや園子達も・・・」

「ああ」

「ねえ、新一・・・確かに、私があなたでも、同じような立場だったら、みんなを危険から守るため、黙っていたと思う。でもね、なんとか新一には、全部じゃなくても、本当のことを伝えようと思う・・・」

寂しげな蘭の顔をコナンは、見ていることができなくなった。

「蘭・・・」

「どんな理由があっても・・・危険なことでも、好きな人に、大事な人に騙され続けるのは、やっぱり、寂しい・・・辛いよ・・・」

コナンには、一言もなかった。

好きな人を、大事な人を危険に巻き込みたくないと思い、正体を隠していたことには、悔いることはない。しかし、蘭の言うことも、理解できた。

もし、蘭が同じ理由で、自分に大事なことを隠していたとしたら、コナン、新一も同じように思ったかもしれない。

自分は、蘭のことを想っていた。それは、間違いない。しかし、本当に蘭の気持ちまで、察していたのかどうかは、自信がない。

蘭も同じだった。

コナンが新一だと確信した時点で、おおよその事情の見当はついていてた。ただ、一番大事なことを、新一から話してもらえなかったことで、新一に対する想いが変わっていったのも、事実だった。

新一も、蘭も、まだ、成長途上の若い人間だ。

心の成長は、体や学力のように、ある方法に基づけば、成長できるというものではない。年数や、本を多く読み、知識をつければ良いというものでもない。また、成長の結果は、どれが正しくて、間違っているという明確な答えが出るものでもない。

寄り道や間違い、失敗を繰り返し、いろんな状況に身を置かなければ、成長できない。

新一も、蘭も、まだ、成長の途上にある。

もう少し、成長していれば、新一は、蘭にもっと、想いを伝えられたかもしれない。

蘭は、もっと、新一の気持ちを察することができたかもしれない。

「彼は・・・工藤君は、蘭さんのことを一番に想っていたのよ・・・だから・・・」

哀は、黙ってしまったコナンを見て、そう言った。

「でも、私が蚊帳の外だったのは、事実でしょ？哀ちゃんは、コナン君を新一だと知っていた、そして、一緒に戦っていたのに・・・」
「それは・・・」

哀にも、その先の言葉はでなかった。

いくら、優秀な科学者であっても、宮野志保も、工藤新一や毛利蘭と同世代であり、同じように、成長途上の若い人間だ。

哀は、コナンの傍にいて、蘭に対する想いを知っていたし、いつからか、それが変化したことも、当然、一番わかつている。

それに、新一がコナンになってしまったことで、結果的に蘭から新一を奪ってしまったことになる。

その後ろめたい罪悪感を抱えている哀には、コナンと蘭の心の変化をどうこう言える資格はないと思っていた。

「それで、哀ちゃんは？・・・」

「それは・・・」

コナンは、蘭の顔を見上げた。澄んだ瞳が哀を見つめている。

口をきくと結んだ哀は、一度目を閉じ、少し考えた後、覚悟を決め、もう一度、蘭を見上げた。

「工藤君が飲まれた薬は、アポトキシン4869っていうの・・・その薬を開発したのは、私」

「え!？」

静かにコナンの話を訊いていた蘭も、哀の言葉には、さすがに驚いた。

「哀ちゃん・・・あなたは、いったい？」

「私は、あなたと工藤君にとって、最も憎い存在・・・あなた方を引き裂き、辛い想いをさせる原因をつくった・・・私の本名は、宮野志保。その組織の科学者だった・・・」

そう言つと、哀は、蘭から顔を逸らし、両手を膝に置いた。その手が震える。

「哀ちゃん・・・」

蘭は、複雑な表情をして、哀を見つめている。

「いつか、誘拐さわぎのとき、あなた、私を庇ってくれたでしょ？ ジョディ先生の車に乗って・・・あの時、私を撃とうとしていたのは、かつての私の仲間だった・・・」

「じゃ、あの時・・・」

「そう。彼らの目的は、誘拐じゃなくて、私の命・・・裏切り者の私を殺すこと」

蘭は、驚いて、改めて、哀の顔を見つめた。

「広田雅美を覚えてる？」

哀が蘭の顔を見上げ、訊いた。

「え?・・・ええ、銀行から10億円を強奪して、撃たれて死んだ・・・でも、あの時は、自殺した事になっていた・・・」

「ええ。広田雅美の本名は、宮野明美・・・」

蘭がハツとし、哀を見つめる目が大きくなる。

「そう、宮野明美は、私の姉・・・」

隣で、コナンが唇を噛んだ。

助けられなかった命、心に刺さった棘のように、彼女のことを思えば、今も胸が痛む。

「だから、私は・・・本当は・・・工藤君に想ってもらえるような人間じゃない・・・蘭さんから、彼が幼児化したのを利用して、彼を奪った・・・」

哀は、俯いて、膝の上に置いた拳を握った。

「それは、違うよ・・・哀ちゃん」

蘭の言葉に、哀は顔を上げ、蘭を見つめた。その顔は、優しく微笑んでいるようだった。

「新一と私の心がすれ違ったから・・・私が、もっと新一を想えなかったから・・・だから、新一は、あなたに心を寄せたのよ・・・」

蘭の顔を半ば呆れたように見ていた哀は、表情を歪め、涙をこらえた顔になった。

「どうして?・・・どうして、あなたも、工藤君も、そんなに優しいの?・・・どうして、私のような人間に優しくできるの?・・・」

哀の目から、涙が溢れてきた。

「バカよ・・・あなたも、工藤君も・・・救いようのないバカよ・・・」

「哀・・・」

コナンが呟き、哀の顔を見た。そして、蘭の方へ顔を上げる。

「蘭、ごめん・・・いつか、電話で言っただように、今の俺は・・・」

俺には、コイツが必要なんだ。哀のことが、好きなんだ・・・」

蘭は、泣き出しそうな、笑っているような、複雑な表情になった。
「新一・・・わかってる・・・私も、今は、前ほど新一のこと、想
つてない・・・でも、大事な幼馴染だと、大事な人だと思ってるよ。
新一」

「ありがとう、蘭」

「でも、今はまだ、2人のこと、認めるとか、幸せになつてなんて、
正直、言えない・・・まだ、時間がかかると思う・・・でも、心配
しないで。大丈夫だから・・・」

コナンを見て、寂しそうな笑みを浮かべる蘭の顔を、哀は、上目
遣いに見た。

（お姉ちゃん・・・似ている・・・いつか見た、お姉ちゃんの顔に・
・・・）

『お姉ちゃんは、大丈夫だから・・・』
姉が殺される前、気遣う志保に言った言葉。

その様子に、ただならぬ雰囲気を感じ、心配した自分に対し、姉
が言った言葉。

今の蘭が、そのときの姉、明美の姿と重なった。

毛利探偵事務所の入り口には、谷晶子が立っていた。

コナンと哀、蘭の3人の様子が異様に見える、思わず、追いかけて
きた。

事務所内の3人の会話は、あまり、聞こえなかった。ただ、そのただならぬ雰囲気と、断片的に聞こえた言葉が、晶子を混乱させていた。

驚いたような蘭の言葉、「哀ちゃん、あなたはいつたい・・・」

哀の声で「工藤君」と呼ばれた人物。

コナンが「蘭」と呼び捨てにしていること。

そして、蘭が読んでいた「新一」。

（何かある。3人には、何か秘密があるんだ・・・工藤君？新一？・・・聞いたことがあるような・・・）

晶子は、そこまで考えると、事務所内にいる3人に気づかれないように、そつとその場を離れた。

「蘭、頼む、このこと、誰にも言わないでくれ」

コナンが蘭の顔に懇願するように言った。

「目暮警部たちも、ジロディ先生も知ってるけど、世間に知れると騒ぎになるし、まだ、組織のことも完全にケリがついたわけじゃない・・・だから、目暮警部やFBIも、時々、俺達の周りを警戒してくれているんだ・・・だから、蘭・・・」

「わかってるわ、新一。いえ、コナン君・・・」

蘭は、フツと笑みを浮かべた。

「あなた達のことを世間に知れたら、大変なことになるものね・・・阿笠博士や新一の両親も無事じゃすまないかもしれない・・・」

「蘭・・・ありがとう」

コナンと蘭が顔を見合わせ、しばらく、哀しそうな、寂しそうな表情でお互いを見ている。

その様子を見ていた哀は、膝の上の拳を握り締め、目を閉じた。

第37章：前を向いて

「ね、新一、もうひとつ、訊いていい？」

穏やかな笑顔を浮かべた蘭がコナンに言う。

「え？」

コナン・・・新一は、幼いころから、ずっと蘭と一緒にだった。

蘭の考えていることは、一番理解していると思っていた。今でも、蘭のことを理解していると思う。

しかし、今、目の前にいる蘭の笑顔、哀しそうな影を宿した笑顔は、新一の知らない顔だった。

その初めてみる蘭の表情に、少し戸惑いを覚えたコナンは、蘭の次の言葉を待った。

「何度か・・・初めて新一の家でコナン君に会ったときの後、何度か新一に戻っていて・・・会ったよね・・・それに、学園祭のとき、新一とコナン君、一緒にいたでしょ？あれば、どうしてなの？」

「確かに、一時的に新一に戻ることは、できると思う・・・でも、完全に元に戻るのには、無理なんだ・・・」

コナンがそう言ったとき、哀の肩が少し揺れた。

「哀が、何度か薬を作ってみたけど、ダメだった・・・学園祭のときは、その薬で一時的に戻れたんだ・・・あの時のコナンは、哀が変装してた・・・」

蘭の顔を見て、何か言おうとした哀を、コナンがその胸の前に腕を出して止めた。

哀は、ゆっくりとコナンの方を見る。

腕を哀の胸の前に伸ばしたまま、コナンは、蘭の顔を見ていた。

「そう・・・」

フツと蘭が笑う。

「そこまで手の込んだこととして、コナン君が新一だって、隠してたんだ・・・」

「それは・・・」

何か言おうとしたコナンだったが、蘭から視線を外し、俯いた。

3人の間に沈黙が流れる。

事務所の前の通りを走る車の音が、事務所にいつもより、大きく響いているようだった。

毛利探偵事務所を出たコナンと哀は、阿笠邸への道を歩いていた。すでに、夜9時を回っている。

並んで歩く2人は、一言も話さなかった。

哀は、ふと、右手の暖かいものが触れるのを感じ、顔を上げた。隣にいる、コナンを見る。

コナンは、前を見つめたままだったが、その左手が哀の右手に触れ、そして、その手を握ってきた。

コナンを見つめる哀の瞳が揺れ、表情が少し、硬くなった。

こぼれそうになった涙をこらえ、哀は、そっと、コナンの手を握り返した。

「遅かったの・・・」

心配していたのだろう。2人が阿笠邸の玄関に入ると、奥から、家主の阿笠が少し慌てて出てきた。

「ごめん、博士……」

2人の表情がどことなく暗く、寂しそうで、阿笠の表情も曇った。
「何か、あったのかの……」

「蘭に、ホントのことを話した……」

阿笠の表情が引き締まった。そして、コナンと哀を交互に見ると、その目が細くなり、いたわるように2人を見た。

「そうか……蘭君には、いずれ、バレるとは、思っておったが……」

阿笠がそう言ったとき、玄関を上がり、リビングへ歩きかけた哀の手を、いきなりコナンが掴んだ。
そして、その腕を自分の方へ引き、哀を抱きしめた。

「くど……うくん？」

コナンの腕の中で、驚いた哀が目を見開いている。

「哀……俺は、おめえが好きなんだ……傍にいてくれ……」

コナンは、蘭に真実を話してから、哀が自分の傍から消えてしまうような予感に襲われていた。

蘭の寂しそうな表情を見たとき、その顔を辛そうに見ていた哀が、自分から、離れていってしまうような、そんな恐怖に、コナンは、とらわれていた。

阿笠邸に着き、少しホッとした途端、コナンは、哀を離したくないと強く思った。失いたくないと、強く思った。そうしたら、気づくと、哀を抱きしめていた。

阿笠が傍にいるのもかまわず、コナンは、強く、哀を抱きしめていた。

そんなコナンの胸の中で、哀は、黙って目を閉じた。

愛している彼に抱きしめられ、胸に幸福感がわきあがってきたが、今までと違い、それには、苦しくなるような痛みも伴っていた。

コナンの背中に回された哀の手が、すっと、コナンの胸のところにいくと、哀は、ゆっくりと腕を伸ばし、コナンから体を離れた。

「ありがとう、工藤君……」

そう言いながら、哀は、コナンと目を合わさずに、リビングの方へ歩き出した。

呆気にとられてみていた阿笠が、哀の背中を見送って、コナンに声をかける。

「どうしたんじゃ？いきなり……」

哀がキッチンへ消えても、コナンは、その方向を見たまま、阿笠に答えた。

「アイツ、蘭と話してから、様子がヘンなんだ……まあ、アイツの考えてることは、察しがつくけど……」

「あの子は……哀君は、優しいからの……ワシらなんかより、ずっと、優しいから……」

リビングへ歩いていくコナンの後を歩きながら、阿笠が言った。

「そだな……」

ソファに座ったコナンは、ふっと息を吐くと、背もたれに頭をつけ、天井を見上げた。

キッチンから出てきた哀が、3人分のコーヒーを持って、コナンの隣に座った。

コナンと哀の顔を交互に見た阿笠は、そのカップのひとつを取るど、地下室への階段に向かった。その背中に哀が声をかける。

「博士」

阿笠が振り返った。

「ありがと」

哀が阿笠の顔を見て、笑みを浮かべて言うと、阿笠もフツと笑顔を見せ、地下室への階段に消えていった。

「ね、工藤君・・・訊いていい？」

コーヒーカップを包むこむように両手で持ち、哀が口を開いた。

「あん？」

コナンは、俯き加減にソファに座る哀の横顔を見た。

「どうして、蘭さんに解毒剤のこと、言わなかったの？」

「もう、元の体には、戻れねえんだ・・・言う必要は、ねえだろ？」

「戻れねえって・・・忘れたの？あなたは、戻れるのよ。工藤新一に・・・戻れないのは、私だけ・・・そうでしょ？」

哀が顔を上げ、コナンの顔を見つめた。

「忘れてんのは、おめえだろ？・・・言っただじゃねえか、俺とおめえは、運命共同体だって・・・元の体に戻るにしろ、この体のまま生きるにしろ、一緒だって、そう約束したじゃねえか」

呆れたようなコナンの表情を見ていた哀は、そのまま、黙った。両手で握っているコーヒーカップが、僅かに震えている。

「嘘だっただのか？」

「え？」

不意なコナンの言葉に、哀が顔を上げる。

「一緒に生きていきえてって、俺と一緒に生きてえって、そう言ってくれたおめえの言葉だよ」

コナンの強い瞳に、哀は、思わず、目を伏せた。

「嘘じゃないわ・・・あなたと一緒に生きたい・・・でも・・・」

「じゃ、もういいだろ。蘭のことは、もう気にすんな・・・アイツだって、前を見て歩きだしてんだ・・・工藤新一に囚われずに、な」

コナンは、そっと、コーヒークップを握っている哀の両手に触れた。

「おめえも、俺と一緒に前を見てくれ・・・これから先を、未来を見てください・・・」

自分を見つめてくるコナンの瞳に目を合わせた哀は、その真っ直ぐな光りに思わず微笑んだ。

「わかったわ・・・ありがとう・・・くど・・・いえ、江戸川君」

「だから、俺の前から消えようなんて、そんなことすんなよ。そんなこと、ぜってえ、許さねえかな」

大好きな哀の碧い瞳を見つめ、コナンは、ニコツと笑った。

その笑顔に、哀も笑みを返していた。

第37章：前を向いて（後書き）

コ哀を描く上で、避けられないのが、蘭の関係だと思っています。第35章から今回までは、私なりの、蘭との関係についての「はじめ」をつけたつもりです。

ただ、コナン（新一）も、蘭も、哀（志保）も、若い成長途上の人間だし、そのことも書きたかったんですが、うまく表現できたかどうか・・・

蘭に、まだコナンと哀のことを認められないと言わせましたが、この部分は、この先、もう少し、蘭を描きたいというのが意図としてあります。

第38章：晶子

工藤新一という人物が何者なのか、調べるのには、大した時間、苦労はなかった。

高校生探偵で、日本警察の救世主とまで言われた推理力、頭脳の持ち主。

インターネットで検索すれば、関連ニュース記事の数から、彼についてのおおよそのことは、すぐにわかった。

そして、3年前、忽然と姿を消していた。
行方不明。死亡したとの噂が流れていた。

当時、帝丹高校2年生で、毛利蘭とは同級生。

晶子が知った事実は、誰もが知っていることだった。
ただ、3年経ち、高校生探偵工藤新一は、世間からは、忘れられた存在になりつつある。

しかし、彼に近い人たち、彼を知る人たちにしてみれば、彼の存在は、以前大きい。行方不明というのは、むしろ、その存在感をさらに大きくしているかもしれない。

「ああ、工藤は、頭が良かった・・・まあ、音楽を除けば、どの教科も、成績は良かったな・・・」

谷晶子は、自分の通う帝丹中学校で、その卒業生である工藤新一を知る教師から、彼についての話を訊いてみた。

「高校生探偵として、有名だったが、3年前から、行方不明になっ

ているらしいな。死んだっていう噂だが・・・」

「先生のところには、連絡はないんですか？」

「まあ、俺は、2年のときの担任だったが、とくに、連絡をしなくてもらったりしていないな」

「あの、毛利蘭さん・・・同級生だったと思うんですけど・・・」

「ああ、あの毛利小五郎の娘で、工藤の幼馴染だ。仲良かったな・・・でも、谷。どうして、工藤や毛利のことが気になるんだ？」

「あ・・・いえ、ネット見てたら、工藤新一っていう、すごい高校生探偵がいたって・・・で、この学校の出身だったって知ったから・・・」

工藤新一が1年生と3年生のときの担任教師は、他校へ転勤になっ
ていて、今は、この学校にはいなかった。

教師に礼をいい、職員室を出た晶子は、昨日の Conan と哀、蘭の
様子を思い返していた。

（蘭さんという新一というのは、工藤新一・・・2人は幼馴染だから、間違いない。じゃ、Conan 君が蘭と呼び捨てにしたのは・・・まさか・・・そして、蘭さんが驚いていた灰原さんのことって、いったい・・・）

晶子は、3年前、誘拐されたことがある。ちょうど、工藤新一が
失踪したと言われる頃だ。

当時、晶子の父は、探偵の毛利小五郎にその調査を依頼したが、
実際に自分の居場所を見つけ、救ってくれたのは、あの Conan だ
った。

今、思えば、晶子より3歳下の Conan が、どうして自分の居場所
を突き止め、助けることができたのか、不思議なことだ。

（蘭さんは、工藤さんとコナン君に一番近い人・・・蘭さんにしかわからない工藤さんとコナン君の秘密を知っている・・・そして、コナン君の近くにいたもう1人・・・灰原さんも・・・）

このことは、晶子は、確信している。

しかし、ここから導き出された結論は、にわかには信じられない。

（工藤新一さんとコナン君は、同一人物・・・）

こんな話、誰も信じてくれないだろう。

17歳の高校生が7歳の小学生に戻るなんてこと。

（でも、昨日の3人の様子・・・そう考えれば、納得がいく・・・）

誰も信じてくれないだろうと、晶子は思っていた。

蘭が真実を知った。

自分は、真実を隠すことに協力してきた。組織の目から逃れるために、コナンの正体を隠すことに、手助けしてきた。そして、自分の正体も隠してきた。

それは、本当に組織の目を逃れるためだけだったのだろうか。

コナンを新一に戻せば、彼は、自分から離れていく。それが怖かったのではないのか。

哀は、蘭がコナンの正体を知ったことで、そのことを蘭に気づかされたのではないかと思っていた。

大事な人を奪われた。

蘭は、そう思っているかもしれない。

いつそ、蘭に責められた方が、気が楽だったかもしれない。

コナンは、自分と一緒に未来を見てくれと言った。過去に囚われず、これから生きていこうと。

蘭も、すでに過去に、工藤新一に囚われていないとも言った。

（強い人・・・あなたも、蘭さんも・・・）

コナンの顔を見ると、哀は、そう思う。

そして、だから、自分は、今、生きているのだとも思う。

コナンと蘭の存在、その強さによって、哀は、助けられたのだ。だから、前を向いて、生きていかなければならない。

コナンが自分を必要としてくれるのなら、自分を求めるのなら、それに答えたい。

蘭が真実を知った。

それは、覚悟していたことではある。そして、蘭と新一を、結果的に引き裂いてしまったという想いも、哀は、一生背負っていくことを、覚悟している。

自分がコナンを愛する限り、彼と、共に歩いていく限り。

「まだ、考えてんのか？」

コナンは、いつも自分を見ている。

自分がコナンをいつも見ているように、コナンも、いつも自分を見ている。

哀には、それが嬉しく、怖かった。

「・・・あなたの前じゃ、すっかり考え事もできないわね」

呆れたようなコナンの顔を見て、哀は、そう言ったが、次第に可笑しくなってきた、つい、吹き出してしまった。

「あんだよ・・・何がおかしいんだよ・・・」

コナンが膨れる。

「うつん・・・あなたといると、考え込むことが、バカらしく思えてきてね・・・」

ソファに座っていた哀は、立ち上がって、2階からの階段の下に立つコナンの前に立った。

「なんだよ、それ。俺は、何も考えてねえって、言いてえのかよ」

コナンは、前に立った哀に膨れた顔を突き出しながら言った。

「あなたは、私が心配していること、難なく解決しちゃうってことよ」

哀は、そう言って、コナンの胸に手を当て、その肩に頭を預けた。

「なんか、ごまかされたような気もするけど・・・」

そう言って、コナンは、哀を抱きしめた。

「ねえ、蘭さんがあなたのこと、工藤君だと知ったって、目暮警部やジョディ先生に言わないといけないんじゃない？」

コナンの肩に頭を預けたまま、哀が言った。

「そだな。言つとかないと、いけねえだろうな・・・」

その頃、毛利探偵事務所の上、蘭の自宅の方の呼び鈴が鳴った。

「はい？」

蘭がドアの内側に立って返事をした。

「あの、私、谷晶子です・・・蘭さんに、お話があつて・・・」
「晶子・・・さん？」

蘭は、怪訝に感じながらも、ドアを開ける。そこに立っている晶子は、ドアを開けて蘭が現れると頭を下げた。

第39章：蘭と晶子

「どうぞ」

玄関のドアを開けると、蘭は、晶子を居間に招きいれた。

ジュースを入れたコップを晶子の前に置くと、蘭は、向かいに座った。

晶子は、改めて見た蘭の顔を綺麗だと思った。
優しく見つめてくる瞳の色は、青く深い。

「それで、私に話って、何？」

蘭は、穏やかな笑みを浮かべ、晶子を見た。

「この前、パーティーの後、私、ここで蘭さんがコナン君と灰原さんと話しているの、ちよつとだけ、聞いちゃったんです」

「え!？」

蘭の顔に驚きの色が浮かぶ。その表情の変化の大きさに、晶子も驚いた。

「全部、聞いたの？」

「いえ・・・」

晶子は、そこで口籠ってしまった。
俯いて、手を膝の上に置いている。

蘭は、少しホツとして、晶子の次の言葉を待った。

「私、知りたいんです・・・」

しばらくの後、晶子は、少し顔を上げて言った。

「何を知りたいの？」

蘭は、表情を緩め、優しく訊いた。

「私、コナン君のこと、すごく気になるんです・・・自分でも不思議なんですけど・・・たぶん、前に誘拐されたとき、助けてくれたからだとは思うんですけど・・・」

少し戸惑った表情が見える晶子は、やっと、蘭の顔を見た。

「中学生の私が、小学生のコナン君のことが気になるなんて、ヘンだと自分でも思います・・・でも、コナン君、大人びているし・・・」

「

蘭は、自分の言葉を待ち、顔を見つめてくる晶子に微笑んだ。

その顔に見惚れた晶子だが、決心したように蘭を見つめ直し、言葉が続けた。

「失踪した工藤新一さん、蘭さんの幼馴染だそうですね」

「え？・・・ええ・・・でも、どうして、急に新一のことなんか・・・」

「

「似てるんです・・・工藤さんとコナン君・・・インターネットで工藤さんの写真のある記事を見ました。一目見て、コナン君と似てると思いました」

蘭の表情が少し硬くなった。

晶子は、そう思った。

「コナン君と新一は、親戚だもの・・・似ていても不思議はないよ」
蘭は、努めて冷静に言った。

「でも、昨日、蘭さん、新一って、言っていましたよね。あれって、誰かに呼びかける感じだった・・・でも、ここに工藤さんは居なか

った・・・もしかして、蘭さんが新一と呼んでいたのは、コナン君のことじゃないですか？」

蘭は、フツと笑った。その笑顔は、硬い。

「そんなバカな・・・コナン君はコナン君だよ・・・だって、歳も違うでしょ・・・確かに、コナン君は、新一に似てるけど、コナン君が新一なわけ、ないでしょ」

「じゃ、なぜ、蘭さんは、新一と呼んでたんですか？それに、コナン君が蘭さんと呼びすてにしたのも、ヘンです」

「別に、呼んでなんかないよ。ただ、新一の話が出ただけで、コナン君が私を呼び捨てにしたのも、新一の言った言葉を真似ただけ・・・」

蘭は、きつい表情になった。そして、晶子の目をまっすぐに見つめる。

その鋭い目に晶子は、たじろいだ。

しばらく、そのまま晶子を見つめていた蘭だが、フツと優しい笑みを浮かべる。

「ね、晶子ちゃん。他人の話を立ち聞きなんて、よくないよ・・・人には、それぞれ、他人には、聞かれたくないこと、知られたくないことがあるわ・・・晶子ちゃんにもあるでしょ？」

蘭の顔は笑っているが、瞳には、強い光があった。

「コナン君も、哀ちゃんも、確かに大人びてるし、頭もいい。でもね、あの2人は、辛い思い、苦しい思いもたくさんしてきたの・・・普通の大人よりも、ね」

晶子には、笑っている蘭の表情が寂しそうに映る。

「だから、あの2人は、小学生でも私なんかより、大人びてるのかもしれない・・・」

晶子には、もう何も言えなくなった。

「そうか・・・ごめんな、蘭」

『新一・・・これから、こんなこと、あると思う。何年かすれば、新一に瓜二つなあなたを、工藤新一を知る人が見かけたら、どう思うか・・・』

「ああ、そだな・・・」

『でも、哀ちゃんのためにも、あなたは、隠し通すのね・・・工藤新一という本当の顔を・・・』

「ああ・・・おめえにも、悪いと思ってる・・・一緒に嘘つかせて・・・」

『いいの・・・そのことは、気にしないで・・・じゃ、博士と哀ちゃんによろしく』

「ああ」

コナンは、晶子が自分達のことを不審に思い、訪ねて来たことを蘭から電話で聞いた。

（蘭、ホント、すまねえ・・・）

阿笠邸。

コナンは、フツと息を吐くと、ソファに腰掛けた。

「どうしたの？」

声のする方にコナンが顔を向けると、地下室からの階段を上がったところに、哀が立っている。

「いや、別に・・・」

コナンは、立ち上がった。その傍に、哀が歩いてくる。

「そう・・・なら、いいけど・・・」

哀の頭をポンと軽く叩くと、コナンは、笑顔を見せた。

「な、晩飯作るんだろ？手伝おうか？」

「あら、珍しいわね・・・明日は、雨かしら？」

半目で言う哀を睨むコナン。

その顔に哀は、クスッと笑った。

「じゃ、お願い」

そう言ってキッチンの方へ足を向けた哀の背中に、コナンは呟いた。

（守ってやつから・・・そして、幸せになろう）

「え？」

コナンの視線に何かを感じ、哀が振り返った。

コナンは、少し慌てた。

「あ・・・いや、なんでもねえよ・・・」

そう言っで、コナンは、哀の背中に手を当て、一緒にキッチンへ入っていった。

第39章：蘭と晶子（後書き）

うーん、谷晶子というキャラ、活かしきれませんでした・・・反省。彼女を登場させたのは、哀のライバルというより、コナンと哀の正体に疑問を持つ人を作りたかったからなんです。が、イマイチ、描ききれませんでした。

第40章：噂

5つの影が帝丹小学校への道を歩いている。

あれから2年。

少年探偵団の5人は、6年生になった。

この間、穏やかな日々が続いている。

哀にとって、この2年は、今までになかった幸せな時間だったといえる。

「しかし、奇跡の探偵団ですね。6年生になって、また5人、同じクラスになれるなんて・・・」

光彦は、去年ぐらいから、背が急に伸びた。

元々、同じくらいの身長だったコナンと哀、歩美の3人に比べると、少し背が高かった光彦だが、1年生の頃から、体が大きかった元太と比較しても、身長では、ほとんど差がなくなっている。

「そだな。また、少年探偵団の活躍が多くなるぜ」

元太も光彦ほどではないが、身長は伸びている。もっとも、小学生らしからぬ巨体は、相変わらずだ。

「修学旅行もあるし、楽しみだね」

歩美も身長が伸びた。

小学生の高学年というのは、男子より女子の方が、成長が大きい。歩美は、光彦より少し身長が低い。しかし、以前は、クラスメイト達の中では、身長の低いほうだったのが、今は、中くらいまでになっている。

哀が心配していたのは、この成長だった。

アポトキシン4869により幼児化したコナンと哀が、普通の小学生のように、ちゃんと、成長していくのかどうか、それを気がかりにしてきた。

小学4年生の頃までは、コナンも哀も、さほど身長が伸びなかった。

「ねえ、哀。最近、蘭お姉さんに会った？」

そう尋ねる歩美の顔は、哀のほぼ、真横にある。

哀も、歩美と同じくらいまで、身長が伸びた。

「うん。長いこと会ってないけど・・・蘭さんがどうかした？」
哀が答える。

コナンは、光彦、元太とサッカーの話で盛り上がりながら、哀たちより少し前を歩いている。

そのコナンも、光彦より、僅かに低いところまで、身長が伸びていて、その姿に、哀は、ホッとしている。

「この前、マリアちゃんが言ってたんだけど、蘭お姉さん、新出先生と、よく一緒に歩いてるのを見て・・・」

「新出先生と？」

「うん・・・仲良さそうに歩いてるって言ってたよ。だからさ、コナン君、蘭お姉さんから、何か聞いてないかなって思ってたさ」

歩美は、好奇の目で哀の答えを待っている。その顔に苦笑しながら、哀は言った。

「江戸川君からは、何にも聞いてないけど？」

「そうかあ・・・コナン君が哀に訊けば、何かわかると思ったんだけどなあ・・・」

「それに、江戸川君も、最近、蘭さんと、ほとんど、会ってないわよ」

「え！？・・・そうなの・・・」

「・・・うん」

「・・・何？蘭お姉さんと喧嘩でもしたの？」

「そういうわけじゃ、ないと思うけど・・・」

「そうなんだ・・・コナン君って、今でも、蘭お姉さんのこと好きなんだと思ってたけど・・・あ！お姉さんとしてという意味だよ・・・コナン君にとっての一番は、哀だよ」

歩美が少し慌てて言うので、哀は、思わず、吹き出してしまった。

「そんなこと、言い訳しなくていいわよ」

「えへっ・・・でも、コナン君、蘭お姉さんと会ってないって・・・新出先生のこと、関係あるのかなあ？」

「さあ・・・そういえば、もう1年になるわね・・・新出先生の奥さんが亡くなってから・・・」

「そうなんだよ・・・だから、新出先生と蘭お姉さん、付き合ってるのかな、って・・・」

30歳になる新出智明は、開業医で、この米花町で医院を営んでいる。

新出家は、以前、悲劇に見舞われた。

智明の実父が、その後妻に殺されたのだ。

その事件は、コナンが解決したのだが、これには、一部の関係者しか知らない事実が、今も隠されている。

智明の父、義輝は、浴槽につかっているとき、停電が起こり、そこへ、浴槽に入れられた電動シェーバーにより、感電死させられた犯人である智明の義母、陽子が、その仕掛けをしたことを知らず、新出家でお手伝いをしていた保本ひかるが、停電時にブレーカーを入れたため、義輝は死亡した。

この真実を知っているのは、一部の警察関係者とコナン、それに智明のみだった。

ひかるがブレーカーを上げたため、義輝が結果的に死んでしまったことをひかる本人が知れば、それが心の傷になる。

それを怖れたコナンが、目暮警部たちと示し合わせ、その事実を隠蔽していた。

その後、黒の組織のベルモットが智明に変装し、彼を殺そうとしていたため、FBIのジョディたちが先手を打ち、智明が事故死したと見せかけ、アメリカで匿っていた。

その際、ひかると智明の祖母も同行していたが、一応の安全が認められた後、日本に戻っていた。

智明がひかると結婚したのが3年前。

しかし、その結婚生活は長く続かず、1年前、交通事故でひかるが亡くなった。

その時の智明の悲しみ方は、尋常ではなかった。

ひかるは、お手伝いとしては、優秀とはいえなかったかもしれない。

仕事を覚えるのには、時間も掛かったし、どちらかといえば、内気で、智明の父から怒られることも多かった。

彼女は、智明が東都医大の研修生だった頃、臨床実習で担当した患者だった。その縁で、新出家にお手伝いとして雇われた。

実の母を交通事故で失っている智明にとって、同じ交通事故で妻を亡くしたことは、よほど辛いことだったのだろう。

しかし、彼は、医師だった。

患者の命を預かる医師であり、責任感、正義感の強い智明は、医院にくる患者のために、立ち直った。妻を亡くした悲しみを乗り越えた。

少なくとも、彼の周りの人は、そう思った。

そんな智明が、蘭と一緒に居るところを目撃した者が大勢いると言っ。

「え？蘭が新出先生と？」

「何？気になる？」

驚いてこちらに顔を向けたコナンを、哀は、少し半目になって睨んだ。

下校途中、歩美や元太たちと別れてから、哀は、コナンに歩美から、蘭が智明と一緒にいるところをよく見られてるという話をした。

「あ・・・いや、そうじゃないけど・・・」

慌てるコナンを見て、哀は、クスッと笑った。

「冗談よ」

「おめえ・・・」

「でも、気になってるのは、本当でしょ？」

「まあな。アイツには、幸せになってほしい・・・ま、新出先生なら、蘭を泣かすようなことはしねえだろ・・・」

「でも、新出先生の奥さん、亡くなって1年でしょ？微妙な時間よね」

「・・・そうかな・・・」

コナンは、複雑な表情をしていた。

その横顔を、哀は、少し寂しそうに見ている。

そんな哀に気づいたコナンは、笑顔を向けて言った。

「ま、どっちにしても、蘭が俺・・・工藤新一を忘れられたんなら、よかったと思うぜ」

その言葉を聞いても、哀には、その複雑な心の中を、その胸の痛みを感じざるを得なかった。

コナンという限り、彼と幸せになろうとする限り、蘭のことは、哀の胸に痛みとして、残り続けるだろう。

ただ、蘭が幸せになれば、その痛みは、少しは、薄くなるかもしれない。

哀には、智明の気持ちもわかるような気がする。

母を事故で失い、義母が父を殺害するという事件が起こり、妻をまた、事故で失った。

家族を失う悲しみ、辛さは、身を持って体験してきた哀には、よく理解できる。そして、その傷を癒してくれる存在の暖かさが、涙が出るほど嬉しいことも。

「おめえの方が、気にしてんじゃねえのか？」

そうコナンに言われ、哀は、ハッとして、顔を上げ、彼を見た。

心配そうに自分の顔を見ているコナンに、哀は、少し硬い笑顔を見せた。

「・・・そうかもね」

呟くように言つと、哀は、俯き加減に前を向いた。

そんな哀の様子を、コナンは、目を細め、いたわるような、優しい表情で見ている。

哀には、わかつている。

コナンは、蘭のことが気になってしかたなくせに、自分のことを気遣い、彼女に会うことも、電話ですら話そうともしないでいることに。

「ありがと」

「え？」

哀の呟きが聞こえなかったコナンは、彼女に聞き返した。

「ううん。なんでもない・・・」

そう言つて笑顔を作つた哀は、右手をコナンに差し出した。

不審な顔をしたコナンだったが、差し出された哀の手をとると、彼も笑顔になった。

第40章：噂（後書き）

更新に時間が掛かっております。

この間、コメントをいただいた方々、ありがとうございました。返信の方も、少しずつ、させていただいています。返

第41章：ゆっくり

蘭にとって、この2年間という時間は、慌しくもあったが、今までで、一番、考え続けていたような時間だった。

幼馴染で、一番身近な存在だった工藤新一は、世間では、失踪したまま、行方不明ということになっている。

しかし、彼は、蘭の近くにいた。

今でも、この町にいる。

彼を知る人のなかでも、さらに、ごく一部の人だけが、新一が姿を変え、この町にいることを知っている。

蘭もその1人。

しかし、新一の心は、すでに自分のところにはない。

そんな蘭には、最近、気になる人が現れた。

以前からその人のことは、知っている。

蘭が卒業した帝丹高校の校医でもあった、開業医の新出智明だった。

彼は、1年前に妻を亡くしている。

大学でも空手を続けた蘭だったが、1回生の時、練習中にケガをした。その時、智明の診察を受けたことがきっかけで、彼には、その後、アドバイスを受けていた。

なので、智明が妻を亡くした時の悲しみようは、よく知っている。

人前で取り乱すことが少なく、どちらかといえば、物静かな彼が、一度だけ、声を上げて泣いているのを蘭は見た。

智明の亡き妻のお通夜の席に、蘭は、合宿に行っていたため、夜遅く、その会場に行った。

すでに夜１１時近くになっていて、会場には、弔問客もおらず、遺族も控え室などで休息していたのか、人影はなかった。

ただ、智明ひとり、妻の遺骸が納められた棺の傍に佇んでいた。

蘭が声を掛けようとしたとき、智明が大きく声を上げ、泣き始めた。

しばらく、その様子を見ていた蘭だったが、かける言葉もなく、その場から手を合わせ、泣き続けている新出の背中に礼をして、会場を後にした。

あれから１年。

自分でも気づかないうちに、蘭の中で、智明の存在が大きくなっていった。

智明にとっても、蘭の存在は、救いだった。

最愛の家族を亡くした智明にとって、明るい蘭と会うことで、どれだけ、気持ちが楽になったことか。それに、蘭のことは、ひかると結婚する以前から知っている。

「先生……訊いて、いいですか？」

蘭と智明は、米花駅前の喫茶店にいた。

「何？」

蘭の顔を見つめる智明の顔は、相変わらず、優しげだ。でも、蘭が高校生だった頃、知り合った頃と違い、その顔には、哀しみの色も混じっている。

最愛の妻を突然失って1年、智明の傷は癒えていないのだろうと、蘭は思った。

「あの…私と、どうして、こうして会ってくれるんですか？」

真剣な目をした蘭の問いに、智明は、正直、戸惑った。

蘭は、幼馴染で仲の良かった新一を失ったと言う。

「世間では、高校生探偵の工藤新一は、失踪したままで、もう忘れられてます。でも、新一は、生きてると、私は、知ってます。でも、もう、私のところには、帰って来ないんです…もう、絶対に…」
そう寂しそうに、それでも、強く、何かを決意したように言った蘭のその時の顔は、智明の知っていた蘭ではなく、もっと、大人になった女性の顔だった。

辛いことも、含め、すべてを受け入れ、何かを手放し、何かを得たような強い女性の顔。それでいて、どこか寂しげな顔は、随分と大人になり、美しくなった。

その蘭に、自分は、惹かれているのだろう。

智明は、そう素直に思う。しかし、ひかるを、亡くして1年ほどの妻のことを忘れてはいない。

今、蘭の素直な問いに、まだ、はっきりしない自分の気持ちを、智明は、改めて感じていた。

「君に、惹かれているのは、事実だと思う…でも、卑怯かもしれないけど、ひかるのことを忘れていないのも、事実なんだ…だから、今は、君と会うことで、自分の心を癒しているのかもしれない…」

「…先生……」

智明の言葉を聞き、蘭は、呟くように言うと、フツと優しい笑み

を浮かべた。

「先生は、正直すぎます。でも、本当は、私の方が先生と会うことで、救われてるんです。新一のこと、ちゃんと話せるのは、園子と先生ぐらいですから…」

蘭は、微笑んだ。そして、少し間をおき、また、話しはじめた。

「先生、ありがとう…私の質問に、ちゃんと、正直に答えてくれて…ねえ、ゆっくり…慌てずに、ゆっくりと、歩いてみませんか？」
「え？」

智明は、微笑んで言う蘭に、少し不審な顔をした。

「自分の気持ちって、わからないときって、あると思うんです…とくに、先生みたいに、奥さんを亡くして、まだ、1年ぐらいだから、ゆっくりと、焦らずに、自分の気持ちを見つめてみませんか？どんなに、時間をかけても、いいですから…」

智明は、優しく話す蘭の顔に、僅かな哀しみを感じた。

おそらく、彼女は、幼馴染への想いを、もう帰らない彼への想いを、時間をかけて自分のなかで、整理したのだろう。

涙を流したかもしれない。

眠れない夜も過したかもしれない。

そうやって、彼女は、彼への想いに区切りをつけ、成長し、綺麗になったのだと、智明は思った。

「ありがとう…蘭さん」

智明は、彼らしい、優しい笑顔で言った。

久しぶりに心からの笑顔を見せられたような、智明は、自分で、そんな気がしていた。

「先生、お礼を言うのは、私の方ですよ」
蘭も、久しぶりに、心からの笑顔ができたような気がした。

「コナン、くん！」

学校の帰り、哀と歩いていたコナンは、甘い声に呼び止められ、ビクリとして、その場に立ち止った。
怖ろしくて、振り返れない。

隣では、哀が、ため息をつき、声の方を振り返っていた。

「晶子さん……」

（また……）

コナンは、振り返らず、その場から立ち去りたい気分だった。哀も、コナンの顔を見て、やれやれといった顔をしている。

しかし、実年齢はともかく、彼女は、3歳年上の中学3年生だ。呼び止められて、無視もできなかった。

「何？晶子さん」

晶子は、2年前のパーティーにコナンと一緒に出席して以来、時々、顔を見せていた。

あの時、コナンの正体を疑い、蘭を尋ね、そのことを訊いた。蘭に強く否定され、その秘密を探ることを暗に止められた晶子は、以降、そのことは、一切口にしなくなっていた。

ただ、時々、コナンや哀の前に現れる。

普通、中学3年生の女子生徒が、小学6年生の男子生徒に好意を持つなどということは、あまりないだろう。

しかし、晶子は、コナンに明らかに好意を持っている。

そして、あの蘭と話した後、数ヶ月の時間を置いて、コナンの前に好意を示しながら、現れるようになった。

ただ、晶子は、哀に対しても、好意を持っているようだ。

コナンの大事な人としての哀の存在を、歩美や光彦たちと同じように、認めている。その上で、コナンに好意を示してくる。だから、哀にとって、晶子の存在は、大きなものになってきていた。

世間的にみれば、中学3年生の晶子が、小学6年生のコナンに好意を持つには、変わっているのかもしれないが、哀からみれば、見かけで3歳年上であることも、コナンの実年齢と比較して7歳年下であることも、そういう年齢の差は、あまり意味を持たないと思う。

それに、彼女は、やはり可愛い。

哀から見ても、自分などより、遥かに可愛いと思う。

以前は、さして気にしていなかった晶子の存在は、哀にとって、最近、大きなものになっていた。

「ね、コナン君、灰原さん、阿笠博士、今日、いらっしゃる?」

「え?あゝいるよ」

「そうじゃ、このまま、一緒にお邪魔していい?」

そう言われ、コナンは、助けを求めるように哀の顔を見たが、彼女は、少し呆れた様子でコナンを見ただけで、すぐに視線を逸らして前を向いてしまった。

実は、阿笠は、この晶子を気に入っている。

晶子は、阿笠が発明したり、開発した製品に関心を持ち、よく、その製品を褒めたり、感心したり、感嘆の声を上げるので、阿笠にとっては、気分を良くしてくれる存在だった。

晶子も、阿笠の奇想天外な発明が好きだった。

阿笠にとって、同居人の2人は、こと自分の発明品の批評に関しては、手厳しかった。

コナンは、事件捜査などに役立つものは、喜んで受け取るが、それ以外のものには、さして興味を示さないし、つまらないと思えば、呆れたような顔をして、阿笠の顔をマジマジと見つめてくる。

哀に至っては、もっと手厳しく、大したものではないと思うと、容赦なく辛辣な言葉を浴びせてくる。

だから、阿笠の発明品であれば、なんでも興味を持つ晶子は、発明家の彼にとっては、披露のしがいがあるというものだった。だから、晶子連れて行くと、阿笠は、もろ手を挙げて大歓迎する。

「博士は、晶子さんが来ると喜ぶし、かまわないと思うけど……」

コナンは、そう言いながら、また、哀の顔色を覗う。

哀は、前を向いたまま、すました顔をしている。その様子に、コナンは、小さくため息をついた。

いかに鈍いコナンでも、晶子が自分に好意を持っているのは、わかる。それも、2年前のパーティーに一緒に行ったときより、かなり強く、それを感じる。

(哀のヤツ…)

そんな晶子を目の当たりにして、哀はどう思っているのか。

哀は、晶子のことについては、なにも言わない。

コナンは、哀の横顔を見ると、もう一度、今度は、さつきより深く、ため息をついた。

「へえー。コナン君の靴って、あの時のことをきっかけにして、博士が作ったんだ…」

阿笠邸で晶子は、得意げにニコニコしている阿笠の前で、コナンの靴を手にとって見ている。

新一が小さくなり、コナンとして最初に遭遇した事件は、晶子が誘拐された事件だった。

その時、晶子が監禁されている場所を見つけ、乗り込んだコナンだったが、7歳の子供になってしまっていたコナンの腕力では、その場にいた犯人を捕まえるどころか、逆に殺されてしまいそうになった。

そんなコナンが、犯人を捕まえるため、阿笠に頼んで作ってもらったのが、キック力増強シューズだった。

「あの時、蘭さんが来なかったら、コナン君も私も、殺されてたもんね」

懐かしそうな顔をしている晶子の顔を、阿笠は、相変わらずの笑顔で見ている。

「博士、あの子のこと、気に入ってるわね…かなり」

「ああ……なんだ、おめえ、晶子ちゃんに嫉妬してんのか？博士の

こと」

コナンと哀は、少し離れ、ソファに座って、博士と晶子の様子を見ている。

コナンに凶星を指され、哀は、少し慌ててコナンから顔を逸らした。

「そ、そんなことないわよ」

「素直じゃねえな…ま、博士にしてみりゃ、俺やおめえより、晶子ちゃんの方が自分を認めてくれると思ってるかもな」

「私だって、認めてるわよ」

哀がコナンに顔を向け、少し怒ったように言った。

「そりゃ、俺だって認めてるさ。博士には、なんでも話せるし、相談もしてるし…」

「でしょう?」

「博士にとっちゃ、俺達は、口うるせえ子供、晶子ちゃんは、可愛い孫ってとこかもな」

「すました顔でいうコナンが哀には、なんだか可笑しくて、クスツと笑うと言った。

「年下の私たちが子供で、晶子さんが孫なの?」

「たえ話だろ…」

「ね!コナン君、この靴、履いてみていい?」

晶子がコナンの方に顔を向け、その靴をかざした。

「え?...あ、別にいいけど…」

「ありがとう」

晶子は、嬉しそうにコナンの靴を履くと、キック力増強つまみを回した。

「あ！ちょ……」

コナンが声をかけようとして、晶子の方へ近づきかけたとき、晶子の足元にあった彼女の鞆が、すごい勢いで飛んできた。思わず、コナンが体をずらしてよけると、顔をかすめた鞆は、後へ飛び去った。

ドサツという大きな音と共に、鞆は、哀が座っていたソファのすぐ横にある柱にぶち当たり、哀の足元に落ちた。

「……」

あまりの威力に、鞆を蹴った足を上げたまま、晶子は、呆然としている。

「使い方、難しいんだから、やたら蹴っちゃだめだよ」

「……その言葉、蹴る前に聞きたかったわ」

叱るように言ったコナンに目だけを向け、晶子が言った。と、ハッとして、晶子が哀の方に目をやった。

「あ！……哀ちゃん、ごめん。ケガない？」

哀の傍に鞆が落ちたことに気づき、晶子が言った。

「ええ……大丈夫」

そう答えながら、哀は、ふうつと大きくため息をついた。

第42章：蘭の迷い

「じゃ、お邪魔しました!」

阿笠にそう言ってペコッと頭を下げると、晶子は、玄関に向かった。

「コナン君、哀ちゃん、またね」

ニコッと、明るい笑顔を見せると、コナンと哀に手を振った。

晶子が玄関を出て、ドアを閉めると、コナンは、フーと大きく息を吐いた。

「しかし、どういうつもりなのかな? 晶子ちゃん…」

少し、疲れたようにソファに腰を下ろし、コナンが言った。

「あなたに好意を持ってるのよ」

隣に座った哀が、コーヒーカップを差し出しながら言った。

「そりゃ、わかってっけど…」

カップを受け取ったコナンは、少し不服そうな顔をしている。

「何?」

不服そうなコナンの顔を横目で睨み、哀が訊いた。

「おめえは、どう思うんだよ… 晶子ちゃんの行動…」

コナンがそう言つと、哀は、フツと笑みを浮かべ、イタズラっぽく目を細め、コナンの顔を見た。

「あなた次第よ…」

「はあ?」

哀は、立ち上がると、コナンに背を向け、窓の外に視線を走らせた。

「彼女、可愛いし、明るいし… あなたに好意を持ってる…」

「哀……」

「あなたが来るなど言えば、晶子さんは、ここへは、来ないでしょうね。でも、そんなこと、あなたには、言えないでしょう？……それに、彼女、私たちの正体を薄々感づいている……その上、私とあなたの仲も、知ってるのよ……それで、好意を示してくるんだから、どうしようもないわ」

哀は、両手を後で組んで、コナンに顔を向けている。

「どうしようもないって……」

コナンが少し呆れていると、哀が続けた。

「つまり、私たちのこと、ほぼ、事情を知ってて、あなたに好意を示してくる彼女は、無敵だってこと」

「無敵、ねえ……」

哀は、コナンの方に体を向けた。

「でも、私は、好きよ。晶子さん……今のままで彼女がいいのなら、私は、このままでいい」

そう言つと、哀は、また、コナンの隣に座った。

「私、嬉しいの……晶子さんのように、私に好意を示してくれる人がいるってこと」

「哀……」

コナンは、自分の方に体を寄せてくる哀の肩を抱くと、彼女の頬に手を当てた。そして、唇を重ねる。

「ま、おめえがそう言うのなら、しばらくは、晶子ちゃんの好きにさせておくか……」

哀から唇を離れたコナンは、彼女に微笑んでそう言った。

「やっぱり、仮面ライダーシリーズは、最高ですね」

「もう、6作目なんだな、映画」

「次の映画ができるころは、中学生だね」

日曜日、仮面ライダーシリーズの映画を観た少年探偵団は、米花駅近くのショッピングセンターにやってきた。

いつものように、はしゃぐ3人の後をコナンと哀は、並んで歩いている。

「随分、疲れた顔してるわね」

「そりゃ、仮面ライダーシリーズを4から6まで、連続3本も観せられりゃ、な」

そう言つて、コナンは、大きく伸びをした。

「そうね。でも、結構楽しめたわ…4作目ぐらいから、大人も楽しめるようになってきてるし…」

伸びをしているコナンを横目で見て、哀がそう言った時、歩美が声を上げた。

「あ！蘭お姉さん！」

「え？」

「歩美ちゃん…みんな…」

（蘭……）

（綺麗……）

久しぶりに見る蘭の姿に、哀は、そう思った。そして、コナンの顔を見ると、蘭に見惚れたように、半ば、啞然としたように、蘭の顔を見ている。

その様子に、哀は、少しムツとしてコナンの背中を突いた。

「何、見てんのよ」

「え？…ああ、アハハ…」

「久しぶりね、コナン君、哀ちゃん…」

蘭は、優しい微笑みを浮かべ、コナンと哀を見た。

「元気？」

「うん。蘭姉ちゃんも元気そうだね」

「ええ」

蘭とコナンは、顔を見合わせ、微笑んでいる。

「蘭さん、お待たせ…っと、君達……」

現れたのは、智明だった。

「新出先生！」

「おひさしぶりです…で、ここでお2人、なにしてんですか？」

光彦が少し、目を細め、意地の悪い目つきをしている。

「決まってるよ！デートだよ、デート！」

「歩美ちゃん！」

歩美が大きな声を出したので、蘭が慌てた。その隣で、智明も赤い顔をしている。そんな2人を見て、コナンと哀は、ホッとしたような笑顔をしていた。

蘭は、そんな2人に顔を向けると、優しい笑顔をする。

（蘭……）

作り笑顔ではない、心からの笑顔。それは、コナンが知っていた蘭より、遥かに大人で、魅力的な女性で、そして、なにより、綺麗だと思った。

コナンは、そんな蘭の笑顔を随分長い間、見ていなかったような気がした。

蘭の顔を見て、優しい笑みを浮かべている、そんなコナンの横

腹をまた、哀が突いた。

「え？…あ、ハハ……」

でも、哀も微笑んでいた。

「綺麗になつたわね、彼女…」

「ああ」

智明と2人、歩美達に囲まれて微笑んでいる蘭を見ながら、コナンと哀は、並んで立っている。

「あなた、後悔してるんじゃないでしょうね…彼女より、私を選んだこと…」

哀は、横目でコナンを睨んでいるが、その顔は、笑っている。

「してるわけ、ねえだろ……おめえだって……」

「私だって…何？」

赤い顔して言いよどむコナンの顔を、哀は、楽しんでみている。

コナンは、その哀の頭をポンと軽く叩いた。

「あのくらいの笑顔、できるだろ？」

「さあね」

哀は、すました顔で、横を向いたが、目元は笑っている。

しばらくして、蘭は、歩美達を智明に任せ、哀の元へやってきた。

「哀ちゃん、ちょっといい？」

蘭は、哀の隣にいるコナンに目配せする。と、コナンは、蘭の言いたいことを察した。

蘭に笑顔で頷き、哀の方を見ると、彼女もわかっているようだった。

コナンは、哀に笑顔を見せ、ポンポンと頭を優しく叩くと、歩美や智明の方へ言った。

「邪魔者は、いなくなったわよ」

哀が蘭に向かって言うと、蘭は、微笑んで頷いた。

2人でシヨップینگセンターの外にある、公園になっているスペースにやってきた。

噴水があり、その前のベンチに座る。

「ねえ、哀ちゃん、新一……コナン君は、優しくしてくれる？」

「え？……ええ」

「そう……よかったね」

蘭が少し硬い表情をしているのが、哀には気になった。

「どうしたの？何かあった？」

「うん……実はね、新出先生にね、結婚しようって、言われたんだ……」

「そうなの……それで、蘭さんの気持ちは、どうなの？」

蘭の表情が少し冴えない。智明にプロポーズされたことが嬉しくないのだろうか。まだ、工藤新一を忘れていないのだろうか。

哀は、そんなことを思って、蘭の言葉を待った。

「私ね、新出先生の亡くなった奥さん、ひかるさんのこと、知っているの……って、いっても、そんなに話したりしたことは、ないんだけど……」

「不安なのね」

哀には、蘭の気持ちがわかったような気がした。

蘭は、智明が自分とひかるを比較することを怖れているのではないだろうか。

「新出先生がもつと私を知ったら、がっかりするんじゃないかって……自分でも、バカだと思う。でも、そんな想いがずっと、心から離れなくて……」

いつもの蘭らしくない不安げな顔に、哀は、フツと笑みを浮かべた。

「何？哀ちゃん……」

「あなた、私をどう思う？」

蘭には、哀の言葉の意味がわからなかった。

「工藤君が私のことを好きだって言ってくれた時、真っ先にあなたの顔が浮かんだわ」

「え？」

蘭は、少し驚いて目を大きくした。

「そしてね、工藤君は、何か勘違いしていると思った……気がふれたんじゃないかも……」

そう言うのと、哀は、可笑しそうに笑う。

「でもね、彼、そんなことを軽率に言える人じゃないでしょ？……それに、彼のお母さんにも言われたの……自分に自信を持て……工藤君の想いから逃げるなって……そして、自分の想いからも……」

哀は、蘭の顔を見つめた。

「新一の想い……哀ちゃん自身の想い……」

「そう。だから、あなたも、新出先生の想いから逃げないで……そして、自分の想いからも……」

「でも、ひかるさんが……」

「あなたね、私が、あなたに敵う部分があると思う？」

「え？」

「私、今でも、あなたには、敵わないと思うわ……強さ、優しさ、素直さ、思いやり、明るさ……どれをとっても、あなたに勝てると思う」

ものは、何ひとつないのよ……ただ、私は、工藤君が好き。そして、彼が私を想ってくれてることを信じてる……だから、私は、迷わない……かつて、彼は、あなたのことが好きだったわ。それを私は、よく知ってる……でも、私は、あなたには、敵わないけど、今の工藤君を信じてるの……私を想ってくれている彼をね」

蘭は、そこまで聞いて、表情を和らげた。

「人と人って、比較することで、成り立っているわけじゃないでしょ？あなた、亡くなった奥さんを大事に想っている新出先生を愛せない？亡くなった奥さんへの想いを抱えた新出先生があなたを愛せないと思う？」

「哀ちゃん……」

「私は、あなたのことを今でも、大事に想っている工藤君を愛せるわ……あなたが大事に想っていた人を愛せるわよ」

そう言って微笑む哀は、綺麗だと、蘭は思った。
自分より、綺麗だと。

「あなたが新出先生を想えたら、それでOKなんじゃない？」

「哀……、蘭おねえさん」

歩美の呼ぶ声に2人がそちらを向くと、彼女の隣で智明が微笑んでいる。

「何話してたの？」

駆け寄ってきた歩美が蘭と哀に訊く。

「蘭さんは、幸せになれるって話よ」

「え？」

哀の言葉に、一瞬、怪訝な顔を見せた歩美だが、すぐに笑顔になった。

「そっくだよね！蘭お姉さん、綺麗だし、優しいし…新出先生がいるもんね」

「歩美ちゃん」

歩美に言われ、少し赤くなっている蘭を、智明の後から、コナンが優しい瞳で見ている。

第42章：蘭の迷い（後書き）

たいへん長らく、ご無沙汰でした。

つて、もう1ヶ月以上たってるし・・・なんだか、話に連続性がな
いし・・・

この間、コメントいただいた方々、ありがとうございました。

第43章：予感（前書き）

お久しぶりの更新になってしまいました。

第43章：予感

自分勝手なのかとも思う。

以前、好きだった幼馴染。

いや、今でも、大事な人には、変わりはない。

ただ、「好き」のカタチが変わっただけ。

彼女が結婚するという。

それを聞いたとき、ホツとしている自分がある。彼女の幸せを願っているのは、本心だが、罪悪感から解放されることに、胸を撫で下ろしているのも事実。

一枚の案内状を見つめ、コナンは、そんなことを考えていた。

「どうしたの？」

今の自分にとって、一番大事な人に声をかけられ、コナンは、ハッとして顔を上げた。

「蘭さんの結婚式の案内ね」

哀は、すべてを知っている。

自分が蘭のことをどれだけ大事に想ってきたか。今の体になってから、新一を待ち続ける彼女を見ていて、どれだけ辛い想いをしてきたか。

だから、哀には、何も隠す必要もない。

コナンにとって、哀の存在は、何ものにも変えがたい。その理由のひとつは、彼女が自分のことをよく知り、理解してくれているから。

「蘭さん、きつと、幸せになれるわね」

阿笠邸のリビングのソファ。哀は、そう言いながら、コナンの前のテーブルにコーヒークップを置き、彼の隣に座る。

「ああ」

短く返事をしたコナンは、そつと、哀の肩に手を回した。

体を寄せ、肩に頭を載せてくる哀の髪を撫でると、コナンは、リビングを取り巻くような、阿笠邸の大きな窓に目をやった。

コナンは、黙って、哀の肩を抱いたまま、窓の外を見ている。いろいろ、巡る想いがあるのだろう。

哀は、目を閉じて、ただ、コナンの手のぬくもりを肩に感じている。

コナンが今、何を思っているのか、哀には、すべてわかるわけではない。

蘭と彼との繋がり、哀が思っている以上に強いし、長い。

そして、自分。

蘭と会う度、彼女の顔を見る度に感じてきた胸の痛み。それから、解放されるのではという、期待。

そのホツとするような想いを、おそらく、コナンも感じているだろう。

自分の胸の痛みが消えることを祈って、彼女の幸せを願うのか。身勝手かもしれない。

それでも、蘭の幸せを心から願うのは、偽りのない本心。

（お姉ちゃん…お姉ちゃんも、蘭さんの幸せを祈ってね）

蘭に面差しが似ている、今は亡き、自分の大事な人に、哀は、心

で語りかけていた。

「うーん…どうしたらいい？」

小嶋元太が、そのおむすび型の顔の顎に手を当て、考え込んでいる。

「そうですねえ…ここは、正攻法がいいのかもしれませんが」
元太と並んで歩いている光彦も、何か思案している顔だ。

「でも、あの2人、こんなに人気があるなんて…」
歩美は、そう言うのと、後を振り返った。

歩美の目に入っただのは、何か難しそうな話をしているコナンと哀。

最近、歩美は、コナンと哀のことを不審に思い始めていた。
小学1年生の時から、コナンと哀は、自分達より頭が良いと思っていた。

事件に遭遇したとき、謎を解くコナン、その彼を一番理解していた哀は、歩美にとって、憧れの存在でもあり、大事な仲間でもあった。

しかし、自分も成長するに従って、コナンと哀が普通ではないと、強く感じ始めていた。

2人は、あまりに頭が良すぎる。いや、それ以上に、その言動は、大人以上のものだ。

2人共、英語が話せる。モーターボートが操縦できる。パソコンの知識も豊富。

それ以前に、持っている知識の量が半端でなく、広く、深い。

（元太君や光彦君は、どう思っているんだろう…）

コナンと哀のこと、普通の小学生ではないと、いや大人以上の何者ではないかと、歩美は、そう考え始めている。

歩美は、今、振り返って見た、自分達の後を歩いている見慣れた、大人びた2人の顔が、自分の知らない人のように感じて、少し戸惑っていた。

「歩美、どうしたんだよ？」

元太が後を振り向き、難しそうな顔をしている歩美を不審に思い、声をかけた。

その言葉に、コナンと哀も、前を向いて、歩美達の顔を見る。

「なんだ？どうした歩美？」

「歩美？」

みんなが自分の方を注目し、ふと、我に戻る歩美。

「な、なんでもないよ！それより、どうするの？」

歩美は、改めて、元太と光彦の顔を見た。

「うーん…ここは、誠意を持って、話し合っしかなさそうですね」

真剣な顔でそう答える光彦に、コナンと哀は、顔を見合わせて苦笑する。

「おい！コナン、灰原！笑い事じゃねえんだぞ！俺達は、真剣なんだから！」

元太が2人の様子に不満げに言う。

「わりい」

「ごめんなさい」

コナンと哀は、素直に謝るしかなかった。

事の発端は、修学旅行のグループ分けだった。

1泊2日で予定されている修学旅行では、クラスを6人のグループに分け、行動は、そのグループ単位を基本にし、後にクラスで行う感想や研究の発表も、そのグループを基本にしていた。

歩美達にすれば、いつもの探偵団のメンバーをグループにしたかったし、話し合いで決めると担任の教師が言うので、その願いは、かなうと思っていた。

問題は、あと女子を1人、誰を入れるかということぐらいだったが、1年生の時から知らる東尾マリア、松中ユリコもいるので、あまり心配は、していなかった。

ところが、意外にコナンと哀の人气が高く、2人と同じグループになりたがるクラスメイトが多くて、話し合いは、紛糾した。クラスの多くの者が、自分達のグループにコナンと哀を入れたかった。

担任の教師は、コナンと哀のどちらか1人を歩美達のグループに入れ、もう1人は、別の、2人と同じになることを希望する生徒のグループに入れる案を出したが、歩美達には、受け入れられるものではなかった。

コナンと哀、それに光彦と歩美、元太の5人が揃わないと、意味がないと、彼らは思っている。

（どうでもいいと思うけどな…）

（こたわるわね、この子たち…）

そんなことを考えている2人を、光彦が睨んだ。

「お2人、どうでもいいと、思ってますんか？」

「「え？」」

コナンと哀は、凶星を差され、同時に声を上げた。

「お前ら、一生一度の小学校の修学旅行なんだぞ！」

（俺は、2度目だけど…）

声を一段と大きくした元太を、コナンは、半目で見た。

「小学時代の一番大きな行事なんだからね！少年探偵団は、一緒に行動しないと意味がないんだよ！」

（どうして、意味がないのか、わからないんだけど…）

歩美の大きな声も、哀の心には、あまり響かない。

「何？哀は、私たちと一緒になくてもいいの？」

「え？…いや、そ、そういうわけじゃ…」

半目で歩美に睨まれた哀は、少し慌てた。

確かに、何かあった時、彼らという方が都合は良い。

自分やコナンのことを一番わかっているし、彼らのこともよくわかってる。いざという時、結構、彼らは頼りにもなる。

だからと言って、修学旅行で一緒でないといけないというのは、
どうだろうか。

グループが違っても、クラスは同じだし、まったく一緒に行動できないというわけでもない。

「お前ら、誰のために…うつ…」

何か言いかけた元太の口を光彦が押さえた。

(?)

「元太君、しゃべっちゃだめでしょ」

「そうよ。2人には、その時まで、内緒なんだから…」

「すまん…」

コナンと哀に聞こえないように、声をひそめた光彦と歩美に釘を刺され、元太は、大きな体を小さくして謝っている。

「何やってんだ？」

コナンが不審げな顔を3人に向ける。

「え！？…あつ…へへ、なんでも、ありません」

「そ、そう、なんでもないよ、コナン君」

不審そうな顔をしているコナンと哀に、3人は、少し慌てて笑顔に向けた。

(アイツら、なんか企んでるな…)

(少し、いやな予感がするんだけど…)

コナンと哀は、3人の顔を不審げに見ると、黙って顔を見合わせる。その顔を見ると、何も言わなくても、お互いに思っていること同じだと、よくわかった。

第44章：企み

「と、いうわけで、コナン君といると、事件に巻き込まれる可能性が高いわけです。なんで、犯人の検挙、犯罪の阻止に実績があり、警察から何度が表彰も受けている少年探偵団がコナン君と一緒に行動しないと、場合によっては、危険も伴うと考えられるわけです」

「お前ら、事件の犯人を捕まえたこと、あんのか？殺人事件の現場に居合わせたことあんのか？コナンと一緒にいるってことはな、そういう危ないことを覚悟しているということなんだぞ！お前らにできんのか？」

「私も何度か、犯人に捕まったり、人質にされたりしたよ…みんな、その覚悟、あるのね」

紛糾した修学旅行のグループ分けは、光彦の妙に説得力のある言葉と、元太の脅しと、歩美の、その内容にしては、明るく話される経験談によって、少年探偵団の希望が通る結果となった。

そして、もう一人、彼らをよく知る友人の東尾マリアを加えた6人のグループで、修学旅行に臨むことになった。

「ハハ…なんか、俺、嬉しくないんだけど…」

コナンは、話し合いの間中、机に片肘をつき、顎を手に載せ、半目で仲間たちの不思議な論理を聞いていた。

その隣の席で、哀は、話し合いの間中、必死で笑いをかみ殺していた。

「フフ…でも、あの子たちの言う通りだし…」

「俺が事件を呼んでるような言い方だな」

コナンが目だけを横に動かし、笑いをこらえている哀を睨む。

「あら？違う？」

哀は、意味ありげな笑顔で、そんなコナンを横目で睨んだ。

「おめえ…」

「でも、安心したわ」

「あん？」

「あの子たち、事件に巻き込まれること、不思議に感じてないと思
つてたけど、自覚は、あつたんだなって…」

可笑しそうに言う哀をコナンは、横目で睨んでいる。

しばらくして、哀を睨むコナンの表情が柔らかくなった。

コナンは、こんな時、哀が明るく笑ってくれるようになったこと
を、改めて、嬉しく思った。

「それにしても、アイツら、何企んでんだろうな？」

コナンは、腕を頭の後に組んで、体を反らす。

「さあ？私たちに何かしようとしてるのは、確かだと思っただけ
ど…」

哀は、そう言って、苦笑した。

帝丹小学校6年生は、その日、修学旅行に出発した。

「それで、準備はOKですか？」

行きの列車の中で、光彦が歩美と元太、それにグループに加わっ
ているマリアの顔を見て訊く。前の席のコナンと哀に聞こえないよ

うに、4人は、顔をよせている。

幸い、前の2人は、会話をしているので、自分達の様子には、気づいていないようだ。

「大丈夫、ちゃんと、用意してもらってるよ」

歩美が声をひそめて答える。

「アイツら、びっくりするか、喜ぶといいけどな」

元太も、大きな体を小さく丸めて顔をみんなに寄せて言った。

「でも、これって、2人を喜ばすというより、やっているこっちが喜んでるんとちゃうの？」

マリアが目を細め、冷静に言った。

「ま、まあ、それは、それで、いいんじゃないですか？僕らも修学旅行を楽しまないと…」

光彦が苦笑した顔をマリアに向けて言った。

「とにかく、向こうに着くまで、コナン君と哀には、バレないようにして。いいね」

「お2人は、鋭いですからね。注意してください」

「OK」

歩美と光彦が順に言うと、元太とマリアが頷いた。

しかし、コナンと哀は、そんな4人の様子には、すでに気づいている。

「まったく、何を企んでるんだか…」

「ま、なんだか知らないけど、一所懸命みたいだから、知らんふりしてあげましょ」

「そだな」

コナンと哀は、顔を見合わせ、小さく笑った。

修学旅行の目的地は、歴史のある街だった。

2時間程度歩けば、その中を回れるほどの区画に、江戸時代以前の街並みが再現されている。その中に、今回、生徒たちが泊まる旅館もある。

この中は、車とバイクの乗り入れが禁止され、観光協会やボランティアの人達が観光客の案内などをしているので、安全に散策できる。

帝丹小学校の生徒たちは、ここでグループごとに別れ、いろいろ見学したり、体験したことをレポートにまとめ、帰ってから、クラスで発表することになっていた。

「今回は、私にリーダーをやらせて！」
歩美がみんなの方を向いて言った。

「え？それは、いいけど？」

コナンは、哀と顔を見合わせて、少し呆気に取られて言った。

「では、リーダー、どこへ行きますか？」
光彦が歩美に笑顔を向けて言う。その顔は、何か意味ありげな表情をしていた。

「とりあえず、お店を見て回ろうよ」
「何か、旨い食いもん売ってっかな？」

歩美の言葉に、すぐに反応したのは、元太だ。

「元太君…目的を忘れてないでしょうね」

光彦は、いつもと同じ反応をした元太に顔を寄せ、声をひそめて言った。

その隣には、マリアも心配そうに顔を寄せている。

「わかってるって…でも、せっかくココまで来たんだから、何か食わせろよ」

「あまり時間は、ありませんからね」

「わかってるよ」

釘を刺す光彦に、元太は、少し嫌な顔をした。

「で？リーダー、私たちは何をすればいいのかしら？」

哀が歩美と並んで歩き始めて訊いた。

「とりあえずさ、お店に入って、そのお店で売ってるものとか、お店の歴史とか、訊いてみようよ」

「でもさ、そういうのって、他のヤツらもやってるだろ？」

歩美を挟んで、哀の向こう側にいる元太が言う。

「観光案内のボランティアの人に話を聞かせてもらっ、っていう手もあるぜ」

前を歩くコナンが振り向いて言った。

「じゃあさ、私たち、あのお店に入ってみるから、コナン君と哀はあそこに立ってるボランティアの人に話し訊いてみてくれない？」

歩美は、名物の饅頭などを売っている店を指差し、次に少し離れたところで観光案内をしている、ボランティアスタッフのジャケットを着た年配の女性を手で示した。

「あ？ああ、いいけど」

コナンがその女性に目を向けて返事をする。

「じゃ、コナン君、哀、お願いね」

笑顔でウインクしてみせた歩美は、他の3人を連れ、その店に入
って行った。

「なんだか、意味ありげな表情してたわね。4人とも…」

店に入っていく4人の背中を見ながら、コナンと並んだ哀が言っ
た。

「そだな…ま、とにかく、あのおばさんに話、訊こうぜ」

コナンが歩き出すと、哀もその後を追った。

そんな2人の様子を、店に入り、その入り口の陰から4人が覗い
ている。

「第一段階、OKね」

マリアが言うと、店の奥から声がかかった。

「あら、歩美ちゃん、いらっしやい」

自分達の親と同じぐらいの歳だろうか、女性がニコニコして、歩
美に近づいてくる。

「おばさん！こんにちは！」

「あれ？歩美、知り合いか？」

元気に挨拶する歩美の様子に、元太が目を丸くして訊いている。

「元太君…歩美ちゃんの叔母さん、ここでお店やってるって、言っ

てたでしょ？」

光彦は、横目で元太の顔を呆れたように睨んだ。

「そうだったけ？」

ばつ悪そうに言う元太を尻目に、歩美がみんなに指示をする。

「じゃ、裏口から、コナン君と哀に気づかれないように出るから……」

4人が裏口へ行く様子を、歩美の叔母が笑顔で見送っている。その彼女に、歩美が振り返った。

「おばさん、戸田のおじさん、ちゃんと用意してくれてるよね」

「ええ…お願いしてあるわよ…さっき、訊いたら、準備OKだって言ってたわ」

「ありがとう！」

笑顔で礼を言うと、歩美は、クルツと振り返って、光彦たち3人の後を追って、裏口の方へ出て行った。

第44章：企み（後書き）

コナン達の修学旅行先は、倉敷の美観地区をモデルにしています。ただ、小学生の修学旅行先としては、東京からは遠いので、架空の観光地にしました。

第45章：期待

「ありがとう！」

コナンと哀は、話を聞かせてくれたボランティアスタッフの女性に頭を下げる。そして、光彦たち4人が入った店に目をやった。

「まだ、中にいるみたいね」

「ああ、そうだな」

2人は、その店に入ったが、客は誰もいないし、4人の姿もなかった。

「変ね」

「ああ……」

「あの……おばさん……さっき、ここに小学生が4人、入って来たでしょ？」

コナンは、子供らしく、店先に座っていた婦人に訊く。

「え？……ええ、少し、話を訊かれたけど、すぐに出て行ったわよ」

店の婦人が笑顔で答える。

「2人は、あの子たちのお友達？」

「うん……でも、どこ行っただら？」

コナンと哀は、顔を見合わせた。

「君たち、江戸川君と灰原さんかな？」

店の婦人の言葉に、また、コナンと哀は、顔を見合わせる。

「そうだけど……」

コナンが答えると、その婦人は、ニコツとすると、封筒を差し出

した。

「これ、預かってるよ、吉田歩美ちゃんから…」

「え？」

2人は、怪訝な顔になったが、コナンがその封筒を受け取った。

封筒を開け、中身を見たコナンの顔が不思議な表情になった。

「どうしたの？」

「これ」

コナンの表情を不審げに見ていた哀が声をかけると、彼は、封筒の中に入っていた1枚の紙を彼女に差し出した。

それを受け取って読む哀の顔が、呆れた表情になったかと思うと、吹き出して笑い始めた。

「あの子たち……」

『いつも、勉強で2人には、お世話になっているので、きょうは、ぼくたちだけでレポートを作ります。2人は、ゆっくり、デートしてください。午後3時になったら、東3番通りにある、戸田というお店に集合してください。 吉田歩美 円谷光彦 小嶋元太 東尾マリア』

「やっぱり、なんか企んでたわね」

「ああ。でも、これで済むと思うか？」

「いいえ」

「だな」

2人は、顔を見合わせて、ニコツと笑った。

「ま、せっかくだし、アイツらの言う通りにさせてもらっか」
「そうね」

コナンがスツと、哀に手を差し出す。
哀は、フツと微笑むと、その手をとった。

コナンと哀が散策を始めた頃、他の4人は、歩美の母方の叔父、戸田雅人の店にいた。

「歩美。用意は、できてる。で、その2人は？」

「3時にここへ来るようにって、伝えてあるよ」

歩美の叔父は、優しい笑顔で姪の顔を見ている。

「歩美ちゃん、本格的だね」

「すごいですねえ！こんなに立派な撮影機材、初めてです。それに、スタジオも凄いです」

マリアと光彦が感心している。

この戸田の店は、写真館。

デジタルカメラやスチールカメラのプリントサービスを始め、カメラや撮影用機材、フィルムなど、写真やビデオに関するものを扱う店だった。

ただ、観光地にあるため、表の作りは、江戸末期の写真館といった風情で、「戸田写真館」の文字も、右から書いてある大きな看板を掲げている。

そして、なんといつても、撮影用スタジオがあり、衣装のレンタルをしている近所の店と提携していて、扮装をしての撮影も引き受けていた。

「それで、おじさん、衣装も用意できてるの？」

「ああ、歩美のご希望通りのもの、用意しているよ」

「ありがとう！えへ、楽しみっつ」

「なんだか、背筋がぞくぞくするんだけど、気のせいかしら？」

「え？おめえもか…俺も、なんだか、背筋が寒い…」

歩美が戸田写真館でご機嫌な頃、哀とコナンが散策しながら、そう言つて、顔を見合わせた。

「それで、歩美、ここで何すんだ？」

スタジオの真ん中に集まった4人。そのうち、元太が歩美の顔を見て怪訝な顔をしている。

「もうっつ！元太君、聞いてなかったの？今まで、何をするつもりでいたのよ！？」

呆れ顔の歩美、その隣で、同じように呆れていた光彦が元太の方に向き直った。

「コナン君と灰原さんに写真のモデルになってもらうんですよ」「モデル？」

「そうだよ。ほら、結婚式の衣装、何着か用意してもらったから、コナン君と哀にそれを着てもらつて、写真撮るの」

光彦、歩美の順で元太に説明をする。

「そやけど、歩美ちゃん…レポートの方は、どないすんのん？」
マリアが遠慮がちに訊いてくる。

「それはね、写真を撮って、この写真館の仕事を取材したってことにするの」

「……そんなんで、ええんかな？」

得意満面に答える歩美に、マリアは、苦笑した。

「大丈夫だよ。私、前にここに来た時、お店のお手伝いしたことあるから、それでレポートも書けるし……」

歩美は、今回は、どこまでも、リーダーだった。

「後は、コナン君と哀が来たら、有無を言わずに着替えさせること…コナン君は、光彦君と元太君でお願いね。哀は、マリアちゃんと私で着替えさせるから……」

「任せといてください！」

「おう！」

光彦と元太が、大きな声で返事をする。

「コナン君、哀、まだかな……」

歩美は、ワクワクしながら、2人がやってくるのを待っていた。

第45章：期待（後書き）

更新が滞りがちで、申し訳ありません。
で、しかも、今回は、少し短め…

次、頑張ります……頑張れると思います……頑張れるといいなあ……

第46章：和葉

「はあ」

何度目だろう。コナンは、深いため息をつき、衣装をつけた自分を映す鏡をみた。

哀と2人でこの戸田写真館にやってくると、いきなり、体の大きな元太に羽交い絞めにされ、目を細めて笑う光彦と共に、奥の更衣室に連れて来られた。

おそらく、哀も同様、歩美とマリアに捕まっただろう。

ただ、哀の場合、力づくではなく、歩美の泣き落としにあっっていると思うが。

「おめえら！何すんだ！」

「暴れんなよコナン。お前にとって、嬉しいこと、やってやんだからよ」

「そうですよ、コナン君。君も気に入りますから……」

そして、コナンは、白のフロックコートに着替えさせられていた。

そんな自分を今、鏡で見ている。

「はあ」

もう一度、ため息をつく。

（これって、どう見ても新郎の衣装だよな……ま、写真館で俺がフロ

ツクコートを着せられた、となりや、俺と哀の結婚式の写真でも撮る気、だな…)

コナンは、うんざりした顔で、鏡に映る自分を見ていた。

(まあ、なんとなく、予想は、してたけど…)

しかし、そんなコナンの気鬱は、写真館のスタジオで、自分の隣に並んだ哀の姿を見て、すっかり消えてしまう。

花嫁衣裳のドレスを着た哀が、スタジオに入ってきたときから、コナンは、彼女から目を離せなくなった。

コナンと同じように、光彦も、そして、こういうことに疎い元太まで、ポカンとして、哀に見惚れている。

「私…こんな、白いドレス、着られる女じゃないのに…」

そんなことを言いながら、哀が赤い顔をしている。

そして、そんな哀の手を取り、ニコニコとした歩美が、マリアと2人、彼女をコナンの横に並ばせる。

「哀…」

純白のウェディングドレスに身を包んだ哀は、とても小学6年生には見えない。

ウエスト部分からの流れるようなドレープが柔らかいカーブを描き、その左の腰のところにコサージュがあしらわれている。

成長し、さらに女らしくなってきた哀。少し膨らんだ胸、そのキ

ヤミソールの胸元は、シンプルだが、ビージングが細かく配されていて、大人びた哀には、よく似合っている。

そして、哀の髪に飾られた少し大きめの白い花束。

それが、彼女の茶髪によく似合っていて、コナンは、それを選んだ人の目の高さに感心する思いだった。

「綺麗でしょ？…この歩美さんが、ここのおばさんといういろいろ考えて選んだんだよ」

哀の向こうで、歩美が胸を張る。

こんな格好をさせられては、さすがの哀も、悪態をつくわけにはいかず、大人しく、コナンの横に佇んでいた。

「さ、腕組んで…嬉しそうに笑って…写真、たくさん撮っておくんだから…」

歩美がコナンと哀にそう言うと、イタズラっぽくウィンクしてみせる。

少し、恥ずかしそうに俯き、コナンの方を向いている哀と、その彼女に見惚れているコナン。

その2人の様子を見て、微笑み合った歩美達4人は、満足したようだった。

「平次！ちよつと！」

大阪。

服部平次の家に幼馴染が乱入してくる。

「なんやねん…」

自分の部屋でパソコンを使い、事件のデータや資料を探していた平次は、ノックもなく、乱入してきた遠山和葉を睨んだ。

「平次んところにも、来た？」

「なにが？」

「招待状や！蘭ちゃんの結婚式の！」

和葉は、いつもに増して機嫌が良くない。

その様子に、タジタジになった平次は、立ち上がると、和葉の肩に手を当てた。

「ま、まあ、落ち着けや…なに興奮してんのか知らんけど、とにかく、座りい」

和葉の肩を押さえるようにして、畳の上に座らせると、平次も、彼女に向かい合って座った。

「？…どないした？」

黙ってしまった和葉に、平次は、不審な顔をして、その顔を見た。

「…蘭ちゃん…結婚すんねんで」

「そやな」

「結婚って…」

「お前、毛利の姉ちゃんが新出先生と付き合ってるの、知ってたやろ？」

「…それは、知ってたよ…そやけど、結婚って…」

「なんで…アカンのか？」

「…工藤君のこと、蘭ちゃん…忘れてもったんか？」

「それは…」

和葉、キツとして、顔を上げ、平次を睨んだ。

「だいたい、工藤君が未だに行方不明なのに、平次も、蘭ちゃんも、あんまり気にしてへんやん！」

「そ、そんなことないで……」

平次は、両手を出し、和葉の勢いを止めるようにそれを振る。

「おかしいわ！……平次、あんた、なんや、隠してるやろ……前に、コナン君と哀ちゃんが大ケガして、やっと帰ってきて、見舞いに行つたとき……あん時から、おかしいと思てたんや！……あれから、平次、工藤君の話、ほとんど、せえへんやん！」

「それは、アイツ、俺にも、最近、連絡くれへんから……」

「そやつたら、よけい心配やろ？普通……そしたら、最近、蘭ちゃんもヘンになつてきて……工藤君のこと、あんだけ気にしとつたのに、新出先生と付きおつて……何！？結婚するやて！……おかしいやん！」

「和葉……落ち着けて……」

「工藤君がかわいそうやん……うち、認めへん！こんな……蘭ちゃんの結婚式、行かへんから！……平次だけで、行つてき！」

「お、おい！和葉！」

言うだけ言うと、和葉は、立ち上がつて、平次の呼びかけに、返事もせず、彼の部屋から出て行つた。

（和葉のヤツ……）

『そついうわけなんや……』

「そう、和葉ちゃんらしいね」

平次からの電話を受けた蘭は、受話器を持ち、苦笑して言った。

『すまんなあ』

「いいのよ。確かに、事情を知らない和葉ちゃんからみれば、私つて、おかしいし……」

『そのことやけど……』

平次が沈黙し、間を置いて、蘭が聞き返した。

「うん？何？」

『あんたと工藤、それに、あの姉ちゃんがええ言っんやつたら、和葉にホンマのこと、話してやりたいんや』

「服部君……」

『俺、アイツに隠し事すんの、もう限界や……前は、工藤やあの姉ちゃん、それにあんたの命の危険も考えられたからな、黙ってられたけど……今は、それも、のうなったし……アイツに嘘、言ってんの、つろうなってきてな』

苦しそうに言う平次の声に、蘭は、目を細め、優しい笑みを浮かべる。

「いいよ……私は……和葉ちゃんも、警察官の娘だから、事の重大さを認識できるでしょうし、それなら、口外もしないだろうし……何より、服部君のためにも、その方がいいでしょ？」

『おおきに……』

「お礼を言うのは、私と新一の方よ。服部君の苦しみ、気づいてやれなかった私たちが悪いよ」

蘭には、和葉の気持ちがわかるような気がする。

彼女は、新一と蘭の姿に、平次と自分のことを重ねているのだろう。

幼馴染で、彼は、探偵で、自分は、武道が好きで、そして、事件を追う探偵のキラキラした目が好きで。

よく似ている。平次と和葉は、かつての新一と蘭によく似ている。

だから、蘭が他の男性と結婚すること、和葉には、許せないのだろう。いや、見るのがいやなのだ。認めたくないのだ。

何年、離れていても、大切な幼馴染であれば、その関係は、変わらないと、和葉は思いたいのかもしれない。

今の蘭は、新出智明を愛している。だからこそ、彼のプロポーズを受け入れた。

蘭は、思う。

恋は、その意志とは関係なく、その人を見たり、話したりしただけで、恋してしまうことがある。

しかし、愛は、違う。

愛するというのは、自分で決めることができる。

その人を愛そうという決意があれば、愛そうと努力すれば、人は、人を愛することができる。

もちろん、その人が、自分が愛することができるものを持っている人であることは、必須条件ではあるが、それさえあれば、人は、決心することで、人を愛することができる。

自分は、工藤新一に恋をし、今は、新出智明を愛すると決心した。蘭は、そう思っている。

和葉は、平次に恋をしている。だが、愛そうと決心しているのか、いないのか、それは、わからない。

哀は、コナンこと新一を愛することを決意した。そして、コナンも、哀を愛することを決意している。

（恋が愛に変わったとしても、愛するという強い決意は、必要だよ。和葉ちゃん）

受話器を置きながら、蘭は、大阪に住む親友の顔を思い出ししていた。

「そういうこっちゃ」

平次は、コナンと哀、それに黒の組織の事件を真相を和葉に話すと、そう言っ、胡坐をかいた足に手をかけ、体を後に反らした。

和葉の家を訪ねた当初、彼女は、なかなか平次に会おうとしなかった。

「自分、俺の話し、聞かれへんのか！俺を信用せえへんちゅうこっちゃな。わかった、もう、好きにせえや！」

平次が和葉の部屋の前で、いつになく真剣な声を上げると、彼女は、ゆっくりと部屋の扉を開いた。

そんな和葉に、平次は、すべてを話した。

和葉は、目を大きくし、信じられないという表情をした。そして、何かを考えるように、黙って俯いた。

「信じられへん……人が小そうなるやて……そんなん、信じられへん……」

和葉が言ったのは、平次が話し終えてから、かなりの時間が経っていた。そして、幼馴染の顔を不思議そうに見ている。

「そやかて、事實は、小説より奇なり、や」

「……それで、その……工藤君は、蘭ちゃんやのうて、哀ちゃんを選んだってことやの？」

「そやな」

「なんで……？ 蘭ちゃん、あんなに工藤君のこと、待つとつたのに……」

和葉に真実を話した今でも、和葉自身が思っていた新一と蘭の関係が無くなってしまったことには、変わりはない。

「ひどいやん……工藤君……散々、待たしといて、自分は、違う女の人と……蘭ちゃんも蘭ちゃんや……」

「和葉……」

「平次……うち、これから東京へ行く！ 工藤君と蘭ちゃんに会う！」
そう言つて、和葉、立ち上がった。

「お、おい！ 和葉！ ええ加減にせえよ！」

「そやかて、うち、納得でけへん！」

止める平次を振り切るように、和葉は、自分の部屋を出て行く。

そんな幼馴染の後姿を追いながら、平次は、深いため息をついた。

第46章：和葉（後書き）

最近、怖ろしくなってきました。この前まで見えていたこの話の最終話が、見えなくなってきたのです。

あれも書きたい、これも入れたい……そう思うと、自分でも、この先の展開が読めなくなってきました。

うーん、怖い。

第47章：歩美

「コナン君、もっと、笑ってください」

「哀、もつといい顔して」

光彦や歩美の声がかかる中、戸田写真館の主で、歩美の叔父、戸田正治は、大型のカメラ2台で、花婿、花嫁に扮した2人を撮影していく。

当然、その周りで、4人が携帯やデジカメで写真を撮っていた。

「ね、次は、哀に椅子に座ってもらおうよ」

「賛成！」

「はあ」

歩美達が要求するたび、コナンと哀は、ため息をつく。

「だめでしょ？いい顔してよ！コナン君、哀！」

そう言われながらも、コナンと哀は、少し、彼らの謀が嬉しくもあつた。

少し照れくさいが、2人で結婚式の衣装を着て、気分は、悪くはない。

「な、哀」

「何？」

「…綺麗だぜ」

そう言って、少し顔を赤くしたコナン。

「…ありがとう」

2人で顔を見合わせ、微笑み合う。

そこで、シャッター音が何重にも、重なって聞こえた。

「今のよかったよ！ね？叔父さん」

「ああ。最高だな」

子供たちの様子に笑顔で写真を撮っていた正治も、そう言っ
て笑う。

その様子に、コナンと哀は、顔を赤くして目を白黒させていたが、
やがて、恥ずかしそうに俯いた。

2人が並んで立った写真、哀だけが椅子に座っている写真など、
一通り取り終えると、歩美が言う。

「ねえ、コナン君、次は、哀を抱き上げて」

「は？」

「ほら、早く」

言われたコナンは、哀を少し間の抜けた顔で見っていたが、フツと
笑みを浮かべる。

「…いやよ」

哀は、少し後ずさった。

「江戸川君…やめてよ…恥ずかしい…」

自分の方によってくるコナンに、僅かに距離を置いて下がりなが
ら、哀が困ったような顔をしている。

「ここまできて、恥ずかしいもねえだろ？」

そう言つて、スツと哀に近づくと、ウエディングドレスを着た細い彼女の体を抱き上げた。

「ちよつと…」

コナンに抱き上げられ、哀が赤い顔をして、彼を睨んだが、そんな2人の様子をニコニコしながら、友人達は、それぞれのカメラを構えて、2人をねらっていた。

いつの間にか、自分を軽々と抱き上げることができるようになったコナンに、哀は、呆れたような顔をしながらも、頼もしいと思った。

そして、あの薬を、A P T X 4 8 6 9 を飲んだ彼の体が、ここまです成長していることが嬉しかった。

「……ねえ、そろそろ、時間、ヤバイんじゃない？」
しばらくして、コナンが哀をその腕から下ろしたとき、マリアが時計を見て言った。

「そうだね、そろそろ終わりにしようか…」

歩美のその声に、コナンと哀が心から、ホツとしたような笑顔を見せた。

コナンが平次からの電話を受けたのは、写真館での撮影が終わり、着替えて、店を出ようとしていた時だった。

（服部…）

「電話ですか？」

携帯電話を見ているコナンに、光彦が言った。

「あ？ああ…わりいけど、先に行つててくんねえか？」

「わかりました」

光彦は、そう言つと、歩美と元太、マリアを促し、外に出て行つた。

コナンは、携帯電話の通話ボタンを押すと、店を出る。
その後に哀もついていった。

写真館の前の通りの向こうには、水がゆつたりと流れている堀がある。

水辺に降りられるように階段があり、コナンは、携帯電話で話しながら、哀とともに、階段を降り、水辺の丸太風の簡素なベンチに座った。

「そうか…ちょっと、待つてくれ」

コナンは、そう言つて電話を耳から離す。

「服部君、何かあった？」

哀がそう言つて、コナンの顔を見る。

「和葉ちゃんが、蘭の結婚式の招待状を受け取つて、カンカンになつてるらしい…」

「え？」

「どうやら、蘭が工藤新一と別れたのが許せねえみたいだな」

「そう…」

「それで、服部が俺とおめえのこと、本当のことを和葉ちゃんに話してもいいか？…って、言っただけど…」

「服部君も辛かったでしょう…かまわないわよ…遅すぎたくらいかもね」

「そだな」

『おおきにな、工藤、姉ちゃん…』

「こっちこそ、悪かったな…服部」

『ほな、毛利の姉ちゃんの結婚式、でな』

「わかった…服部」

『なんや？』

「和葉ちゃん、大事にしてやれよ」

『……わかった』

そう言っ、携帯電話を閉じるコナンの顔を、哀は、少し寂しそうな表情で見ている。

その視線にコナンが気づく。

「どした？」

「いえ…なんでもないわ」

哀は、そう言っ、少し不機嫌そうに、顔をそらせた。

そんな哀の様子に、コナンは、表情を硬くする。

その時、2人のいる階段の上に立っている人影が、ずっと、後へ下がり、走り去っていった。

その人影に、コナンと哀は、気づかなかった。

「そろそろ行かないと…」

「ああ。そだな」

自分の顔を見ずに言う哀の言葉に、なぜか、少し戸惑いを覚えたコナンは、それでも頷くと、先に階段を上りだした哀の背中を追った。

コナンが携帯電話で話しだすと、彼についていった哀を残し、自分達は、先に宿になっている旅館に戻ろうとした。

その時だった。

「あ!」

「どうしたんです？歩美ちゃん？」

不意に声を上げた歩美に、光彦が声をかけた。

元太とマリアも、怪訝な顔をして歩美を見ている。

「コサージュ…哀がつけていたコサージュ、忘れてる…私、取りに行つて、哀に渡してくる」

「おい！歩美!」

振り向いて、すぐに走り出してしまった歩美には、元太の声は、聞こえていないようだった。

「どうしたん？歩美」

戻ってきた歩美は、俯いて、元気がない。というより、考え事をしているようだった。

そんな歩美に、マリアが声をかけても、反応がない。

それに、哀に渡すと言っていた、コサージュを手に持っている。

「灰原さんには、会わなかったんですか？」

光彦の問いにも、歩美は、俯いたまま、答えない。

「歩美ちゃん？」

「歩美？」

みんなが黙っている歩美を不審に思っで見ている。

「え！？…あ、あ…何？」

みんなが自分を見ているのに気づき、我に返った歩美は、慌てた。

「何、じゃないですよ…灰原さんには、会わなかったんですか？」

光彦に言われ、歩美は、思いだしたように、自分が手にしているコサージュを見た。

「…うん…どこ行っただか、わかんなくて…」

「そう…ですか…」

鋭い光彦には、歩美の様子がおかしいのは、コナンと哀に関係があるのだろつとわかった。

元太とマリアは、そこまで気づいているのかどうか、少し、心配そうな顔をして、歩美を気にしているのは、確かなようだった。

「ごめん…ちょっと、考え事…しててさ。ボーっとしちゃった」

そう言っ、舌を出した歩美は、照れくさそうな笑顔を友人たちに向けた。

第48章：見つめあう笑顔それぞれ

勢いで飛び出してしまった。

そんな想いに、急に捕われてきた和葉は、新大阪駅まで来て、少し冷静さを取り戻している自分に気づいた。

考えてみれば、新一ことコナンも、蘭も、いろいろ悩み、辛い想いをして、別れることにしたのだろう。

そんなことは、少し考えれば、和葉にだって、すぐにわかることだった。

新幹線の券売機が並ぶコンコースで、和葉は、迷っていた。

（しもたなあ…あんま、深こう考えんと出てきてしもた……蘭ちゃんに電話しとこかな？）

その時、和葉の携帯電話が鳴った。

着信画面を見た和葉、少し驚いて、その電話を取った。

「蘭ちゃん!？」

『和葉ちゃん、元気だった?』

「…蘭ちゃん…うち……」

和葉は、次の言葉が出てこなかった。

しばらくして、蘭の優しい声が耳に届く。

『ごめん…服部君から聞いたよ……和葉ちゃん、和葉ちゃんの言いたいこと、わかってるよ…』

和葉は、新大阪駅のコンコースの真ん中、人々が忙しく行き交う

なかで、携帯電話を持ち、立っている。

『ホント、ごめんね、和葉ちゃん』

「え？」

『友達なのに、ちゃんと、新一のこと、新出先生のこと、話してなかったから……』

「……それは……」

『私、和葉ちゃんの気持ち、わかるよ……私が和葉ちゃんの立場でも、怒るかもしれないし……ね、和葉ちゃん、今、どこ？』

「新大阪」

『それじゃ、こっち、来ない？久しぶりに顔も見たいし、電話じゃ、ちゃんと、話せないし……』

そう言う蘭の声に、和葉、しばらく考えていた。

「やめとくわ……今日は、やめとく……そやけど、今度、蘭ちゃんの結婚式の前に、いっぺん、そっち行くから、そんな時、話して」

『わかった、和葉ちゃん、楽しみにしてるよ』

「……あんまり、のろけんといてな」

『和葉ちゃん！』

「ハハ……ほな、蘭ちゃん、ごめんな」

携帯電話を耳から離すと、和葉は、後を振り向いた。

「平次、そこにおんの、わかってんで！」

和葉の言葉に、柱の陰から、平次が出てきた。視線を外し、横を向いている。

「なんや、わかつとつたんかいな」

平次は、和葉の傍に來ると、ポンと、彼女の頭を軽く叩いた。

「ほんまに…後先考えんと、飛び出しよってからに…」

珍しく、大人しく俯いている和葉に、平次は、フツと微笑んだ。

「ほら、帰んで」

歩きかけた平次は、動かない和葉を見て、また、足を止めた。

「和葉？」

「ごめん、平次…うち、人のこと…自分の都合のええように決め付けとった…ちよっと、考えたら、わかんのに…蘭ちゃんも、工藤君も、苦しい想いして、辛い想いして…やっと…そやのに、うち、自分の…想いだけで、みんな見てて…1人で腹立てて…アホな話や」

「和葉…」

「蘭ちゃんと工藤君って、うちと平次に似とるやろ…そやから、うち、工藤君が蘭ちゃんから離れたのが、ごつつ、いややった…」

「和葉、俺と工藤は違う…そやろ？俺は、小ちよなつてへんし、ずつと、お前の傍におったし…そやけど、工藤見てて思った…ちゃんと、お前に気持ちを言わなアカン、て…ずつと、お前を守つたるから…傍におつてくれ…な…」

「平次……」

和葉は、平次の顔を見つめていたが、その視線を外し、フツと微笑んだ。

「ええよ、その代わり、うちを口説く気いやってたら、くど…コナン君みたいに男を上げなあかんで…」

「は？…お前こそ、あの姉ちゃんみたいに、もつと綺麗になつてくれや…今のままやったら、見た目小学生のあの姉ちゃんに負けてんで…」

平次は、いつか、哀を誘拐犯から助けたときのことを思い出して

言った。

あの時、イタズラっぽく笑った哀の顔、可愛いというより、綺麗だった。その顔が、平次の脳裏から今も去らない。

「失礼なこと言わんといて……まあ、哀ちゃんが綺麗なのは、認めるけど……」

頬を膨らませた和葉は、平次を睨んだ。

しばらく睨みあっていた2人は、お互い、同時に吹き出すと、心の底から、楽しそうに笑った。

「ねえ、光彦君」

「はい？」

「ちよつと、話があるの」

修学旅行の宿で、夕食の後、グループ毎のミーティングの前の間、歩美は、光彦をこの旅館の中庭に呼び出した。

「歩美ちゃん、何です？話って……」

「…服部さんって、何歳だっけ？」

「は？…服部さんって、大阪の？」

「うん」

「蘭さんと同じ年ですから、僕たちより10歳上の22歳か23歳だと思いますが」

「そう……光彦君は、コナン君と哀のこと、どう思う？」

「どうって？」

「コナン君の精神年齢って、いくつかな？」

「はあ…?」

「だって、コナン君、服部さんや蘭さんと同じように話し、できるでしょ?」

「そうですねえ…20歳は越えてるような気はしますね、確かに…」

「私、追いつけるかな?」

「?何がですか?」

「コナン君の、その精神年齢に…」

「はあ…」

「だって、そうじゃないと、コナン君と哀の友達でいられないかもしれないもん」

最初、光彦には、歩美の言いたいことがわからなかった。

コナンと哀が普通の小学生でないことには、光彦も感じている。あの黒の組織の事件の時、半年も2人に会えなかった。その後、帰ってきた2人は、以前にも増して、2人だけの絆が強くなっていたような気がした。

もつとも、当時は、あまり深く、そんなことを考えていたわけではなかった。ただ、2人は、仲が良くなっていた。自分達には、わからない、入れないものができていた。

なんとなく、そんなことを考えていただけ。

そして、最近になって、光彦には、不思議に思えることが多くなってきた。

コナンと哀の大人びた雰囲気。

確かに、自分も含め、マセた小学生は、多い。しかし、コナンと哀は、違う。

ただ、マセているだけでなく、知識や知恵が、子供離れしている
いや、それどころか、自分の知る大人以上のものを持っている。

低学年の頃には、あまりわからなかった2人の凄さ、不思議さが、
最近、理解できるようになってきた。そして、それを感じるたびに、
ひとつの疑問が胸に沸いてくる。

江戸川コナンと灰原哀は、何者なのか。

歩美は、自分と同じことを感じていると思う。だから、今の言葉は、
少し意外だった。

歩美が考え込んでいたのは、大人びているコナンや哀の不思議、
なんとなく感じる2人の秘密めいた関係のことではなく、自分がそ
んなコナンと哀と友達でいられるかどうかという心配だったのだ。

コナンと哀が何者であろうとも、数年のときを過ごし、助け合っ
てきたかけがえのない仲間であることには、変わりはない。

2人に、なんとなく、自分たちの知らないもの、秘密を感じてい
ながら、それを知ることより、そんな2人と、友達でいることの方
が、歩美には、大事なだろう。

「哀は、コナン君と…その同じくらい、頭もいいし、話もちゃんと
できるじゃない？」

「そうですね。コナン君の方が、灰原さんに負けてるなって、思う
時もあるくらいですね」

「だから、私、コナン君や哀と、ずっと、友達でいられるかな、っ
て…」

さつき、戸田写真館の前の堀端で聞いたコナンの電話。

相手は、大阪の服部平次らしい。

平次とコナンの仲がいいのは、よく知っていたが、コナンが「服部」と、当たり前のように呼び捨てにしていることに、歩美は、驚いた。

そして、そのことを当然のように傍で聞いている哀。

歩美も、光彦と同じように、コナンと哀が、自分達とは、違うと気づいている。

2人には、何かある。

で、なければ、あんな大人以上に大人の言動、知識を持てるはずがない。

しかし、それ以前に、歩美にとって、コナンと哀は、大事な仲間なのだ。

2人が何者であっても、それは、譲れない。

「大丈夫ですよ。お2人とも、歩美ちゃんのこと、大事にしてるじゃないですか。それに、そんなことで友達を決めるような人じゃないでしょ？コナン君も灰原さんも……」

歩美の気持ちを見透かすような光彦の言葉に、思わず笑みが零れる。

「僕には、わかってますよ。コナン君も、灰原さんも、歩美ちゃんに感謝してるんです。それに、僕も、歩美ちゃんには、感謝してます」

「え？」

「転校生だったお2人に、真っ先に声をかけたのは、友達になったのは、歩美ちゃんですからね。歩美ちゃんがいなかったら、お2人とは、友達になれなかったかもしれないから」
そう言つて笑顔を向ける光彦の言葉には、歩美は、涙が出そうになるくらい、嬉しかった。

「光彦君…」

「だから、コナン君と灰原さんが、僕たちと友達になったのは、仲間だと、僕たちが言えるようになったのは、歩美ちゃんのお蔭なんです…探偵団が5人になってから、ホントに、楽しかったですし、これからも、仲間でいられたら、いいなと思います」

「そだね…ありがとう、光彦君」

「こちらこそ」

（確かに、コナン君と灰原さんが何者なのか、興味はありますが、それ以上に、歩美ちゃんにとっては、2人と友達であることが大事なんですよね…僕も、そう思います）

うれし泣きしそうな歩美の顔を見た光彦は、優しく笑顔を向ける。その彼の笑顔に、歩美も笑顔になった。

「どした？」

コナンは、夕食後、平次からの電話を受けてから、あまり口を開かなくなつた哀の様子に、彼女を外へ連れ出して訊いた。

「おめえ、ひよつとして、和葉ちゃんのこと、気にしてんのか？」

「和葉さんは、あなたと蘭さんに、服部君と自分のこと、重ねてる

「…」

「あん？」

「私は、いくら責められても、構わない…でも、あなたや蘭さんのこと、和葉さんが悪く思うのは……」

「ったく…おめえは、いつもそうだな」

「え？」

「自分のことは、後にして、いつも、俺や周りの人のことばっか、気づかって…ま、そこに惚れてんだけど…」

赤い顔をして、それでも、コナンは、真っ直ぐに哀を見つめた。

「気にすんなよ…和葉ちゃんだって、わかってるさ……俺は、俺。

服部は、服部…そうさ、彼女には、服部がついてんだ…蘭に新出先生、おめえに俺がいるようにさ」

少し、得意な顔のコナン。その顔を見つめていた哀は、フツと笑みを浮かべる。

「ホント、あなたといると、悩むことがバカらしくなってくるわ…」

「俺に、悩んでると博士みたいにハゲるって言ったの、誰だよ」

「失礼ね」

「おめえが言っただろ？」

2人は、顔を見合わせると、声を立てて笑い合った。

第49章：小さな友達のなかで

「うわっ！綺麗！」

「江戸川君もカッコイイ！」

「さっすがっ、灰原さん！きれいだよ！」

戸田写真館でのコナンと哀の結婚式衣装の写真。

歩美が自分のデジカメで撮ったものを、宿の部屋でクラスメイト達に見せている。

修学旅行の夜は、クラスメイト達と一緒に、いろいろ話せるチャンスだ。

寝てなんかられない。

布団を敷いた部屋、ここには、女子9人。その中には、哀と歩美、マリアがいた。

ただ、歩美が写真を披露しているので、他の部屋の女子生徒も集まっている。

入れ代わり、立ち代りやってくる女子達に、哀は、少し辟易していた。

しかし、その瞳を輝かせ、写真と、当の自分の方を見つめてくる女の子達は、ウエディングドレスに憧れを持つ年齢になったばかりの純粋な子供たちであり、その姿が哀には、羨ましく、眩しくもあった。

「ね、訊いていい？」

哀にそう言ったのは、同じクラスの大宮詩織。

どちらかというと、大人しい方で、哀も、ほとんど、話したこと

はない。

「何？大宮さん」

「……前から気に、なつてただけ……その……江戸川君と一緒に住んでるんだよね……」

「ええ」

「……どうして？……」

「え？」

「ご、ごめんなさい……訊いちゃいけないことだった？……」

詩織は、大人して、クラスでは目立たないが、大きな目が印象的な可愛い顔をしている。

哀は、彼女が、いつも、教室で、剥がれている掲示物を張り直していたり、歪んだ机を並べなおしたりしているのを見ている。

詩織は、大人しく、目立たないが、何でも、率先して行動するタイプで、そんな彼女を、哀は、好感を持ってみている。

今、赤くなつて俯いている詩織は、恥ずかしがっているというより、哀を怖がっているように見える。

哀は、自分は、そんなに怖いのだろうか、内心、苦笑していた。そして、自分の顔さえ、まともに見ようとしないう詩織の様子に、フツと微笑んだ。

「別に、何もいけないことなんか、ないわよ……私と江戸川君は、遠い親戚になるの……私は、親がいないし、江戸川君は、ご両親が仕事で海外だから、2人の親戚の阿笠博士の家にお世話になってるってわけ」

哀は、できるだけ、優しい口調で言った。

「……そう……だったんだ……ごめんなさい」

詩織は、哀の顔を伏し目がちに見ると、そう言っ、下を向いた。

「だから、あなたが謝ることは、何もないって、言ってるでしょ？」

哀は、詩織の様子に苦笑するしかなかった。

「ごめんなさい」

また、詩織から、その言葉が出る。

哀は、苦笑して、ため息をついた。

「あの……私、江戸川君のこと、ずっと前から知って……でも、なんだか、凄い大人に見えて……そしたら、灰原さんが、隣にいて……2人とも、凄く……その、大人で……ごめんなさい……私、何言ってるんだろ？」

詩織は、一所懸命に話しをしている。赤い顔をして、俯いて。

フフフ。

哀が声を立てて笑う。その大人びた雰囲気、詩織は、赤い顔を上げた。

「笑って、ごめんなさい……って、今度は、私が言ってるわね……あなた、いい子ね」

そう言っ、哀は、優しく微笑んだ。

「私、灰原さんで、もっと……その、怖い、って……そんな感じに思っ、でも、吉田さんの写真みたら……嬉しそうに笑っ、綺麗で、優しそうで……だから、謝んなきゃって……誤解してたから……」

一所懸命に言葉を選ぶ詩織に、哀は、優しい笑顔になっていた。

「ホント、いい子ね。あなた……気にしないでいいわ。ホントは、あなたの思っているとおり、怖い女かもしれないし」

「そんなこと、ない……」

詩織がそう言ったとき、他の女子生徒たちが数人、哀の周りに集まってきた。

「灰原さんって、綺麗だと思ってたけど、笑うと、優しい顔になるのね」

「私、灰原さんのファンになっちゃう」

「それに、お似合いだよ、江戸川君と灰原さん」

「いいなあ」

みんなが集まってきたので、詩織は、哀の顔を見て、少し頭を下げると、彼女達に譲るようにして、立ち上がり、部屋を出て行った。哀は、呼び止めようと思ったが、他の生徒達が話しかけてくるので、それもできず、彼女の背中を見送るしかなかった。

（大宮さん、ごめん……）

正直、哀は、彼女達に囲まれたり、大勢の生徒たちの中にいることに、苦痛を感じることが多かった。

でも、過去に自分が犯した罪を、コナンや蘭の運命を狂わせたことを思えば、これくらいのことは、なんともないと、言い聞かせてきた。

しかし、今、彼女達のことを、純粹に可愛いと思う。

こんな自分を仲間にしてくれる彼女達が、哀には、嬉しかった。

「哀……なんか、不思議な顔、してるよ？」

歩美が哀の隣に座ると、顔を覗きこんでそう言った。

彼女こそが、今の哀に優しさとか、安らぎとか、大切なものをくれた張本人。

「歩美、ありがとう」

「え？」

歩美は、怪訝そうな顔をしていたが、フツと笑みを浮かべると、哀に言った。

「ホントは、哀、照れ隠しに怒るかなって、内心、ビクビクしてたんだ」

「そりゃ、思いつきり、恥ずかしいわよ……でも……」

「でも？」

「1人であるよりは、ずっと、いいから……あなたに会う前は、あの人に会う前は、1人になっちゃってたから……その頃のことを思えば、ずっと、いいから……ありがとね、歩美」

「哀……」

哀は、自分と会う前、どんな想いをしていたんだろう。

そういえば、歩美は、自分と会う前の、哀のことは、何も知らない。

母親がイギリス人で、両親共、亡くなっている。

それくらいしか、知らなかった。

そして、それを思ったとき、歩美の脳裏には、さっき、コナンが平次と電話で会話していた内容が浮かび、その隣に、少し難しい顔

をして立っていた哀の顔が思い出された。

「歩美？」

考え込んでいる様子の歩美に、哀が不審に思って声をかける。

「どうかした？」

「ううん……へへへ、哀、じゃ、これから、いろいろコナン君と哀のことで、楽しませてもらうから……次、楽しみにしててね」

「はあ？まだ、何か企むつもり？」

「当たり前でしょ？」

そう言っ、いたずらっ子のように笑う歩美に、哀は、ため息をついた。

「それで、どうしろって言っの？」

「……どうって……そりゃ、今からでも……その、やめとけば……
「なんですって！？中止しろっていうの！？」

「いや……その……中止じゃなくって、延期っていうか……」

「何、バカなこと言ってのよ！今さら、娘の結婚式を延期しろっていうの！？招待状も送ってから……あなた、蘭に恥をかかす気！？」

毛利家では、小五郎が妻の英理の怒りをかっていた。

小五郎と英理が、長かった別居生活に終止符をうつたのは、2年と少し前。

コナンが黒の組織の事件で、大ケガをした後だった。

今は、小五郎と英理、蘭の3人の親子は、毛利探偵事務所の近くで、マンションを買って住んでいる。

「新出先生なら、蘭を不幸にするようなことはないって、大喜びしてたの、誰なのよ!？」

鬼のような形相で自分に迫ってくる英理に、小五郎は、後ずさりした。

そして、壁に背をつけると、その場に座り込む。

「不安なんだよ……確かに、新出先生は、医院を経営してて、患者に信頼されている……でもよ、再婚だし、な。あの探偵ボウズのよ
うなことは、ねえとは思っても、その……不安なんだよ。俺は、もう泣いてる蘭を見たくねえ……二度と」

俯いている小五郎の言葉を聞くうち、見つめる英理の顔が、段々と優しいものになってきた。

「あなた……」

「蘭は、俺の娘にしちゃ、よくできた娘だ。俺の自慢だから……アイツには、幸せになってほしい」

「大丈夫よ。蘭が新出先生を選んだのよ。信じましょ、私たちの娘を……」

英理は、そう言うと、小五郎の肩に手を置いた。

「すまなかった……」

小五郎は、そう言うと、妻に笑顔を見せた。

「娘をちゃんと、送り出してやんねえと、な」

そんな両親の会話の様子を、部屋のドアの外、廊下の壁に背を凭せ掛けた蘭が、目を潤ませて聞いていた。

第50章：蘭への想い

「うわーっ！やっぱり綺麗！」

「やっぱり、灰原さん、素敵だよ！」

「江戸川君もかっこいい！」

「いいなあ。私も着てみた〜いつ！」

歩美の周りにクラスメイト達が集まっている。

その席、机の上に、修学旅行で歩美の叔父が撮った写真がある。

スタジオで撮ったプロの写真だけに、雑誌のグラビアのように鮮明で、綺麗だった。

他にも、歩美達が撮った写真も何枚があった。

そして、その写真を前に、ニコニコして座っている歩美。なんだか、自分のことのように嬉しそうな顔をしている。

その隣で、赤い顔をして写真に見惚れている光彦。

「ほんとに、綺麗です。灰原さん！」

力を入れて言う光彦に、哀は、顔を歪めて苦笑する。

「……あ、あ、りがと、円谷君……歩美、もういいでしょ？」

赤い顔をした哀が、歩美の横に立つと、写真を隠そうと手を伸ばす。

その手を歩美が押さえた。

「だめ！まだ。こんなに綺麗なんだから、みんなにもっと、よく見もらうの！」

「歩美……」

哀は、困ったような顔をして、集まったクラスメイトたちの中から、体を引く。

と、そういえばと思って、辺りを見回す。

（どこ行っただのかしら？）

教室にコナンの姿が見えない。

（もう、1人だけ逃げちゃって……）
哀は、少し不満げな顔をしていた。

「ねえ、新一！一緒に帰ろ！」

帝丹小学校の校庭。

校門に近い桜の木の下で、帰ろうとしていた工藤新一は、駆けてくる隣のクラスの幼馴染に声をかけられ、振り向いた。
その目に、毛利蘭の姿が飛び込んでくる。

「蘭か……」

新一は、興味のなさそうな顔をして、足元のサッカーボールを蹴り上げる。

「何よ！その顔は！？」

蘭は、興味なさそうに半目で自分の顔を見ている新一に、少し腹を立て、その頬をつねった。

「いてえ！何すんだよ！」

「新一がつまらなさそうな顔するからよ！」

「別に、つまらねえ顔なんかしてねえよ！」

「したよ！思いっきり！」

「……ったく」

新一は、付き合いきれないという感じでため息をつく、蘭に頬をつねられたとき、足元から離れてしまったサッカーボールを追いかける。

ボールに追いついた新一は、それを蹴り上げ、またリフティングを始めた。

小学6年生の晩秋。

蘭は、少し離れ、つまらなさそうに新一を見ていたが、次第に穏やかな笑顔になって、サッカーボールを蹴りながら、校門へ向う彼を目で追っていた。

工藤新一。

彼は、少し、悩んでいた。

クラスで、同級生たちに避けられている気がする。

無視されているとか、いじめというわけではないが、なんとなく、クラスで、自分が浮いている。

逆に、新一からみると、彼らの話題には、あまり関心が持てず、その会話の輪に、積極的に入っていく気持ちが持てない。

彼らと会話が弾むのは、サッカーについての話ぐらいしかなく

た。

小学6年生ともなると、それぞれ、人間関係を持ち、遊び仲間との関係で、悩んだりすることも出てくる。

新一は、最近になって、自分は他の生徒たちと違うのかと、悩み始めていた。

家に帰れば、父、優作の書斎に入り、その蔵書を読むのが楽しみだった。

世界中の推理小説や探偵たちの話は、胸をときめかせられるし、歴史や法律、経済学、理工系など、あらゆる知識を得られる書籍たちは、新一のよき先生だった。

小学6年生の子供たちが興味を示すようなゲームやテレビ番組より、父の書斎にある本の方が、新一にとって、よっぽど楽しい時間を与えてくれる存在だった。

そんな読書で得た発見、驚きを話しても、クラスメイト達の反応は、鈍い。

そして、次第に、そんな新一の話に耳を傾けてくれる友達もいなくなり、彼も、友達には、そういう話をしなくなった。

クラスで浮いている。と、新一は、感じている。

しかし、蘭は違った。

蘭だけは、新一の話を聴いてくれる。

彼女にとって、面白くない話や退屈な話、難しい話もあるだろうが、それでも、蘭だけは、新一の話を聴いてくれた。

「蘭！帰るぞ！」

新一は、振り返ると、少し離れたところで自分の方を見ている蘭に言った。

「うん！」

彼女らしい、元気な返事をした蘭の後に、紅葉したモミジの木があった。

夕陽を浴びた紅葉の木をバックに、微笑む蘭に、新一は、胸が高鳴った。

そして、思わず、その顔をじっと見つめる。

「どうしたの？」

自分の顔を見つめている新一に、蘭は、首を傾げた。

「えっ！？……い、べ、別に……」

「？」

赤い顔をして目を逸らせる新一に、蘭は、ますます首を傾げた。

「ほら。帰るぞ！」

赤い顔をした新一は、向こうを向いて、また、サッカーボールを蹴り始める。

そんな新一の様子を不審げに見つめていた蘭は、フツと微笑むと、小走りに彼の後を追う。

新一が蘭を異性として、初めて、強く意識したのは、この時かもしれない。

「どうしたの？ボーっとして……」

「えっ!？」

校庭近くの木を見ていた、コナンは、ハッとして、声の主の方を見た。

哀が不思議そうに、自分の顔を見て立っている。

「……」

哀は、自分の方を見たコナンの顔が、心が抜けたようになって、少し、呆れるような思いで見ている。

「……あ、哀……いや、その……なんでもないさ」

コナンは、蘭が結婚すると聞いてから、彼女のことをよく思い出すようになっていた。

別に、今更、嫉妬したり、蘭に強く想いを残しているということではない。

ただ、幼馴染で、大事な彼女が結婚すると聞いて、いろいろな想いがコナンの胸に沸いてくることは、当然ではあるし、コナン自身には、どうすることもできなかった。

その蘭の結婚式は、来週末に迫っている。

「彼女、幸せになれるといいわね」

「え!？」

自分の心を見透かしたような哀の言葉に、コナンは、驚いて、彼女を見つめた。

「蘭さんのこと、考えていたんでしょ？」

「そ、それは……」

「いいのよ。今更、彼女に嫉妬でもないし……あなたにとって、蘭さんは、大事な人だし、あなたにとって、彼女との思い出は、かけがえないものでしょ？」

言葉を詰まらせたコナンに、哀は、フツと微笑んでみせる。

「私にとっても、蘭さんは、大事な人……私、いつか、彼女に言ったことがあるの……蘭さんのことを大事に想ってるあなたを、愛することができる、って……いえ、蘭さんとのことを大事にできるあなただから……だから、私は、あなたが……好きなのよ」

そう言っ、赤い顔をした哀は、少し恥ずかしそうに顔を逸らせた。

「哀……」

いつから、コナンは、哀のことを異性として、強く意識し始めたのだろうか。

そんなことがフツと、コナンの頭に浮かぶ。

今、目の前で恥ずかしそうに、彼女らしく、横を向いている哀は、綺麗だと、心から思う。

年々、美しく成長していく彼女。

コナンは、フツと微笑んだ。

「コナンくん！哀〜！」

元気な声が2人を呼ぶ。

「何してんのよ！そんなところで！授業、始まるよ」

見上げる校舎の窓から、歩美の顔が見え、その隣にクラスメイト達が顔を並べている。

「なあ、哀」

「何？」

「俺、幸せだよ」

「え？」

「たくさん、友達がいて、俺を理解してくれるヤツが……おめえがいて……」

コナンは、歩美達の方を見上げながら、言う。

「それは、私のセリフよ」

少し、意地悪げな言い方をして、哀がニヤツと笑う。

コナンが哀の方に顔を向けると、彼女は、優しい笑顔で、コナンを見つめている。

「もうっっ！哀っっ！コナン君！いちやつくのは後にして、早く戻ってきなさい！」

先生のような歩美の言い方に、コナンと哀は、苦笑して顔見合わせる、教室の方へ向って、歩き始めた。

しばらく後、2人は、教室の後に張り出された、自分達のウエディング写真に、慌てることになる。

第50章：蘭への想い（後書き）

ホントに、お久しぶりの更新になってしまいました。

話が進んでいるんだか、いないんだか……

だいたいのストーリーは、決めているのですが、なかなか、文章、セリフが浮かばなくて、苦勞しております。

しかも、忙しい！……

考える時間、書く時間がほしい！

最終章：ぬくもり（前書き）

12月21日、「後書き」を加筆、修正いたしました。

最終章：ぬくもり

「あら？コナン君、私より先に、結婚しちゃったの？」

アルバムを開いた蘭は、そう言って、意地悪く微笑むと、コナンの顔を軽く睨んだ。

「蘭……」

呆れて、半目で自分の顔を睨むコナンに、蘭は、フツと微笑んだ。

「新一……フッフ、第二の小学校生活、楽しんでるようね」

「おめえ、な」

コナンは、蘭の顔を睨み、少し怖い顔をしていたが、フツと表情を緩める。

「フツ……まあ、最初は、憂鬱だったけど、思ったより、楽しかったな」

「そう……よかった、って言うのも、おかしい気もするけど……」

蘭の笑顔の中に、複雑な色が見え、コナンの胸が少し痛む。

「蘭……幸せになれよ……」

「ありがと……新一も……哀ちゃん、幸せにしてあげて」

「……ああ」

阿笠邸のリビング、2人の会話を地下室から上がってきた階段のところで、哀が聞いている。

その顔は、泣いているような、笑っているような、複雑な表情をしていた。

2日後は、蘭の結婚式。

「ちよつと、あなた……もう、しっかりなさいよ！天下の名探偵、毛利小五郎の名が泣くわよ！」

小五郎の妻、英理の声が結婚式場の廊下に響き、コナンと哀は、思わず顔を見合わせた。そして、苦笑する。

「あの……蘭姉ちゃん、いますか？」

「あら、コナン君、哀ちゃん」

英理は、小五郎に向けていた険しい表情を崩し、控え室の入り口に立つ、コナンと哀の方を見た。

「……蘭……綺麗だ……さすが、俺の娘……うう、なあ、やっぱ、やめねえか？この式」

ウエディングドレスを着て座っている蘭の前で、父親の小五郎が涙を浮かべ、顔をクシャクシャにしてしゃがみ込んでいる。そして、両手で、蘭の手を握っていた。

「……お父さん」

そんな小五郎に戸惑っている蘭だが、それでも、彼女らしい笑みを浮かべ、娘想いの父を見つめていた。

「あなた！いい加減になさい！！」

英理がまた、小五郎を怒鳴りつける。

「また、そんなこと言って！蘭に恥かかせないでよね！……」
「まったく、ほら、コナン君と哀ちゃんが来てくれたんだから、シャンとしなさい！！！」

英理の言葉に、コナンと哀の方に顔を向けたのは、言われた小五郎ではなく、蘭だった。

自分を見つめる蘭。

ウエディングドレスを着た彼女は、今までに見た中で、一番綺麗だと、コナンは、思った。

コナンと哀に、蘭は、優しい笑みを浮かべる。

その顔に、僅かに胸が痛んだ気がして、哀は、少し、目線を下げてしまった。

（綺麗……お姉ちゃん……）

蘭の姿に、哀にとって、忘れられない面影が重なる。

そして、彼女が、哀にとっても、大事な存在だと、改めて思う。

「ね、お父さん、お母さん……悪いんだけど、しばらく、コナン君と哀ちゃんと、3人だけで話したいんだけど……」

蘭は、そう言っ、自分の手を握っている小五郎の両手の甲に、もう片方の手を添えた。そして、英理の顔を見る。

「蘭……？」

「お願い……ね、お母さん」

少し、不審な顔をしている英理に、蘭は、少し頭を下げ、上目遣いに懇願の表情してみせた。

「わかったわ……さ、あなた！あなたも、こっちへ来なさい！！」
「らっんっ」

英理は、蘭の方に手を伸ばし、泣き顔をして娘を呼ぶ小五郎の襟首を掴み、引き摺るようにして、控え室を出て行く。

「もう、お父さんたら……」

両親の姿が消え、控え室のドアが閉まると、蘭は、苦笑して溜息をついた。

「蘭……おめでとう。綺麗だぜ」

「蘭さん、ホント、綺麗よ」

呆れた顔で英理と小五郎を見送ったコナンと哀は、顔を見合わせ、苦笑した後、蘭に言った。

「ありがとう、新一、哀ちゃん」

微笑む蘭。

そして、見つめ合うコナンと蘭に、哀は、笑顔のような、泣き顔のような、複雑な表情になった。

「……私も、出ましようか？」

戸惑いがちに言った哀に、蘭は、優しく微笑んでみせた。

「うっん……言っただしょ？ 新一と哀ちゃん、2人と話したいの」

「ね、新一。私、新一にお礼が言いたい……楽しかったよ、新一と、小さい頃から、一緒に居て……いろんな事件とか、悩んだことも、悲しかったこともあったけど……でも、新一と幼馴染でよかったと、思ってるよ」

「蘭……」

「あの時……コナン君が新一だとわかった時、正直、新一を恨まなかったと言えば、嘘になる……そして、哀ちゃんのこと……」

そう言っって顔を上げ、天井を見上げた蘭に、コナンと哀の瞳が小

さく揺れる。

「でもね……気づいたんだ……私以上に、新一と哀ちゃんは、苦しい想いをしてるんだって……悩んだんだ、って……だって、新一は、私が……私が大事に想える人、好きだった人だもんね……人の気持ちがわかる人だもん……」

蘭は、そう言って、コナンの顔を見つめた。

「蘭……」

「そして、そんな新一が好きになった人だもん……哀ちゃんだって、新一と同じように、私のことで、苦しんだんだって……そう思ったの」

「蘭さん……」

「だからね、だから、今、私は、幸せなの。智明さんが愛してくれる……私も、智明さんを愛してる……そして、新一……コナン君と哀ちゃんが、私のことを想って……今でも、大事にしてくれるから……幸せなんだ」

言葉を選ぶようにして、ゆっくり話す蘭の顔は、まるで、慈愛に満ちた母親のようだった。

そして、そんな蘭の美しい姿は、亡き母や姉が見せてくれている、その言葉を聞かせてくれている気がして、哀の目頭が熱くなつてきて、視界がぼやけてきた。

「蘭、サンキユ……俺も、おめえが幸せで嬉しいよ」

そう言って、隣で泣きそうな顔をしている哀の横顔を見たコナンは、その手を、そっと握った。

「でも、羨ましいよ」

「え？」

蘭の語調が変わり、コナンと哀は、思わず顔を上げて、彼女を見た。

「だって、2人、これから、中学、高校と成長していくのよ。私には、もう帰って来ない楽しい時間を、2人は、もう一度、過せるんだもん」

笑顔で頬を膨らませる蘭は、そう言って、コナンと哀を軽く睨んだ。

「しかも、大事な人と一緒に……」

「何言っただ、おめえこそ、新出先生みたいないい人に大事に想われ、一緒に生きていけるんだぜ」

コナンは、そう言って、ニヤリとする。

「そうね、推理好きなホームズオタクよりは、平和に暮らせるでしょうから、そっちの方が幸せかもよ」

横目でコナンを見た哀は、意地悪げな顔をして言った。

「ううーん……それは、哀ちゃんの言うとおりかもね」

蘭は、真剣に考えているような顔をして、コナンを見た。

「でしょ？この人と一緒にいる限り、事件とは、縁が切れそうにないし……」

哀は、そう言って、肩をすくめる。

「おめえら、な」

頬を膨れさせたコナンに、蘭と哀は、顔を見合わせて笑った。

「来てくれてありがと、新一、哀ちゃん」

そう言って微笑む蘭の笑顔は、この世で一番美しいものに見えた。

コナンと哀は、この時の蘭の笑顔を、一生忘れることはない、
そう思った。

「いてっ！」

頬をつねられ、コナンが声を上げた。

「何すんだよ！」

自分の頬をつねった哀を睨み、コナンが声を上げた。

控え室を出て、式場に向う廊下。

並んで歩いているコナンと哀。

「ボーっとして……あなた、惜しいことしたって、思ってたんじゃない？……蘭さん、私なんかより、ずっと綺麗だったもんね」

哀は、そう言って、少し早足に歩き始める。

「何を言ってるんだよ」

すました顔をして早足で歩いていく哀を追いかけて、コナンは、その横に並ぶと、同じ歩調で歩く。

「あん？」

しばらくして、不意に哀の足が止まった。

「……がと」

「え？」

俯いて、呟いた哀の声がよく聞き取れず、コナンが聞き返した。

「私と出会ってくれて、ありがとう。あなたも、蘭さんも、博士も、

歩美達も……みんなと出会えて、もったいないくらい……私、幸せだわ……」

哀は、そう言って、照れたような笑みを浮かべ、コナンの顔を見上げる。

「哀……」

「だから……約束して」

「約束？」

「ええ。工藤君らしく、これからも、生きていく、って……」
「俺、らしく？」

「そう……だって、蘭さんも、私も、あなたらしいあなたが、好きなのよ。たぶん、みんなも……今の工藤君は、『工藤新一』じゃないかもしれないけど、私と蘭さんは、わかっているから……あなたは、『工藤新一』だって……キザで、推理オタクで、目立ちたがりで、それでいて、犯罪を憎み、犯人にすら、思いやりを示せる誇り高い名探偵だって……私と蘭さんは、知ってるから……だから、あなたらしく、これからも、生きて」

哀の言葉を、コナンは、目を大きくして、驚いたような顔で聞いている。

「それが、私や蘭さんが愛した『工藤新一』……みんなが好きな江戸川君なのよ」

そう言って微笑む哀の顔は、気高く、綺麗だと、コナンは、思った。

「なら、おめえも、おめえらしく生きろよ」

コナンは、あの、事件の謎を解いた時のような得意げな笑顔をして言った。

「おめえが、おめえの中に、亡くなったおめえの両親と姉さんがいる……おめえが、それを大事にしている『宮野志保』だって、俺は、知ってるから……憎まれ口を言って、冷めた目をして、それでも、誰より、周りの人を気遣っている灰原哀は、世界一の科学者だって、俺は、知ってるから……おめえも、おめえらしく、生きてくれよ」

「工藤君……」

哀は、コナンの顔を見つめると、瞳を揺らして、微笑んだ。

「いいの？私らしく生きて……」

「ああ」

「じゃ、覚悟はできてるのね」

哀の笑顔に、意地悪い色が混じってくると、コナンは、少し表情を硬くし、身構えた。

「どういう意味だよ？」

「だって、私、普通の女じゃないもの……あなたの言うこと、素直に訊くと思う？」

哀は、そう言って、得意げな笑顔すると、コナンから視線を外し、前を見つめる。

「……今更……そんなこと、百も承知だよ」

コナンは、そう言って肩をすくめる。

言われた哀は、コナンに視線を戻すと、わざとらしく、呆れた顔を見せた。

「変わってるわね、あなた」

「そんなこと、おめえだって、百も承知だろ」

「まあね」

「さ、行こうぜ」

クスツと笑った哀に、手を差し出しながら、コナンが言った。

「ええ」

そう言っ、て、哀は、差し出された手をとる。

そして、照れたような笑顔で顔を見合わせ、歩き出す2人。

信じる人、愛する人の手のぬくもりが、体全体を暖かくすることを、この時、コナンと哀は、改めて、強く感じていた。

そして、このぬくもりがあれば、どんなことがあっても、生きていけると、2人は、思った。

最終章：ぬくもり（後書き）

書き出した時は、10回くらい続けばいい方だと思っていましたが、気づけば、50回を越え、思いがけず、長い話になっていました。

そして、この間に、「コナン哀ものがたり」は、私にとって、愛着のある、ずっと、これからも、書き続けたい話になっていました。

昨年の8月より連載を始めてから、この最終話の前を含め、途中、長期に渡って、更新が滞ったこともありましたが、とりあえず、完結させたことには、ホッとしています。

とりあえず、完結しましたが、私にとっては、「コナン哀ものがたり」は、まだまだ、続いていく話です。

それは、「中学編」「高校編」といった、この先の話しを書いていくつもりでいるから、という理由だけでなく、私が二次創作を書き始めた動機が、この「コナン哀ものがたり」を書く事にあるからです。

私が「コナン」で二次創作小説を書き続ける限り、「コナン哀ものがたり」は、続いていきます。

ただ、コメントを頂いた方には、申し訳ないのですが、この場、「コナンノベルズ」での連載は、今のところ、考えておりません。いろいろ理由はあるのですが、自分の運営しているサイトの方に、専念したいということもあります。

将来、気が変わるかもしれませんが、今のところは、そう考えています。

最後に、これまで、コメントをくださった方々、応援していただいた方々、読んでくださった方々に、心から感謝していることをお伝えします。

そして、この話の中のキャラ達にも、感謝しています。

彼らと過ごしたこの間、1年3ヶ月ほどの時間は、私にとっても、楽しい時間でした。

読者のみなさん、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5795c/>

コナン哀ものがたり

2010年10月9日14時55分発行